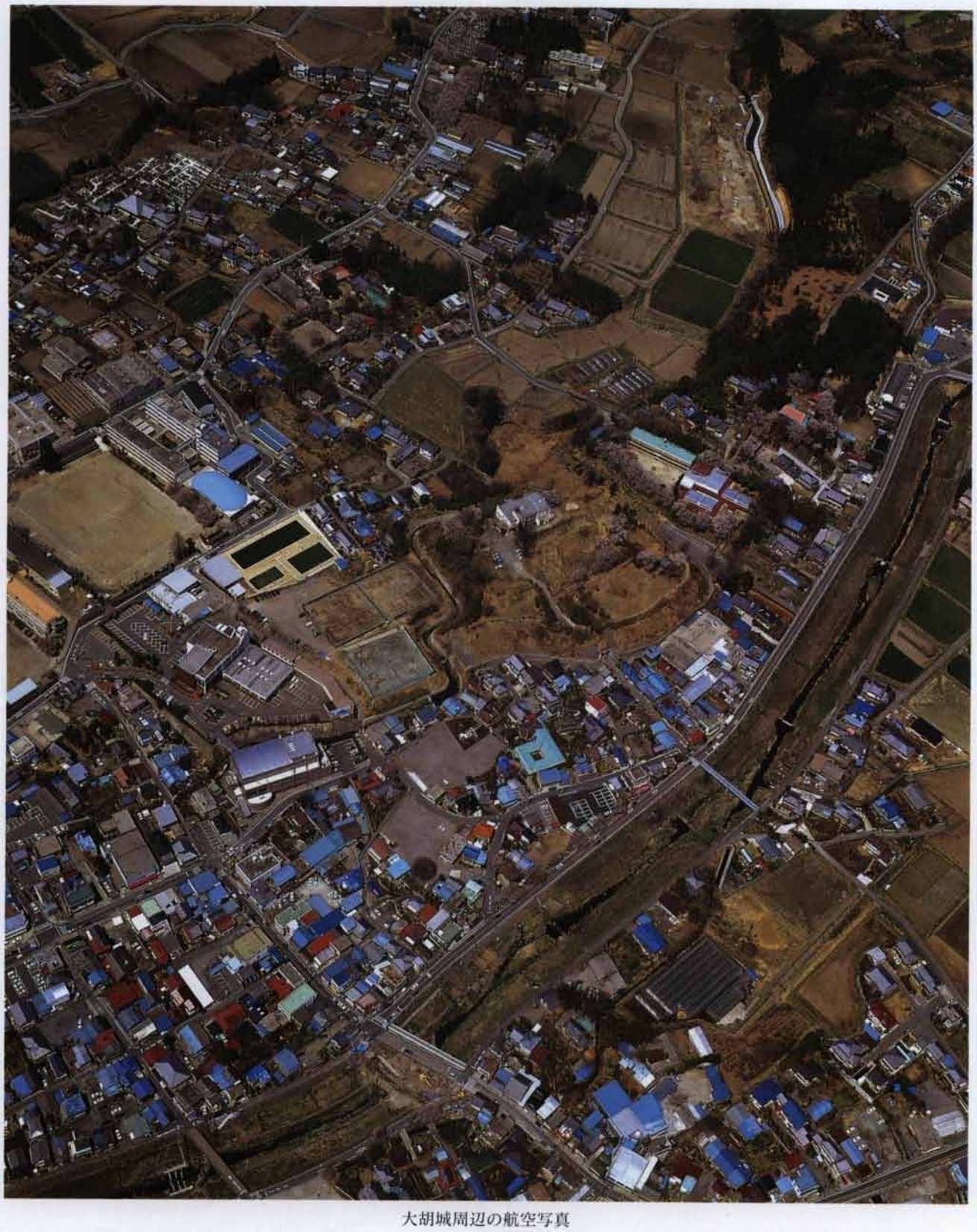
群馬県勢多郡大胡町

《群馬県指定史跡　大胡城跡》

本丸北大堀切り跡遺跡

（横町川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）

2001



大胡城周辺の航空写真

序　　文

赤城山南麓に位置する大胡町は、中世には大胡氏の本拠地とし、近世では牧野康成公が大胡城に入城し、勢多郡の中心地的な役割をになってきた所です。

廃城後は日光裏街道の宿とし、また、近隣の交易の場として市が開かれておりました。現在に至っては、前橋市の衛生都市としてベットタウン化が著しく、着実に人口増加が見られます。しかし、過去に於いて大胡城の東側を防衛するの荒砥川の氾濫により、城下が水害を被り、戦後の昭和22年に遭遇したカスリン台風による大水害は死者42名を出し、荒廃した町並と石河原が広がった様は自然の脅威を後生に語り継ぐべき教訓である。

ここに報告する大胡城本丸北大堀切り遺跡は、水害を最小限に防ぎ、城下町に居住する町民の皆様に安心して住める施策として講じられた工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施したもので、大胡城と玉蔵院に関係する中世から近世にいたるまでの多くの土器や石製品遺物が出土しました。これら大胡城に係わる貴重な資料により、中世・近世の実態を解明する一助となれば幸いです。

本遺跡の発掘調査から整理に至るまでの間、関係者等の方々の御指導・御協力をいただき、ここに報告書を刊行する運びとなりました。厚く感謝の意を表します。

本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されていくことを願い序文と致します。

平成13年３月15日

大胡町教育委員会

教育長　松　本　浩　一

例　　言

1　本書は、横町川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査区は、群馬県勢多郡大胡町大字河原浜660番地を中心とする群馬県指定史跡「大胡城跡」に係わる大堀切りの部分で、遺跡名は「本丸北大堀切り遺跡」と称する。

該当地番は河原浜字根古屋641-7・8、643-4、660-34・35番地等である。

3　発掘調査は、平成11年9月30日から平成12年3月25日まで行い、出土品整理作業・報告書刊行作業は平成12年6月から平成13年3月23日までおこなった。

4　発掘調査は、事業主体である前橋土木事務所の委託により大胡町教育委員会が直営で実施したものである。

5　調査組織及び本書の作成は、下記のとおりである。

事務局

教 育 長　松本浩一

事務局長　井上健児

文化財担当

係　　長　山下歳信（調査担当）

主　　任　藤坂和延

調査補助員　水谷貴之

6　本書の作成は、編集・執筆を山下が行った。

7　発掘調査によって出土した遺物については、総て大胡町教育委員会で保管管理している。

8　本書に使用した遺物写真は、大胡写真クラブ会長の小黒茂男氏による。

9　現地での発掘調査及び出土品整理作業に当たり、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝したい。（順不同・敬称略）

群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬県立博物館、前橋土木事務所、
大胡町建設課、㈲大崎建設、㈱佐田建設、㈱技研測量、㈱須賀工業、㈱シン技術コンサル、
唐沢四郎、高島英之、綿貫邦夫、谷藤保彦、奈良部満清、清水　豊、笠原仁史、東　宏和、
新井喜昭、中島直樹、小川卓也、水谷好雄

10　発掘調査・発掘整理参加者（順不同・敬称略）

若林俊次　大原きみ子　勅使川原幸枝　石井よね、小沢チヅエ、石川節子　荒井愛子　萩原秀子、
小林　勝　荒井春夫　大野京子　松倉菊江　伊藤はる江、斎藤　準、鈴木久美子、内藤典子、
須田章子、田村志づ江、北爪珠美、山下雅江、五十嵐文江、小黒茂男

凡　　例

1　第1図は国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」に加筆して使用した。

2　第2図は大胡町役場発行の2,500分の1現況図に加筆して使用した。

3　第3図は大胡町役場発行の2万分の1現況図に加筆して使用した。

4　遺構図の縮尺は

　グリット図　1：800　　遺構全体図　1：200　　遺構図・セクション図　1：80

　井戸跡　　1：40　　堀横断図　　1：160

　遺物の縮尺は、

　鋲　1：1　古銭　2：3

　カワラケ・瓦器・陶磁器・摺鉢・砥石・軽石製品・煙管・木製品・縄文土器　1：3

　凹石　1：4

　内耳土器・石臼・石鉢・石塔　1：5

　遺物の重量は6kgまでを1g単位で表示し、6kg以上は100g単位の計測値である。

5　遺構図中に記した断面基準線は、標高を示す。

6　遺構図中に示したN方向は、座標北である。

7　グリット名は東西方向に西から東へ0～算用数字、南北方向に南から北へA～アルファベットを付し、南西隅の杭を呼称する。

目　次

口　絵　大胡城周辺の航空写真
序　文　大胡町教育委員会　教育長　松本浩一
例　言
凡　例
目　次
挿図目次・観察表目次・写真目次

第1章　発掘調査に至る経緯……1
第2章　大胡城跡の位置と環境……2～5
　第1節　位置と周辺の環境（第1～3図）
第3章　大胡城跡の概要……5～13
　第1節　大胡城の沿革
　(1)　大胡氏の時代
　(2)　牧野氏の時代
　(3)　酒井氏の時代
　(4)　廃城以後の大胡宿
　第2節　大胡城跡の縄張りと発掘調査地点の概要（第4・5図）
第4章　検出された遺構と遺物……14～96
　第1節　遺構（第6～25図）
　(1)　発掘区とグリット設定
　(2)　遺構の概要
　第2節　遺物（第26～76図）
　(1)　カワラケ（第26～30図）
　(2)　内耳土器等（第31～37図）
　(3)　陶磁器（第38～48図）
　(4)　石製品（第49～73図）
　　1）茶臼　2）粉挽臼　3）石摺鉢　4）搗臼・凹石　5）石塔　6）砥石
　　7）軽石製品　8）硯
　(5)　金属製品（第74・75図）
　(6)　木製品（第74・75図）
　(7)　その他（第76図）
第5章　成果とまとめ……97～99
第6章　参考資料
　年　表……100～101
　参考資料（玉蔵院に係わる資料）……102～106

挿図目次

第1図　位置図（1/50,000）……2
第2図　周辺遺跡図(1)（1/2,500）……3
第3図　周辺遺跡図(2)……4
第4図　発掘調査区周辺図……10
第5図　大胡城周辺地形図……11
第6図　発掘調査区グリット図……14
第7図　遺構全体図(1)……15
第8図　遺構全体図(2)……16
第9図　遺構全体図(3)……17
第10図　遺構全体図(4)……18
第11図　1区橋脚跡・1号井戸……19
第12図　1区仕切り堀と堀底集石、土層図……20
第13図　2区西側・東側南北土層……22
第14図　5区南北土層……24
第15図　1号石積……25
第16図　8区旧堀南北土層(1)・(2)
　　1号新堀土層・3号堀土層……26
第17図　8区柱穴群井戸跡……27
第18図　1・2号井戸跡……28
第19図　3～6号井戸……29
第20図　馬骨等出土分布図……30
第21図　9区南北・東西土層……31
第22図　暗渠・石積……33
第23図　10区東西土層・調査区南北断面図(1)……34
第24図　調査区南北断面図(2)……35
第25図　同集成図……36
第26図　カワラケ法量図……37
第27図　出土遺物　カワラケ(1)……38
第28図　出土遺物　カワラケ(2)……39
第29図　出土遺物　カワラケ(3)……40
第30図　カワラケ出土分布図……41
第31図　内耳土鍋の変遷図……42
第32図　出土遺物　内耳土器(1)……43
第33図　出土遺物　内耳土器(2)……44
第34図　出土遺物　内耳土器(3)……45
第35図　出土遺物　内耳土器(4)……46
第36図　出土遺物　内耳土器等(5)……47
第37図　内耳土器出土分布図……48
第38図　出土遺物　瀬戸・美濃陶磁器(1)……49
第39図　出土遺物　瀬戸・美濃陶磁器(2)……50
第40図　出土遺物　肥前系陶磁器(1)……51
第41図　出土遺物　肥前系陶磁器(2)……52
第42図　出土遺物　舶来陶磁器……53
第43図　陶磁器等出土分布図……54
第44図　焼締陶器　常滑……55
第45図　出土遺物　擂鉢(1)……56
第46図　出土遺物　擂鉢(2)……57
第47図　出土遺物　擂鉢(3)……58
第48図　擂鉢出土分布図……59
第49図　石臼模式図……60
第50図　石臼法量……61
第51図　出土遺物　茶臼(1)……62
第52図　出土遺物　茶臼(2)……63
第53図　出土遺物　茶臼(3)・穀物臼(1)……64
第54図　出土遺物　穀物臼(2)……65
第55図　出土遺物　穀物臼(3)……66
第56図　出土遺物　穀物臼(4)……67
第57図　出土遺物　穀物臼(5)……68
第58図　出土遺物　穀物臼(6)……69
第59図　出土遺物　穀物臼(7)……70
第60図　出土遺物　穀物臼(8)……71
第61図　出土遺物　穀物臼(9)……72
第62図　出土遺物　穀物臼(10)……73
第63図　出土遺物　石擂鉢……74
第64図　出土遺物　搗臼・凹石(1)……75
第65図　出土遺物　凹石(2)……76
第66図　石臼・石鉢・搗臼・凹石分布図……77
第67図　出土遺物　石塔(1)……79
第68図　出土遺物　石塔(2)……80
第69図　出土遺物　石塔(3)……81
第70図　出土遺物　石塔(4)……82
第71図　石塔分布図……83
第72図　出土遺物　砥石(1)……84
第73図　出土遺物　砥石(2)・軽石製品・硯……85
第74図　出土遺物　古銭・金属製品・木製品……86
第75図　砥石・金属製品・木製品等出土分布図……87
第76図　出土遺物　縄文時代遺物……88
第77図　北城南東虎口図……98

観察表目次

第1表　カワラケ観察表……90
第2表　内耳土器観察表……90～91
第3表　瓦器等観察表……91
第4表　瀬戸・美濃系陶磁器観察表……91～92
第5表　肥前系陶磁器観察表……92
第6表　舶来陶磁器観察表……92
第7表　焼締陶器（常滑）観察表……92～93
第8表　摺鉢・捏鉢観察表……93
第9表　石臼観察表……93～94
第10表　石摺鉢観察表……94
第11表　搗き臼・凹石観察表……95
第12表　石塔観察表……95
第13表　砥石観察表……95
第14表　軽石製品観察表……95
第15表　硯観察表……96
第16表　金属製品観察表……96
第17表　木製品観察表……96
第18表　縄文時代遺物観察表……96

写真目次

PL 1　1 発掘調査前（真上から）　2 同（東から）

PL 2　1 発掘調査 1～6区(真上から)　2 同（東から）

PL 3　1 1～3区全景（真上から）　2 1区作業風景　3 橋脚柱穴（東から）

PL 4　1 橋脚柱穴跡(南から)　2 1区1号堀（東から）　3 仕切り堀（北側部分）　4 同（北側部分）

PL 5　1 仕切り堀（南側）　2 1区堀内集石　3 同（近撮）　4 2区西側セクション

PL 6　1 2区全景　2 2区（東側から）　3 石臼（216）出土状況　4 2区東側セクション

PL 7　1 2区2号堀　2 3区集石状況　3 3～5区全景（真上から）

PL 8　1 1号集石　2 3区堀内集石　3 5・6区全景（真上から）

PL 9　1 2号集石　2 6区から西側を望む　3 3号集石　4 同作業風景

PL10　1 3号集石除去後　2 4号集石　3 7～9区（東側から）

PL11　1 7～9区全景（真上から）　2 7区全景（真上から）　3 1号石積

PL12　1 7区（南から北を望む）　2 7区作業道？　3 8区全景（真上から）

PL13　1 8区旧1号堀　2 8区柱穴群等　3 3号堀封石と3号井戸　4 3号堀セクション

PL14　1 3号堀と5号井戸　2 3号井戸　3 3号井戸半截　4 3号井戸周辺（真上から）

PL15　1 新1号堀　2 6号井戸　3 9区馬歯出土状況　4 墓坑副葬品

PL16　1 9区（西側から）　2 石積と暗渠（西側から）　3 石積と暗渠（真上から）　4 石積と暗渠（真上から）

PL17　1 1号暗渠(真上から)　2 1号暗渠（北側から）　3 2・3号石積（真上から）　4 3号石積

PL18　1 石積と暗渠(東から)　2 9区北側セクションと4号石積　3 10区北側セクション　4 気球による写真撮影

PL19　出土遺物（カワラケ）№1～№25

PL20　出土遺物（カワラケ）№26～№52

PL21　出土遺物（内耳土器）№53～№63

PL22　出土遺物（内耳土器）№64～№71

PL23　出土遺物（内耳土器）№75～№86

PL24　出土遺物（内耳土器・瓦器等）№87～№103

PL25　出土遺物（陶磁器）№105～№120

PL26　出土遺物（陶磁器）№121～№135

PL27　出土遺物（陶磁器）№136～№144

PL28　出土遺物（陶磁器）№145～№162

PL29　出土遺物（陶磁器）№163～№180

PL30　出土遺物（陶磁器）№179・181～№195

PL31　出土遺物（陶磁器・臼）№196～№203

PL32　出土遺物（臼）№204～№207

PL33　出土遺物（臼）№208～№215

PL34　出土遺物（臼）№216～№221

PL35　出土遺物（臼）№222～№227

PL36　出土遺物（臼）№228～№233

PL37　出土遺物（臼）№234～№240

PL38　出土遺物（臼）№241～№250

PL39　出土遺物（臼）№251～№259

PL40　出土遺物（臼）№260～№268

PL41　出土遺物（臼）№269～№276

PL42　出土遺物（石鉢・擂臼）№277～№283

PL43　出土遺物（擂臼・凹石）№284～№292

PL44　出土遺物（凹石・石塔）№293～№301

PL45　出土遺物（石塔・砥石）№302～№317

PL46　出土遺物（砥石・軽石製品・硯・金属製品・木製品）№318～№349

PL47　出土遺物　縄文土器・石器　№350～№357・馬骨-1～6

PL48　馬骨-7～12

第１章　発掘調査に至る経緯

昭和20年の第二次世界大戦が終結して二年後の同22年９月８日に南太平洋マリアナ諸島の東方海上で発生した熱帯低気圧は11日に994ミリバールの台風となった。これを確認した米軍気象観測隊がカスリーン台風と命名した。14日には中心気圧960ミリバールの勢力となり東海道をめざして北上し、停滞していた温暖前線と台風が記録的な降雨をもたらし、群馬県をはじめ関東地方全域において未曾有の大災害が発生した。本県はとくに赤城山を中心とした地域に大被害が発生し、15日の夕方に当大胡町にも大災害を及ぼした。荒砥川を山津波が襲い、根古屋（大字河原浜）、町屋敷（大字大胡）の一部を貫流し、その被害は、死者71名、重軽傷者434名、家屋流失124戸、倒壊半壊98戸、埋没297戸、床上浸水105戸、罹災世帯600、同世帯人員2500、埋没冠水の田畑330町歩と報告されている。

「赤城神社年代記」より過去の水害史を紐解くと「天正十二年（1584）甲申正月朔日大地震、七月二九日湯澤川大水、大胡城下ニテ人馬二百余流失、～」を初め、「享保十（1725）乙巳　今ノ年六月六日湯ノ澤川洪水、丈余ノ水也」「安永六（1777）丁酉　同年五月大雨、手洗川出水、一丈余」「寛政五（1793）葵丑　七月八日大雨、川々大洪水、人馬流失多、大胡辺馬通止、秋毛甚不宜」「文化九（1812）壬申　六月大ニ雨降ツヅキ同二十八日、当山（赤城山）ノ小沼ヨリ出水、～中略～大胡町不残水上ル」等の記載があり、大胡城下は荒砥川の氾濫に度々遭遇していた事が分かる。

近年に於いても荒砥川の増水により、同川の右岸で取水する虎ヶ堰用水(註1)が氾濫し、大胡城下の横町周辺では床下浸水等に被った。昭和57年度には台風災害による城跡東急傾斜地の崩壊等があり、本丸・二の丸等は急傾斜地崩壊対策工事が行われてきた。

また、用水に係わる工事の必要性が論じられ、近年に至ってこれらの災害を防ぎ安全な生活を送るべく、治水工事の進捗が図られて来た。

平成５年３月、当町建設課と教育委員会の間で、横町川(註2)砂防工事に伴う開発について事前協議がもたれ、大胡城跡に係わる埋蔵文化財の問題点を協議した。

事業の進展に伴い、平成10年に前橋土木事務所より具体的な工事概要の設計案に伴い、本事業に携わる具体的な埋蔵文化財発掘調査について前橋土木事務所、町建設課と教育委員会との三者で協議を開始した。横町川（以後、風呂川と称する）は、二の丸と三の曲輪間を流れ、三の曲輪の東から大胡町役場のある四の曲輪の東、そして人家の密集する横町周辺を南に流下している為、現在の用水路幅を拡幅することは困難であり、風呂川の増水した水を本流である荒砥川に戻す手段が最良と判断された。

その結果、大胡神社西の風呂川に架かる堀合橋付近から東の玉蔵院曲輪、本丸と北城間の大堀切り部分に放流路を構築し、増水時に一定量を放水路に流すことで、水害からの危機を免れるとの結論が導き出された。

この結果に基づき設計された路線が県指定史跡「大胡城跡」の指定地域（本丸と二ノ丸）、特に二ノ丸側を工事区から免れる様調整を行い、合意に至った。

平成11年９月29日、埋蔵文化財発掘調査委託契約書を交わし翌日より調査を開始し、翌年２月29日に調査を終了した。

（註１）宮城村境の荒砥川右岸に設けられた取水堰で、その流路（支流）は堀越・茂木の水田を灌漑する虎ヶ堰用水である。根古屋周辺地区では通称「西川」と呼ばれている。前橋図書館所蔵の大胡城下絵図には、「風呂川」の記載がある。

（註２）横町川の名称は、治水工事に係わる名称として使用。

第２章　大胡城跡の位置と環境

第１節　位置と周辺の環境（第１～３図）

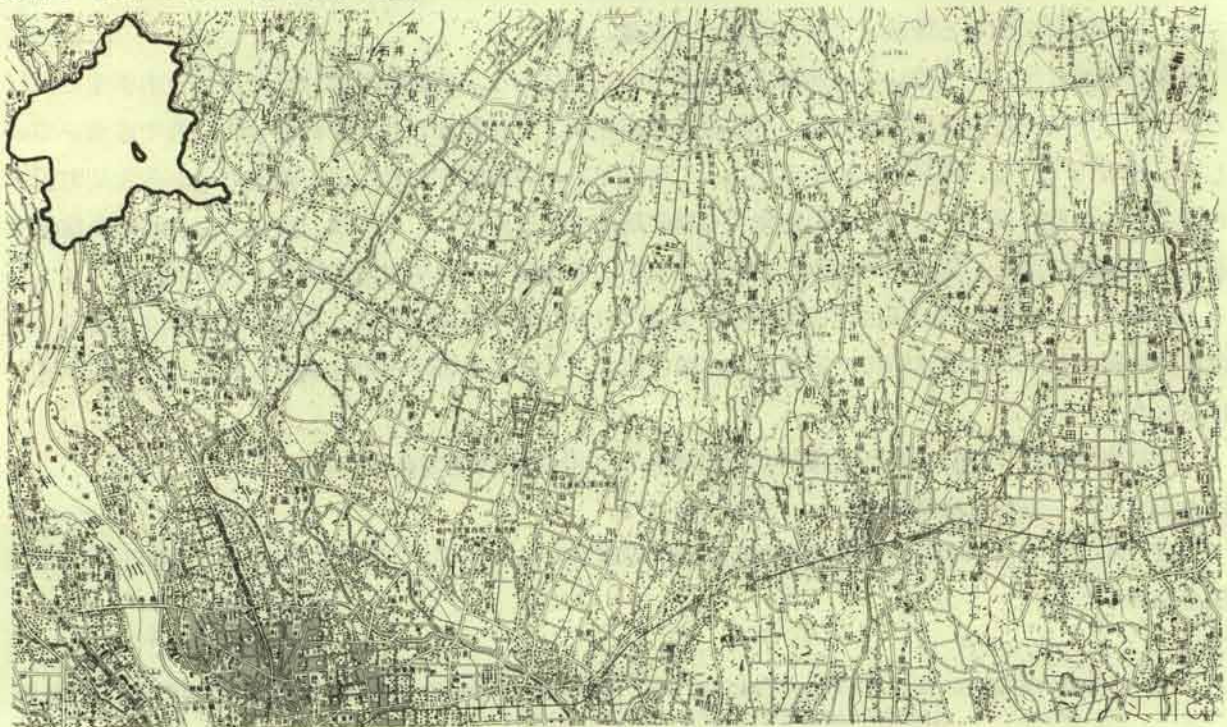
赤城山南麓の裾野に位置する勢多郡大胡町は、首都圏から約100kmに位置する。「鶴舞う形の群馬県」（上毛カルタ）と形容される鶴の胸の部分に当たり、県都前橋市に南と西が接し、東に粕川村、北で宮城村、北西部の最高所で富士見村に接する。

この最高所を標高640mとして平均斜度約３度の南勾配で台地と低地地形が交互に織り成しながら関東平野に移行し、最低所で標高120mを測る。面積は19.76㎢、人口16,769人、世帯数5,245戸の町（平成13年３月１日現在）であり、前橋市の衛星都市として徐々にベットタウン化している。

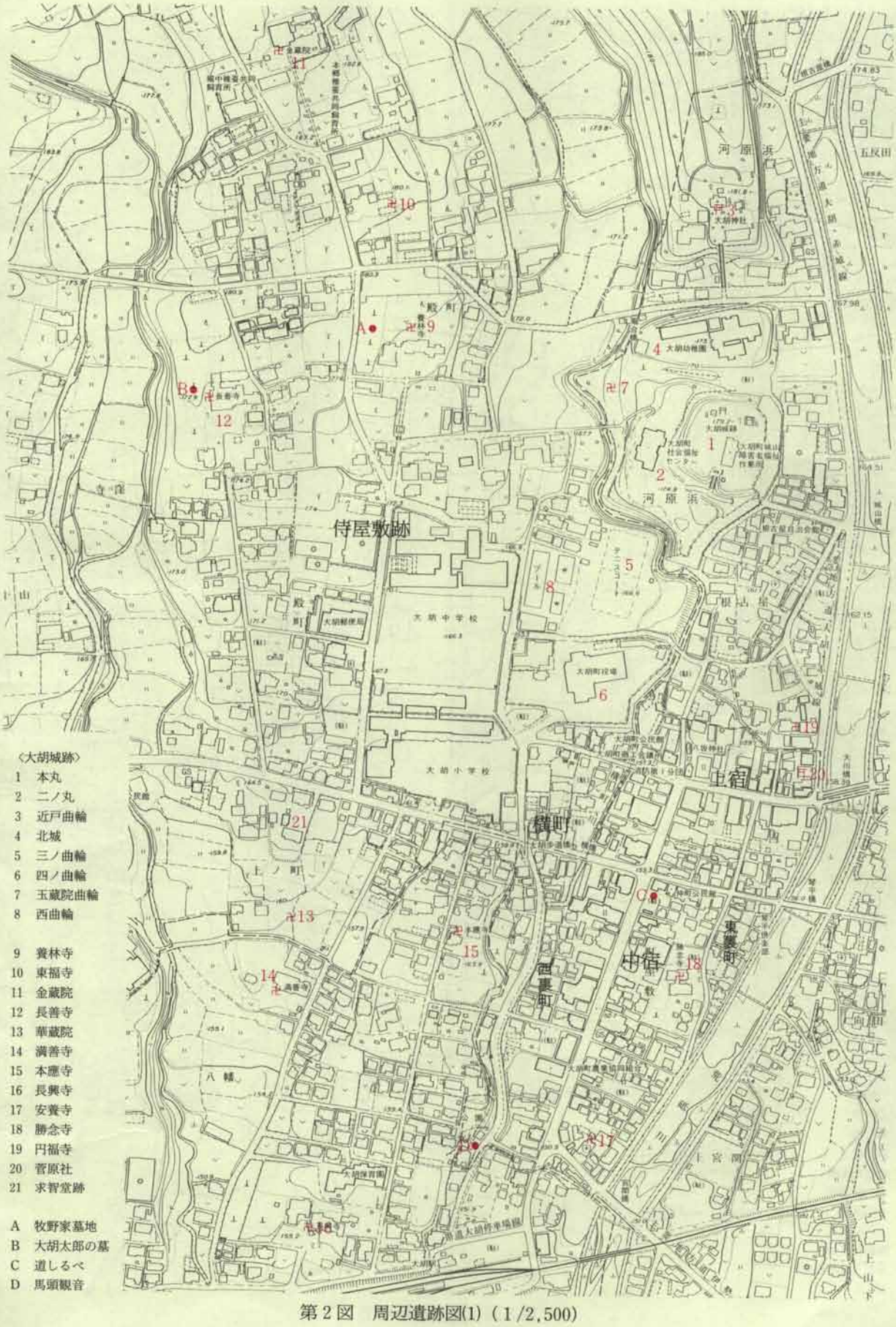
群馬県指定史跡「大胡城跡」は上毛電気鉄道「大胡駅」の北々東約750mにあり、赤城山の荒山の東を水源とする荒砥川右岸の侵食崖が南北に連なる台地（軽石流台地）上に占地している。

城郭部は県指定史跡域である本丸（１）と二の丸（２）を大字河原浜660-１番地とし、北城（４）（現大胡幼稚園）、大胡神社のある近戸曲輪（３）と根古屋の集落が大字河原浜に該当する。三の丸（５）・南曲輪（６）（現大胡町役場）の城郭部と殿町と称されている侍屋敷（大胡小・中学校周辺）は大字堀越にある。城下町は、近世大胡道（日光裏街道）の大胡宿がある大字大胡（旧宮関村）に主体を占め、城郭部（根古屋を含む）、侍屋敷、町屋敷が三つの大字に跨がって所在している。

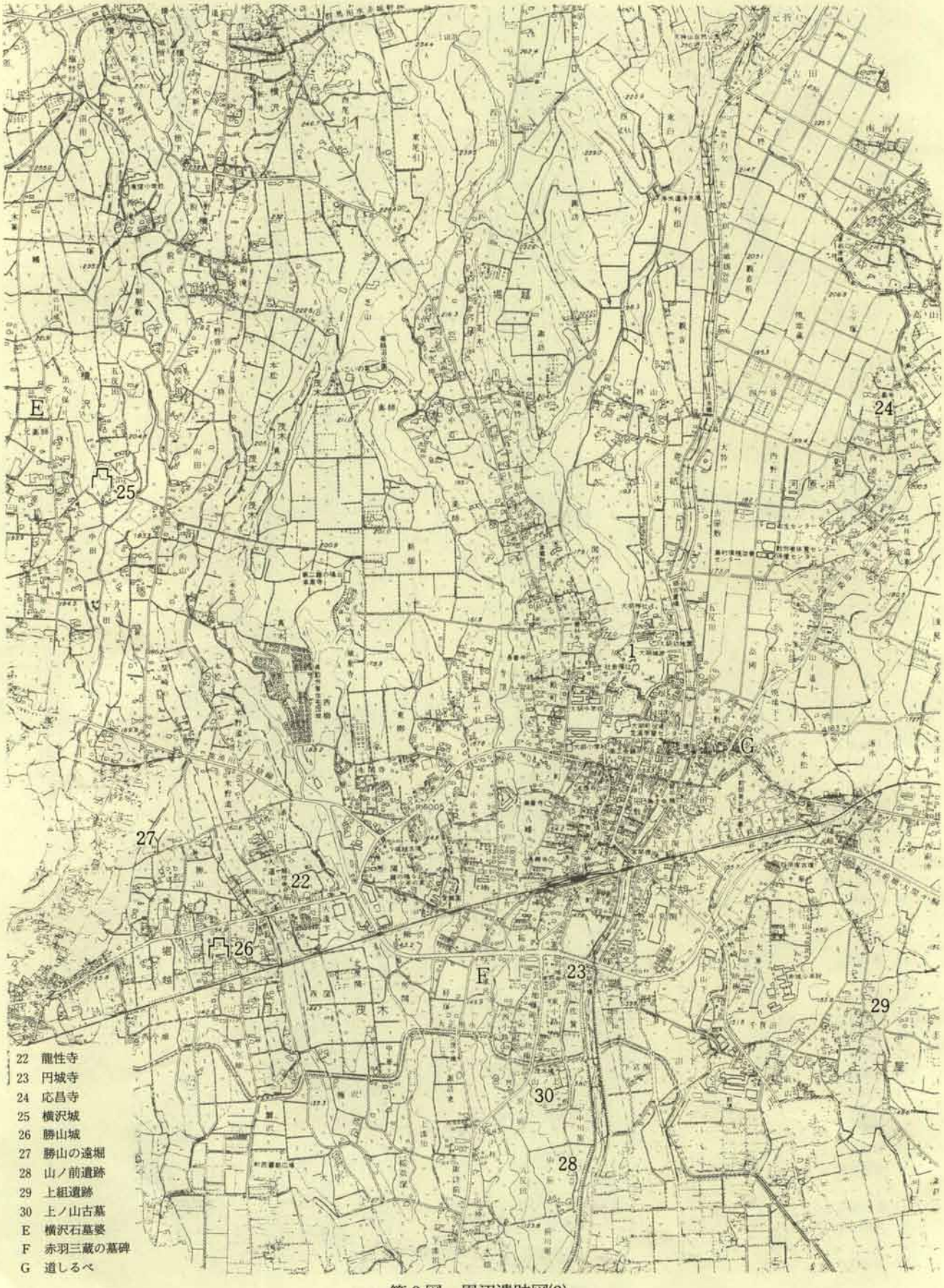
これらの地域には多く寺院が存在する。牧野氏の菩提寺である養林寺（９）には牧野康成（A）とその側室が葬られている。山門は桃山時代から江戸初期の様相を残し、寺域は大胡氏との係わりが推察される館跡で濠跡が残る。長善寺（12）は貞和三年（1347）銘を刻む大胡太郎の墓（B）と伝わる異型多宝塔がある。長興寺（16）は牧野氏の重臣で後の伊勢崎藩主となる稲垣長茂が開山を勧請した寺である。勝念寺（18）は室町時代初期の造像と云われる阿弥陀如来像を本尊としている。金蔵院（11）には牧野



第１図　位置図（１/50,000）



第2図　周辺遺跡図(1)（1/2,500）


E
25
24
1
G
27
22
26
F
23
29
30
28
22 龍性寺
23 円城寺
24 応昌寺
25 横沢城
26 勝山城
27 勝山の遠堀
28 山ノ前遺跡
29 上組遺跡
30 上ノ山古墓
E 横沢石墓婆
F 赤羽三蔵の墓碑
G 道しるべ

第3図　周辺遺跡図(2)

氏の家臣である深沢三四郎が関ヶ原の戦いに武運長久を願い堀越村の村社である諏訪神社に奉納した町指定重要文化財「鰐口」が保管されている。

周辺にも中世～近世に係わる遺跡がみられる。県指定重要文化財「横沢の石塔婆」（E）は施主の長源子満が暦応二年（1339）～康永二年（1343）の５年間に渡り祈念銘を刻んでいる。この地には中世館跡を存在を示唆する堀が以前存在し、五輪塔・板碑が出土したとされ、特に青白磁の水注が注目される。

茂木古墓（30）は鎌倉時代末期の墓地であり、元亨四年（1324）と嘉暦元年（1326）の祈念銘を刻む板碑と常滑焼の骨蔵器が出土している。横沢城（25）は小字内出と称され、天正十八年以前の城と考えられ、現在も僅かに堀跡を留めている。勝山城（26）は牧野氏の大胡入城後に世襲の庄屋として町政を仰せ使った勝山家の屋敷跡である。勝山の遠堀（27）は前橋境から山ノ前遺跡（28）からは２万枚を超える中世の備蓄銭の出土があり、隣接地は館跡が想定されている。中組遺跡（29）からは15世紀前後の竪穴遺構等が検出され、約一貫文の古銭が出土している。

第３章　大胡城跡の概要

第１節　大胡城の沿革

(1)　大胡氏の時代

当町は、上野三碑の一つ「山ノ上碑」に記される「大児臣」[註3]の居住地と推されており、中世に至り大胡郷の地域は大胡一族が荒砥川流域に基盤を作り、活躍したと考えられている。

大胡氏は秀郷流藤原氏の系譜渕名大夫頼行の曾孫重俊に発する家系で、初めて登場するのは「平治物語」巻第一（源氏勢汰の事）の平治元年（1159）、源義朝の軍勢として上野国には大胡・大室・大類太郎が記されている。「吾妻鏡」には源頼朝等の御家人とし、建久元年（1190）～正嘉二年（1258）間に随兵としての記載がある。他に「義経記」、「平家物語」、「曾我物語」等の軍記物にも大胡氏[註4]が登場している。

「法然上人行状絵図」では、寛元四年（1246）に往生した大胡太郎実秀は、生前父大胡小四郎隆義が在京の時に法然上人に帰依して念仏修行に励んでいる。帰国後に浄土の教えに疑問を抱いた実秀は、小屋原（前橋市）の蓮性を使者として上人に尋ねた所、法然から消息（返書）が賜っている。

また、山上（勢多郡新里村）の行仙房が編集したとされる「念仏往生伝」には、大胡小四郎秀村が法然上人の消息に従い念仏昼夜怠らなかったので極楽往生したとされる。

大胡氏は在地土豪とし法然門流と関係し、念仏修行に専念した宗教生活が知れる。その支配拠点は大胡館（現養林寺）にあったと推定されている。

以後、「長楽寺文書」の建武二年（1335）六月十九日に、大胡郷内野中村の地頭職を長楽寺に宛行う国宣が出され、応安六年（1373）と康暦三年（1381）の間には、長楽寺へ売り渡され田畠在家について三通の請文がある。「茨城県鹿島神宮古文書」には貞治四年（1365）の請文に大胡秀能の名があり、文明元年（1469）に太田道灌の父資清入道道真主催による川越千句に大胡氏が参加し、修茂の名が見られるがいずれも系譜は不明である。

永禄二年（1559）に北条氏康が支配下の諸役の負担の基準を作成した「小田原衆所領役帳」には、

大胡民部の所領　江戸牛込　64貫430文　江戸日比谷本郷67貫780文　葛西堀切　45貫文

と記され、大胡氏の一族が江戸に居住していた資料である。

大胡氏の江戸牛込移住[註4]は諸説があり定かでないが、牛込に赤城神社がある。赤城神社の伝承によると「正安二年（1300）、上野国赤城神社より牛込早稲田村田島に勧請した」に始まるとされる。

文安元年（1444）に武蔵国六郷城主松原讃岐守八道妙讃から奉納された大般若教が赤城明神に奉納されている事実から、それ以前の明徳三年～文安元年の間に社殿が造営されていたと推察されるが大胡氏が勧請した傍証は不明である。寛正元年（1460）には太田道灌により牛込台下の田島森から番町台へ移転された。弘治元年（1555）に牛込城に居住していた大胡勝行は、赤城明神を番町台より牛込台に遷座させ、大胡近戸門神と赤城姫命を合祠したとされる。

大胡勝行は天文十二年（1543）に死去した父大胡重行のために寺を建て、寺名を重行の雲居宗参より宗参寺とした。天文二四年（1555）一月、大胡勝行は北条氏康より大胡を改め牛込を名乗る「手書」」を賜っている。

永禄三年（1560）、長尾景虎（のちの上杉謙信）は、関東管領上杉憲政を擁護して関東に出兵し、翌年に憲政の譲りを受けて関東管領となった。以後、上杉・武田・後北条氏の三者による戦国動乱期を迎える。

上杉謙信が永禄四年（1561）の小田原遠征に参加した関東諸国の諸将の家紋を記した「関東幕注文」の中に廐橋衆として　長野藤九郎 檜扇　同彦七郎 同紋　大胡　かたはみに千鳥すこそ　引田伊勢守かう竹の丸の内にさふ梅五ツ　の四家が記されている様に大胡氏は箕輪城の長野氏の一族の長野廐橋氏に服従して廐橋衆の一員を構成していた。

〈上泉氏〉

この大胡氏と同紋を使用した上泉氏は、長野業政に仕えた上泉武蔵守信綱は始め大胡信綱と称したが上泉村に居住したので地名をとって上泉氏とした。信綱の子で剣豪として名を馳せ、神陰（新陰）流の祖である上泉伊勢守秀綱は、武田信玄による永禄六年（1563）の箕輪城攻め後に信玄の招きを断り、一時桐生氏を頼ったが、その後に諸国行脚に出ている。

〈北条高広と大胡常陸介高繁〉

北条高広は、越後国刈羽郡北条出身の毛利姓の豪族で、永禄五年（1562）五月に廐橋城代となり、上杉氏の上野支配の重要拠点となった。これ以来、北条高広は越後から移住定住して隣接する大胡等周辺を掌握して上野の中央部を確保し続けた。北條氏と大胡を関係する米沢図書館蔵の上杉文書の『与板組先祖書』では「景虎様御代上州之内おふこの城代ニ長門被指置候。～」と記している。

同文書の『御家中諸氏士略系譜』によると、「北條右衛門尉光広、上杉謙信公御代永禄元年右衛門尉ニ改、上州大胡之城相守、天正十一年八月二日卒ス」と記し、『越佐史料』では「北條毛利九代の輔広は、上州大胡城主光広の子で、～中略～11代高広がその晩年を大胡に隠退したと伝わる」としている。

天正十二年（1584）に北条高広は、後北条に降伏して廐橋城を明け渡して三俣城（片貝の根古屋）に退き、大胡高繁が大胡城主となった。高広は晩年、大胡に隠居して天正十五年（1587）に死去したとされる。

北条高広と大胡常陸介高繁の関係は不明であるが、高広が廐橋城城代となった永禄５年以降に大胡常陸介高繁は高広の重臣として活動を共にし、目まぐるしく変貌する上州の覇権争いの動乱期を生き延びたのであろう。

大胡常陸介高繁に係わる書状は「赤城神社古文書」に四通ある。

(1)　天正十年（1582）九月九日

伊勢房為祈念永楽壱貫文令進納候。殊宮中社人衆知行公事以下万事如前々紀伊父子任置候。弥被抽舟

誠尤候。仍如件。大胡常陸守高繁　三夜沢神主紀伊守殿

(2)　天正十三年（1585）七月九日

三夜沢宮中佗言之筋目附而、守護府不入之事、任旧規不可有相違。弥以武運長久、子孫繁昌之祈念可致精誠者也。仍如件　常陸介高繁　奈良原紀伊守殿

(3)　天正十三年（1585）八月吉日

有立願之旨、柏倉之内九貫文之地為新寄進奉納候。弥武運長久、子孫繁栄、当城安全之所、被抽丹精御祈　成就所仰候。仍状如件。大胡常陸守高繁　三夜沢神主紀伊守殿

(4)　天正十七年（1589）十一月九日

一筆致啓上候、御堅固之段珍重奉存候、然者、其地赤城大明神、当城之鎮守ニ近戸大明神ヲ奉祭度候間、其元父子之中此方江引越、神事奉頼候、万事家来口上申候。謹言。常陸介　奈良原紀伊守殿

(註3)都丸（1995）は、大児は別に大胡と書かれるので、胡人つまり帰化人のいた所であろうというが、「大子」つまり長子などの住んだ所と推察している。昨年度の山神II遺跡の発掘調査で出土した「大兒万財□」と書かれた平安時代の墨書土器により「大児臣」の存在が裏付けされ、都丸の推察した様に当地に於ける在地豪族が「大児臣」であり、地方豪族の「大胡氏」の誕生で地名が大胡となったと考えられる。

(註4)大胡氏が軍記物に登場する場合の多くが、赤城南麓の武士では筆頭的に最初に記されている。「六条八幡宮造営注文」(海老名　尚・福田豊彦　1992)に記載されている上野国御家人は12名で、総負担95貫文である。最も多い佐貫氏の20貫文に次いで12貫文を大胡太郎跡（大胡重俊カ）が負担している。

(註5)「牛込氏と牛込城」で大胡氏の移住の一考察で、「赤城山麓は古代から馬牧の地で大胡氏も馬牧に関係があり、移住先の牛込地域には牧場と関係の深いを地名を残すことから大胡氏は牧場管理をしていたと推察している。

(2)　牧野氏の時代

天正十八年(1590)、豊臣秀吉は後北条氏の居城である小田原城を攻略し、天下統一を果たした。その旧領は徳川家康に与えられ、関東入国を果たし、江戸城に入城した。徳川四天王の一人である榊原康政を総奉行として領内の知行割を行い、三河以来の重臣を戦国以来の要城に配し、江戸城の守りとした。上野国は江戸城北辺の外郭にあたり、東北や甲信越に対する防御前線であり、井伊直政（箕輪12万石）を信越両国に対する抑えとし、榊原康政（館林10万石）を常陸の佐竹氏や東北への備えとし、中央部に平岩親吉(前橋３万３千石)、幼少から徳川家康に仕えて長篠の戦や駿河国田中城攻め等に軍功をあげた三河以来の譜代重臣である牧野康政は、大胡二万石の城主となった。その所領である大胡領は、現在の宮城村・粕川村・新里村と赤堀町の一部を含む大胡東領と大胡町を中心として前橋市の一部（旧城南村）を含む大胡西領の地域であった。

牧野氏は入城から越後長嶺に転封の約26年間に、近世城郭として大胡城・城下町の整備が遂行された。その特徴は、第１に桝形の形式をもつ虎口の整備、第２に捨曲輪を廃して三の曲輪と四の曲輪を設け、根古屋囲部の拡張や西曲輪の設定、第３は城下町の整備として風呂川を二の丸と三の曲輪間に流し、その一部を用水として本町に流している事、第４に家臣団の居住区を整備し、殿町地区に侍屋敷を設定した事等と考えられる。

康成は、慶長五年（1600）の関が原の戦では、徳川秀忠に従って信濃国上田城攻めに参戦したが軍記違反を犯し、吾妻郡内に蟄居を命ぜられた。この蟄居の場[註6]が、北群馬郡長尾村の白井城と岩櫃城の説がある。その後、蟄居を許されたのは数カ月（牧野家譜）か、慶長九年の秀忠の嫡男竹千代の出生の時（牧野家家史）の二説がある。同九年（1604）に50歳となった康成は、多病の為に家督を忠成に委ねる。慶長十四年（1609）十二月十二日、55歳で没し、養林寺に葬られた。

忠成は、慶長九年より父康成に代わって政務に携わり、同十年の徳川秀忠の上洛に際して御供として京に入る。同十九年（1614）の大坂冬の陣では先鋒として加わり、夏の陣にも従軍して功績を立てる。元和二年（1616）七月、越後国頸城郡長嶺に5万石余で転封、同四年に1万石が加増され、長岡藩に転封となり、6万4千石余を領地する。さらに同六年（1620）三月には、さらに1万石を賜り、都合7万4千石余となった。長嶺に城郭を企画している間に長岡転封となり、寛永七年（1630）三月三日に入国を布告し、六月に到着している。

⑶ 酒井氏の時代以後

元和二年（1616）の牧野忠成の長嶺転封により、大胡藩は同年八月より前橋藩酒井忠世の家領となり、同三年七月以来、大胡領は前橋藩領となった。大胡領が前橋藩に編入されると大胡城の建物は片付けられ、必要なものは前橋城に移築されたのである。この移築[註7]に関する仕事は、酒井氏の重臣である高須隼人を中心とした大胡組または大胡衆と称される組織がその任に当たった。寛文九年（1669）に城代が置かれ、寛文十一年には大胡目付の支配となった。

大胡宿の様子は、貞享元年（1684）に前橋藩主酒井忠挙の命によって儒臣古市剛が撰進した地誌『前橋風土記』に

「大胡町、本町、古城の東に在り。道南北に通ず。北は上宿と名づけ、南を下宿と曰う。市有り、三八の日を期となす。群商ここに聚る。横町、古城の南に在り。道東西に通ず。其の東は本町の半に列り、西は北に曲折す。古城に到るの道なり。裏町、比びて本町の東に在り。而して本町に比ぶ。北は上宿に列り、南は下宿に通ず。商と農と居を接せり。右は、大胡の坊街なり。」と記されている。

元禄十三年（1700）には、大胡在住の家臣やその師弟の教育を目的として「求知堂」[註8]が建てられた。

この頃の大胡城周辺の様子は、「大胡城絵図」（前橋市立図書館所蔵）で知れる。藩主酒井忠挙は領内の総検地や上野国絵図の作成を命じており、この絵図には「求知堂」が描かれていることから姫路転封以前の1700～1749年の間に製作されたと考えられる。大胡城考で福島は「酒井家の手で完全に測量したと見え、遺跡と対照して可成り正確な事までわかる」と記している。

寛延二年（1749）に前橋藩主の酒井忠恭は姫路転封され、大胡目付の支配が終わり、大胡城は完全に廃城となった。

⑷ 廃城以後の大胡宿

大胡宿には、町指定重要文化財に指定されている「道しるべ」が2カ所にある。中町と横町が交わる交差点の南東隅と河原浜向屋敷の交差点にあり、前者は

「東　文化六（1809）己巳六月　世話人奥泉文平　江原忠兵衛」「西　前橋　米野」「南　五料　伊勢崎」「北　日光　大間々」と刻んでいる。

後者のある向屋敷は侠客で名を馳せた大前田英五郎が晩年に居住し、通行人の便宜を図って建立したと曰われ、「右桐生　大間々」「左　日光」と刻まれている[註9]。『前橋風土記』に記されている市は六斎市で、近年その面影は全く失われてしまったが、江戸期においては近隣の粕川村等で生産された糸まゆが売買されたり、馬市が開催されていた。

昭和初期までは風呂川から分水して大胡宿の中央通りに宿用水が流れ、宿場町らしさの風情を残していた。その様子は明治十八年に「汲場設置願書」に記され、用水の東西に洗い場が設けられていた。

(註6)蟄居の場所については、「子持村史」では北群馬郡長尾村の白井城と推察。

(註7)「直泰夜話」では、「御用場は評定所と申し候。咸休院様（忠挙）御代、天和四子年（1684）公儀にて評定所と申すに付御遠慮遊候。御用場と可申候旨被仰付候。以前は粗末成る事に御座候得共、此の節大胡の城の御殿を崩し候て、書院は前橋本丸の焼火の間に御建て被候、広間を御用場に建て被遊候。それ迄は大胡は牧野右馬充殿在城の節御殿有之、大胡住居の給人番を勤め候。元和の初には江戸より大勢引越被仰付、給人八十人余り大胡に住居仕候。」「姫陽秘鑑」元和六年（1620）の条には、「前にて昔大胡組と申候者故隼人大胡御城預り居城之節大胡之御家中者隼人組に御座候。隆興君（忠世）御時分也、大昌君（忠清）御代御老中様方江御届と成候隼人者三之曲輪江御移し後は新御殿と申候～」

(註8)元禄13年に建てられた「求知堂」は、前橋藩の酒井氏の川越転封に伴い武家の学問所は終わる。

(註9)萩原進（1965）「道しるべ」に博徒の親分の大前田栄五郎が嘉永年間（1848～1853）衆人のために建てたというと記す。

第2節　大胡城跡の縄張りと発掘調査地点の概要（第4・5図）

城跡は赤城山麓の舌状台地[註10]の先端に構えた断崖城であり、特に史跡指定地域の東端は、15m程の断崖となり、県指定の急傾斜地となっている。城郭部となる台地は標高184m～170mを測り、北から大胡神社のある近戸曲輪から南の大胡町役場の四の曲輪に及ぶ長さ670mを4つの堀切りで区切り、東側の荒砥川を防御に組み込み、城郭部との間に根古屋を形成する戦国期の根小屋式山城の形態を具備した基本的に連郭式の城郭である。

曲輪の配置は、北から大胡城の守り神である近戸神社（現在は大胡神社）が鎮座する近戸曲輪、堀切り（堀越上大屋線）を挟んで大胡幼稚園として利用されている北城、調査区の大堀切りを隔てて本丸、その本丸をL字形に二の丸が囲郭する。二ノ丸に北西に一段低く玉蔵院があった玉蔵院曲輪があり、風呂川を挟んで南にテニスコートとして利用されている三の曲輪、そして西曲輪（学校プール）と根古屋を結ぶ堀切り道の南に大胡町役場のある四の曲輪を設けている。

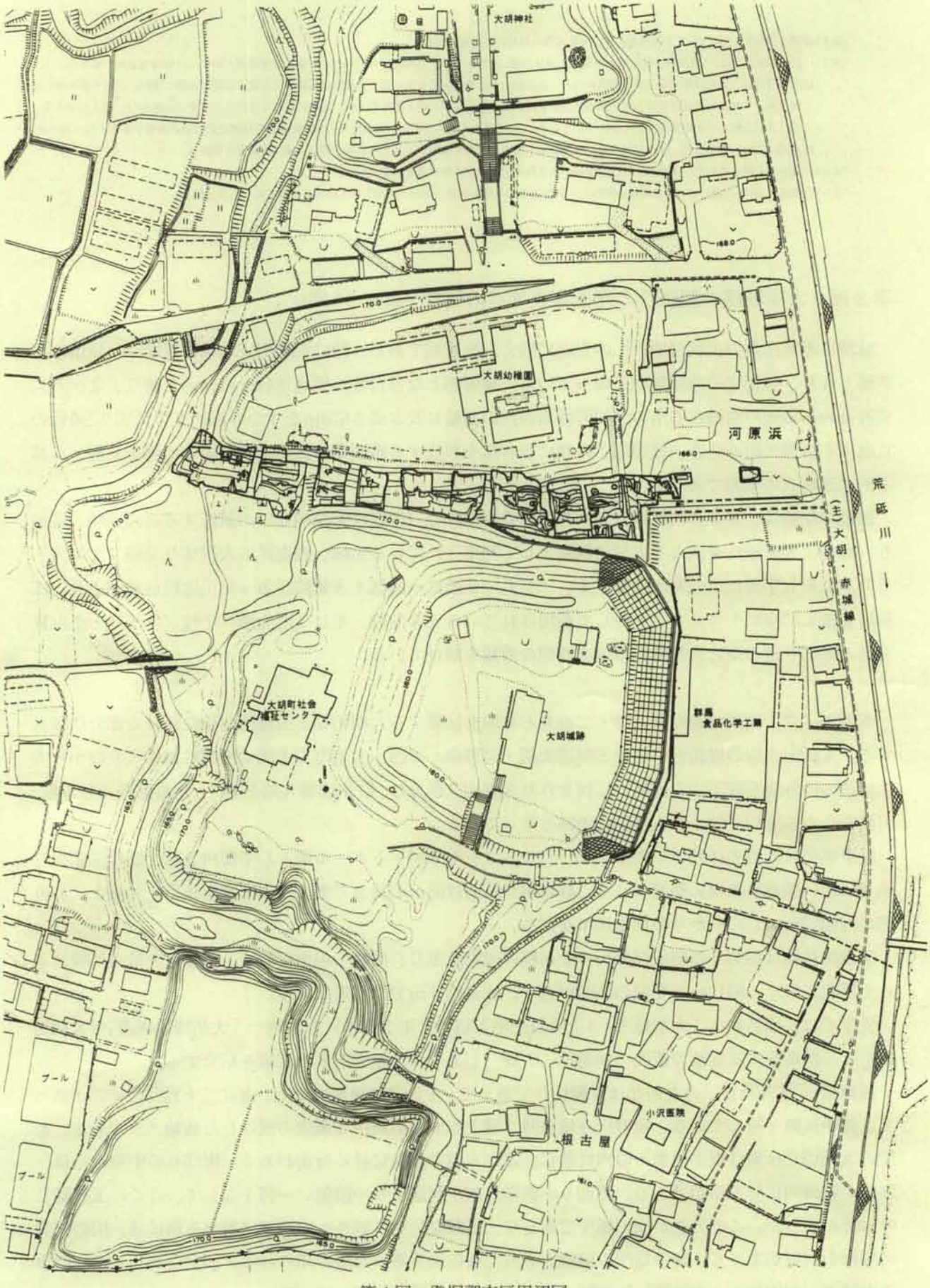
本調査区は、大胡城跡の本丸跡・二の丸と北城を区画する大堀切りと玉蔵院曲輪に係わる部分に該当する。荒砥川右岸の堤防沿いを走る県道大胡・宮城線から西へ大胡町立大胡幼稚園駐車場入り口から大胡城跡の西外縁を流下する風呂川に挟まれた大堀切り部分は、駐車場導入路を経て、幼稚園職員駐車場、旧状を止める堀切り跡、旧玉蔵院墓地跡となっている。

駐車場部分は過去に於いて埋土され、バレーコートやゲートボール場として使用され、幼稚園園児の増大に伴い職員駐車場に整備された。駐車場から西は55mの長さで堀切りの旧状を止め、北城と二の丸間の堀幅20m、二の丸からの深さ10mを測る。

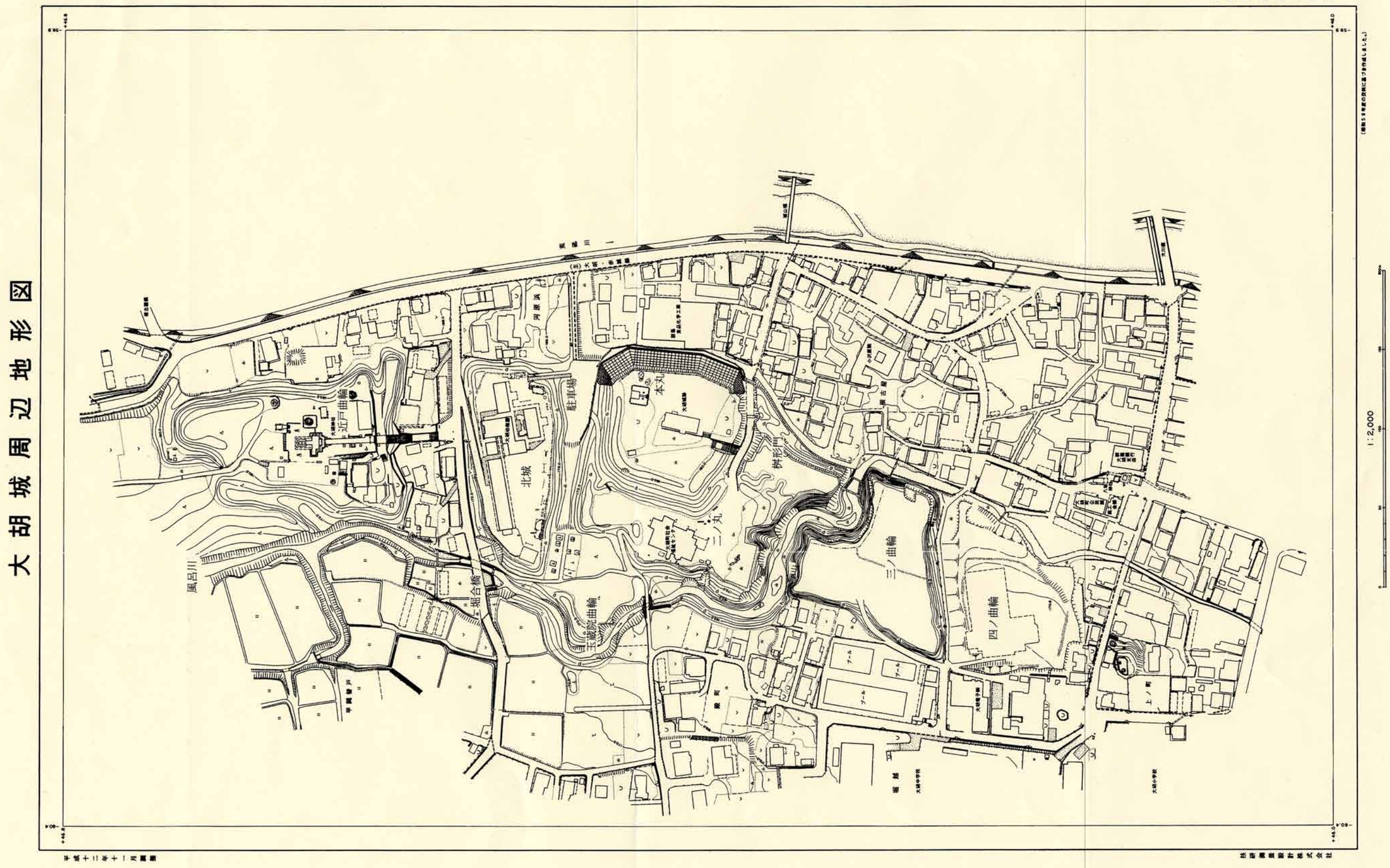
玉蔵院墓地は堀切りの旧状部分から2m程の段差を生じ、曲輪平坦面が続く。西端は曲輪の外縁に巡る土塁北先端部と幅12mで北城の法面が迫り、比高差5mで風呂川となる。

先学では、福島武雄「大胡城考」（上毛及上毛人昭和4年1月号）と山崎一「大胡城の構造」（大胡町誌）と「群馬県古城塁址の研究　補遺篇　下巻」があるので該当部分の記載を紹介する。

福島は、「本丸及び二の丸の北は大堀切りであって、その北に東西六十間、南北二十五間の一郭があって、越中屋敷と呼んでいる。牧野氏在城当時、城主忠成の弟越中守儀成の居住した曲輪[註11]である。前記の大堀切りは東は根小屋構えの内に通じ、之から越中屋敷に昇る坂道がある。堀切りの中央からは、本丸の乾堀内に昇る事ができる。堀切りの西端は越中屋敷より一段低い一郭をなして、ここに玉蔵院と呼ぶ寺があった。この方面が城の搦手であって、玉蔵院址から城外への通路に当たる所には、川の両側に橋桁の石垣があって、搦手城門の位置も恐らく其の辺であった事が知られる。～」と記し、越中屋敷の曲輪名、堀切りからの通路、玉蔵院の存在、搦手の位置を指摘している。



第4図　発掘調査区周辺図



第5図　大胡城周辺地形図

山崎一は、北城と本城間の堀切りを「第二堀切り」と仮称し、玉蔵院址が存在した「玉蔵院曲輪」と本丸と二の丸間の空堀と北城への拡大部分を「中曲輪」と称し、論じている。

◎玉蔵院曲輪（大胡町誌）

北城と本城二の丸との間の第二堀切西部はひろがって、用水に西側を限られた南北100m、東西70m程の一郭となる。郭城面、二の丸面より７mばかり低いが、第二堀切底より２m高く、堀切掘窄時にはそのまま残された自然土面であることが知られる。ここを掘り残したのは用水が堀切に切れ込み荒砥川に流入するのを防ぐためでもあろうが、一北を構えて本城、北城間の繋ぎとし、また搦手口の固めとした意図も推察される。西北面寄りに鍵形の高土居が盛られ、直虎口跡もあるからこれが明らかとなる。この虎口は北城竪壕末端部の隘路にあったと思われる虎口との間に若干の武者屯を設けるため、10mあまり後にさげてある。尚、郭の西南部に橋台跡が認められ、西方の養林寺方向に対し、架橋されていた。南には二の丸の西虎口に登る坂道がある。大胡廃城後この郭には真言宗玉蔵院が建立されたが現在は金胎寺と合併して堀越の金蔵院観音寺となり、墓地だけがのこっている。玉蔵院曲輪とはそのための名である。

◎中曲輪（大胡町誌）

第二堀切の東部、本丸と北城との間に当たる部分は拡大して「中曲輪」を形成する。ここは本丸から二の丸堀を通り北城東虎口に入る中つぎの郭であって、北城の東下をめぐって近戸曲輪東虎口に通ずる道もここからつづいていたのであろう。北城を本城と一括した防御計画に加える場合には、二ノ丸から直接連絡をより強力にすべきで、土橋を掘り残すが、堀切に「折」を設けて架橋するのであるが、この城のように別城支点として独立性を強調するには、「中曲輪」のような中継施設が必要となる。敵がここに侵入しても、両側の郭からの俯射により長く地歩をふまえることは不可能である。

◎大胡城の構造（群馬県古城塁址の研究　補遺　下巻）

北城、本城間の堀切（第二堀切と仮称）は長さ160m、中央部75mは明らかに純然たる堀切であるが、東部と西部しは単なる堀切りではなく、拡がって一郭を形成している。東部70mの間は、上幅50m、底幅25mあり、今これを「中曲輪」と仮称し、西部は玉蔵院という寺があった郭なので「玉蔵院曲輪」と仮称する。玉蔵院曲輪と本城との間には上幅８m、深さ2.5mの壕が掘られ、第二堀切りの西端から南に折れ屈曲して60m伸び、用水の近くに達している。これは昭和51年、西城外から二の丸に登る歩道を設けるため事前調査の試掘を行って確認されたものである。

本城の本丸、二の丸の間の堀は後に本丸、二の丸を分離するため掘られたと推定され、玉蔵院曲輪、本城間の堀と形状が近似している。

山崎は第二堀切りの形状に注目し、重要な指摘をしている。第１点として、その堀幅から仮称「中曲輪」の存在、第２点は玉蔵院曲輪の機能と搦め手の位置を述べている。

(註10)台地は赤城山から供給された軽石流台地で火山物質は火砕流堆積物と火山泥流状堆積物で、溶岩でない。通称「大胡軽石流堆積物」と呼ばれている。

(註11)越中屋敷の呼称について、山崎は「群馬古城塁址の研究 補遺篇 下巻」で牧野越中守成儀の居住した曲輪から越中曲輪と呼ぶ事に対して、「藩翰譜」によれば万治三年（1657）３月５日卒、55才となっている根拠から生誕は1602年であり、越中守に任ぜられたのは明暦二年（1656）の十月であり、卒去の前年であることから、越中屋敷の呼称を用いず「北城」を使用している。「牧野家家史」では牧野成儀は越中守でなく通称帯刀自美濃守と記されている。

第４章　検出された遺構と遺物

第１節　遺　　構

(1)　発掘区とグリット設定（第６～10図）

本遺跡の設定調査区は、発掘調査地点の概要で述べた様に、北城と本丸を区切る大堀切り部分に該当する。大まかに１区と２区は玉蔵院曲輪の北側平坦部に位置し、その大半が旧墓地域部分であり、北側で北城の南法面にかかる。墓地が途切れる西側には北城の北西に架かる堀合橋の東より風呂川左岸に沿って幅狭の通路が続く。この通路は後述するが玉蔵院曲輪に入る虎口部分としてその痕跡が辿れ、南西隅では残存する土塁の裾部が迫り風呂川に接する。

３区～６区は堀切り部分が良好に残存する部分で、二ノ丸側法面の崩落の危険を防ぐ為に調査区南側にシートパイルを設置したが、油圧による差し込みでは大胡軽石層の下部に食い込まないのでドリルによる穴を設けて構築した。その支えとして堀内に北城に続く幅広のベルトを残して安全性を高めた。

７～９区は幼稚園の駐車場地区で、コンクリートと砕石、残土による埋土を除去し、大胡幼稚園南東入り口園路の西側を７と８区に２分し、園路の東に９区を設定した。10区は駐車場搬入路の北側部分に設定し、これらの部分に５ｍ方眼のグリットを被せた。

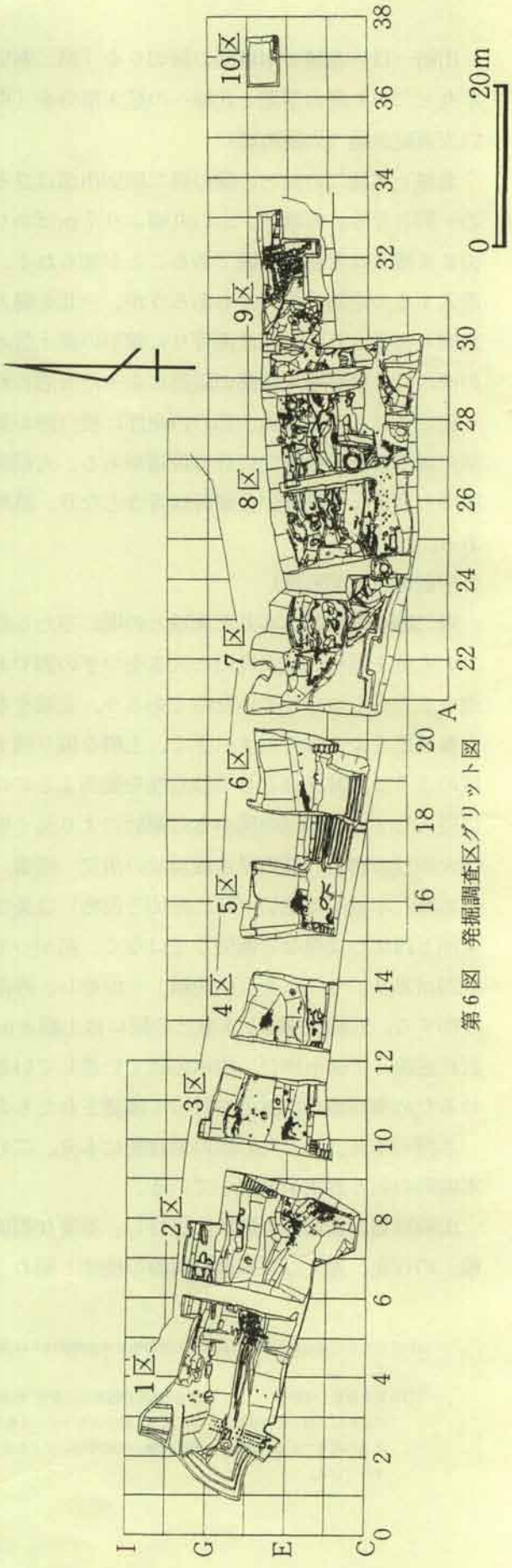
１区から９区に続く１号堀は、１区で橋脚跡と仕切り堀、２区に於いて２号堀との重複、３～６区では堀浚いによる集石、７区では新旧に分岐し、８区では新旧堀が併走し、９区に至り走行を南東方向としている。玉蔵院に係わる１・２区では１と２号堀が埋土され、寺域の拡張が成されたと考えられる。

７・８区では居住性が考えられる井戸跡と柱穴群が検出され、９区では遺構の東端が確認された。

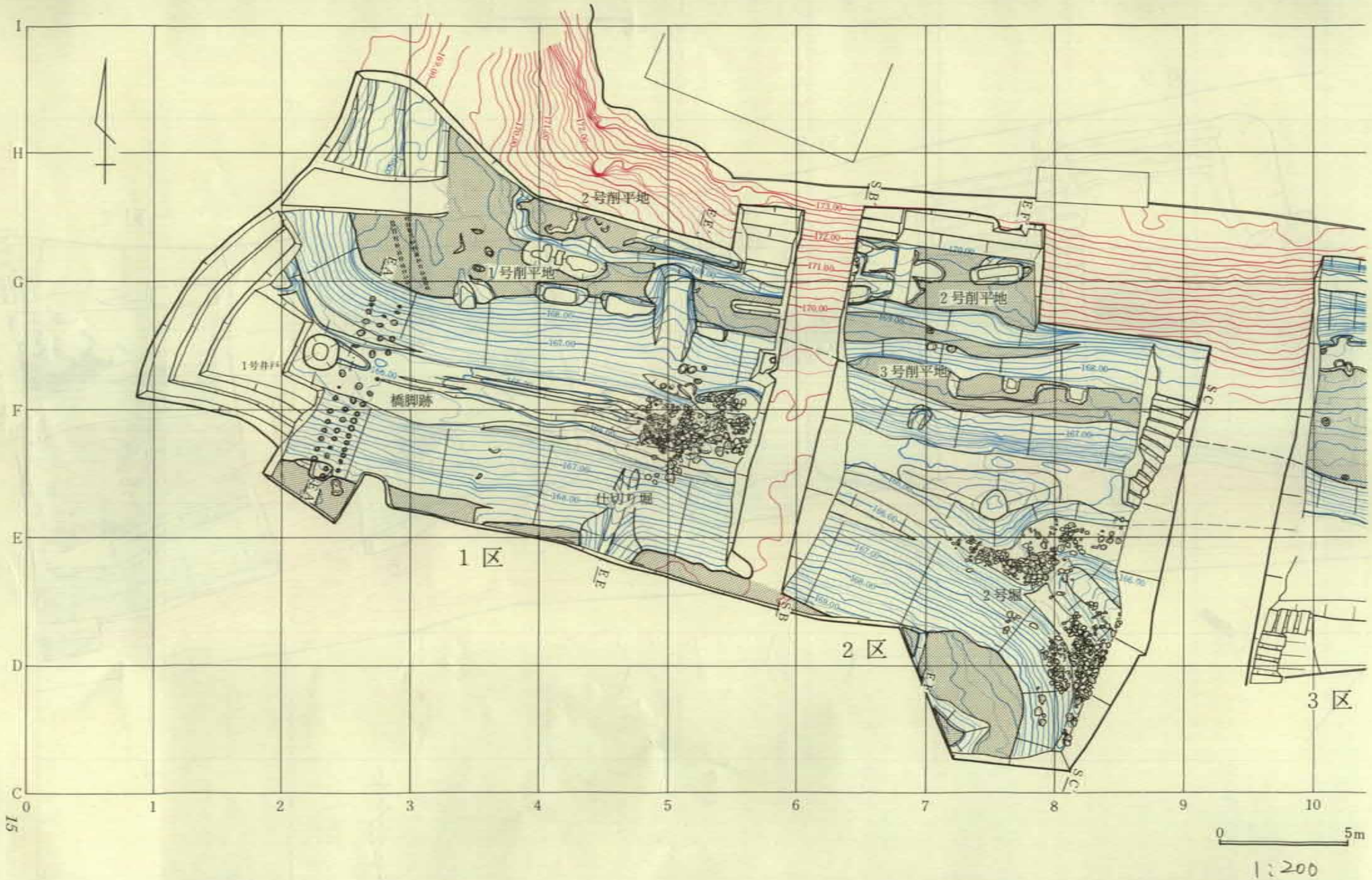
(2)　遺構の概要

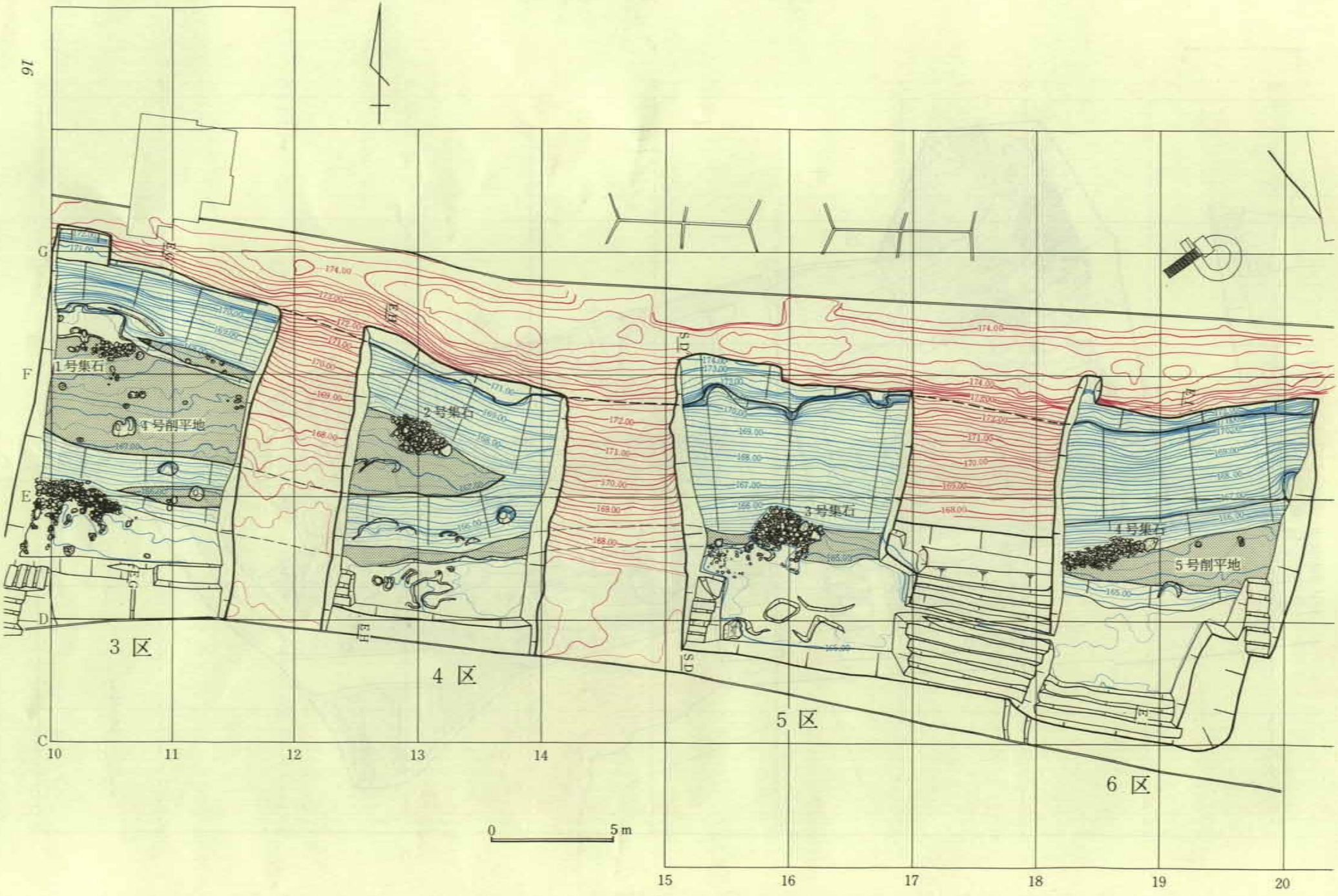
《１区》（第７・11・12・18図）

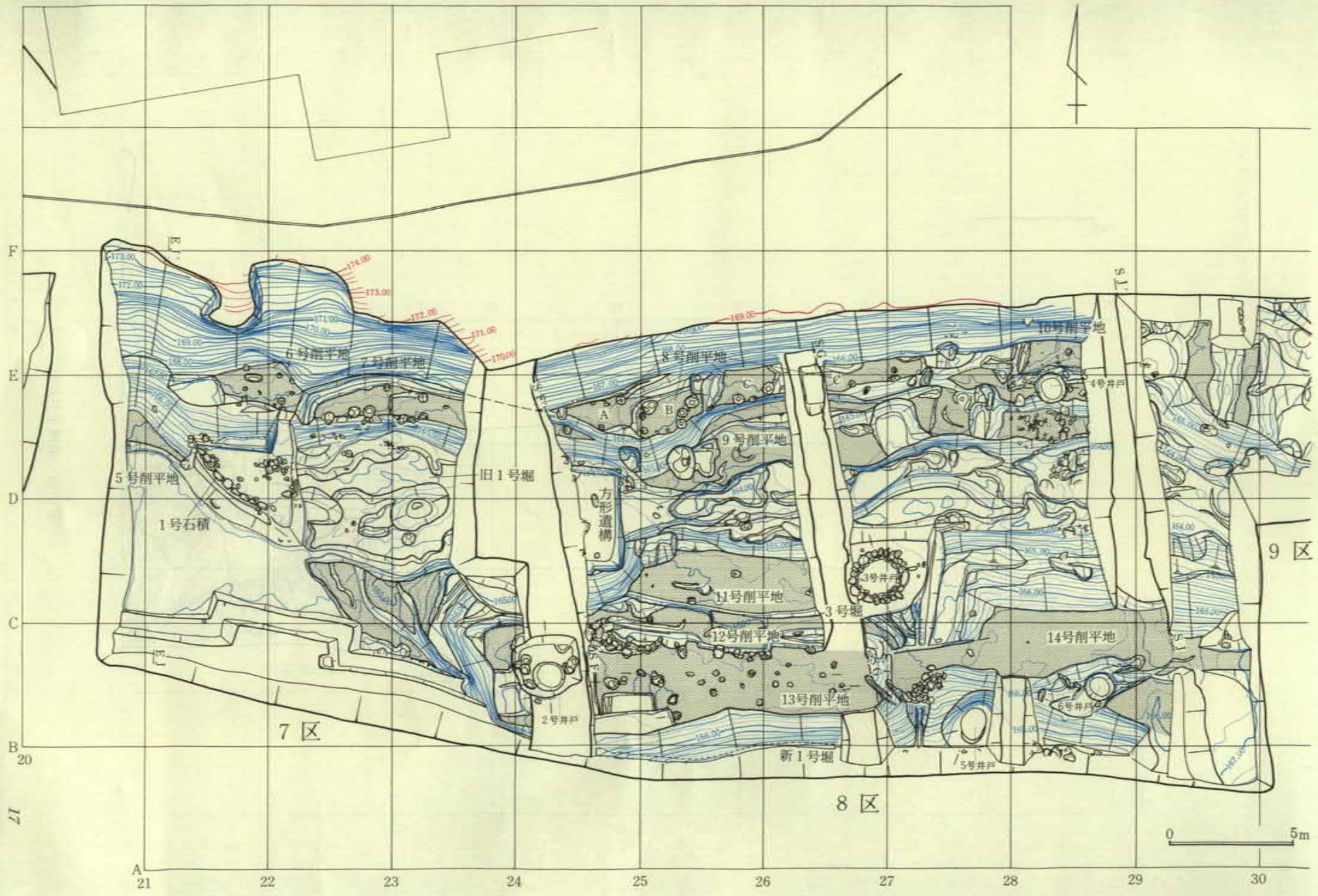
本遺跡の主要遺構は１号堀跡であり、１区～９区に連続して検出された。１区では西方で１号井戸と橋脚

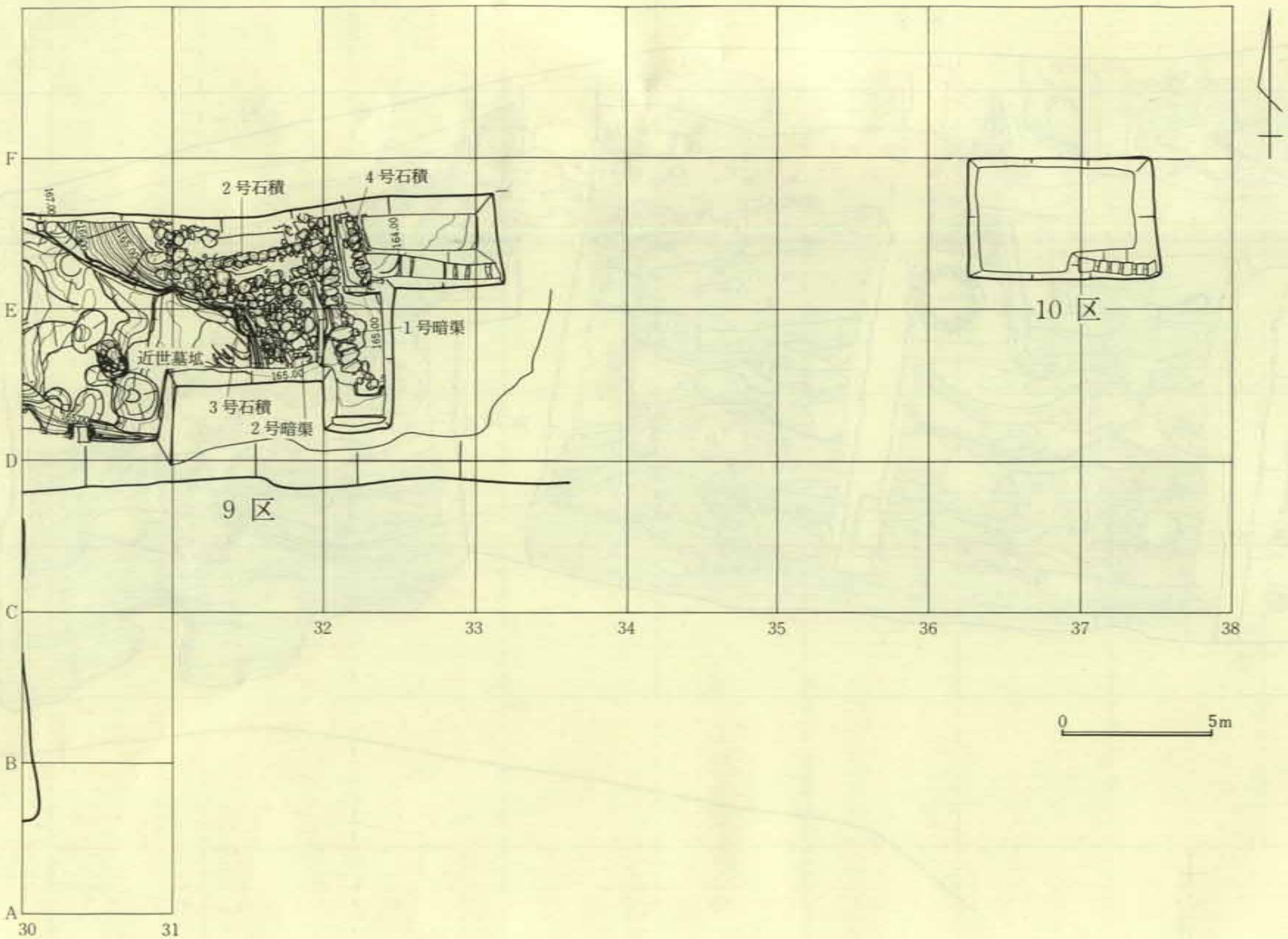


第６図　発掘調査区グリット図


I
H
G
F
E
D
C
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
15
2号削平地
1号削平地
1号井戸
橋脚跡
仕切り堀
1区
2号削平地
3号削平地
2号堀
2区
3区
0
5m
1:200


16
G
F
E
D
C
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
1号集石
4号削平地
2号集石
3号集石
4号集石
5号削平地
3 区
4 区
5 区
6 区
0
5m


6号削平地
7号削平地
8号削平地
9号削平地
10号削平地
5号削平地
1号石積
旧1号堀
方形遺構
11号削平地
12号削平地
13号削平地
14号削平地
3号堀
新1号堀
2号井戸
3号井戸
4号井戸
5号井戸
6号井戸
7区
8区
9区
0
5m

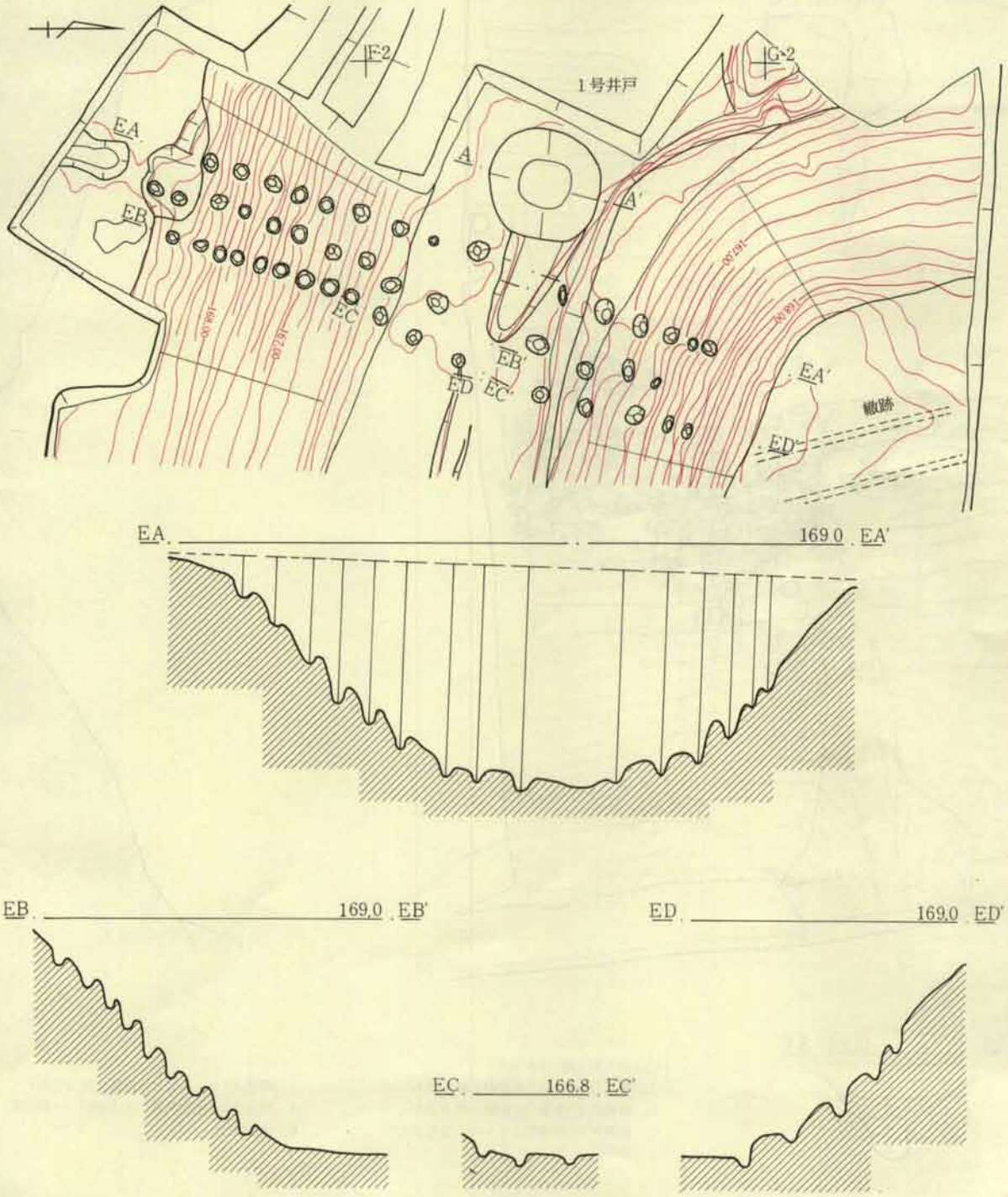

2号石積
4号石積
1号暗渠
近世墓壙
3号石積
2号暗渠
9区
10区
F
E
D
C
B
A
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
5m

第10図　遺構全体図(4)

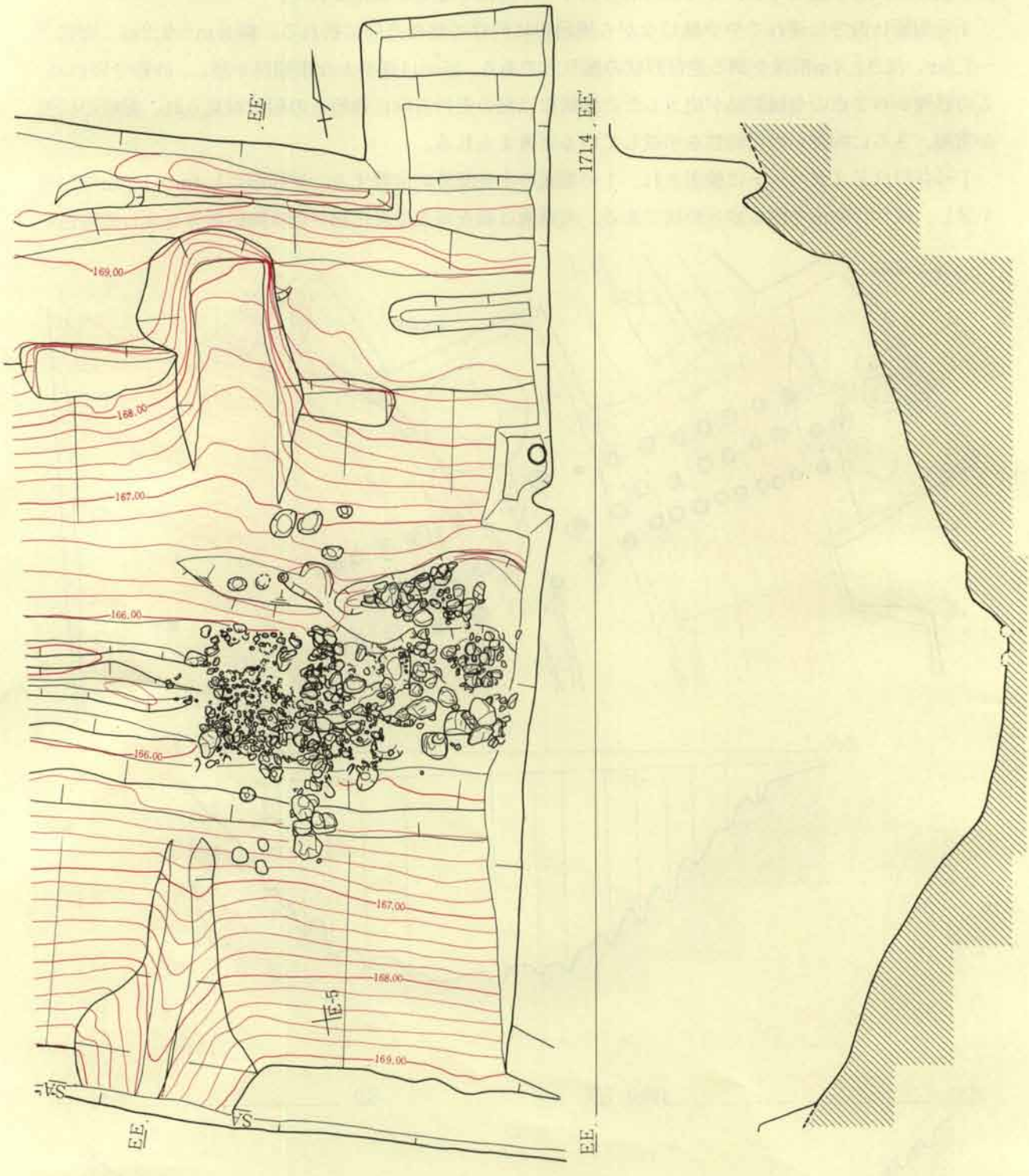
跡、東方で仕切り堀と集石、１号堀の北方に１・２号削平地等が検出された。

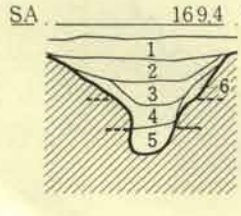
１号堀幅は西方に連れてやや減じながら風呂川に向けて北西方向に折れる。幅８m～9.2m、堀底２～2.5m、深さ2.4m前後を測る逆台形状の掘り方である。底面は緩やかな東傾斜を呈し、砂礫で覆われ、この砂礫から２点の金属製品が出土した。堀底には堀の走行方向に幾筋もの起伏が見られ、堀幅の拡張か重複、さらに堀浚いの可能性を示唆していると考えられる。

１号井戸はＦ２グリットに検出され、１号堀底の中央部分に位置する。平面形は1.4m×1.3mの円形を呈し、深さ1.58mを測る逆台形状である。当遺構は調査時点で炭化物や近世陶磁器等を含む黒褐色が



第11図　１区橋脚跡・１号井戸





1区仕切り堀土層 (SA-SA')

1．表土(ロームBと大胡軽石粒を含む)
2．褐色土(ロームBと大胡軽石粒を含む)
3．暗褐色土(多量の大胡軽石粒を含む)
4．混合土(灰白色粘質土と大胡ピンク軽石粒)
5．暗褐色土(黒褐色土とロームBを含む)
6．灰白色土

第12図　1区仕切り堀と堀底集石、土層図

検出され、堀埋没後の埋土内に構築されている。玉蔵院縁起に記されている火災後に井戸跡を利用して廃材等が埋められたと考えられる。出土遺物等から江戸時代18世紀以降に埋没したと考えられる。

橋脚跡はＥ２・Ｆ２グリットに跨がって検出され、１号堀跡が風呂川方向に折れる部分に構築されている。西に隣接して１号井戸、北方の平坦部に轍跡がある。堀幅８ｍ前後、堀底幅２ｍ部分で西柱列がＮ－70°－Ｅを示す。柱穴列は西列がほぼ直線的に配列するが、中央列と東列が堀底部分で弧状を呈し、南法面部分が比較的整然と併走する。西列で15カ所、中央列14カ所、東列17カ所を検出した。規模は全長8.4m、柱間幅１ｍ前後で最深部の橋脚高が2.6m以上、勾配は北方向へ２度前後と推定される。

Ｇ３グリットポイントの北方に広がる１号削平地には僅かに残る細い窪みが続き、主軸をＮ－16°－Ｗを呈する。形状から轍跡と判断される。この削平地には轍跡の検出面が硬化面として広がり、北方へ緩慢な傾斜を呈しながら幅を減じて風呂川沿いに北城の縁辺下を巡ると考えられる。この橋脚跡と轍跡の存在は、玉蔵院曲輪の北西部分に設けられた虎口の存在を示唆している。

仕切り堀は１号堀跡にほぼ直交して南北の法面に構築され、堀底には集石が東方に広がる。仕切り堀は南法面では平坦部で上幅1.9m、深さ1.05m、底面幅35cmを測り、堀底方向に連れて上幅を減じて１号掘りの下端近くで法面に吸収されている。北法面では中位から１号削平地まで掘り方が及び、最大上幅1.7m、下端１ｍの方形状を呈し、北方で深さ80cmを測る。堀底集石は仕切り堀のライン上から東方に集められ、小柱穴が集石の西限に直線的に並んでいる。この小柱穴と集石から、風呂川からの流水に対する堰止め的施設と考えられる。

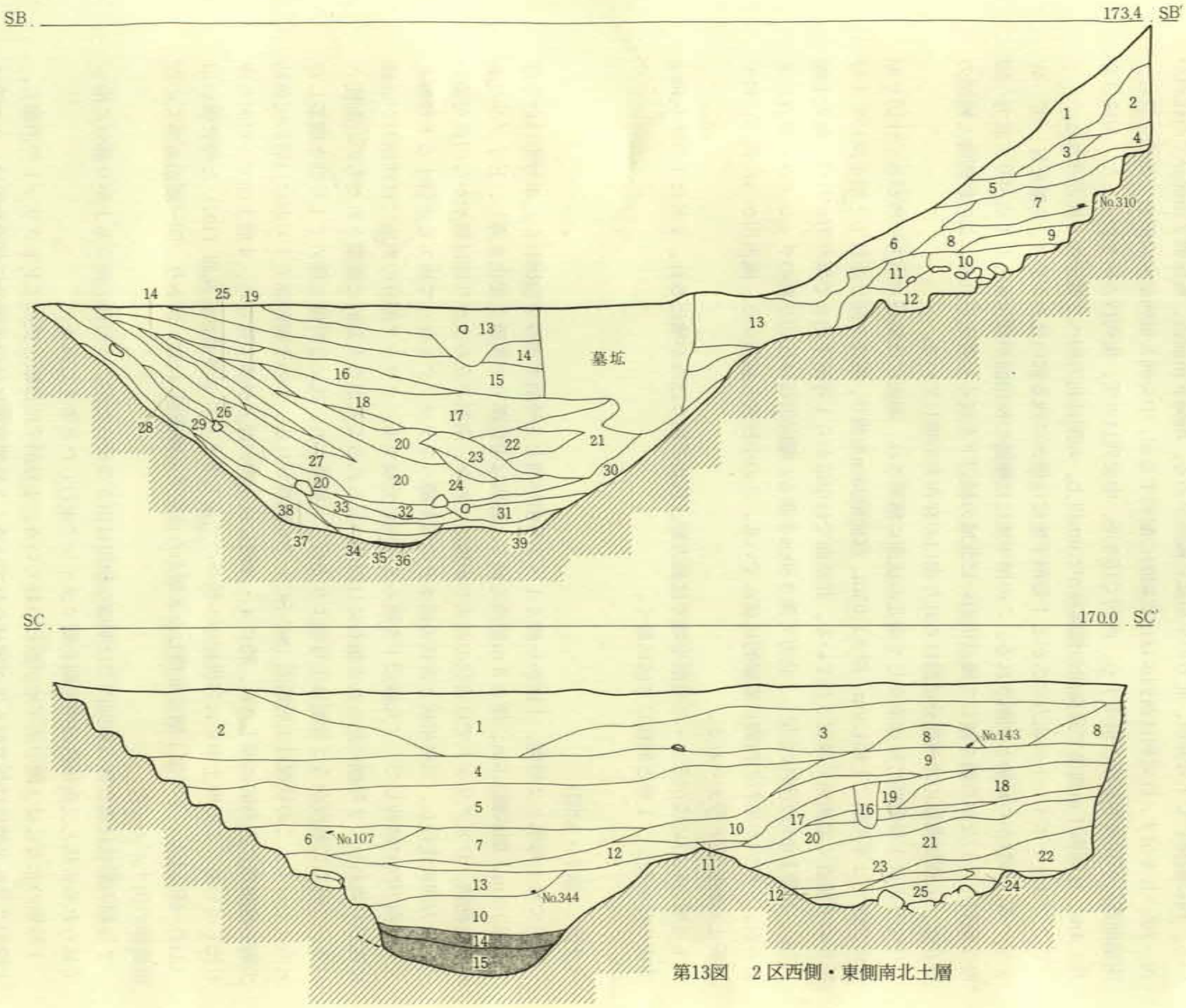
１号堀の北方に広がる１・２号削平地では長方形土坑状の掘り込みが検出され、２号は１号より40cm前後の段を有し、１号と同様に２区に続く。

《２区》（第７・13図）

本区では１号堀と２号堀、１区から続く１・２号削平地と３号削平地等を検出した。１号堀は西方部で上幅9.2m、堀底幅3.6m、深さ３ｍ前後を測る。堀底は中央部分で複雑な変化を齎し、Ｅ７グリットに三角洲状、Ｄ８グリットでは舌状の高まりが検出された。南側の立ち上がり部は緩やかな円弧を描いて南東方向に走行し、三角州状と舌状の高まりの間を縫ってクランクとなって東方に走行する１号堀と大きく南方向に湾曲して二ノ丸縁辺下を巡る２号堀に分岐する。クランク部分の堀底には河原石が砂礫に混じり集石し、２号堀に見られる集石には隙間が見られることから人為的に廃棄されたものと判断される。これらの状況から２号堀は１号堀より先行して構築され、後に２号堀を埋めて１号堀を構築したと考えられる。この状況は土層断面（SC-SC'）でも観察される。この土層断面で１号堀は14層の灰色粘土層の堆積後に人為的に埋土され、特に４・５層に炭化物の混入が多く見られ、４層上面で平坦面を作り出している。この埋土中には17世紀中～後半の所産と考えられる美濃鉄絵丸皿（107）と煙管吸い口（344）が出土し、２号堀上層に堆積した８層からは肥前系陶磁器（144）があり、同一層から多くの陶磁器類の出土があった。

２号堀の形状は調査区の範囲内では明確な検出は出きなかったが、１号堀の南立ち上がり部分に沿って見られる舌状と三角州状の南上端を繋ぐラインで走行したと考えられる。

１号堀の北方には３段の削平地が設けられている。１号削平地は幅を狭めてＦ８グリットで消滅し、上段の２号削平地には長方形土坑が設けられている。３号削平地には中央部分に有段を設け、２カ所に隅丸方形の柱穴状の掘り込みがある。



第13図　2区西側・東側南北土層

1区2区間東側南北土層（SB-SB'）

1・2．黒褐色土
3．黒褐色土(ロームBを多く含む)
4．黒褐色土(ロームBを含む)
5．2層に似る
6．1層に似る
7．暗褐色土(下部よりNo310礫石出土)
8．7層に似るが暗い
9．褐色土
10．褐色土(暗褐色粘土と大胡軽石を含む)
11．褐色土(カーボン粒を含む)
12．褐色土
13．暗褐色土
14．鹿沼軽石
15．ローム土
16．暗褐色土(ロームBと大胡軽石を含む)
17．褐色土(多量のロームBと大胡軽石を含む)
18．褐色土
19．混合土(褐色土とローム)
20．ロームB
21．灰褐色粘質土(大胡軽石を含む)
22．褐色土(17より暗い)
23．暗褐色土(ロームBを含む)
24．黒褐色土
25．混合土(ロームBと鹿沼軽石)
26．褐色土
27．25に似る
28．暗褐色土(ロームBを含む)
29．褐色土(大胡軽石とロームBを含む)
30．褐色土(大胡軽石粒を含む)
31．灰褐色土(大胡軽石を含む)
32．褐色土(ロームBを含む)
33．灰褐色土(少量の大胡軽石を含む)
34．混合土(灰褐色土とローム粒)
35．34に似る
36．砂層
37．褐色土(大胡軽石粒を含む)
38．灰褐色土

2区東南北土層（SC-SC'）

1．盛り土
2．褐色土(ロームBを多量に含む)
3．暗褐色土(大胡ピンク軽石を多量に含む)
4．暗褐色土(カーボン・ロームB・少量の大胡軽石粒を含む)
5．暗褐色土(カーボン・大胡軽石粒・褐色土を含む)
6．褐色土(ロームB・少量の大胡軽石粒を含む(No107鉄絵丸皿))
7．褐色土(大胡軽石粒を含む)
8．黒褐色土(近世陶磁器類を含む)
9．暗褐色土
10．混合土(大胡軽石・ロームB・鹿沼軽石)
11．灰褐色軽石
12．鹿沼軽石
13．未注記(No344煙管吸い口)
14．灰褐色粘土
15．砂礫
16．灰褐色軽石
17・18．未注記
19．黒褐色土(少量のロームBを含む)
20．暗褐色土(多量のロームBを含む)
21．褐色土(少量の大胡軽石粒を含む)
22．褐色土(大胡軽石粒を含む)
23．大胡ピンク軽石
24．ロームB
25．暗褐色土(礫を多量に含む)

《3区》（第8図）

本区では、1号堀跡の延長と4区に続く4号削平地、柱穴群を検出し、同削平地に1号集石と堀底に集石がある。1号堀は堀幅5m以上を確認し、堀底幅は西方で3m、削平地から1.5m前後の深さを測る。堀底の集石は西方の北の立ち上がり部分に集中し、宝篋院塔の塔身部（287）と石臼片が出土した。

4号削平地は2号削平地から続くと考えられるが詳細は不明である。規模は最大幅4.5mで北西隅に東西方向に長い土坑状掘り込みと弧状を呈する溝状の掘り込み等があり、1号集石は東西方向に2.8m、最大幅80cmほどの範囲に分布し、大半が河原石であり、石臼片が混入する。この削平地の北辺は北城に比高差5m前後で急峻に立ち上がる。柱穴は削平地等に検出されたが規則性は見られなかった。

《4区》（第8図）

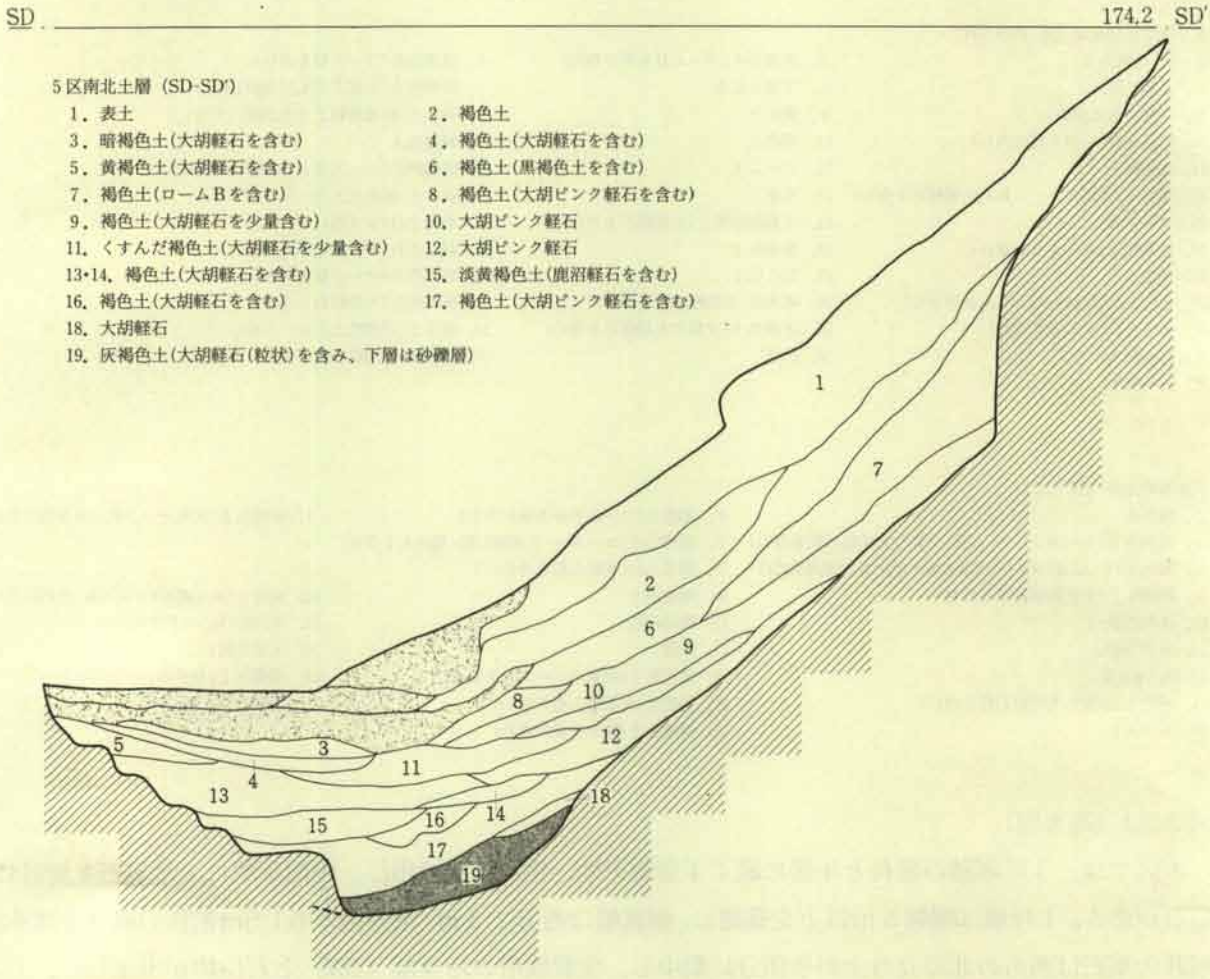
1号堀と3区から続く4号削平地と5号削平地、2号集石を検出した。1号堀は北城の縁辺部から深さ9.2mを測り、堀底は平坦で西方から緩やかな東傾斜を呈する。

4号削平地は3区から9.5mの長さで続き、東方で靴先状となって窄まる。削平地の北辺は3区と同様に急峻な崖をなし、2号集石はこの変換点に設けられている。規模は東西2.9m、南北1.5mの範囲に集められている。5号削平地は堀底より僅かな高さで段を成して5～6区へと続く。

《5区》（第8・14図）

1号堀は北城の縁辺部から最深部で比高最大9.4m、堀底幅3.6m以上を測る。堀底は2区と比べ50cmほど低い東傾斜となっている。堀底には砂礫する自然堆積で人為堆積は見られない。

3号集石は1号堀の北側立ち上がり部分に設けられた5号削平地を分断する様に検出された。集石はウォーターホールの窪みに集めら、内部より馬歯が出土した。



第14図　5区南北土層

《6区》（第8図）

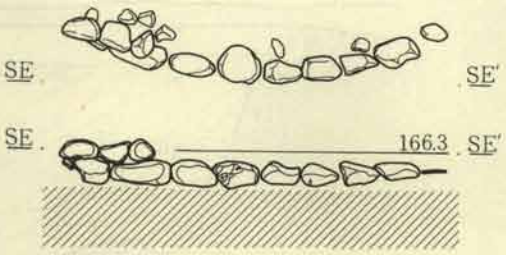
1号堀は最深部と北城との比高差9.6mを測り、北法面に5号削平地を設ける。堀底は平坦で2区より東傾斜で70cm下がる。5号削平地は本区西方から東方連れて広がり、その一部が7区まで続く。4号集石は最大幅1mで東西に4mほどで法面と削平地の変換部に連なる。

《7区》（第9・15・18図）

本区では1号堀、5～7号削平地、柱穴群、1号石積等が検出された。1号堀は新旧の流路に分岐する。新1号堀の北縁は1号石積の配列方向からC22グリットを先端部として三角形とする地山を結ぶ南東方向に流路を変え、B24グリットからは東進し、堀底幅は5.5m前後を測る。旧1号堀は北城の縁辺下に走行し、北城との比高差9.5～10m程を測る崖をなし、堀底から1.8mほどの高さで6号削平地と7号削平地を設けている。堀幅は同削平地から南上端が6～6.5mを測り、堀底は新堀が旧堀より15～20cm前後深く、旧堀内で石臼（232）と内耳土鍋（55・58・59）と内耳浅鍋（89）が出土した。

北法面に設けられた削平地は、西方隅に6区に主体を占める5号削平地の東方部分が続く。6号削平地は東西辺4.7mの方形状を呈して西方に一段低い方形土坑状の掘り込みを設けている。平坦面には20～30cmの円形で深さ5～10cm前後の柱穴状掘り込みがある。7号削平地は6号削平地より35～40cm低い面からなり、その一部は8区に続く長さ11m、最大幅1.4mの東西に細長い形状で、周縁を60cm前後、

幅で深さ30cmの溝が巡る。平坦面には6号削平地と同様に柱穴状の掘り込みがあり、その一部の掘り方は40cm前後の円形で深さ65～80cmを測るが、その規則性は不明である。恐らく南前面の旧堀の埋土に関連する掘り込みが存在した可能性が考えられる。



第15図　1号石積

1号石積は、上記した新1号堀の北縁ライン上に検出された。形状は緩やかな円弧を描いて全長3.7mが検出され、西端で2段構成部分が残存し、東端部分に板碑片が出土した。

2号井戸は7区と8区の境に位置するB24グリットにほぼ全体が検出された。平面形は南辺がやや南方に突出する隅丸方形の掘り方をもち、南辺寄りに直径1.2m前後の円形で深さ3.25mの円筒形を呈する。掘り方には7カ所の柱穴が設けられている。

《8区》(第9・16・17・19図)

本区では新旧の1号堀、方形遺構、3号堀、8～14号削平地、柱穴群、3～6号井戸等が検出された。新1号堀跡は調査区の南縁辺下に沿ってほぼ東西方向に走行するが、その規模の全容は不明である。

旧1号堀は新1号堀と間に削平地を挟んで東西方向に走行し、北方にも削平地を設けている。規模は西方の方形遺構付近で上幅4.5m、底幅1mを測り、東方に連れて上幅は広がる。底面はウォーターホールによる凹凸が多く見られる。

堀内の土層観察(SG-SG')では、中位下が砂礫層とラミナの水成堆積、上位が人為的埋土で埋没している。水成堆積による要因から生じた黒色と褐色シルト互層から大きく3度の浸水が考えられる。2度目以降に埋土されるが3度目の浸水が及び、以後、整地作業が行われている。

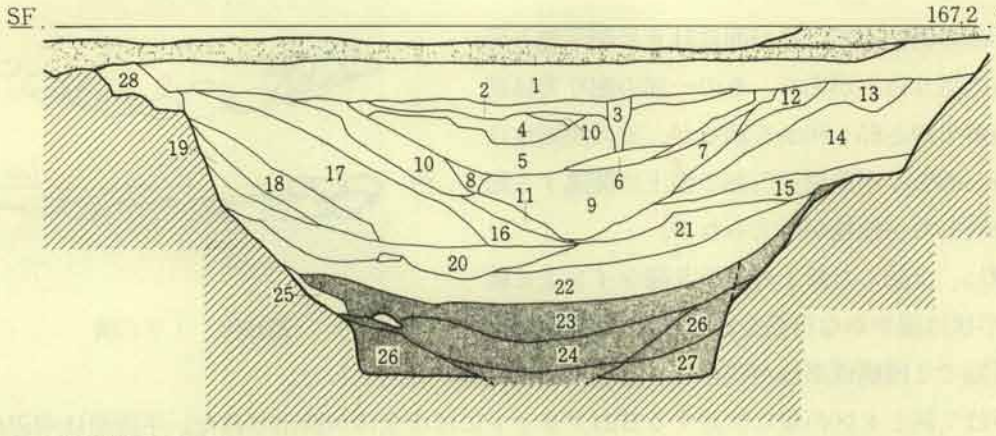
新1号堀はその一部の法面が検出され、約45°の勾配で掘り込まれ、下層部分に2度の砂層の堆積が認められるが堆積層は薄い。

方形遺構は、本区の西方で旧1号堀と重複してその一部が検出された。その新旧関係は旧1号堀より新しい構築である。規模・形状は不明な点が多いが、東西7.5m、南北6.5mの円形の掘り込みを有し、内部には一辺が4m前後の方形の掘り込みを設けていると考えられる。この方形の掘り込み内部は水成堆積で埋没し、木製品(348・349)等が出土している。水溜めか井戸状の施設と推察される。

3号堀は新旧1号堀を連結する様にほぼ南北に走行するものと3号井戸の西方を掠めて走行するものがあり、B27グリットの北西部分で分岐し、南方部分で新1号堀と重複する部分には封石が施されている。規模は土層観察部分で幅3.45m、深さ1.7m、底幅20cmを測る。これらの新旧関係は3号堀は新1号堀より古く、3号堀は南北走行のものが新しく、北西方向にカーブするものが古いと考えられるが1号旧堀との関係は不明である。

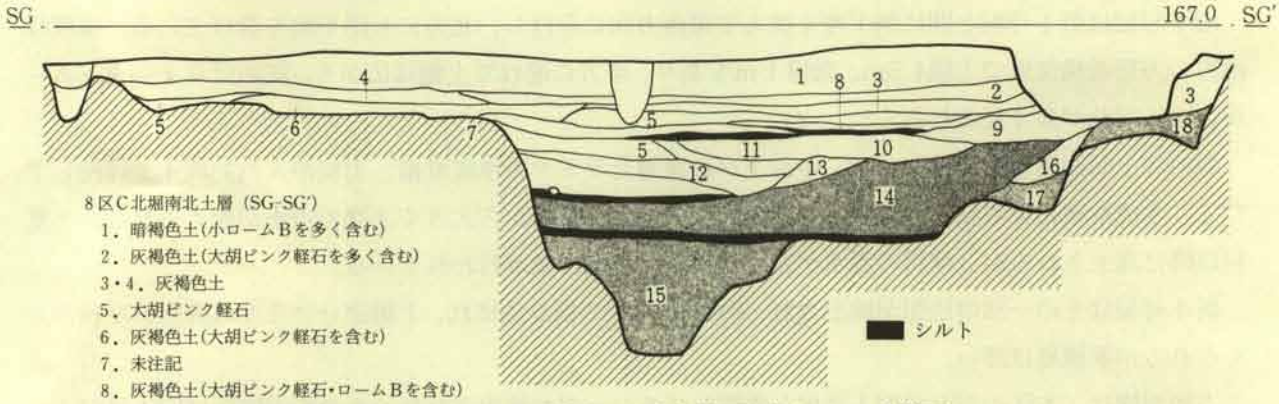
8～10号削平地は旧堀と北城縁辺下に設けられている。8号は7区7号削平地の上段に設けられ、土坑状の掘り込みと柱穴が重複し、9号は旧堀内に設けられ、ウォーターホールが各所に見られる。10号は8号の延長上にある。

11～14号削平地は旧堀と新堀の間にはが設けられている。11号は幅2.2m前後、東西最大長さ8.5mと考えられ、12号は11号と35cm前後の段差を設け、幅1m前後、長さ11.5mを測り、中央部分の11号と13号の境は凹状に南方に張り出す。12号との境には溝が形状に沿って巡り、西方に集石が設けられ、集石



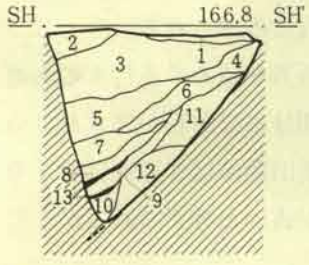
8区北堀南北土層（SF-SF'）

1．暗褐色土(大胡軽石を含む)　2．灰褐色土(ロームBを含む)　3．灰褐色土(ローム粒を含む)
4．暗灰褐色土　5．大胡軽石(粒状)　6．暗灰褐色土
7．大胡軽石(粒状)　8．黒褐色土(少量のロームBを含む)　9．混合土(大胡軽石と大胡ピンク軽石)
10．暗灰褐色土(大胡ピンク軽石を含む)　11．黒褐色土(ロームBを含む)　12．大胡軽石
13．ローム土　14．混合土(大胡ピンク軽石とロームB)　15．黒褐色土
16．大胡ピンク軽石　17．大胡軽石・大胡ピンク軽石　18．大胡ピンク軽石(粒状)
19．大胡軽石(粒状)　20．大胡軽石(暗灰褐色)　21．大胡軽石(黒灰褐色)
22．大胡軽石・大胡ピンク軽石　23．ラミナ　24．黒色シルト
25．大胡軽石　26．砂層　27．シルトと砂礫層の互層(ロームBを含む)
28．灰褐色土(大胡ピンク軽石を含む)



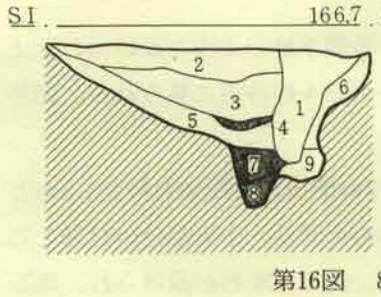
8区C北堀南北土層（SG-SG'）

1．暗褐色土(小ロームBを多く含む)
2．灰褐色土(大胡ピンク軽石を多く含む)
3・4．灰褐色土
5．大胡ピンク軽石
6．灰褐色土(大胡ピンク軽石を含む)
7．未注記
8．灰褐色土(大胡ピンク軽石・ロームBを含む)
9．黒褐色土(ローム粒・大胡軽石を含む)　10．褐色土(ローム粒・大胡軽石を含む)　11．大胡軽石
12．大胡軽石(少量の大胡ピンク軽石を含む)　13．黒褐色土　14．ラミナ
15．砂層と礫層の互層　16．黒褐色土(小ロームBを含む)　17．砂層
18．砂礫層(大粒のロームBを多量に含む)



8区南堀南北土層（SH-SH'）

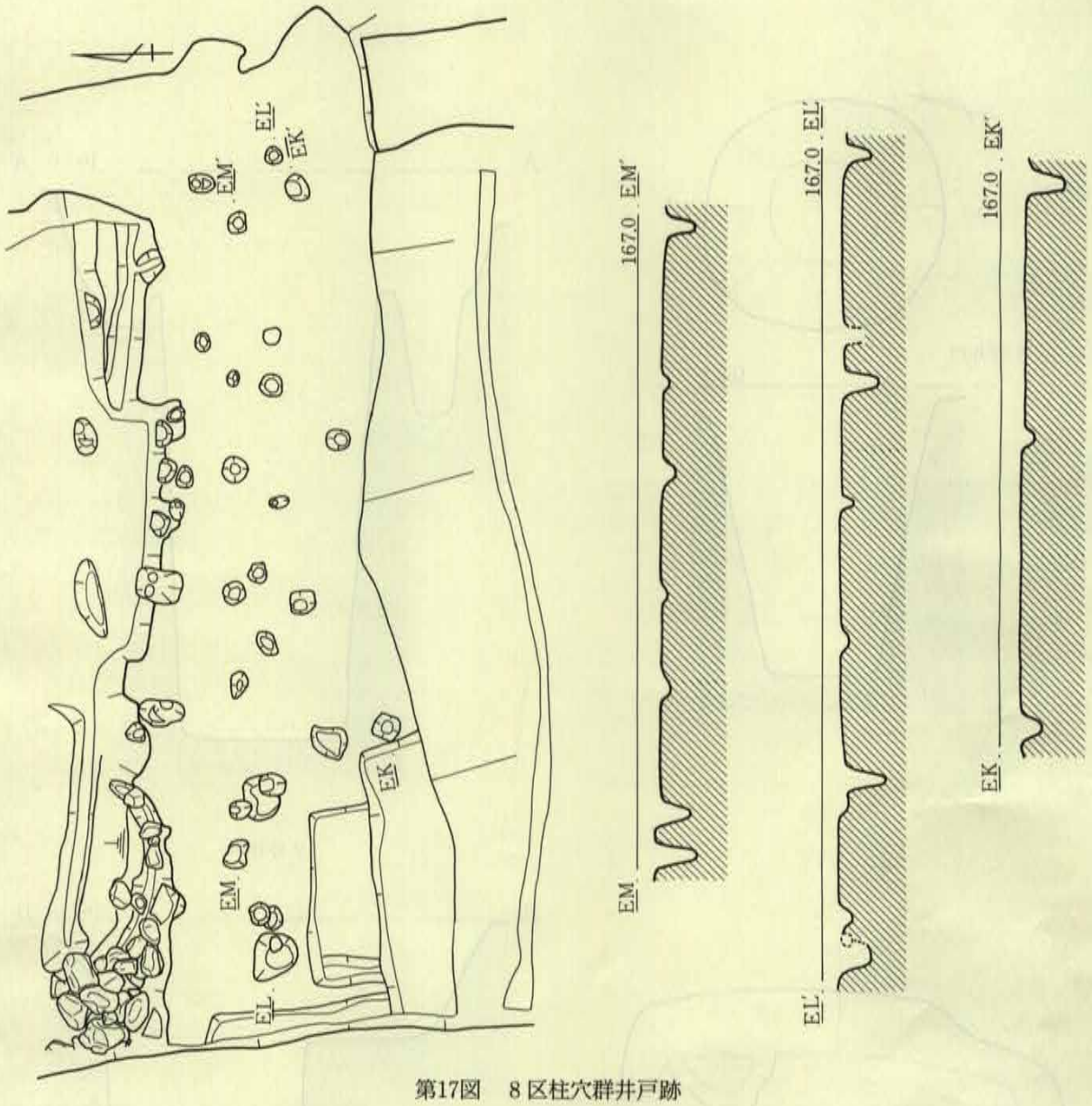
1．埋土　2．大胡ピンク軽石(少量のローム粒を含む)
3．ロームB(大胡軽石を含む)　4．暗褐色土(ローム粒を含む)
5．黒褐色土(ロームB・ローム粒を含む)　6．大胡ピンク軽石
7．大胡軽石(灰褐色)　8．砂層(ロームB・ローム粒を含む)
9．灰褐色土(ローム粒・大胡ピンク軽石を含む)　10．暗灰褐色砂質土
11．暗褐色土(ロームBを多く含む)　12．混合土(ローム粒・大胡軽石を含む)
13．砂層



8区南北堀東西土層（SI-SI'）

1．暗褐色土(ローム粒・大胡軽石粒を含む)
2．灰褐色土(ロームB・大胡軽石粒・暗褐色土を含む)
3．黒褐色土(ロームB・大胡軽石を多量に含む)
4．ラミナ
5．混合土(大胡ピンク軽石と灰褐色土)
6．大胡ピンク軽石
7．砂礫
8．砂礫の互層
9．暗褐色土(ロームB・大胡軽石を含む)

第16図　8区旧堀南北土層(1)・(2)　1号新堀土層・3号堀土層



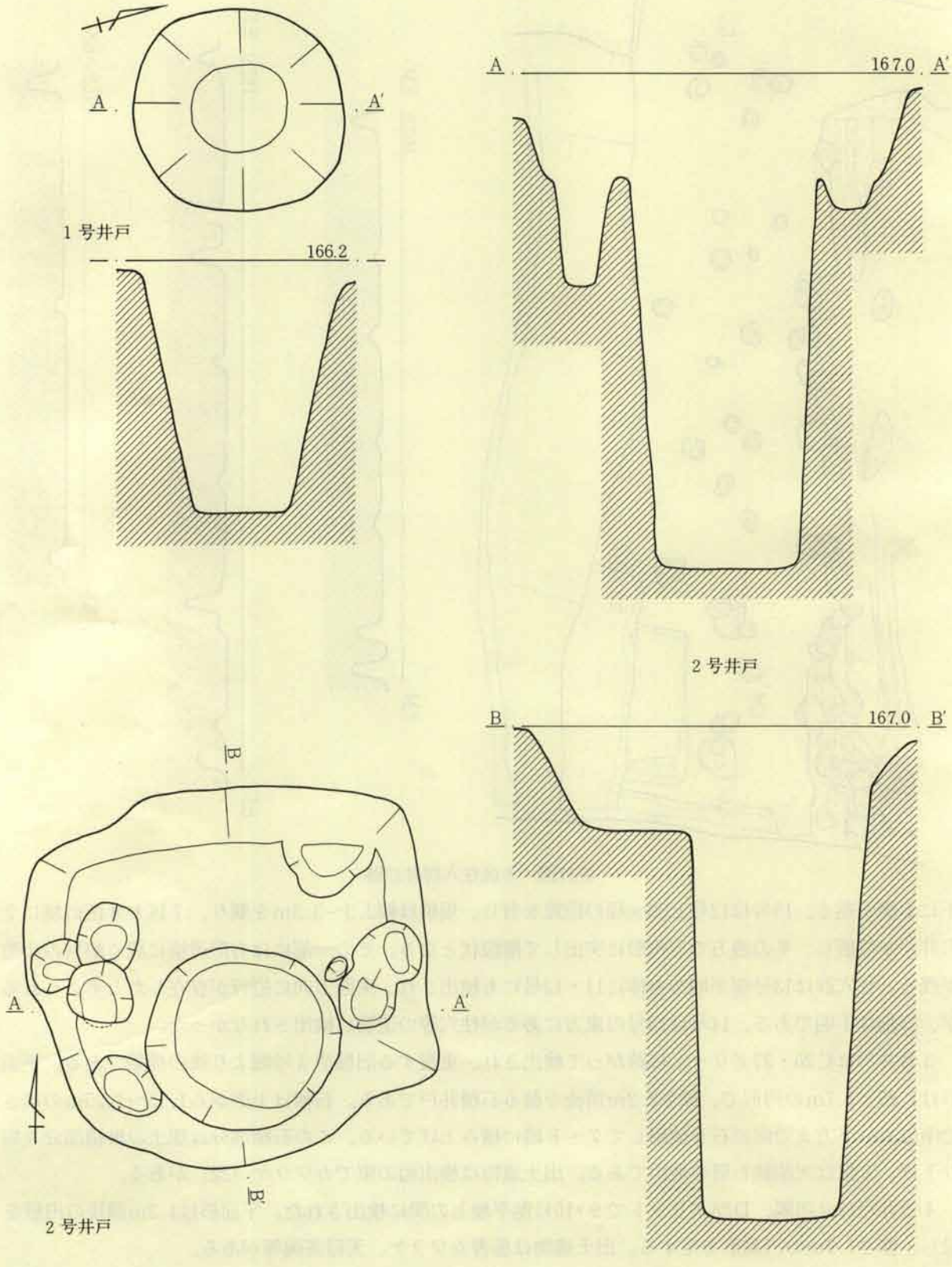
第17図　8区柱穴群井戸跡

下にも溝が巡る。13号は12号と50cm程の段差を有し、規模は幅2.3～3.3mを測り、7区と8区の境に2号井戸が位置し、その西方で三角形に突出して階段状となる。その一部には方形遺構に続く幅狭の小道が残る。柱穴群は13号削平地を主体に11・12号にも検出され、東西方向に桁行が存在したと考えられるが、詳細は不明である。14号は13号の東方にあるが柱穴等の遺構は検出されなかった。

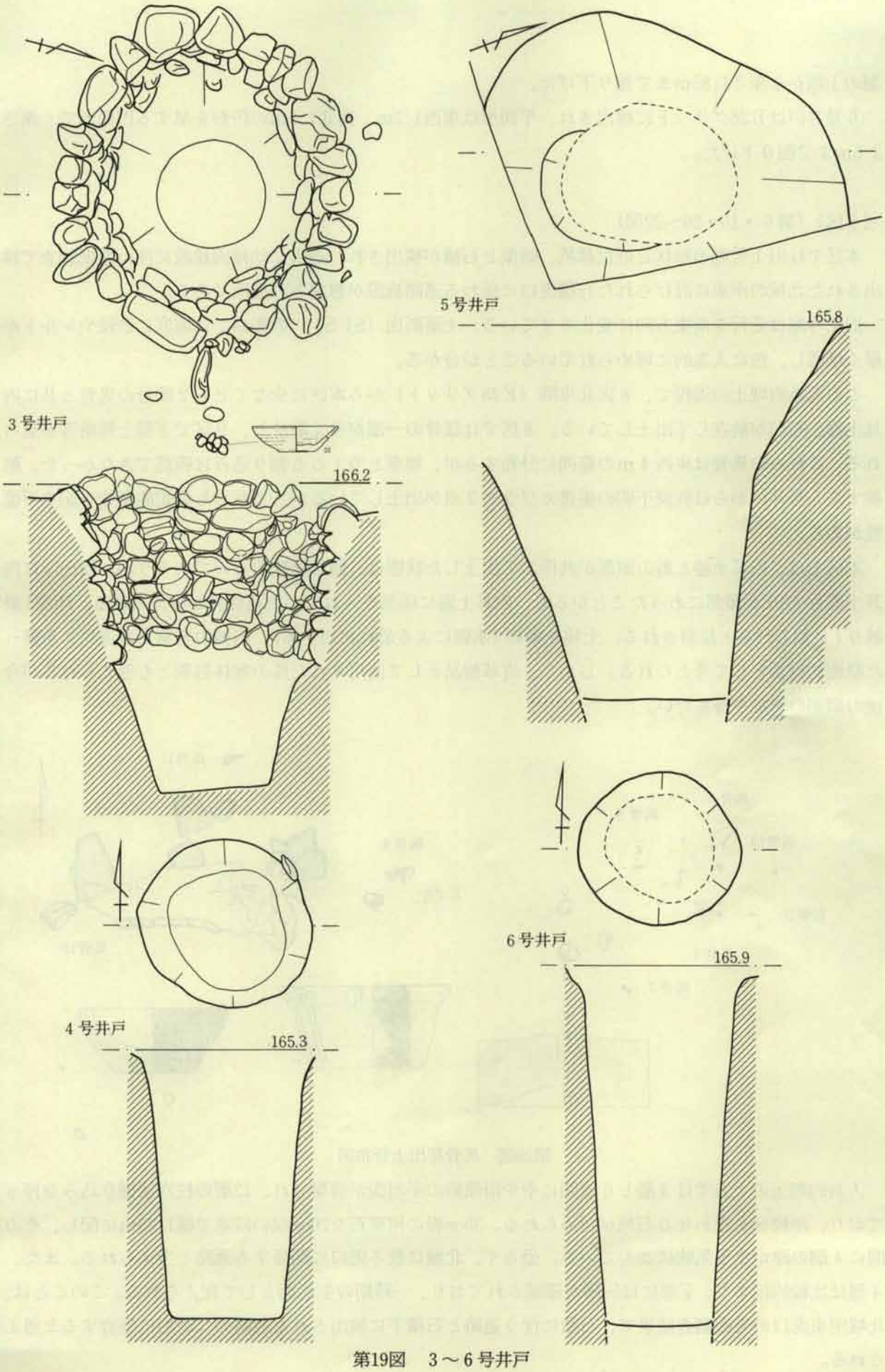
3号井戸はC26・27グリットに跨がって検出され、重複する旧堀や3号堀より後の構築である。平面形は1.85×1.7mの円形で、深さ2.2m前後を測る石積井戸である。石積は上面から1.15～1.25mの高さで中位やや下方まで河原石を使用して7～8段に積み上げている。この石積部分は埋土の堆積部分を掘り下げ、下位は大胡軽石層の地山である。出土遺物は検出面の東でカワラケ（22）がある。

4号井戸は北西隅、D28グリットで9・10号削平地との間に検出された。平面形は1.2m前後の円形を呈し、深さ1.9mの円筒形を呈する。出土遺物は墨書カワラケ、天目茶碗等がある。

5号井戸はB27グリットに検出され、新1号堀の北法面に構築されている。平面形は南北に長い楕円形を呈すると考えられる。規模は南北2.8m、東西2.3m前後と推定され、下部は南北に長い楕円形で新



第18図　1・2号井戸跡



第19図　3～6号井戸

堀の上端から深さ1.85mまで掘り下げた。

6号井戸はB28グリットに検出され、平面形は東西1.2m、南北1.1mの円形を呈する円筒形で、深さ2.6mまで掘り下げた。

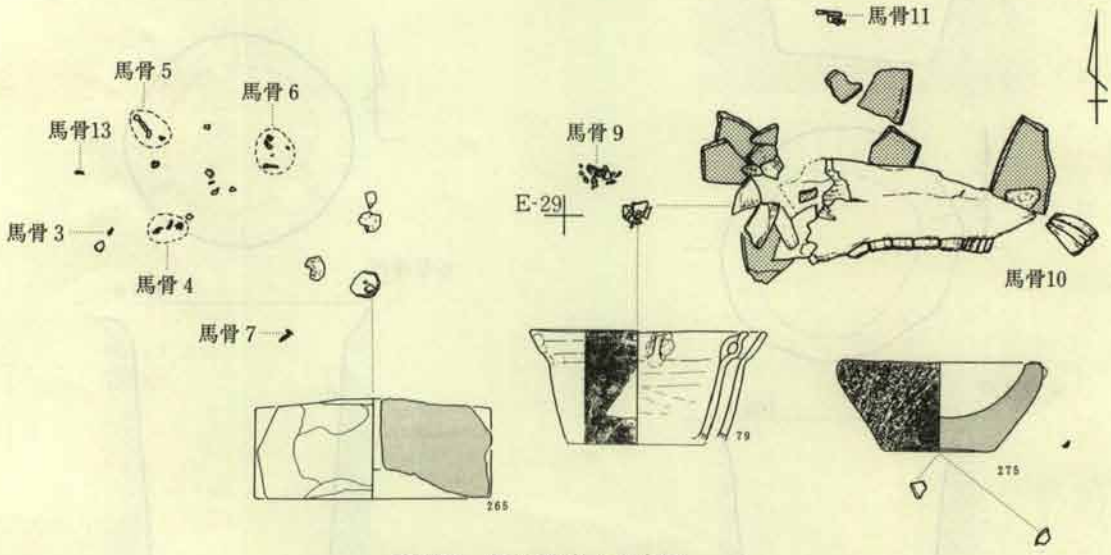
《9区》(第9・10・20～22図)

本区では旧1号堀の形状と近世墓坑、暗渠と石積が検出され、過去に幼稚園建設に伴い発掘調査で検出された北城の南東に設けられた石積虎口に係わる通路施設が想定され箇所である。

旧1号堀は走行を南東方向に変化させている。土層断面(SJ-SJ')の観察では堀底に砂礫やシルトが厚く堆積し、後に人為的に埋められていることが分かる。

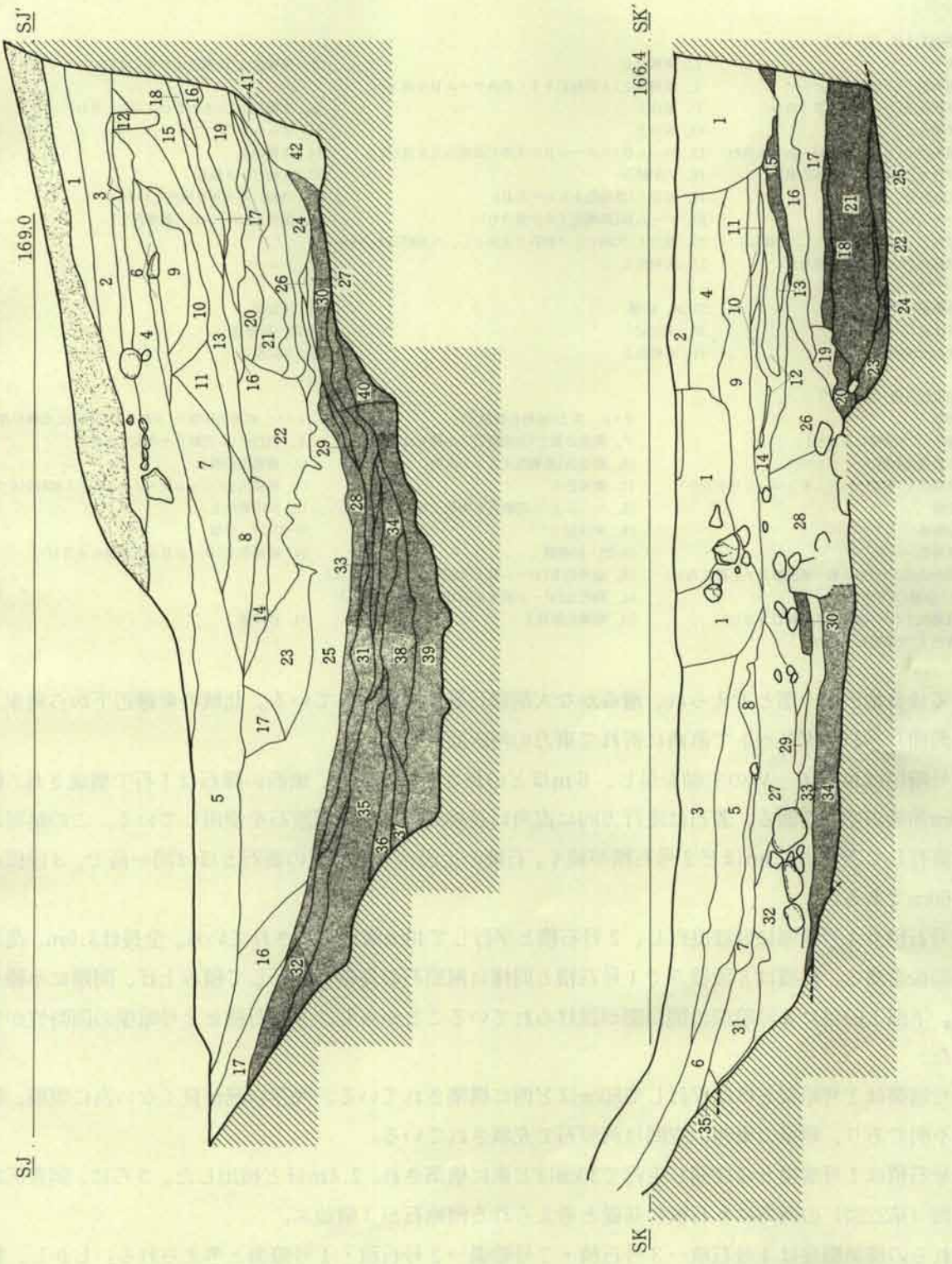
この人為的埋土の過程で、8区北東隅(E28グリット)から本区に少なくとも2頭分の馬骨と共に内耳土器、石臼が散在して出土している。8区では肢骨の一部が多く散乱し、9区で下顎と頬歯等が見られる。これらの馬骨は東西4mの範囲に分布するが、埋葬と考えらる掘り込みは確認できなかった。隣接する5号井戸からは判読不明の墨書カワラケ2点が出土しているが、これらも祭祀的意味を記す可能性がある。

本区では、内耳土器と馬の頭部が共伴して出土した状態は、何を意味するのであろうか。検出時に内耳土器片(79)が頭部にあったことからも、内耳土器に頭部を入れていた可能性が考えられる。所謂「鍋被り」に似る行為と推察される。土地を鎮め(水害による恐れに対する)、当城の安泰と武運長久を願った祭祀的行為として考えられる。しかし、皮革製品として使用された馬の解体処理とも考えられるが今後の類例の増加を待ちたい。



第20図　馬骨等出土分布図

人為的埋土の上方では3層と6層間にやや南傾斜の平坦面が構築され、12層の柱穴状掘り込みを伴っており、階段状を思わせる石列が認められる。30cm程の河原石を20cm程の段差で幅1.25mに配し、その間に4個の礫が水平気味に並んでいる。恐らく、北城に登る虎口に関係する通路と考えられる。また、4層は比較的締まり、下部には灰層が確認されており、一時期の生活面として捉えられる。このことは、北城南東虎口の発掘調査結果で、石積に伴う通路と石積下に検出された通路の二時期に整合すると考えられる。



第21図　9区南北・東西土層

近世墓坑はD30グリットに検出された。検出時は大小4個の河原石が集中し、南前面に111の灰釉皿、120の腰錆碗、124の尾呂徳利が並べられて正位で出土した。人骨は河原石下に頭部を北にして南北方向に足を曲げて埋葬され、341の煙管が副葬品として出土。

これらの副葬品から18世紀代の墓坑と考えられるが、何故にこの場所に埋葬されたのであろうか。特定の墓地に埋葬できない、水難に遭遇した身元不明の人物であろうか。

暗渠と石積は本区の東に重複して河床面に構築されている。この部分は北城縁辺下を流下した荒砥川

9区北堀南北土層（SJ-SJ'）

1．表土　2．黒褐色土　3．黒褐色土(灰褐色土を多く含む)
4．黒褐色土(下部に灰層)　5．暗褐色土(大胡軽石を多く含みロームBを混入)
6．黒褐色土(ロームBを多く含む)　7．混合土　8．黒褐色土(大きめのロームBを含む)
9．黒褐色土　10．混合土　11．ロームB
12．暗褐色土(ソフトで小ロームBを含む)　13．ロームB(大ロームBが主体で黒褐色土を含む)　14．黒褐色土
15．混合土(黒褐色土とロームB)　16．大胡軽石　17．大胡ピンク軽石
18．大胡軽石　19．混合土(黒褐色土とロームB)　20．19層に似るが黒褐色土が多い
21．ロームB　22．ロームB(黒褐色土を少量含む)　23．混合土(ロームBと黒褐色土)
24．混合土(大胡軽石・大胡ピンク軽石)　25．混合土(大胡ピンク軽石を主体とし、大胡軽石を含む)
26．黒褐色土(ローム粒を含む)　27．灰褐色土　28．シルト
29．30．31．
32．砂礫層　33・34．砂層　35．未注記
36．未注記　37．未注記　38・39．砂礫層
40．混合土(砂礫とロームB)　41．灰褐色土　42．39に似る

9区北側東西土層（SK-SK'）

1．攪乱　2・3．表土(暗褐色砂質土)　4・5．暗褐色砂質土(少量の大胡軽石と小礫を含む)
6．褐色土(大胡軽石を含む)　7．褐色砂質土(大胡軽石と小礫を含む)　8．褐色土(大胡軽石を多量に含む)
9．淡黄褐色砂質土　10．混合土(黒褐色土とローム粒)　11．黄褐色砂質土
12．黒褐色土(多量のローム粒とロームBを含む)　13．黒褐色土　14．黒褐色土(ローム粒・ロームBと大胡軽石を含む)
15．砂層　16．ローム土(大胡軽石と褐色土を含む)　17．灰暗褐色土
18．砂礫層　19．未注記　20・22・23．砂層
21．黒褐色シルト　24・25．砂礫層　26．暗褐色土(ロームBと大胡軽石を含む)
27．褐色砂質土(ローム粒・大胡軽石・小礫を含む)　28．暗褐色土(ローム粒と大胡軽石を含み締まる)
29・30．砂層(ラミナ)　31．褐色土(ローム粒と大胡ピンク軽石を含む)
32．暗褐色土(ローム粒と大胡軽石を含む)　33．暗褐色砂質土　34．砂礫層
35．褐色土(大胡軽石を含む)

による侵食地形の一部と考えられ、滑らかな大胡軽石層面を露呈している。北城の東縁辺下から南東方向に湾曲し、D31グリットで直角に折れて東方の河床面に続く。

1号暗渠はN—16°—Wの主軸を呈し、6mほどの長さを検出した。東西の縁石は1石で構成され、幅は30cm前後の空間を測る。蓋石は走行方向に直角に長軸50cm以上の河原石を使用している。この暗渠にほぼ直行して西方に3.3mほど2号石積が続く。石積の上段は1号暗渠の蓋石とほぼ同一高で、3段積の高さ60cmである。

3号石積も1号暗渠にほぼ直行し、2号石積と平行して40cm南に構築されている。全長は3.9m、高さ1m前後を測る。石積は5段積みで1号石積と同様に河原石の長軸を面として積み上げ、間隙に小礫を挟む。下部1段目に2号暗渠の開口部が設けられていることからも、3号石積と2号暗渠の同時性が判明した。

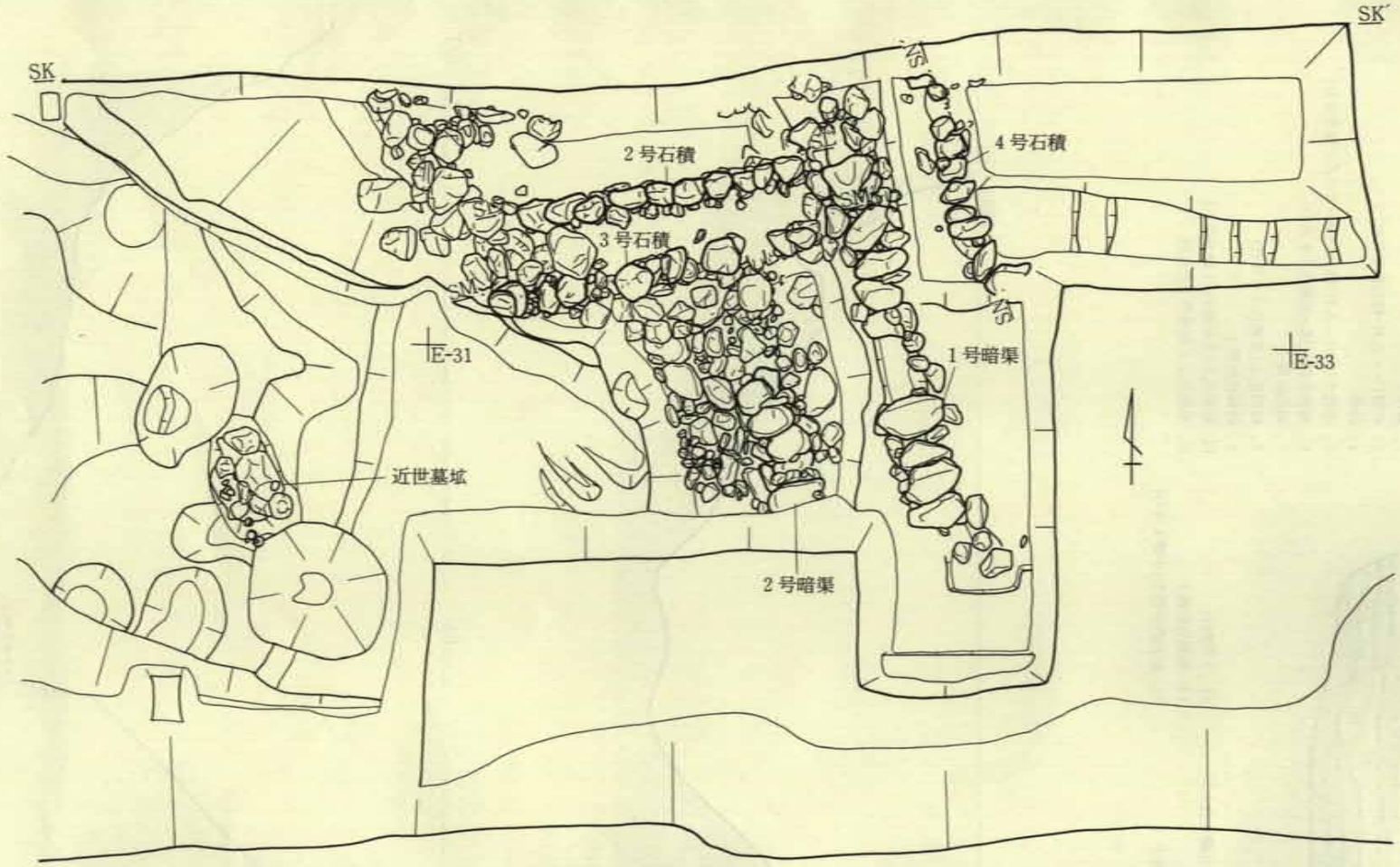
2号暗渠は1号暗渠とほぼ平行して80cmほど西に構築されている。残存状況が良くない為に規模、形状は不明であり、暗渠の東西の空間は河原石で充填されている。

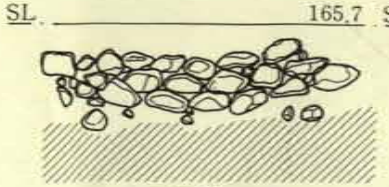
4号石積は1号暗渠とほぼ同じ走行で30cmほど東に構築され、2.4mほど検出した。さらに、調査区北の断面（第22図）の西方にも石積の基礎と考えられる河原石が3個並ぶ。

これらの構築順序は4号石積→3号石積・2号暗渠→2号石積・1号暗渠と考えられる。しかし、狭い部分の調査の為に、その性格や時代の把握は不明であった。しかし、4号石積の東方には遺構が検出されていないことから、調査区外の北方部分に続く可能性があり、今後の課題となった。

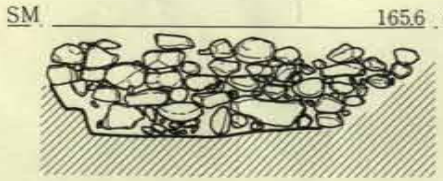
《10区》（第10・23図）

駐車場導入路の北側でE36・37グリットに設けた遺構確認の為の調査区である。東西6m、南北4mの範囲を設定し、河床礫面まで掘り下げたが遺構は検出されなかった。

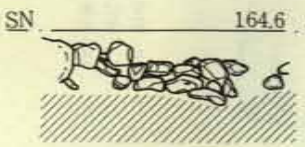




2号石積側面図

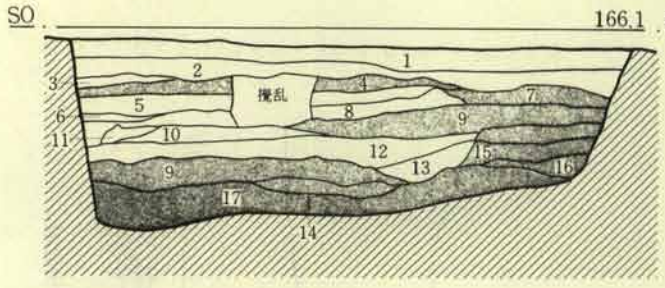


3号石積側面図



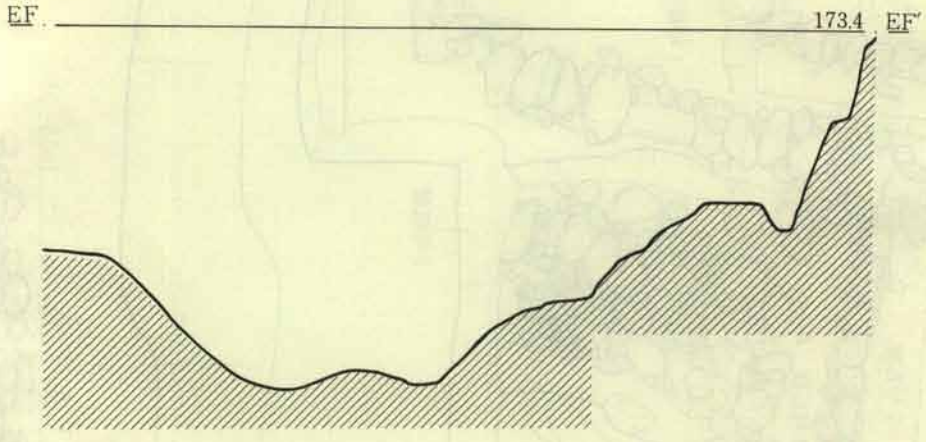
4号石積側面図

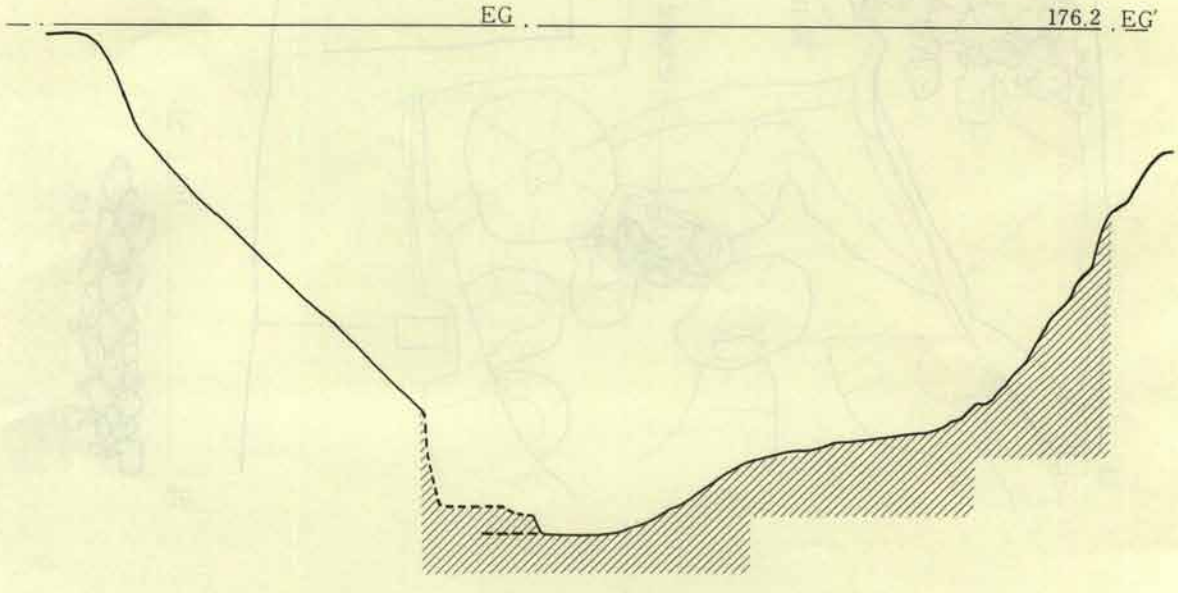
第22図　暗渠・石積



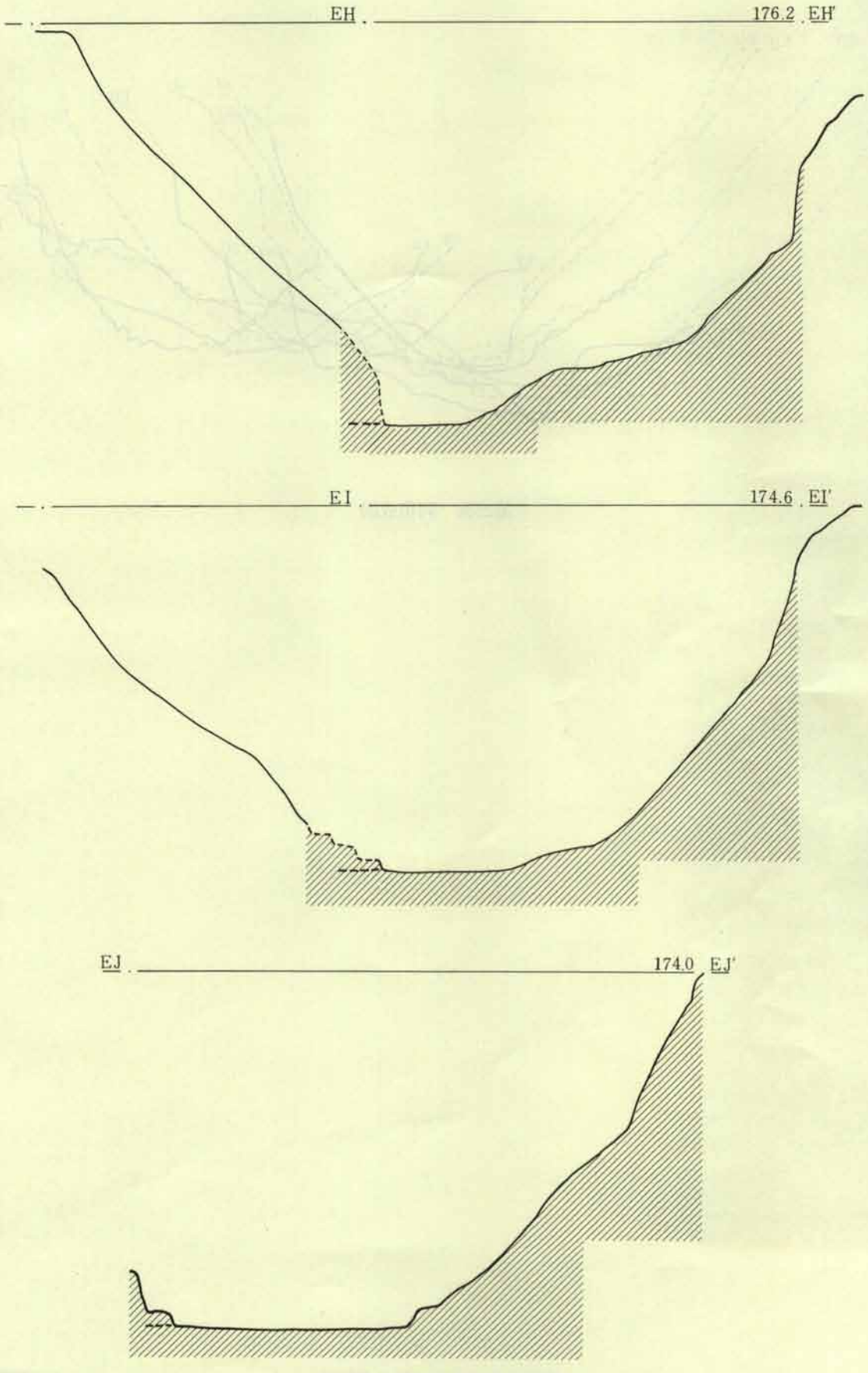
10区東西土層（SO-SO'）

1．盛り土
2．耕作土
3．砂層（ローム B・軽石粒を含む）
4．砂層
5．褐色土（小ローム B・軽石・小礫・カーボン粒を含む）
6．褐色土（軽石粒・黒褐色土を含む）
7．褐色砂質土
8．暗褐色土（黒褐色土を含む）
9．暗褐色砂質土
10．暗褐色土（小礫を含む）
11．大胡軽石
12．暗褐色土（大胡軽石・小礫を含む）
13．未注記
14．暗褐色砂質土
15．黒褐色土と暗褐色土の互層
16．灰褐色粘質土
17．暗褐色砂質土（小礫を含む）

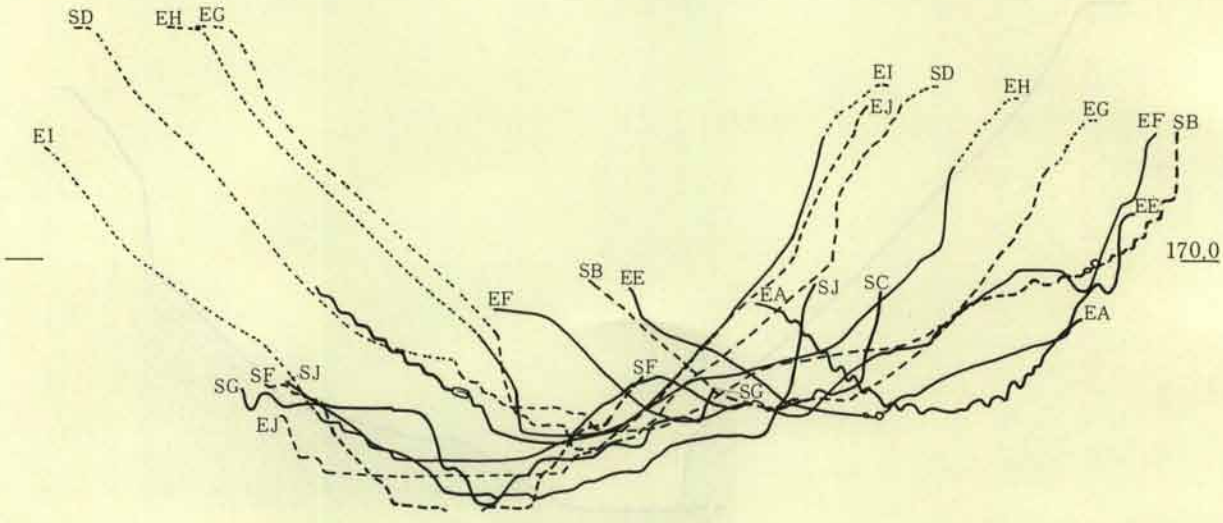




第23図　10区東西土層・調査区南北断面図(1)



第24図　調査区南北断面図(2)


SD
EH
EG
EI
EI
SD
EJ
EH
EG
EF
SB
EE
170.0
SB
EE
EF
EA
SJ
SC
EA
SF
SG
SE
SJ
SG
EJ

第25図　同集成図

第2節　遺　　物

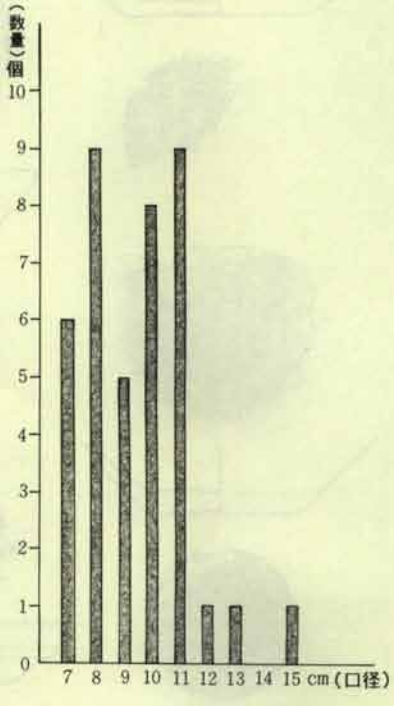
(1) カワラケ（第26・30図、27～29図1～52、第1表）

本遺跡からは通称「カワラケ」と称される土師質土器の皿が多く出土した。完形品は少なく、破損品が主体を占め、図化し得たものは52点である。出土区は半分以上が8区に集中し、3号井戸から5点、4号井戸で2点、堀切りの旧状を留める3～6区は僅かに2点であった。

口径（復元口径を含む）は7～15cm代の間にあり、8cm代と11cm代のものが9点で、12cm以上のものは3点のみである。

墨書土器は4号井戸から2点出土し、底部外面に書かれているが、判読不明である。灯明皿は10点が確認され、1と2区で4点、8区に5点、10区に1点がある。

成形はロクロ水引によるもので、その大半が左回転の糸切り技法であり、右回転は僅かに4点である。41は糸切り後に底部周縁を篦削りを施している。10は精選された胎土で焼成も硬く上がり、器面も光沢があり他とは異質なものであり、近世陶磁器等と出土していることからも近世後半の所産である。



第26図　カワラケ法量図

成形時に内面底部に渦巻き状のロクロ目を残すものや内面底部を指撫で整形を施すもの、底部外面に板目状の圧痕を残すものがある。この圧痕は乾燥時の台の圧痕と考えられてきたが、飯田（1985）は浜町屋敷内遺跡C地点のかわらけの分析で糸切り後に別の台上で施される見込部の強いナデによるものと考えるとしているが、本遺跡での内面底部に施された指撫で整形と板目状の圧痕の因果関係を看取できる積極的資料には乏しかった。

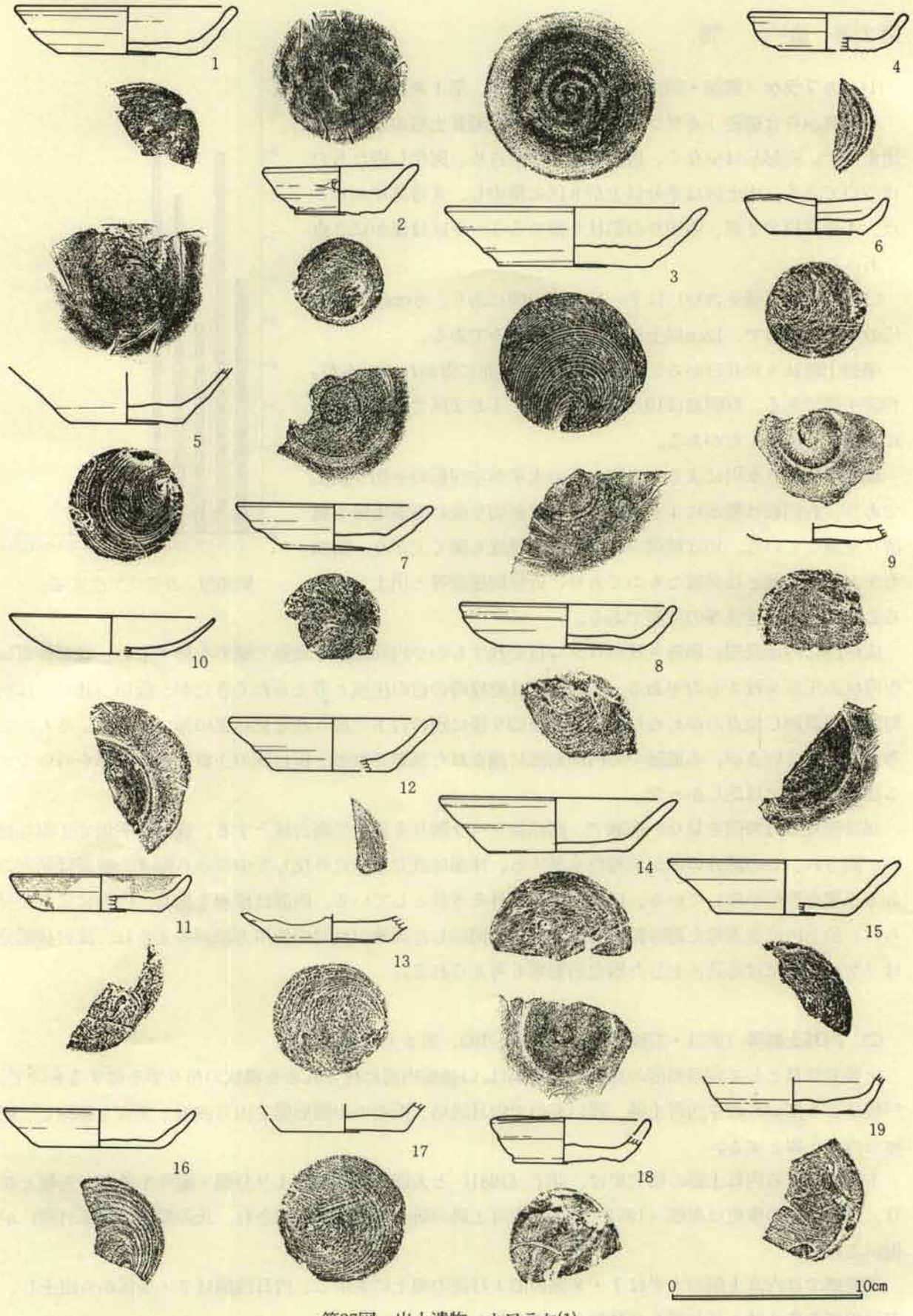
46は管見では類例を見ない形態で、底部脇をヘラ削りを施して高台状とする。底部は平坦で丁寧な拭いが施され、この部分のみが黒褐色を呈する。体部は直立気味に外反して中位から開き、器面は光沢のある丁寧な整形を施している。口唇部はやや外そぎ状としている。内面は横撫を施し、内面に黒斑が見られ、胎土内に金雲母と細砂粒を含んでいる。図示した天地が反対の使用方法が考えられ、高台状部分はソケット状にはめ込みとした器台的要素も考えられる。

(2) 内耳土器等（第31・37図、32～36図53～103、第2・3表）

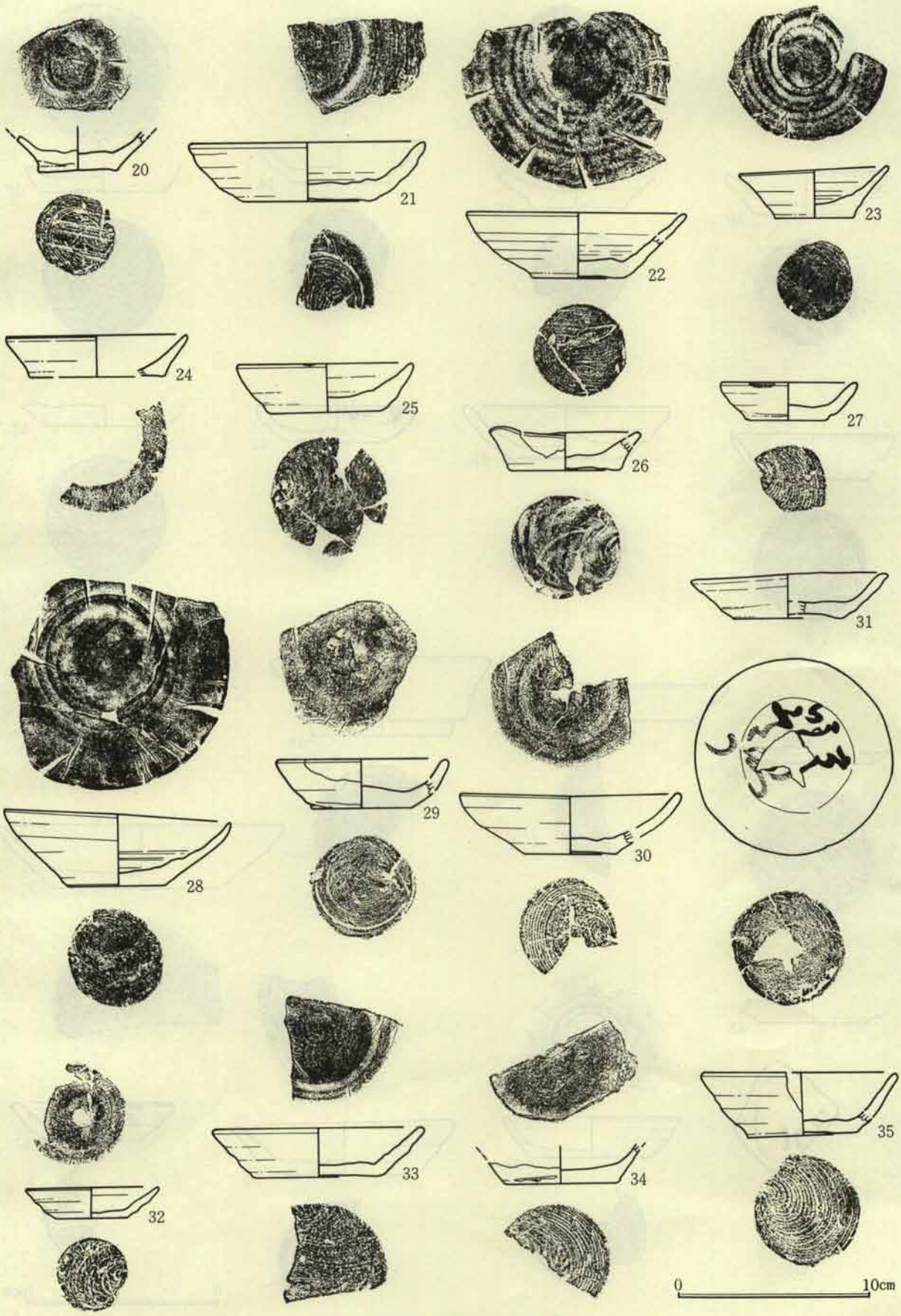
土製煮炊具として利用頻度の高かった土鍋は、口縁部内面に付されるを環状の吊り手を付するもので、形態により深いものを内耳土鍋、浅いもので内耳焙烙、両者の中間形態を内耳浅鍋と便宜上呼称し、総称を内耳土器とする。

本県に於ける内耳土器の研究史は、井上（1981）と大江（1981）により分類・編年や論考が先鞭となり、以後、その様相は服部（1997）により内耳土鍋の研究（上）に要約され、氏の変遷図（第31図）が提示された。

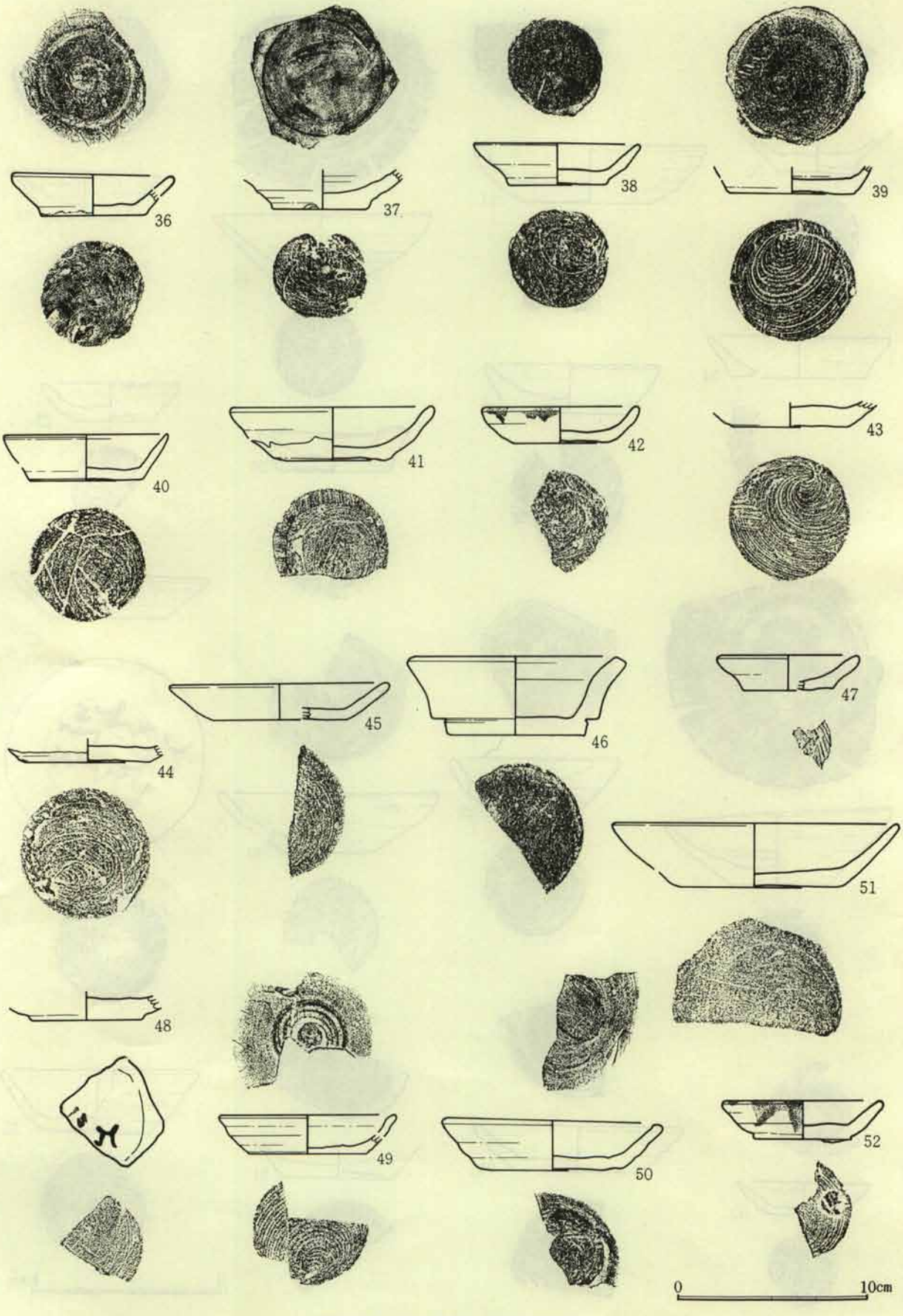
本遺跡では内耳土鍋の大半は7・8区の旧1号堀の埋土に集中し、内耳浅鍋は7・8区から出土し、内耳焙烙の多くは1号井戸と2号堀より出土した。



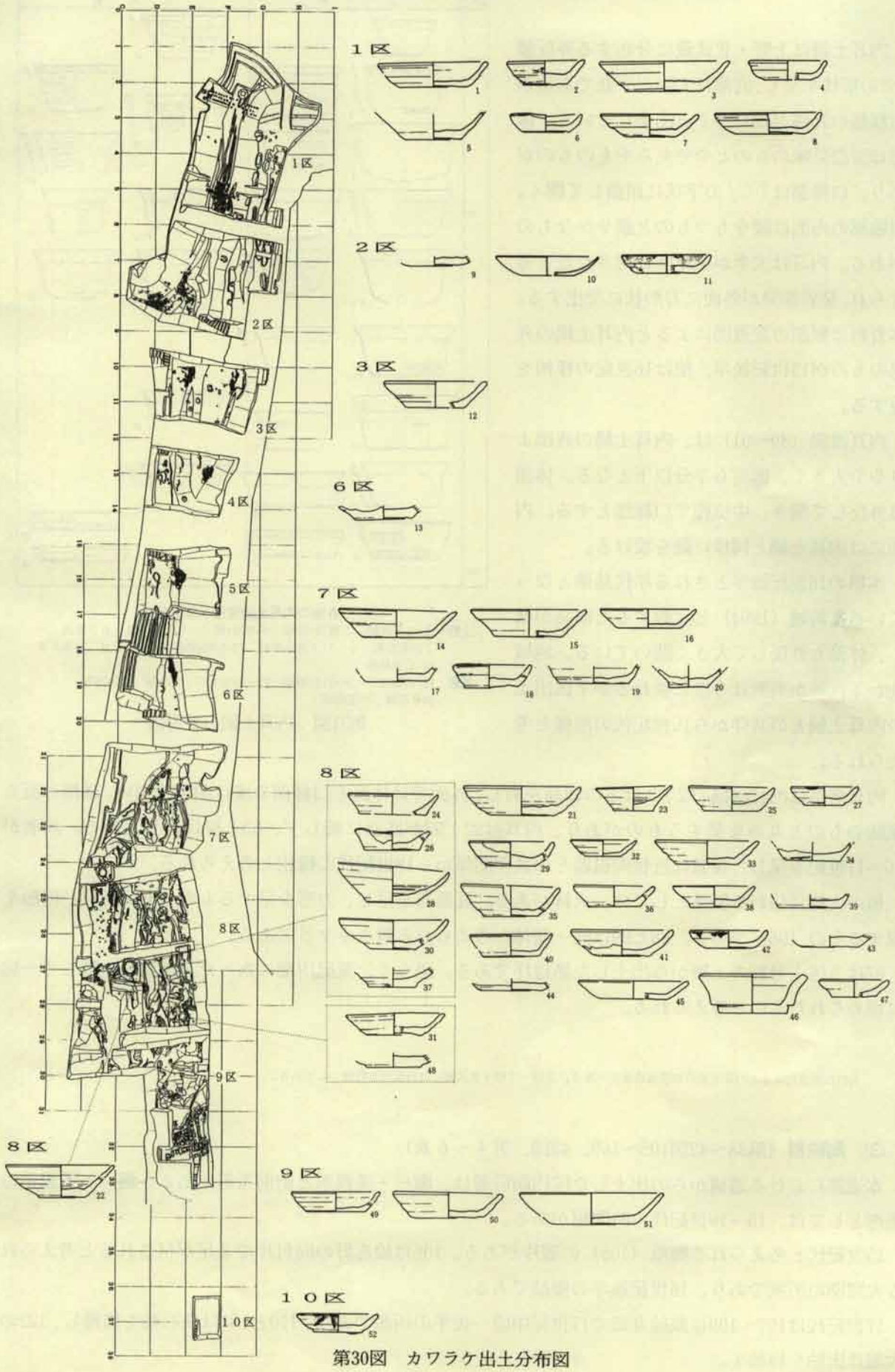
第27図　出土遺物　カワラケ(1)



第28図　出土遺物　カワラケ(2)



第29図　出土遺物　カワラケ(3)

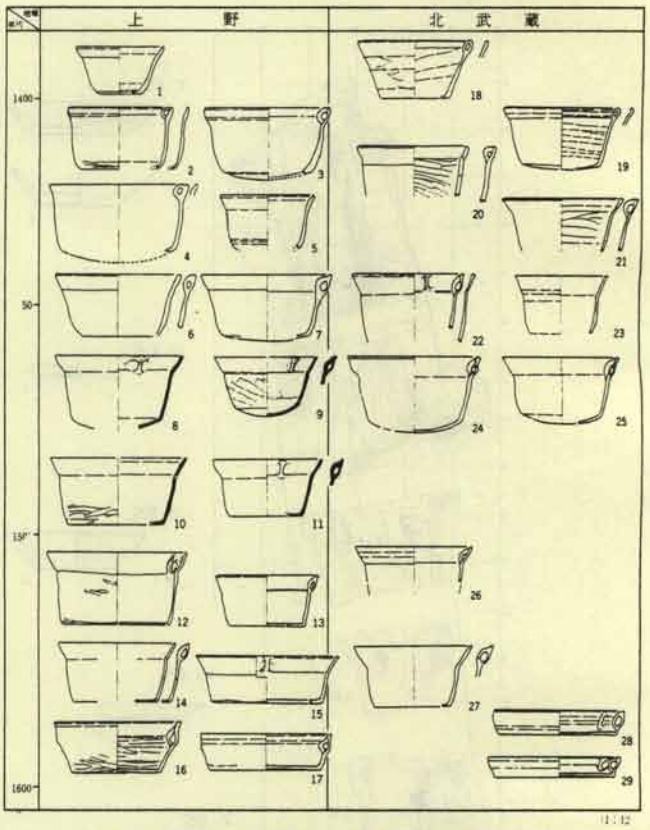


第30図　カワラケ出土分布図

内耳土鍋は上野・北武蔵に分布する外反型[註12]の形状を呈し、底部は大半が平底であるが古様相の丸底（78）が1点出土している。体部は直立気味のものとやや丸みをものものがあり、口縁部は「く」の字状に屈曲して開く。屈曲部の内面は陵をもつものと緩やかなものがある。内耳は大半が2カ所に付されたと考えられ、装着部分が外面に方形状に突出する。本資料は服部の変遷図によると内耳土鍋の丸底のものが15世紀後半、他は16世紀の様相を呈する。

内耳浅鍋（89～91）は、内耳土鍋の底部よりやや大きく、器高も半分以下となる。体部は外反して開き、中位程で口縁部とする。内面には内耳土鍋と同様に陵を設ける。

本県の16世紀後半とされる年代基準となっている宮崎城（1994）と比較すると器高が低く、体部も外反して大きく開いている。地域性か年代差か判断は今後に委ねるが7区出土の内耳土鍋との共伴から16世紀代の所産と考えられる。



各地の内耳土鍋変遷（服部1998）
上野 1・2下佐野　3清里・陣場　4本宿・郷土　5万福寺II　6下東西　7浜町屋敷　8～11下瀬名塚越　12・13稲荷森　14万福寺II　15稲荷森　16・17宮崎城
武蔵 18・19堂山下　20・21自樹原　22～25古井戸　26忍城　27河越館　28私市城　29花崎城

第31図　内耳土鍋の変遷図

内耳焙烙は内耳浅鍋の2/3ほどの器高を有し、外面では体部と口縁部の境は明瞭で無い。体部は直立気味のものと丸みを呈するものがあり、内耳は92と93が底面に接しず、83と88は接している。前者が16～17世紀を呈し、後者は近世陶磁器との共伴関係から18世紀代の様相と考えられる。

他の火処に係わる製品としては、火鉢がある。瓦器質を呈し、方形を呈するもの（95・101）、円形を呈するもの（96）がある。98と99は同一個体と考えられる置きカマドである。

97は2区1号堀の上層から出土した墨書坏である。恐らく、荒砥川端にあった墓地移転に際して一緒に埋められたものと考えられる。

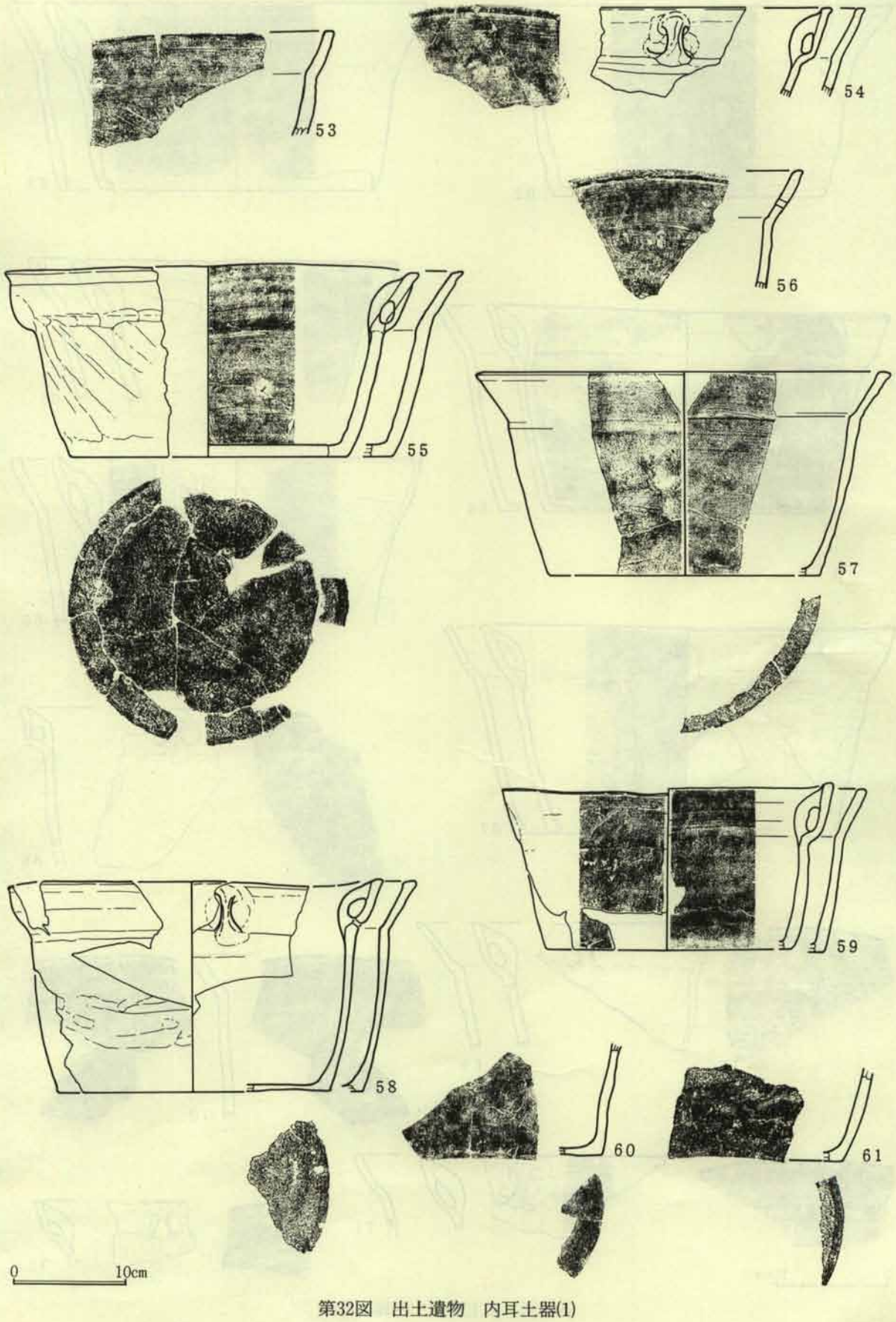
（註12）足立によると内耳土鍋の形態は地域性があり、上野・下野・北武蔵には外反型を特徴としている。

(3) 陶磁器（第38～42図105～169、43図、第4～6表）

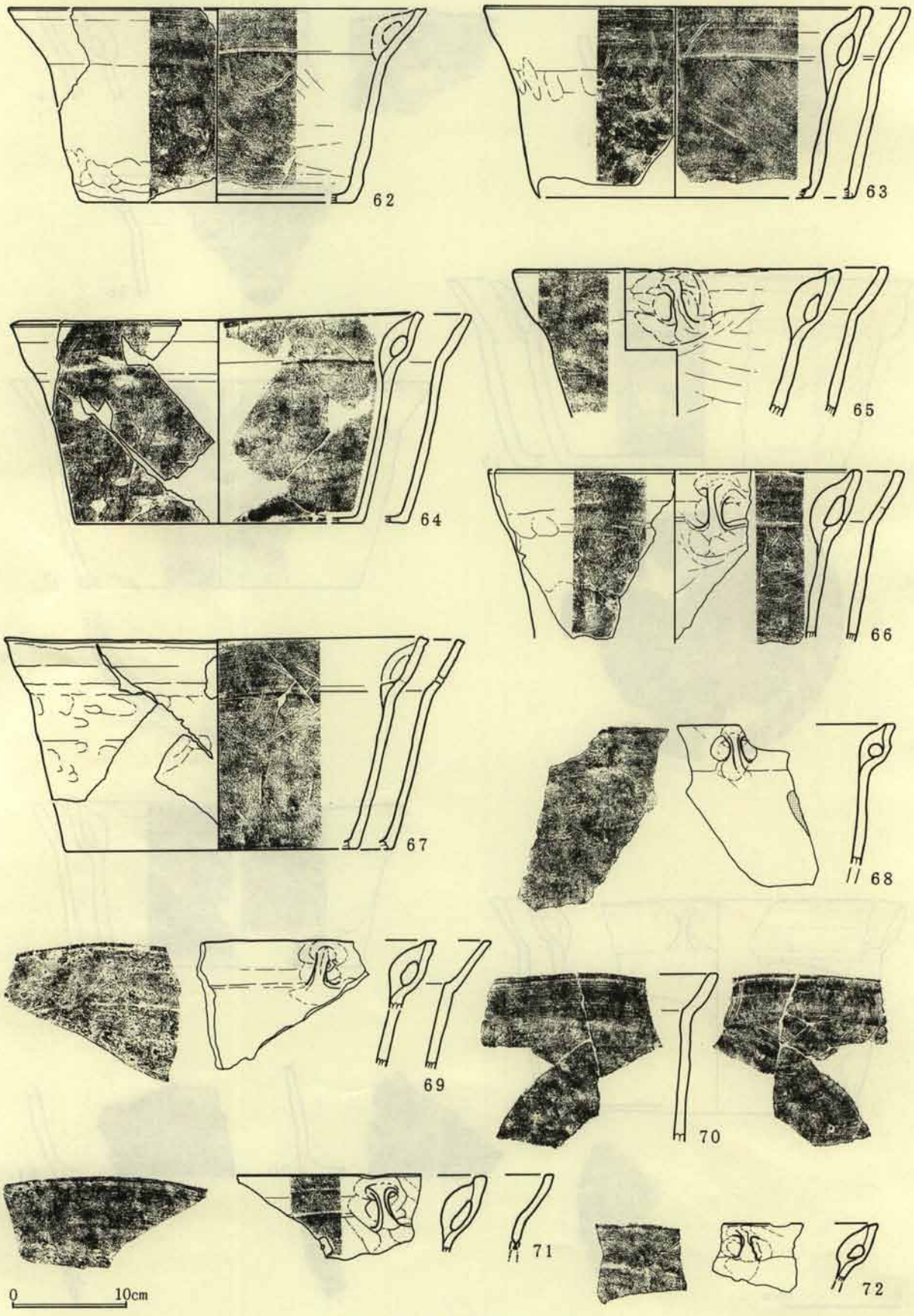
本遺跡における遺構からの出土した国内陶磁器は、瀬戸・美濃系と肥前系等がある。瀬戸・美濃系の所産としては、15～19世紀代の時間幅がある。

15世紀代と考えられる梅瓶（105）の破片がある。106は絵志野の向付片で3足が付されると考えられる大窯期の所産であり、16世紀後半の優品である。

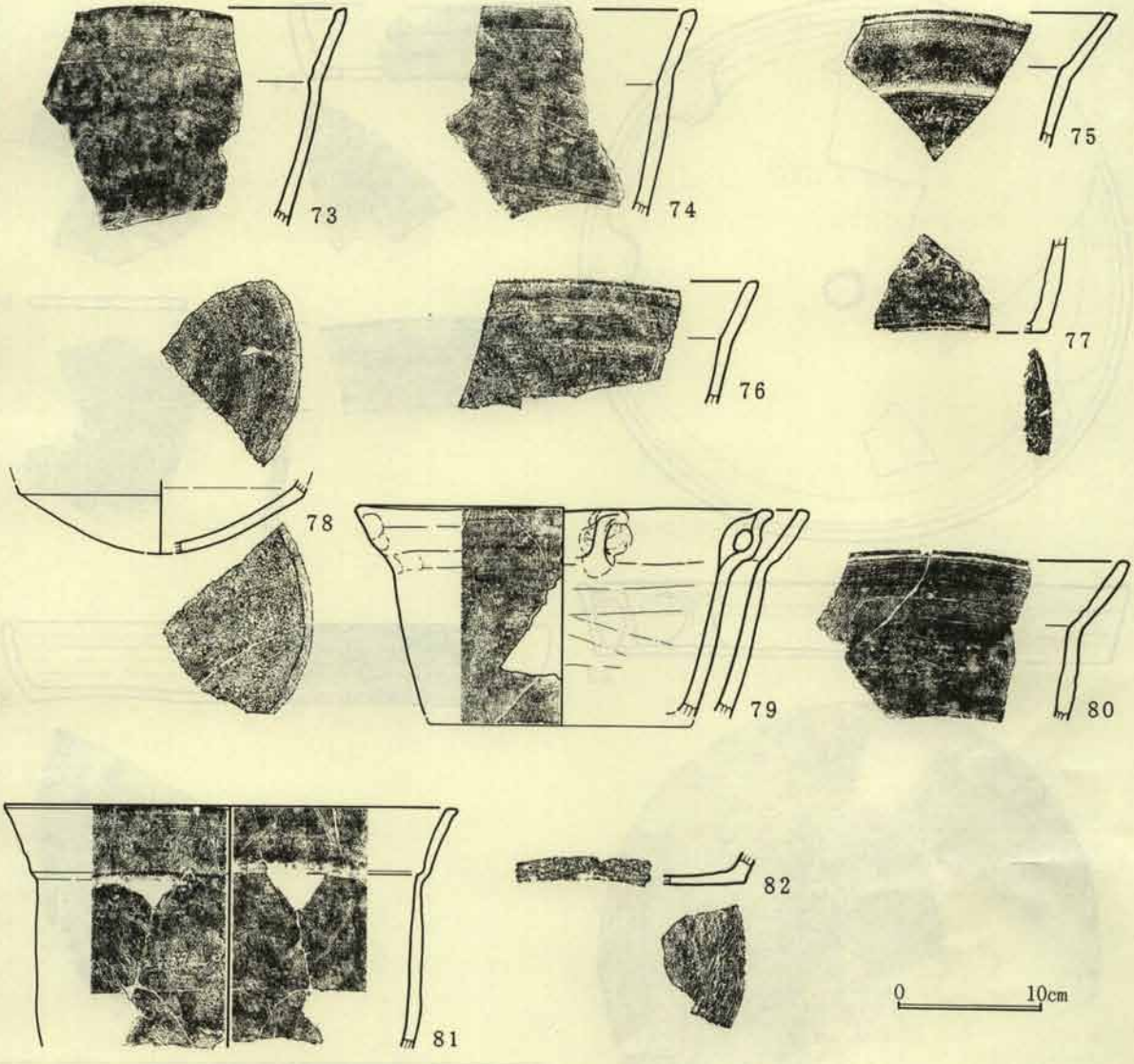
17世紀代は107～109は鉄絵丸皿で17世紀中頃～後半の所産であり、110と188は長石釉を施釉し、122の大皿は灰釉を施釉す。



第32図　出土遺物　内耳土器(1)



第33図　出土遺物　内耳土器(2)



第34図　出土遺物　内耳土器(3)

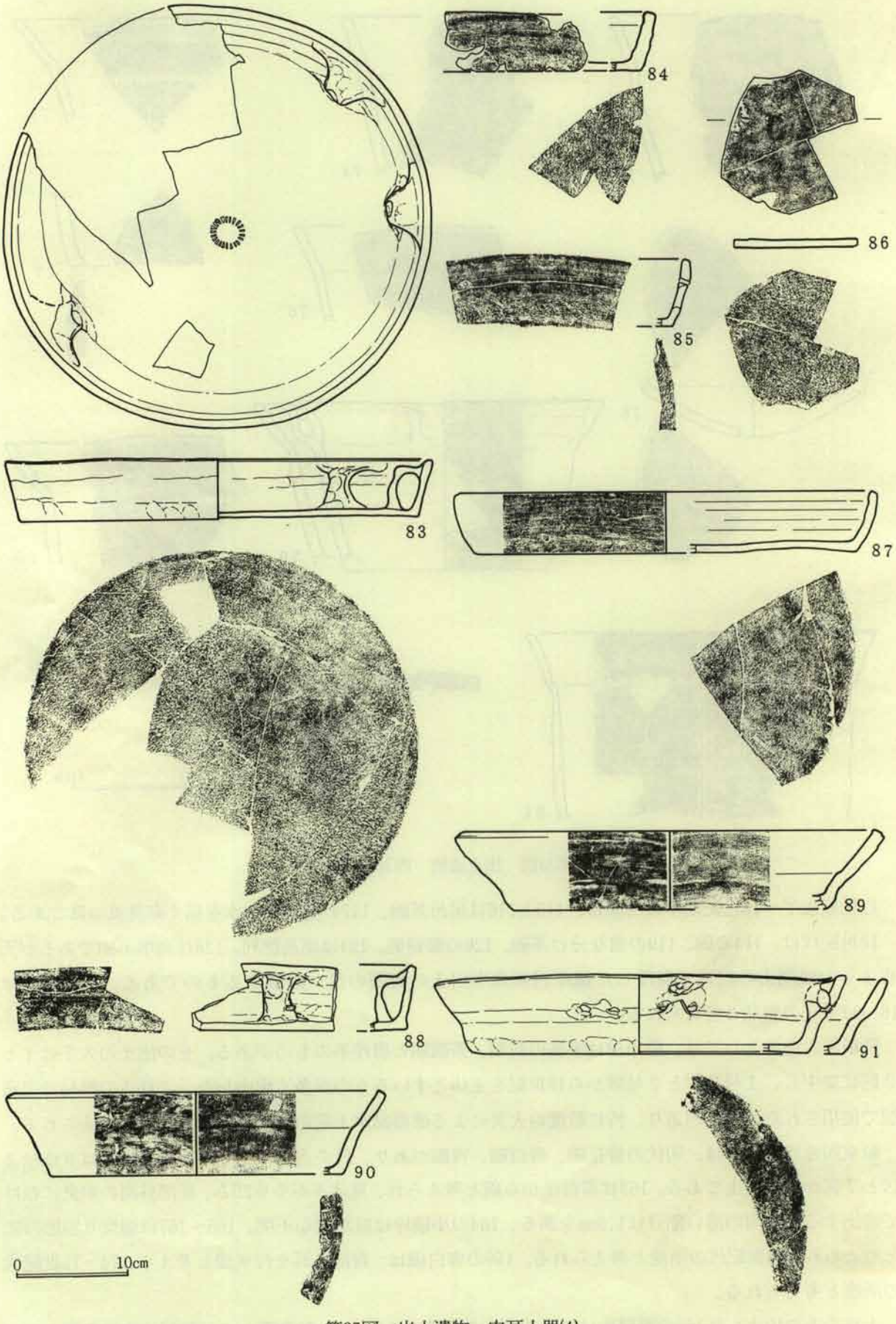
17世紀後半～18世紀前半の所産は、115と116は尾呂茶碗、117の見込に山水を描く京焼風の鉢である。

18世紀代は、114の碗、119の塗り分け茶碗、120の腰錆碗、124は尾呂徳利。125は産地不明であるが天明３年の浅間山の泥流で埋没した鎌原村延命寺出土の陶製の蓋に酷似するものである。天目茶碗は16～17世紀の製品と考えられる。

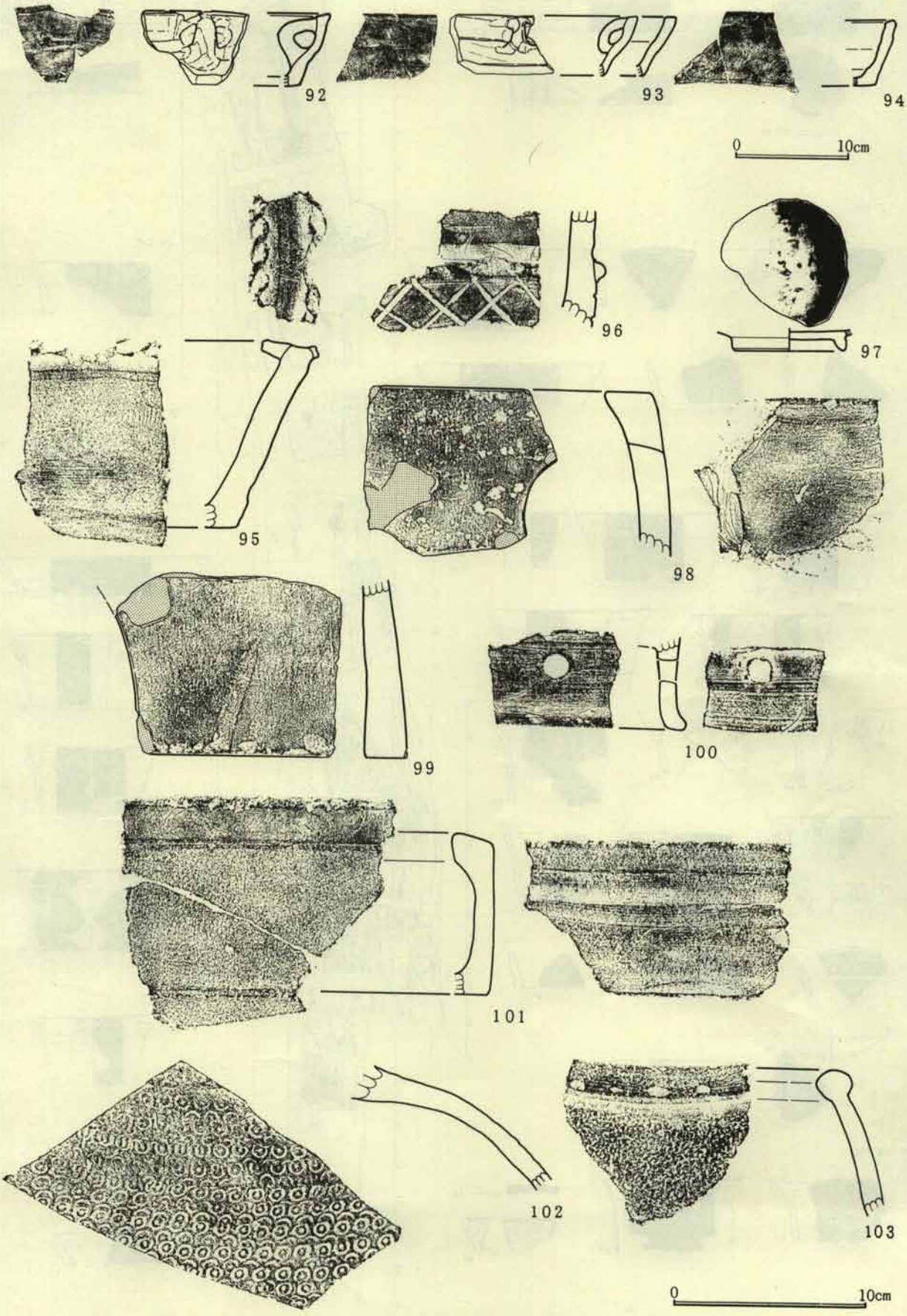
肥前系の所産としては、染め付け手法の皿類、茶碗類と唐津系のものがある。その出土の大半は１と２区に集中し、１号井戸と２号堀から18世紀を主体とすいるものが多く出土した。これらの製品は玉蔵院で使用された可能性があり、特に数度の火災による破損品が上記の遺構に廃棄されたと考えられる。

舶来陶磁器としては、明代の青花磁、青白磁、青磁があり、計７点が出土した。青花磁器は５点は２区と７区からの出土である。163は高台径から碗と考えられ、見込みがやや凹み、底部外面の中央にむけて突出する。器肉の薄い部分は1.5㎜を測る。164の小破片は皿か碗か不明。165～167は端反り器形の皿と考えられ、16世紀代の所産と考えられる。169の青白磁は、肩部に耳を付す壺と考えら、14～15世紀代の所産と考えられる。

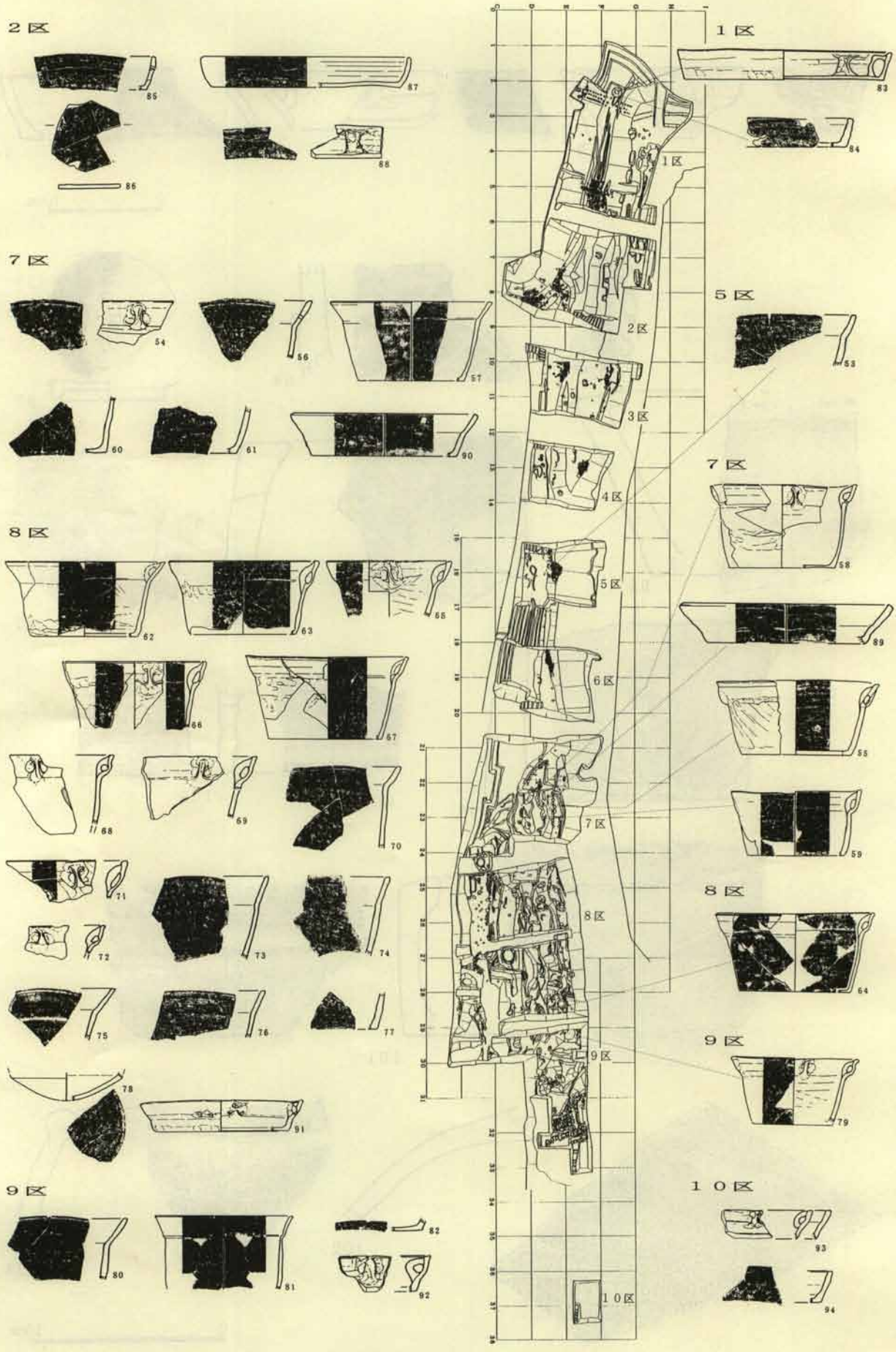
１点のみの出土した168の青磁片は口縁部がやや内彎する破片で、釉調等から15世紀代後半を溯らない



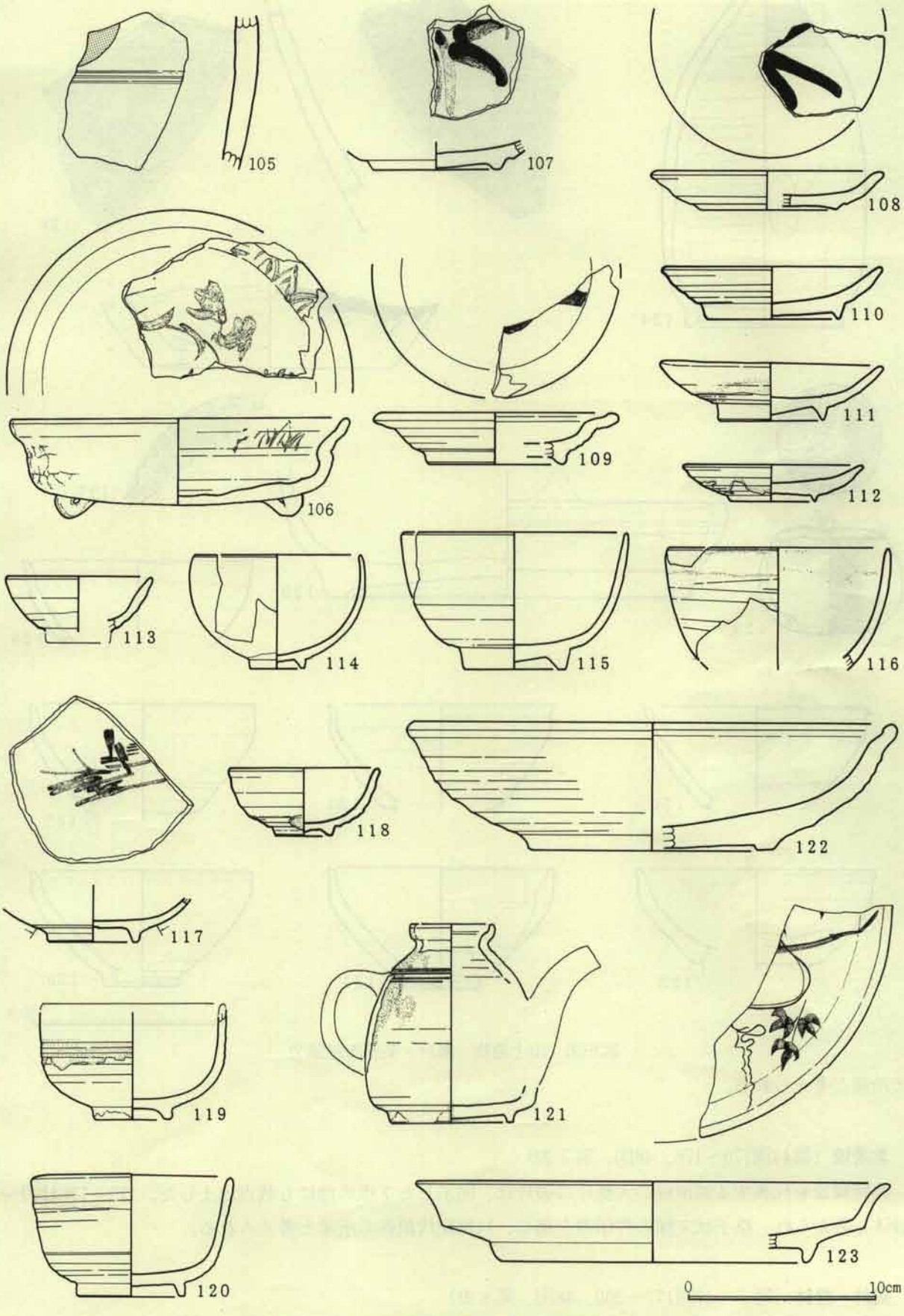
第35図　出土遺物　内耳土器(4)



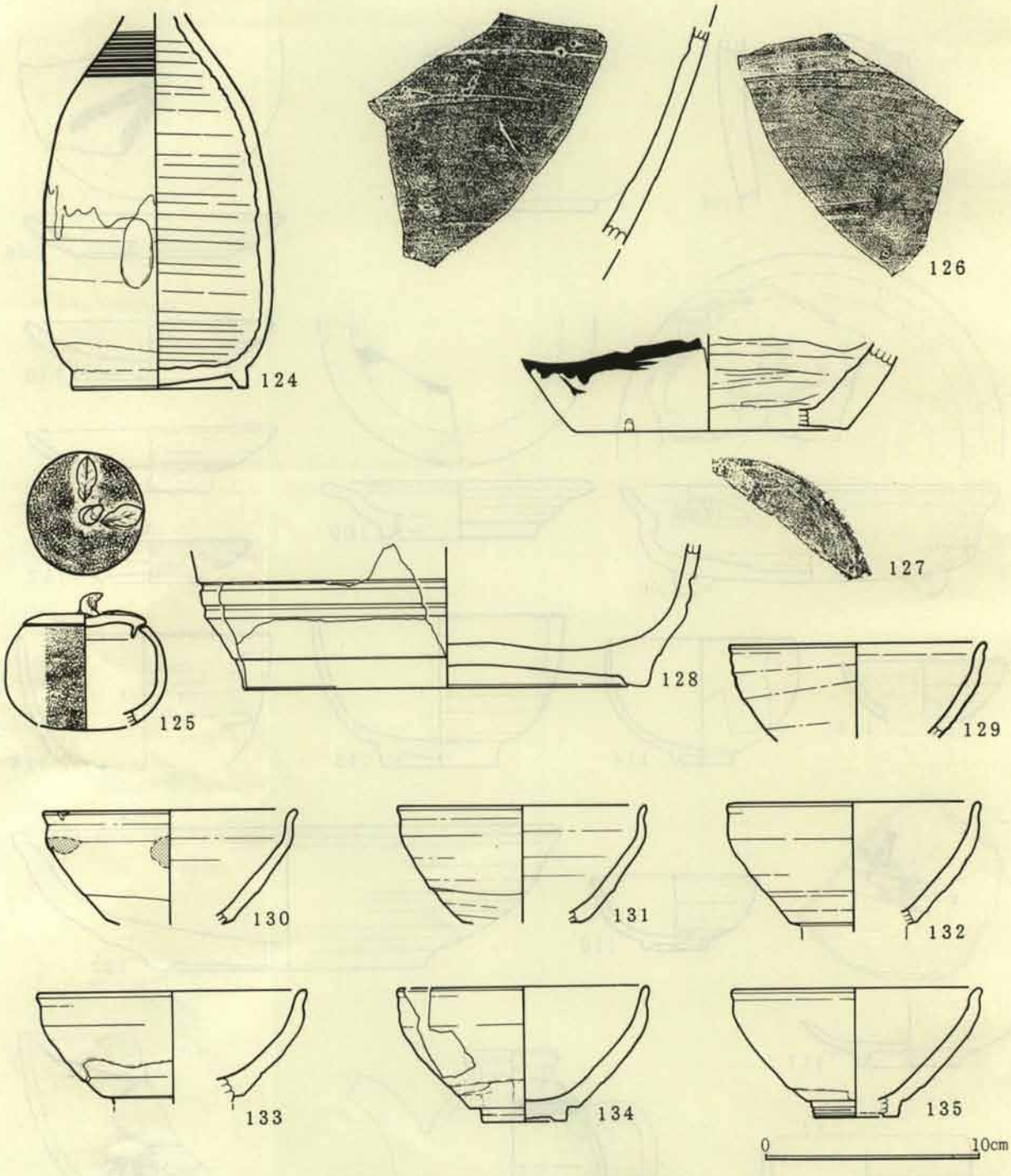
第36図　出土遺物　内耳土器等(5)



第37図　内耳土器出土分布図



第38図　出土遺物　瀬戸・美濃陶磁器(1)



第39図　出土遺物　瀬戸・美濃陶磁器(2)

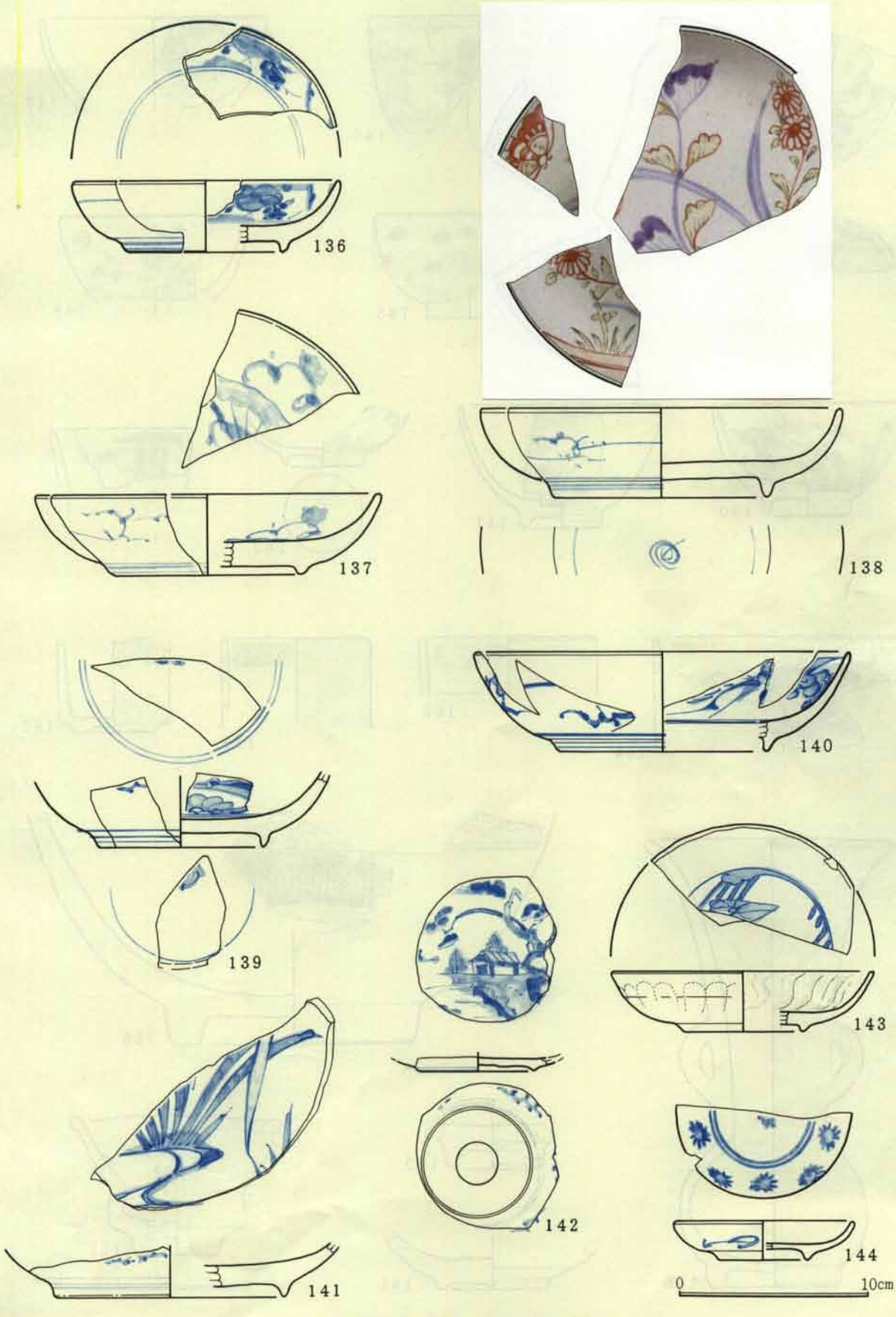
と所産と考えられる。

常滑焼（第44図170～176、48図、第７表）

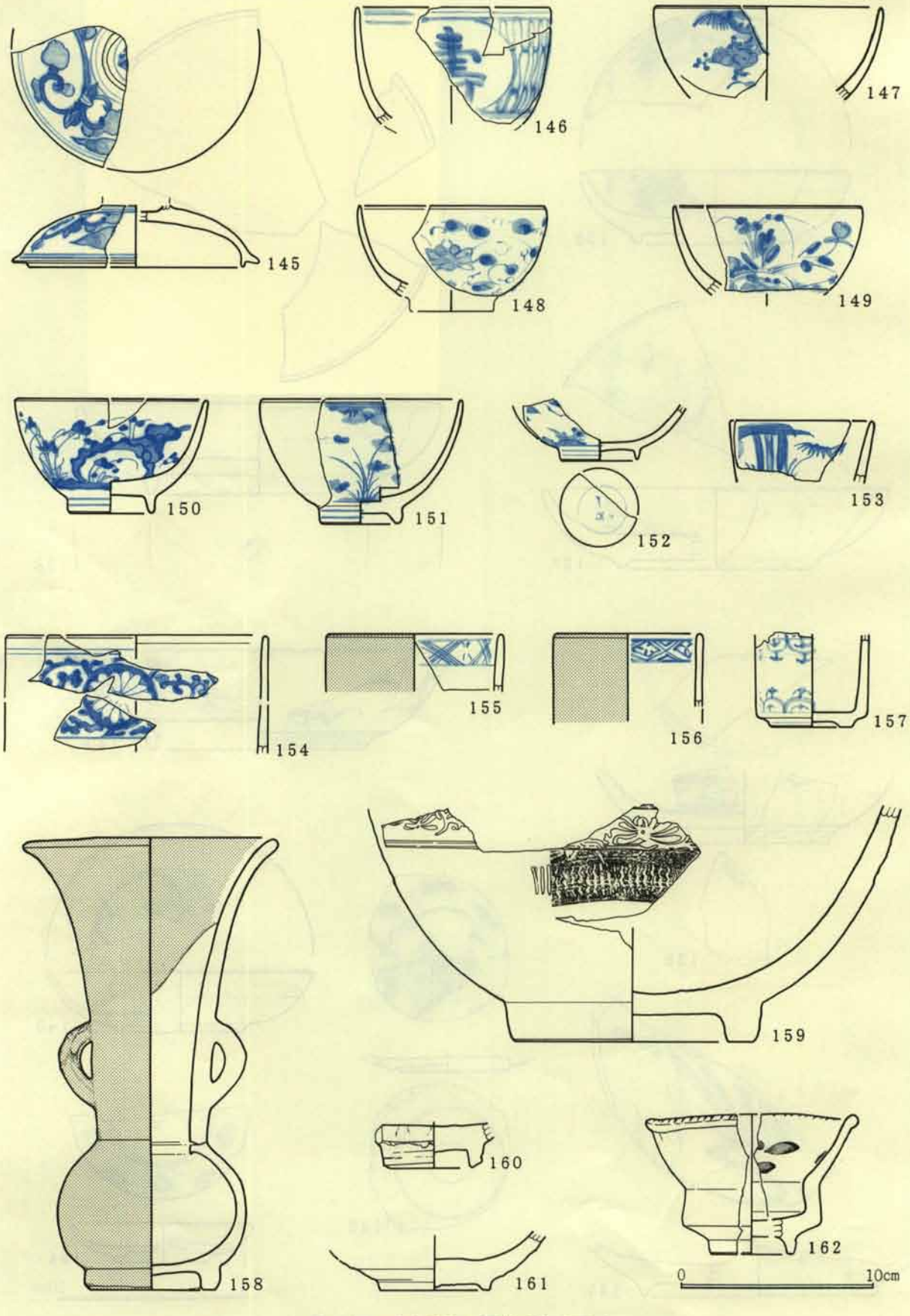
焼締陶器を代表する常滑焼の大甕片の破片は、図示した７点の他にも数点出土した。175と176は同一個体と考えられ、格子状文様の押印帯を施し、14世紀代前後の所産と考えられる。

摺鉢・捏鉢（第45～47図177～200、48図、第８表）

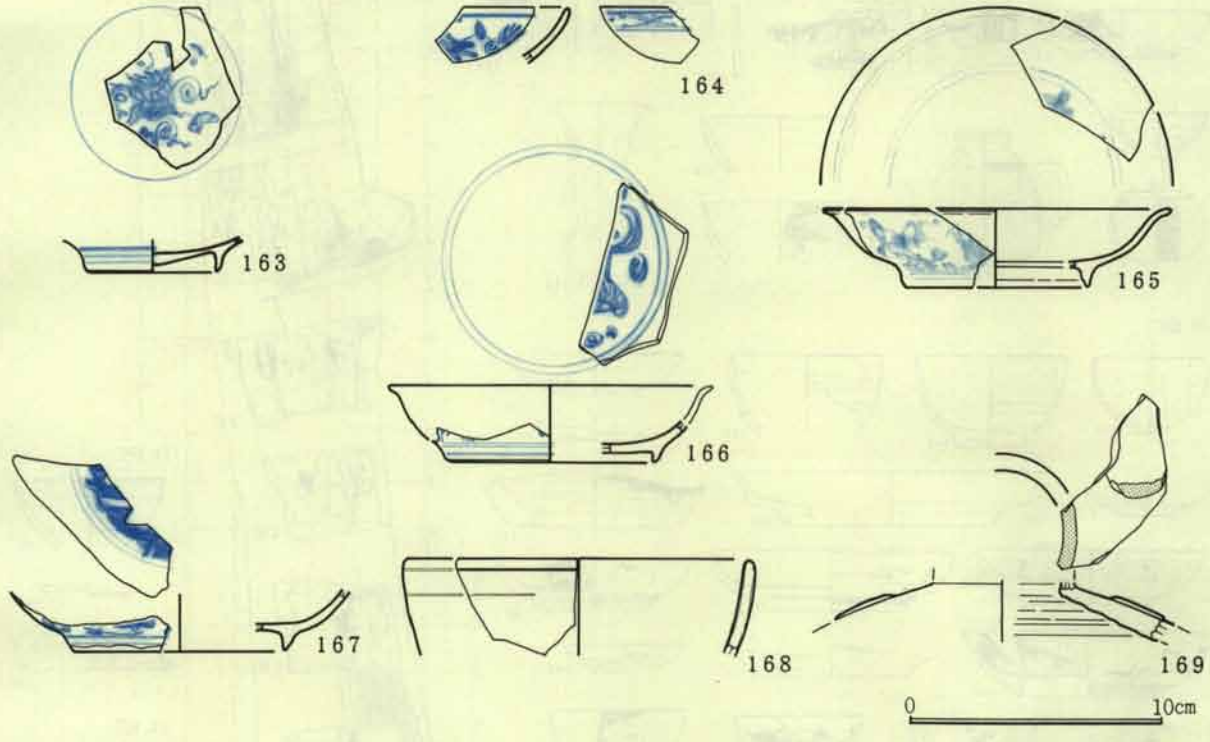
摺鉢は在地系、瀬戸美濃系と明石系、丹波信楽系、泉州堺系の焼締陶器が出土し、その大半は瀬戸美



第40図　出土遺物　肥前系陶磁器(1)



第41図　出土遺物　肥前系陶磁器(2)



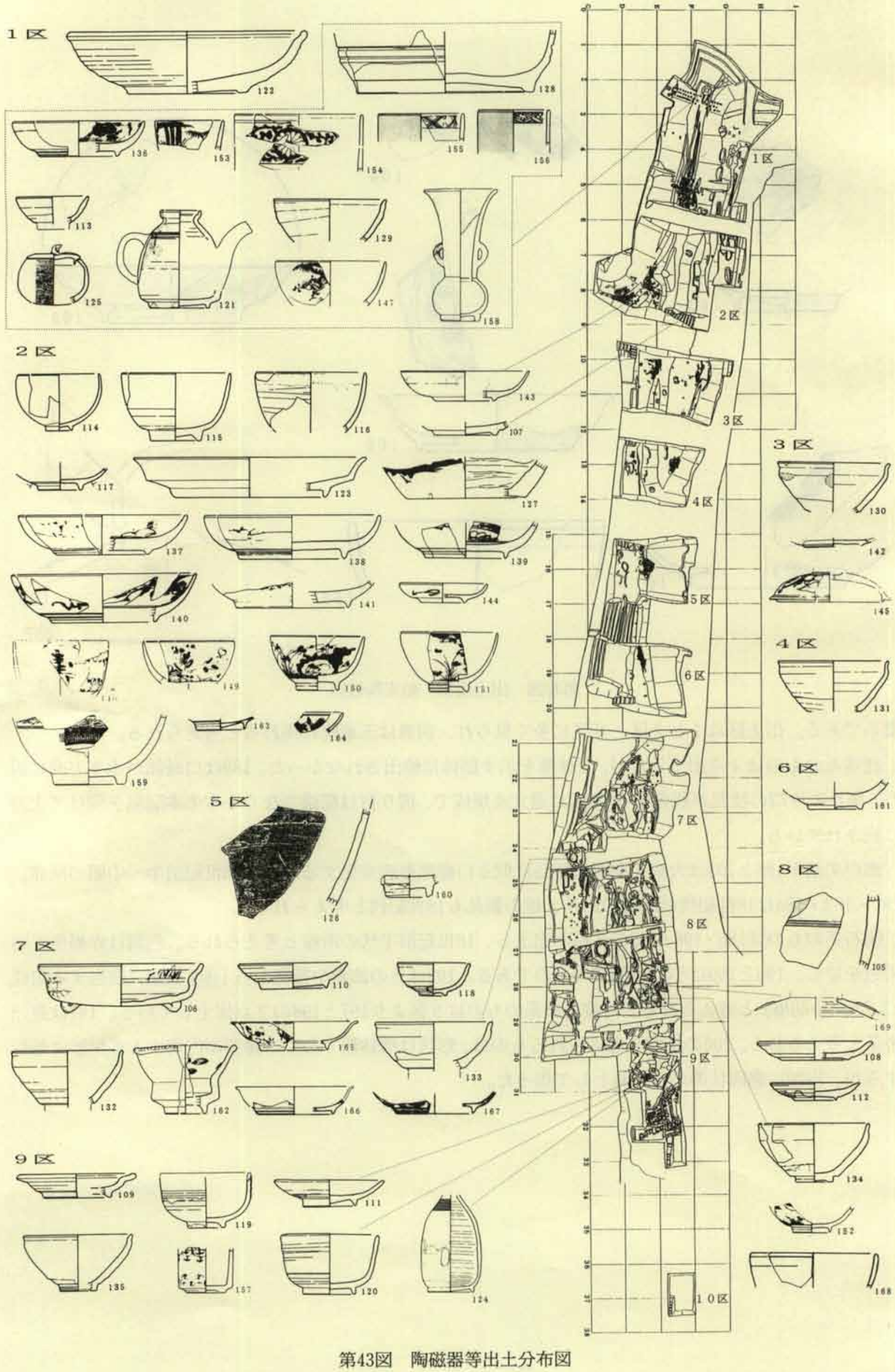
第42図　出土遺物　舶来陶磁器

濃系である。出土区は１と２区、８区に多く見られ、前者は玉蔵院に係わると考えられる。

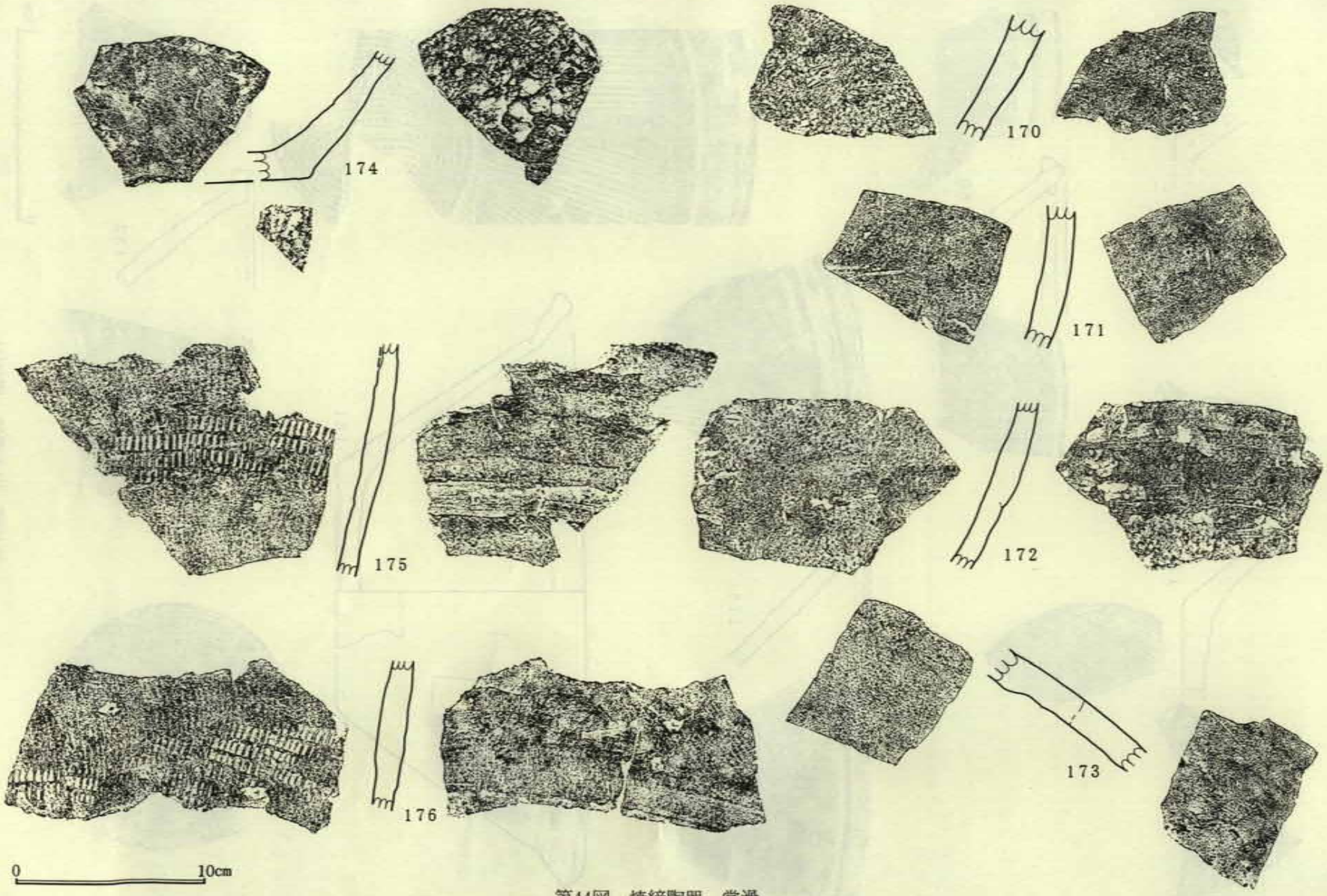
在地系のものは４点出土したが、全体像を示す個体は検出されなかった。189は口縁部が水平方向に折れ、僅かに片口の状況が残存する。190は還元炎焼成で、摺り目は櫛歯でなく１本１本間隔を開けて上方に施されている。

瀬戸美濃系188と193は大窯Ⅰ期頃の製品に似る口縁部形態を呈するもので16世紀前半～中頃の所産。181・183・184は18世紀代の所産であり、他の製品も18世紀代と考えられる。

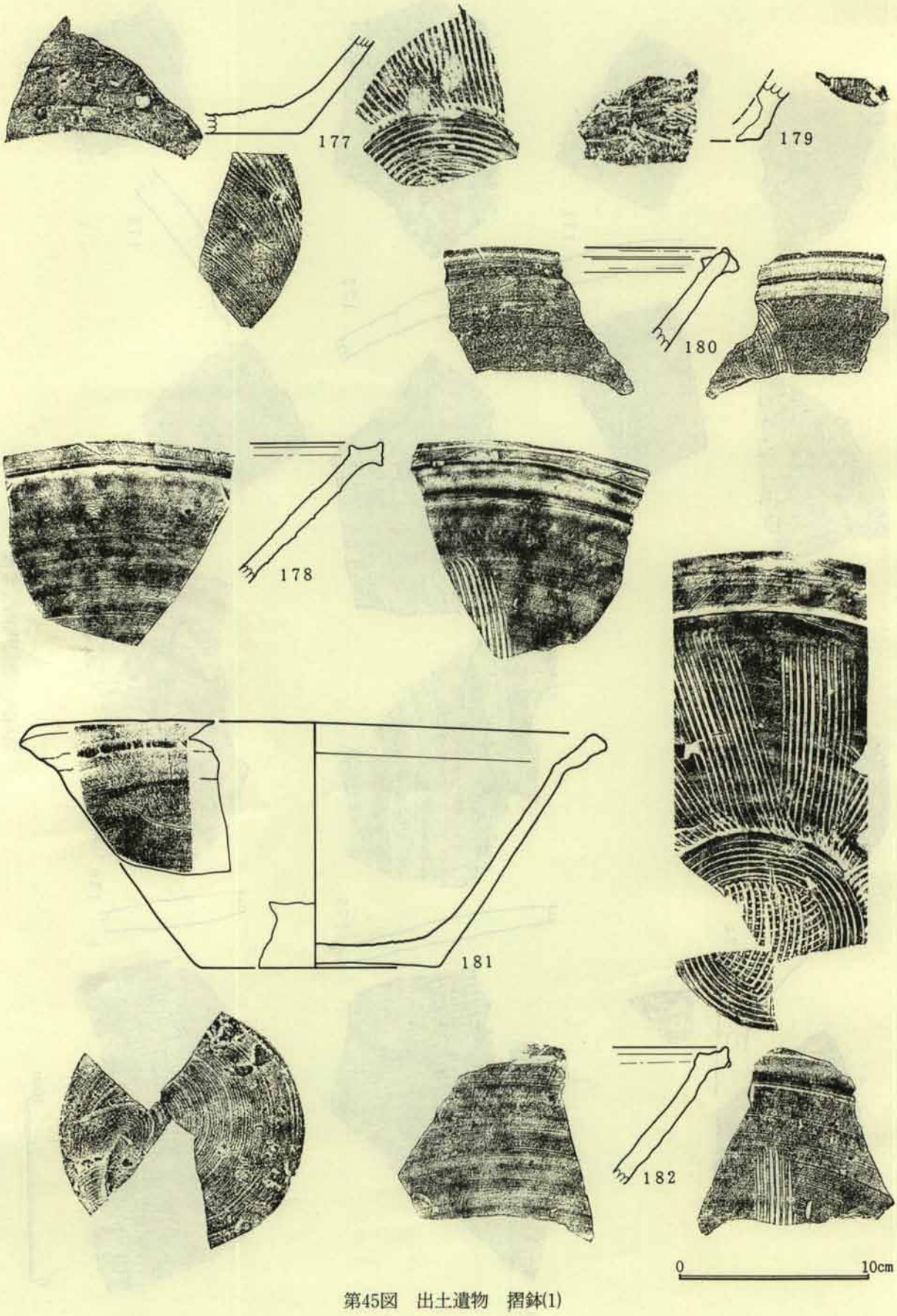
明石系のものは186・196・199の３点が出土し、18世紀前半代の所産と考えられる。色調は赤褐色か暗褐色を呈し、196と199は小型の部類のものである。199はその法量や特徴から「赤」種類に該当する口径22.7cm（小胡麻）と考えられる。丹波信楽系のものは９区より197と198の２点出土している。187は泉州堺系と考えられる。200の捏鉢と考えられるものは、形状は摺鉢形でなく口縁部が内彎する香炉形に類似するが、内面の磨面状態から捏鉢として扱った。



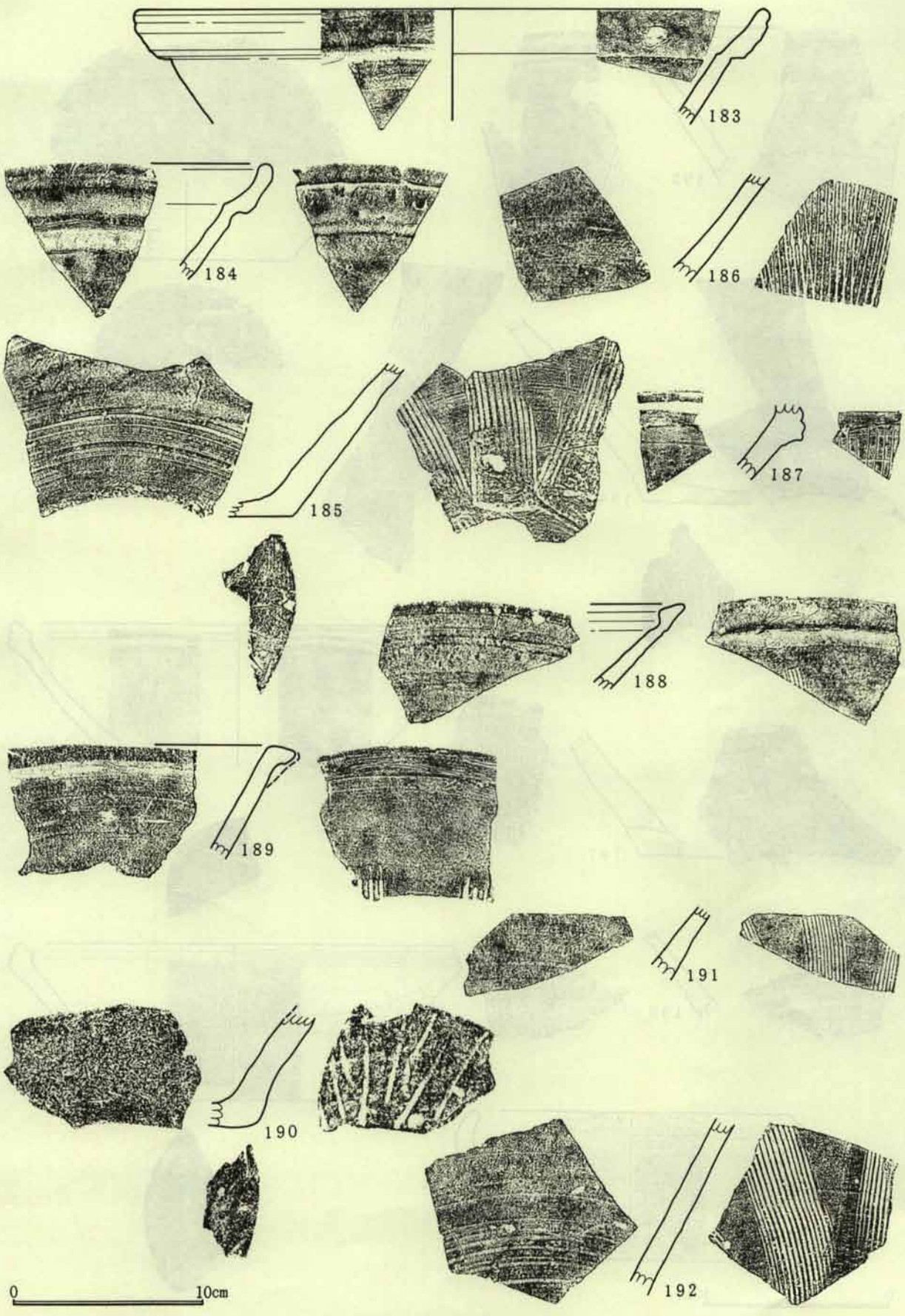
第43図　陶磁器等出土分布図



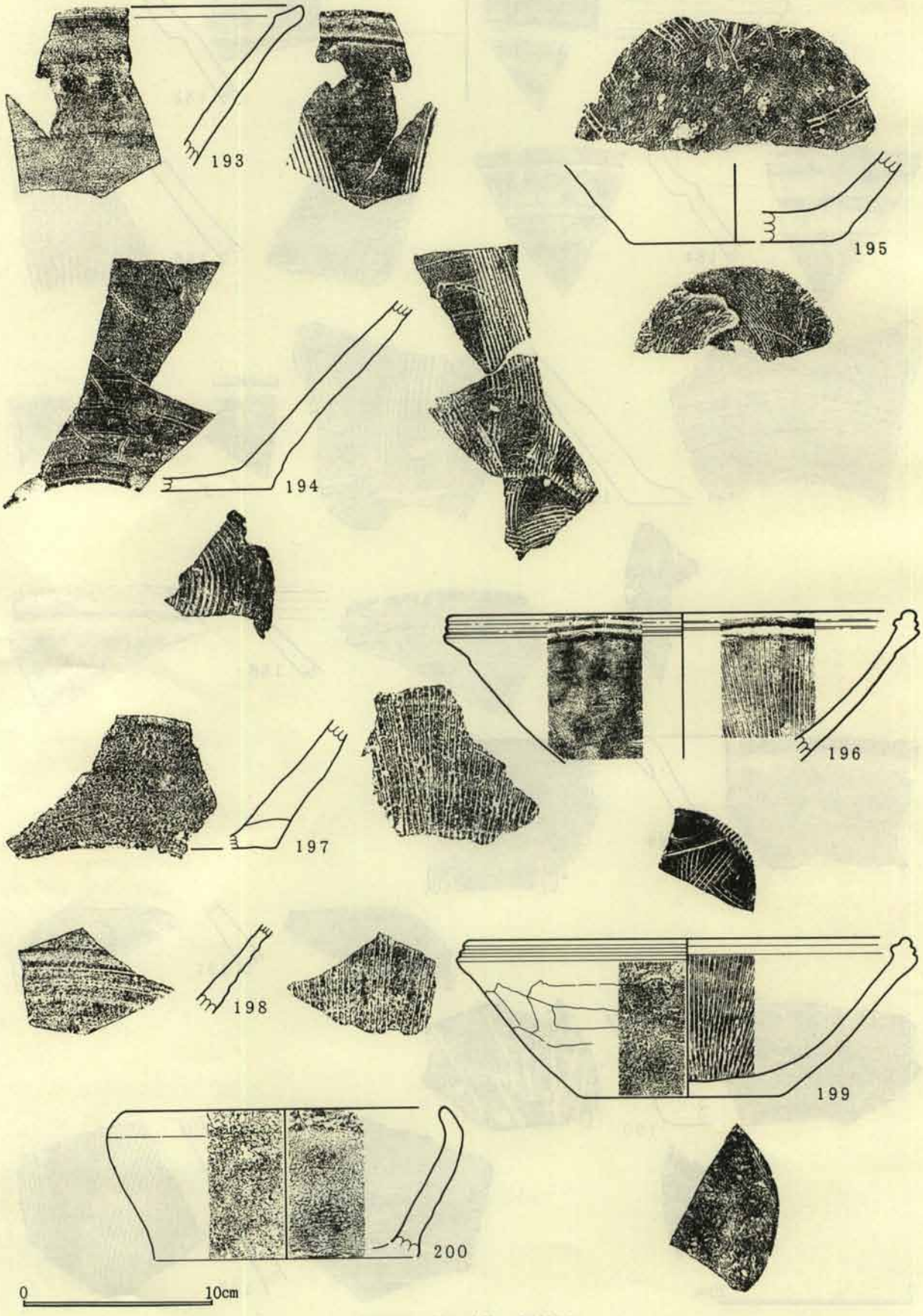
第44図　焼締陶器　常滑



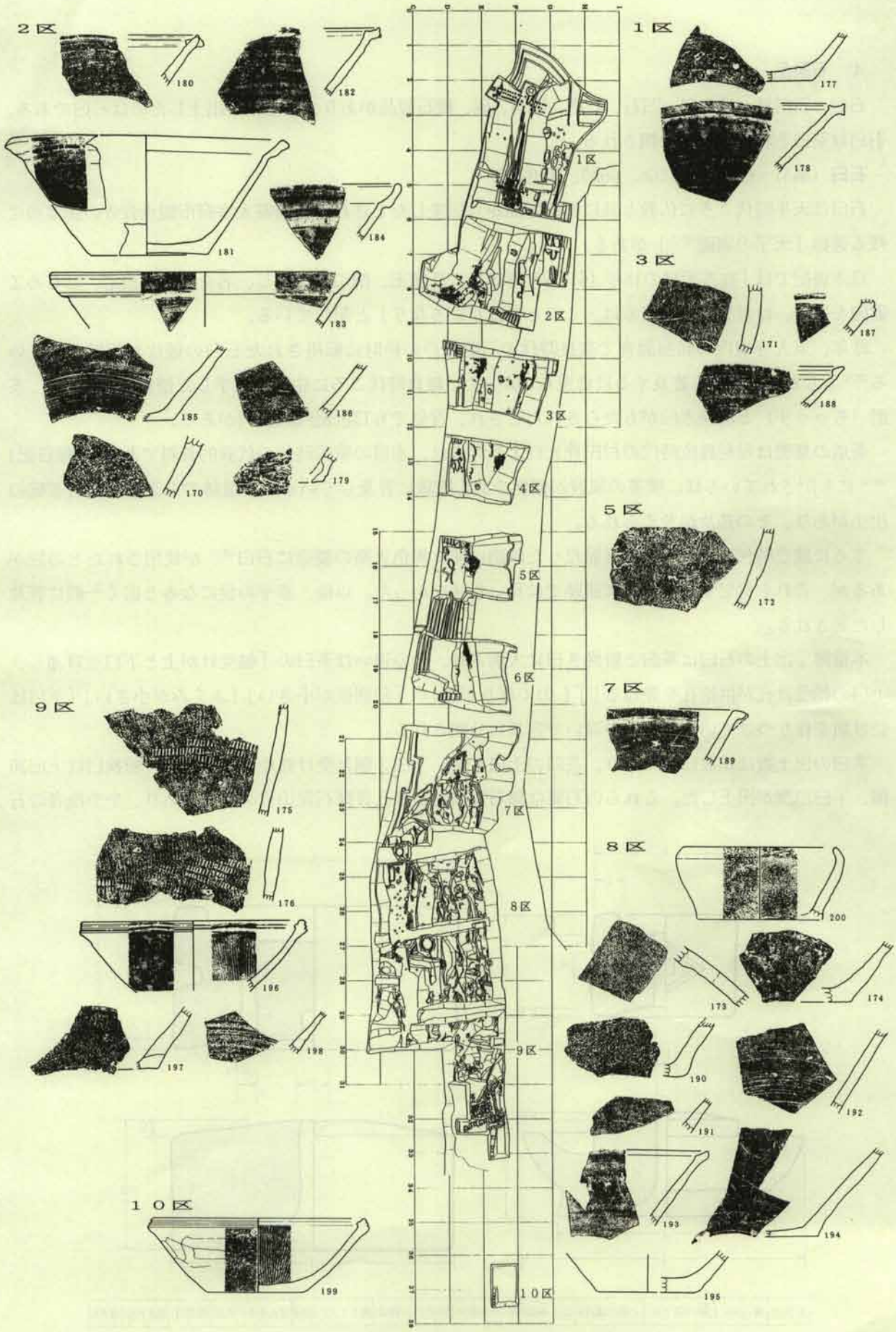
第45図　出土遺物　摺鉢(1)



第46図　出土遺物　摺鉢(2)



第47図　出土遺物　摺鉢(3)



第48図　摺鉢出土分布図

(4) 石製品

石臼、石摺鉢、搗き臼、凹石、石塔、砥石、硯、軽石製品があり、最も多く出土したのは石臼である。石臼は茶臼と粉挽臼に大分類される。

石臼（第51～62図201～268、66図、第9表）

石臼は天平時代ころに仏教と共に朝鮮半島から伝来したとされ、福岡県太宰府市観世音寺の講堂前に残る通称「天平の碾磑[註13]」がある。

日本書紀では「推古天皇の18年（610年）春3月、高麗王、僧二人を献じ、名を曇微、法定、はじめて碾磑を造る。けだし碾磑を造るは、このときはじまるなり」と記している。

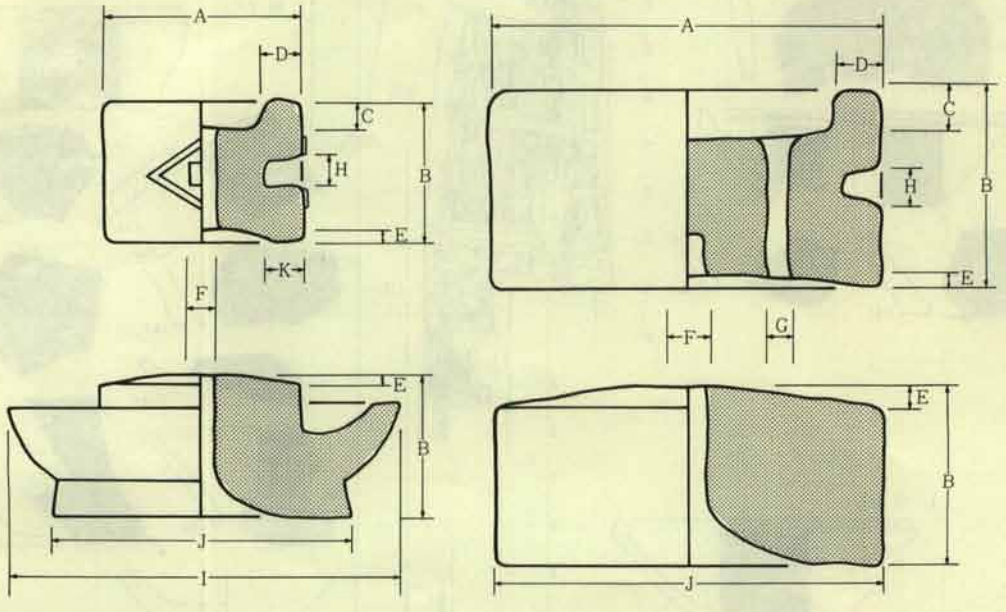
昨年、東大寺境内の発掘調査で奈良時代の石組井戸の枠材に転用された石臼の破片が報道されている[註14]。しかし、ひろく普及するには至らなかった。鎌倉時代ころに中国に留学した僧侶たちにより、茶磨（ちゃうす）と粉挽き臼がもたらされたとされ、管見でも13世紀代の資料がある。

茶道の基礎は足利義政時代の村田珠光により作られ、本県の戦国時代の代表的資料である「永禄日記」[註15]にも記されている様に喫茶の風習が僧侶や武士階級に普及している。本遺跡でも茶臼と天目茶碗の出土があり、その普及が考えられる。

さらに織豊時代には当時の新兵器だった鉄砲に使う黒色火薬の製造に石臼[註16]が使用されたとの説があるが、これを肯定する根拠は本遺跡では見いだせなかった。以後、泰平の世になると広く一般に普及したとされる。

本遺跡で出土の石臼は茶臼と粉挽き臼に大別され、その違いは茶臼の「軸受けが上と下臼を貫通し、上臼の軸受け孔が供給孔を兼ねる」「ものくばりがない」「臼面径が小さい」「ふくみが小さい」「下臼は受け皿を作りつけている」ことの違いで容易に分類される。

茶臼の出土数は総数15個であり、茶臼の上臼8個、下臼3個と受け皿片4片である。粉挽臼は上臼30個、下臼23個が出土した。これらの石質は輝石安山岩と多孔質輝石安山岩の2種があり、やや後者の石



直径(A)	高さ(B)	上縁の高さ(C)	上縁の幅(D)	ふくみ(E)	芯穴の径(F)	供給口の径(G)	挽き手穴の径(H)	はんぎりの径(I)	底径(J)	挽き手穴の深さ(K)

第49図　石臼模式図

材が多い。

これらの個体は総てが割られた状態で出土し、道具には人間と同様に魂が宿ると考えられ、「つくも神」と呼んだようである。こうした道具の魂を供養するために魂抜きの方法としてわざわざ割ったとされている。

1） 茶臼（第51～53図201～215）

上臼の残存状況は、上縁を欠くもの1点、約半分に欠かれたものが5点、1/3と1/4のものが各1点である。特に204は上縁部の全周を欠き、側面は皮を剝がす状態に似る様に欠かれている。

口径は復元で19.1～21.2cmの数値であり、ほぼ20cm前後である。高さは10.6～14.4cm、挽き手孔は2カ所に施されているものが3点ある。これらは片減りを防ぐためにつけかえる予備孔であり、この挽き手孔には文様（以後、この文様を台座文様と呼称する）が施され、二重方形が1点、菱形2点、円形3点がある。201は剣菱文に似、207の台座文様は七宝文と称され、隣接する前橋城遺跡等からも出土している。目の分画を復元できるものは3点で6分画と8分画であり、他は摩耗が著しく不明である。203は雑な目立てと考えられる痕跡がある。

面の調整は全体に丁寧に仕上げられ、204の上部くぼみは光沢のある磨面に仕上げられている。側面は細かい仕上げ痕を残すものが多い。

下臼は受け皿を伴う所謂「はんぎり」（粉になった粉砕物を受ける部分）が付くものであるが、その全容を留めるものは無く、何れも欠かれた破片である。形状を想定でる3点は高台を作り出している。底部の抉りはラッパ状に施される。

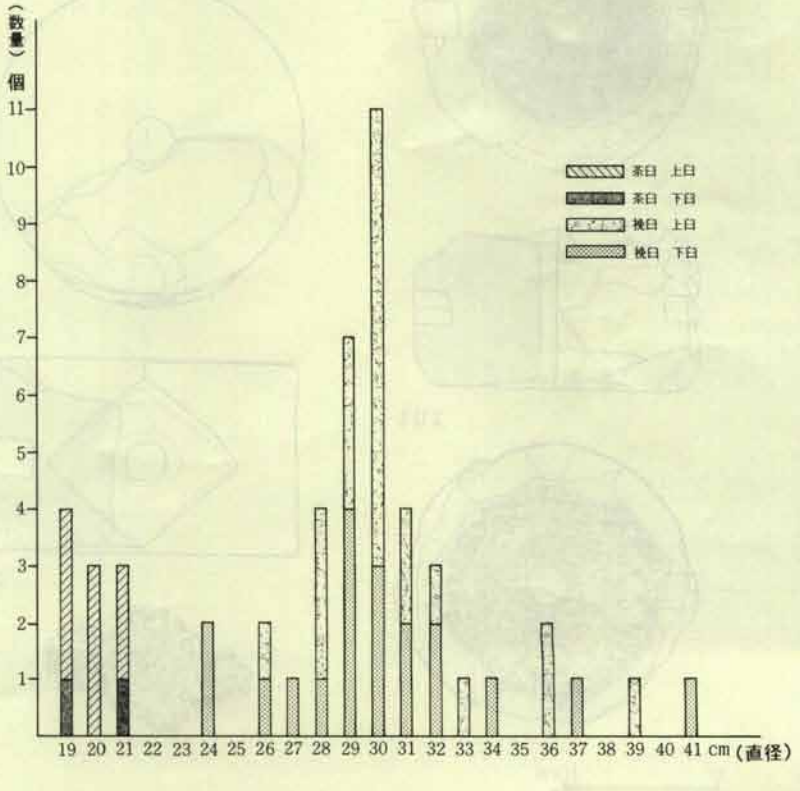
2） 粉挽臼（第53～62図216～268）

上臼の残存状況は完形のもの1点を除いて総てが破片である。その形状は1/2に近い残存率のものが6点、1/3に近いもの3点、1/4が9点、他はそれ以下のものである。

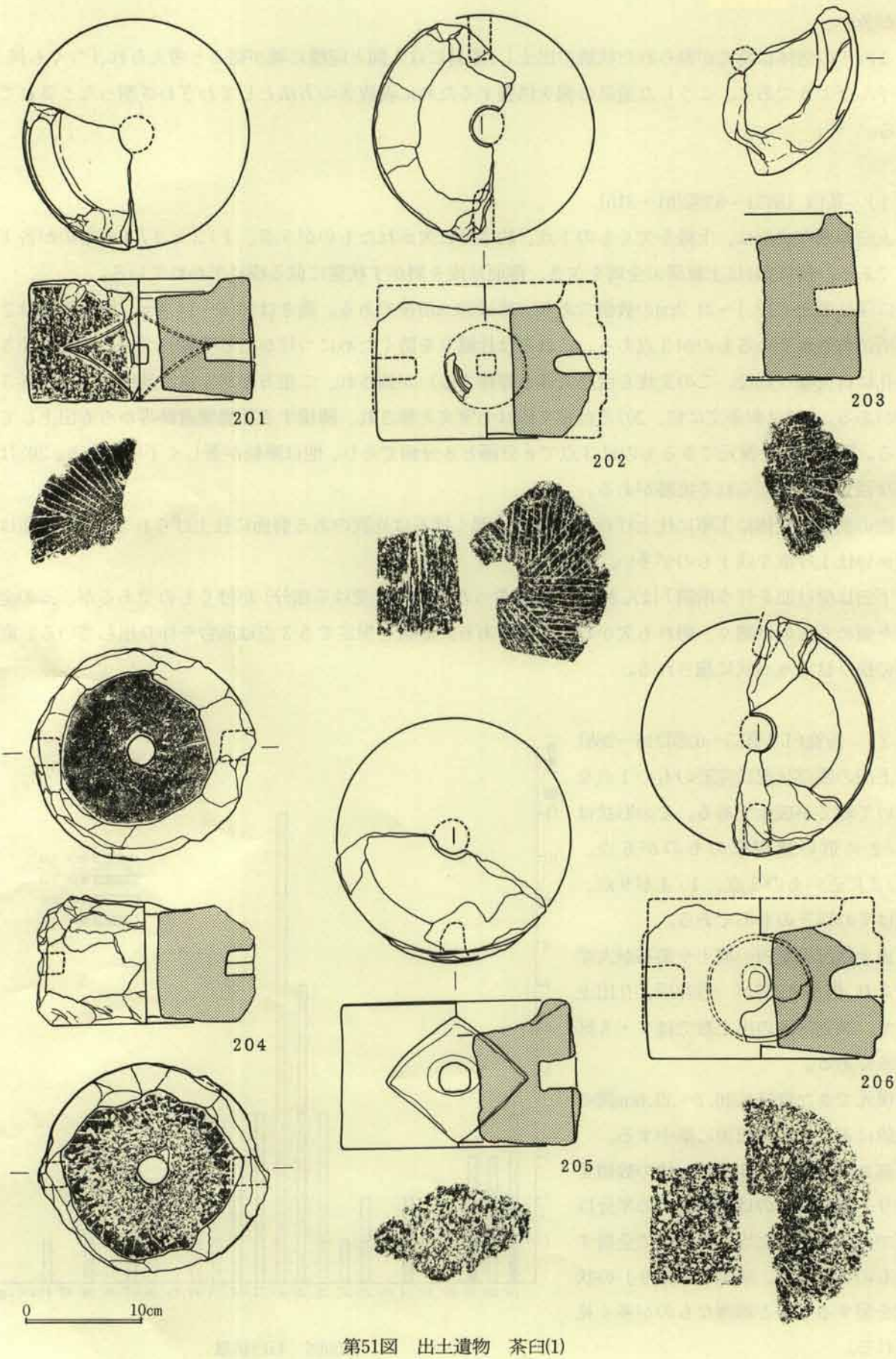
出土状況は堀内の埋土や集石が大半であり、僅かに237が　号井戸より出土した。調査区別の出土数では7・8区に多くある。

復元できた直径は26.2～39.8cm間の数値にあり、30cm前後に集中する。

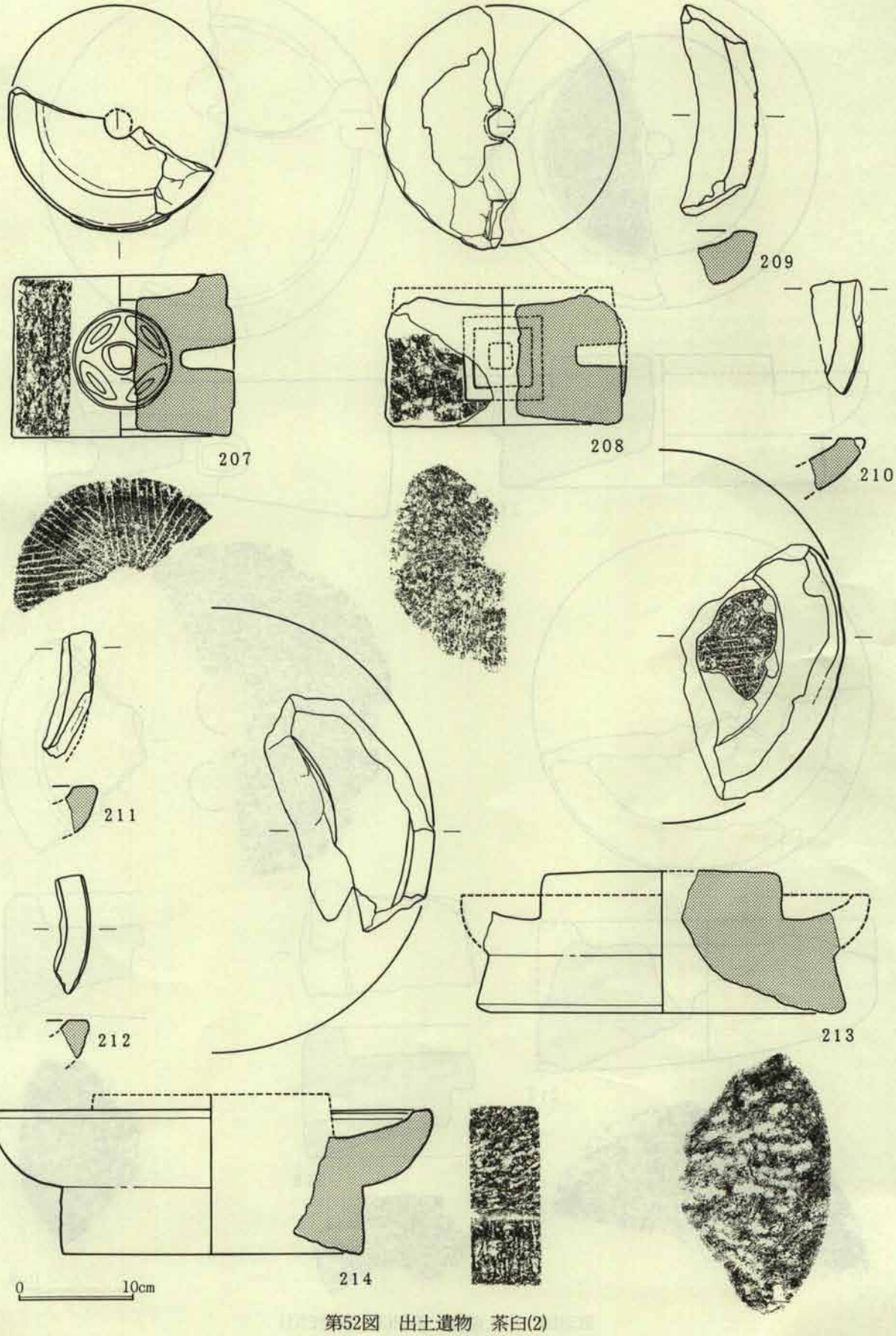
高さ（厚さ）は6～14cm代の数値を計り、器薄なものは厚いものの半分以下である。さらに均一な高さで全周するものは少なく、所謂「片減り」の状況を呈するものと器薄なものが多く見られる。



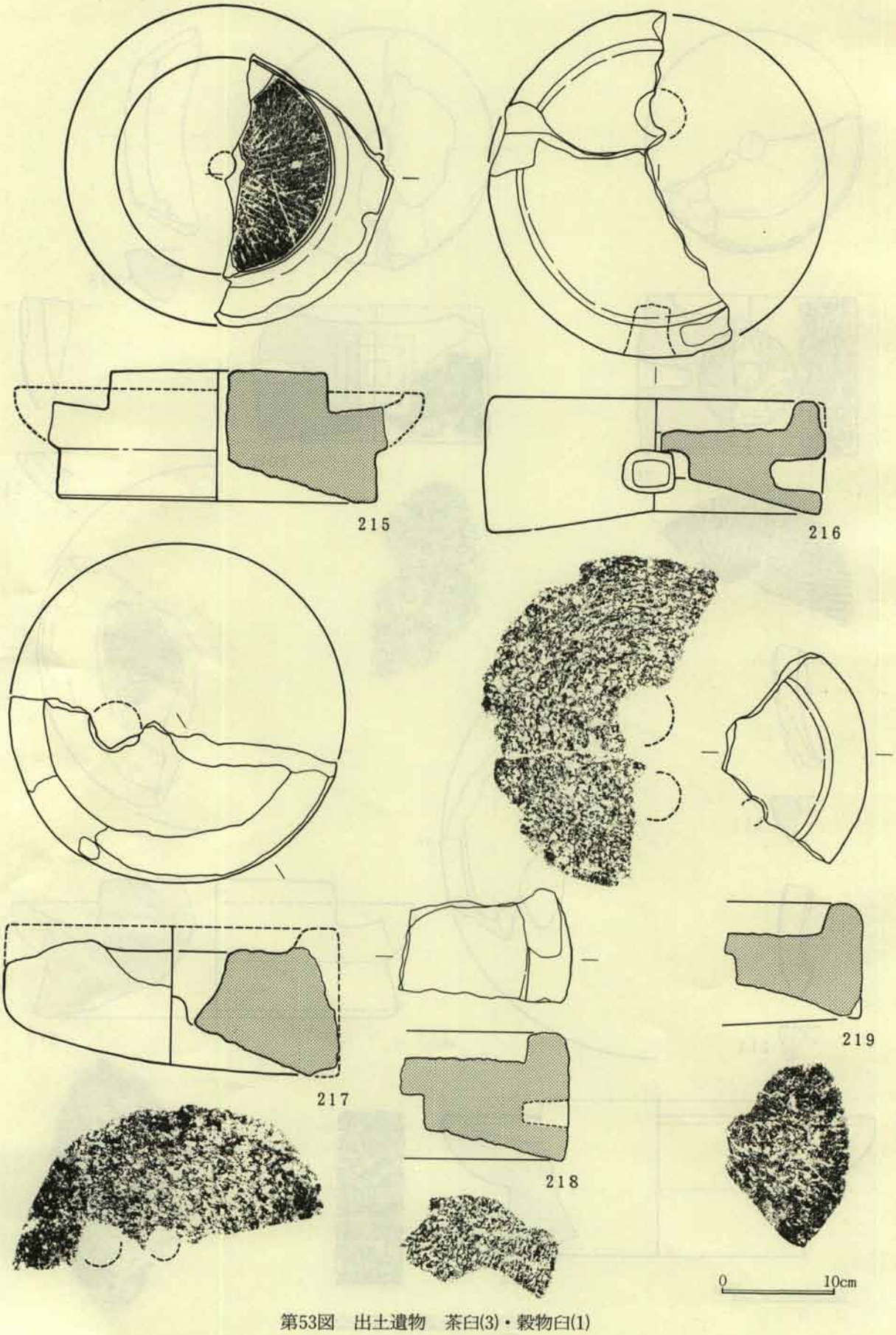
第50図　石臼法量



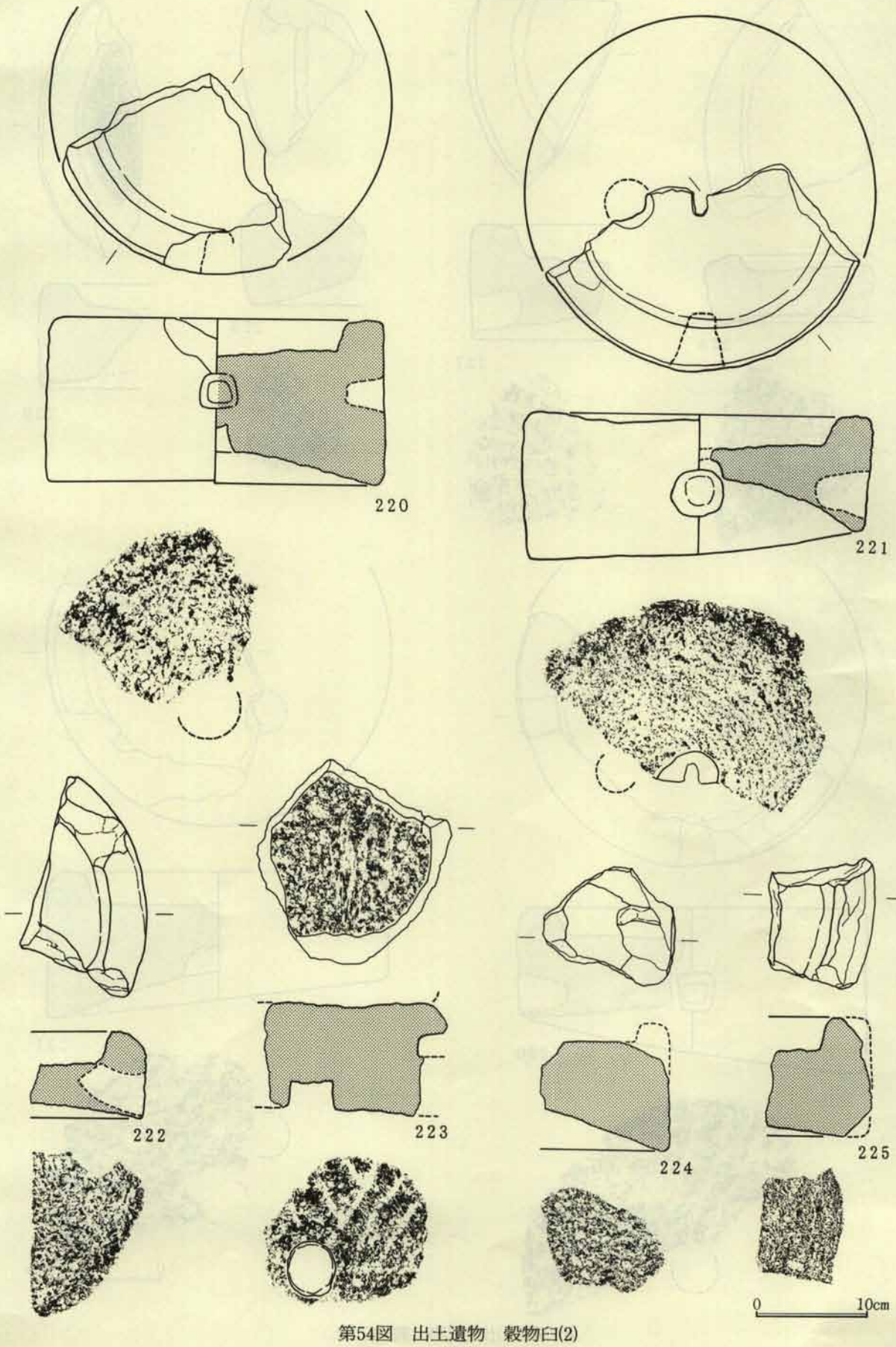
第51図　出土遺物　茶臼(1)



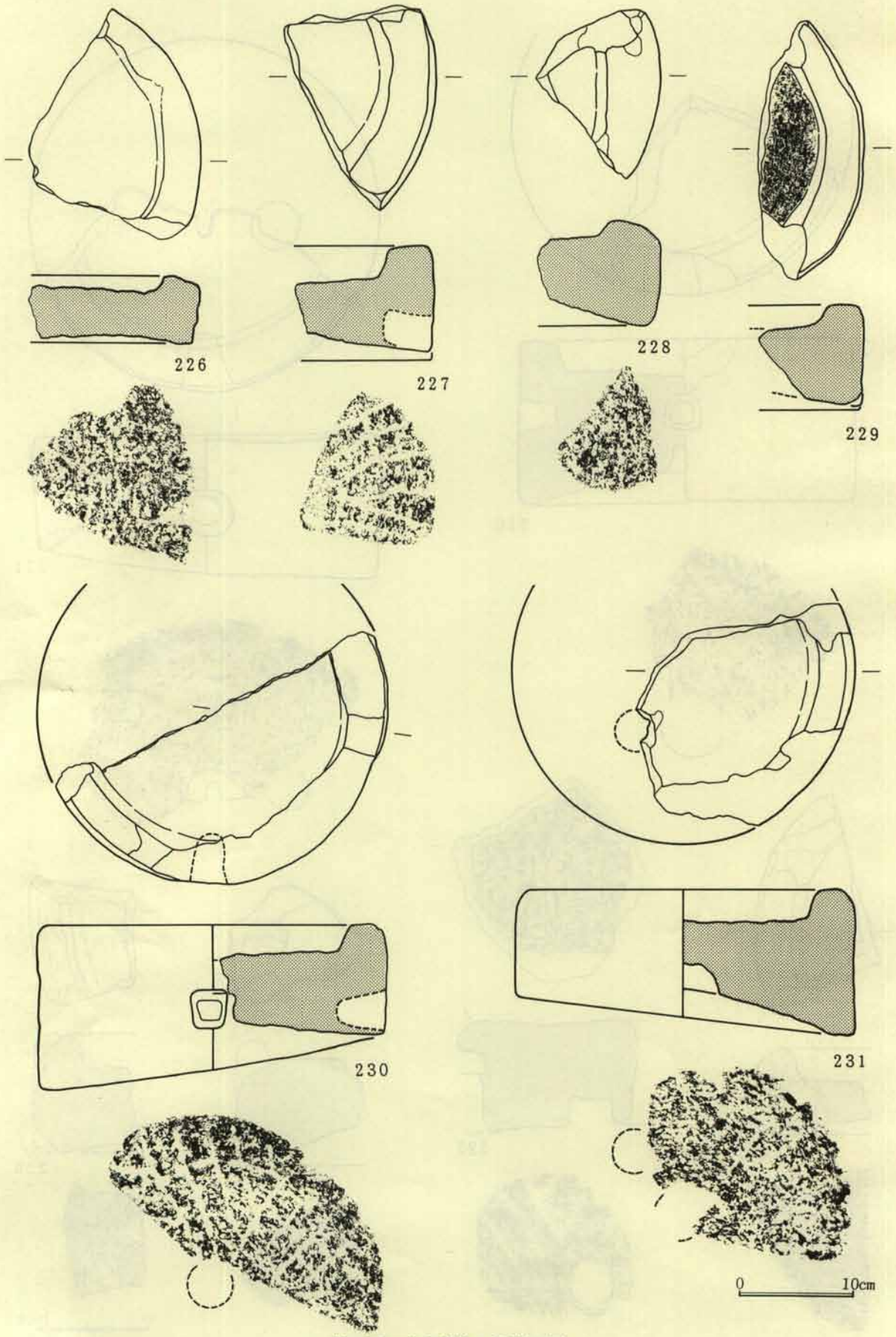
第52図　出土遺物　茶臼(2)



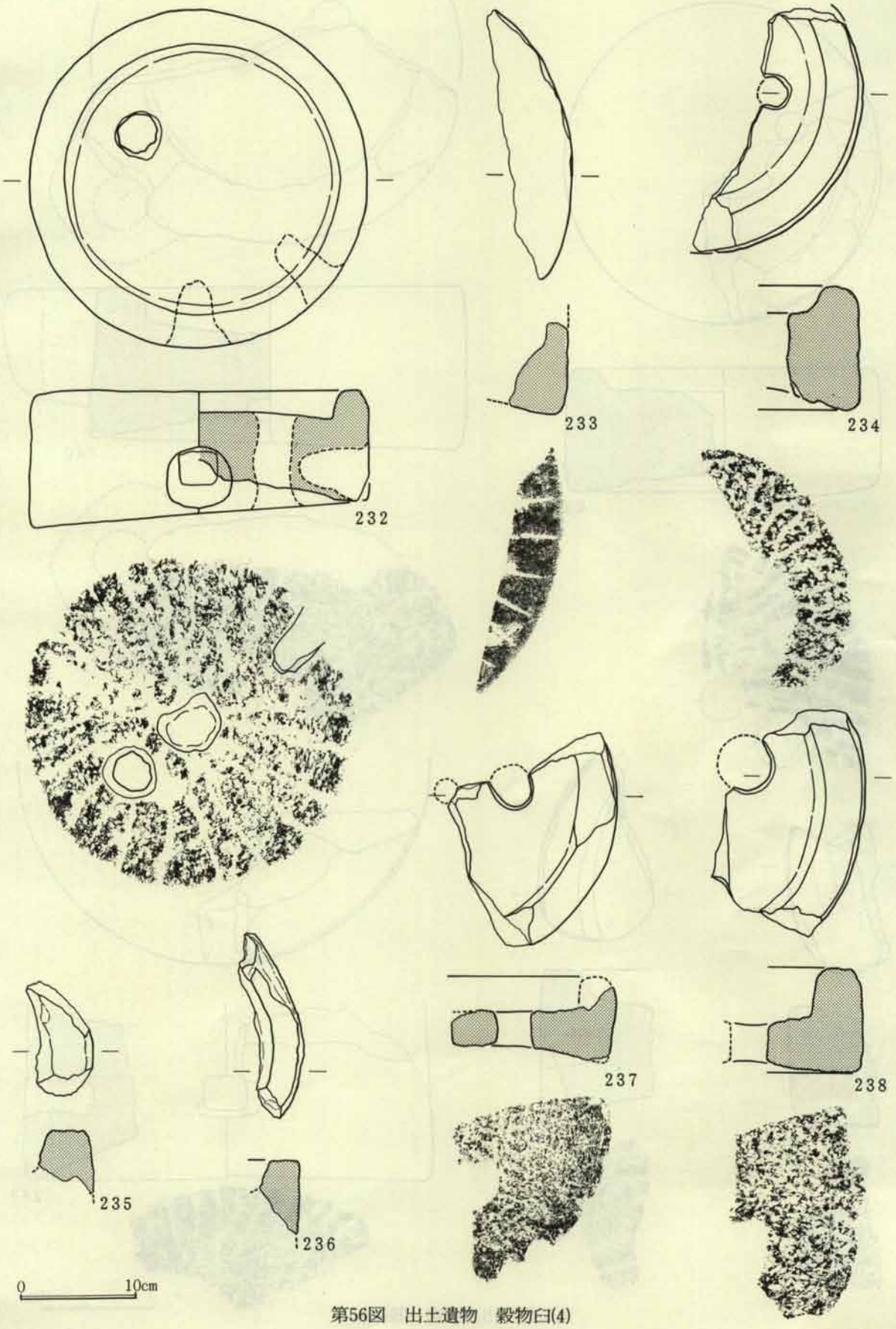
第53図　出土遺物　茶臼(3)・穀物臼(1)



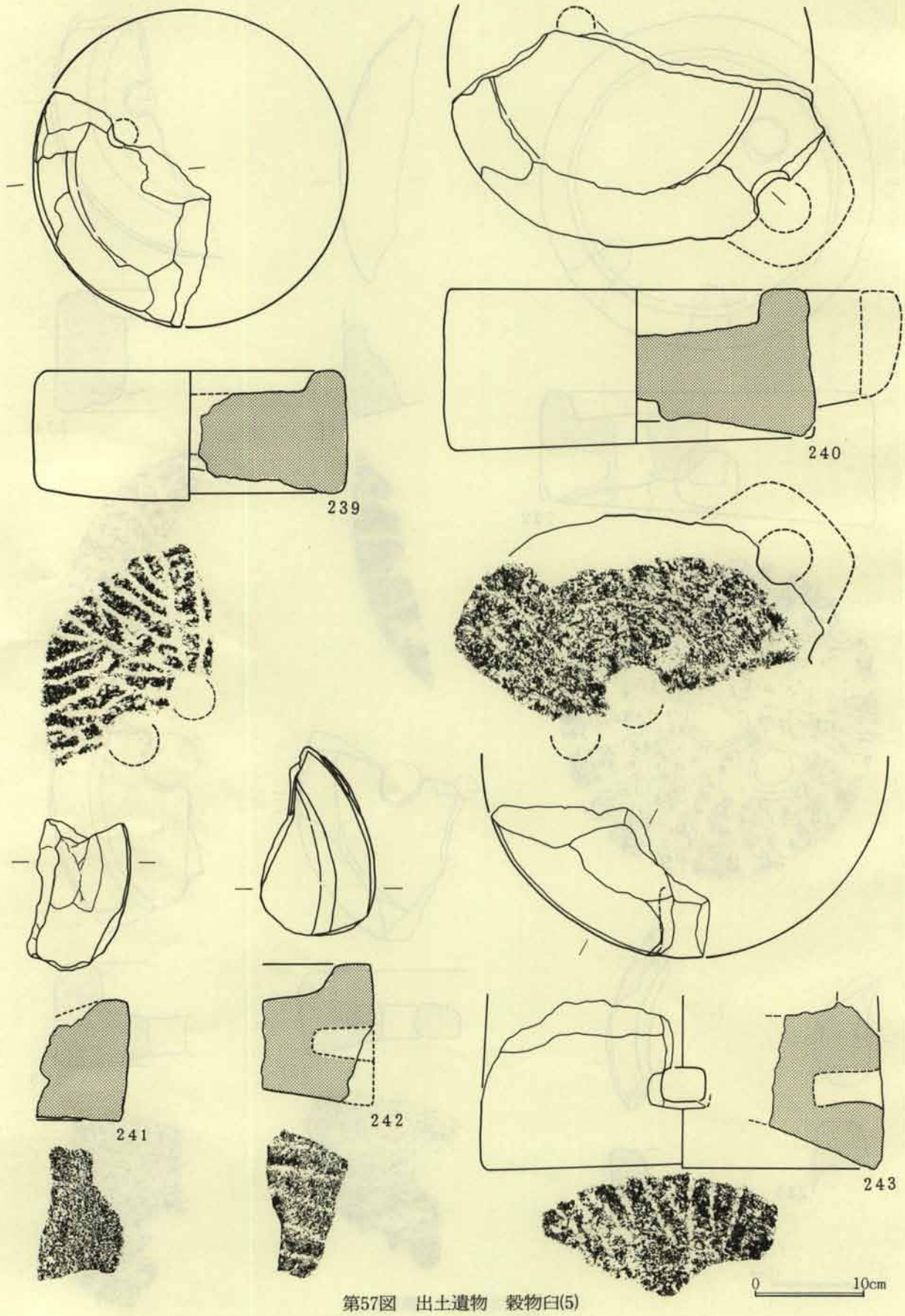
第54図　出土遺物　穀物臼(2)



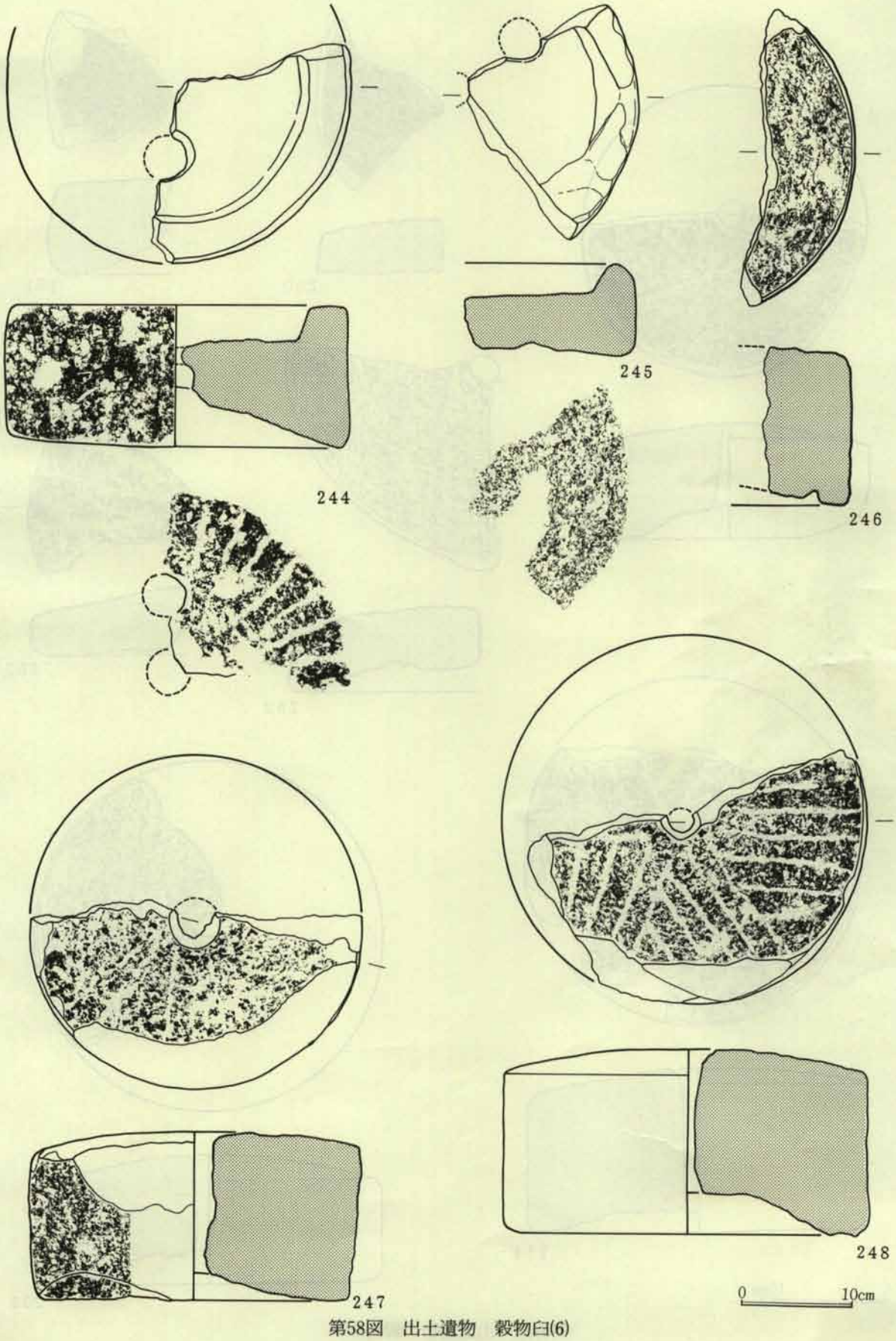
第55図　出土遺物　穀物臼(3)



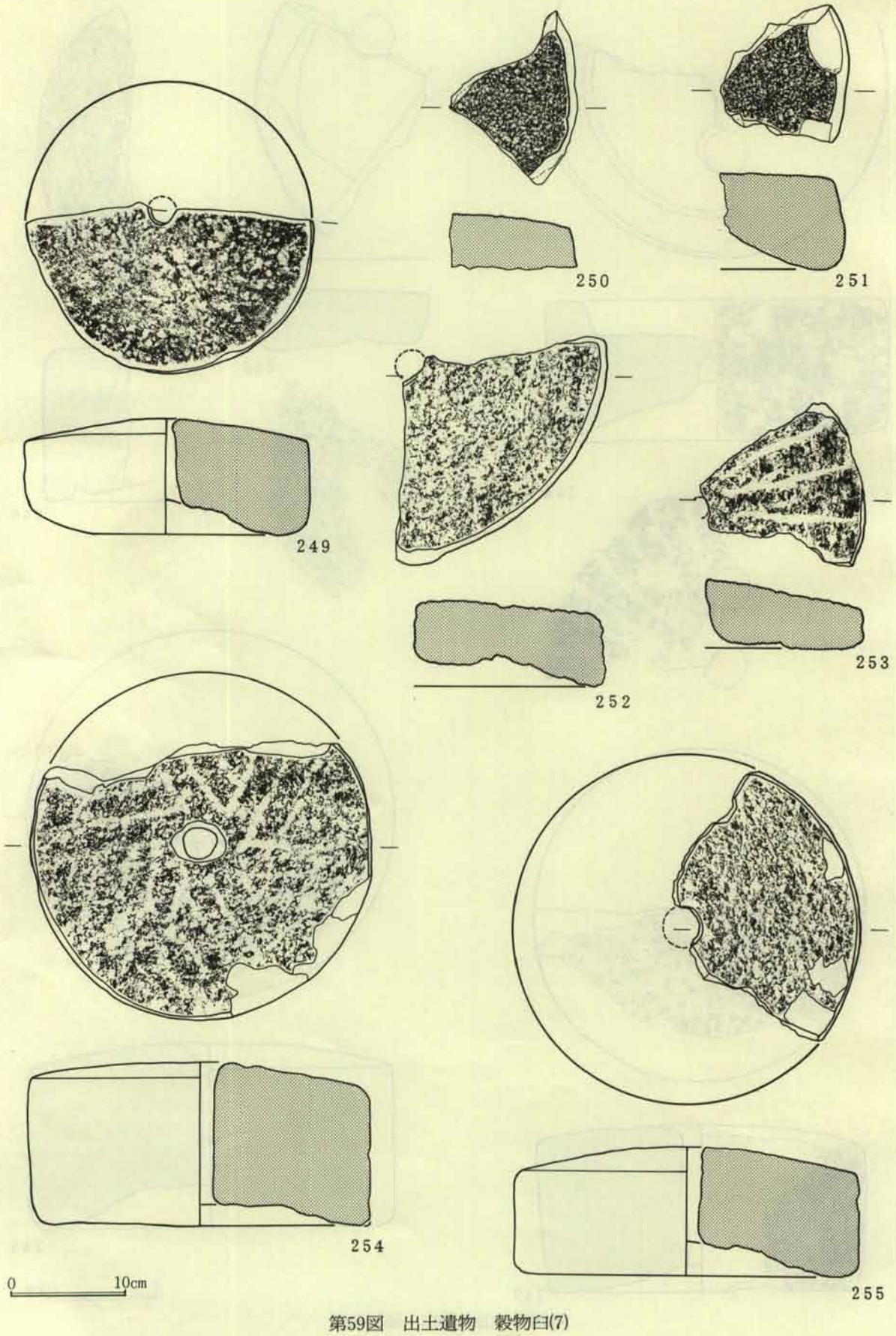
第56図　出土遺物　穀物臼(4)



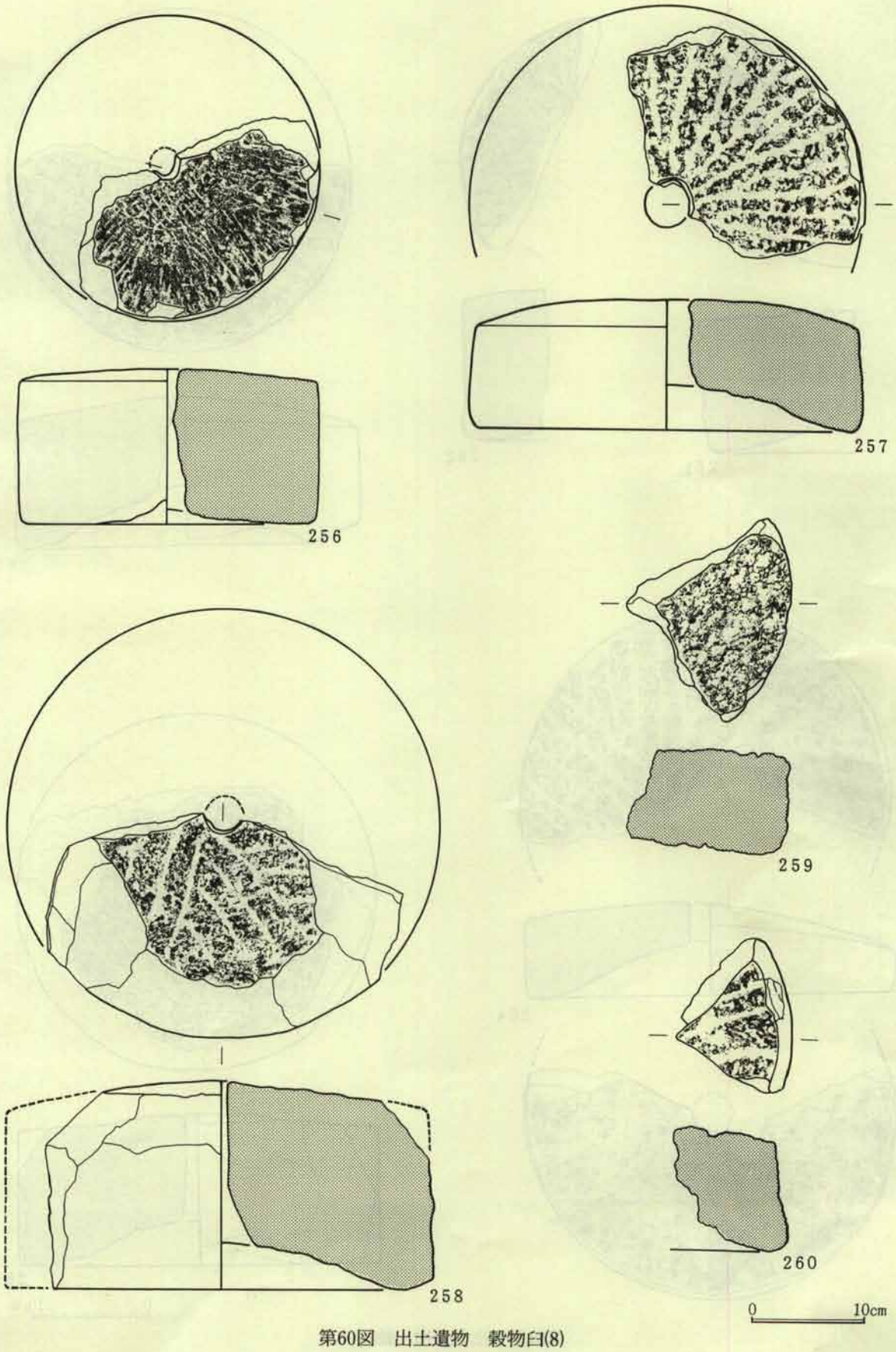
第57図　出土遺物　穀物臼(5)



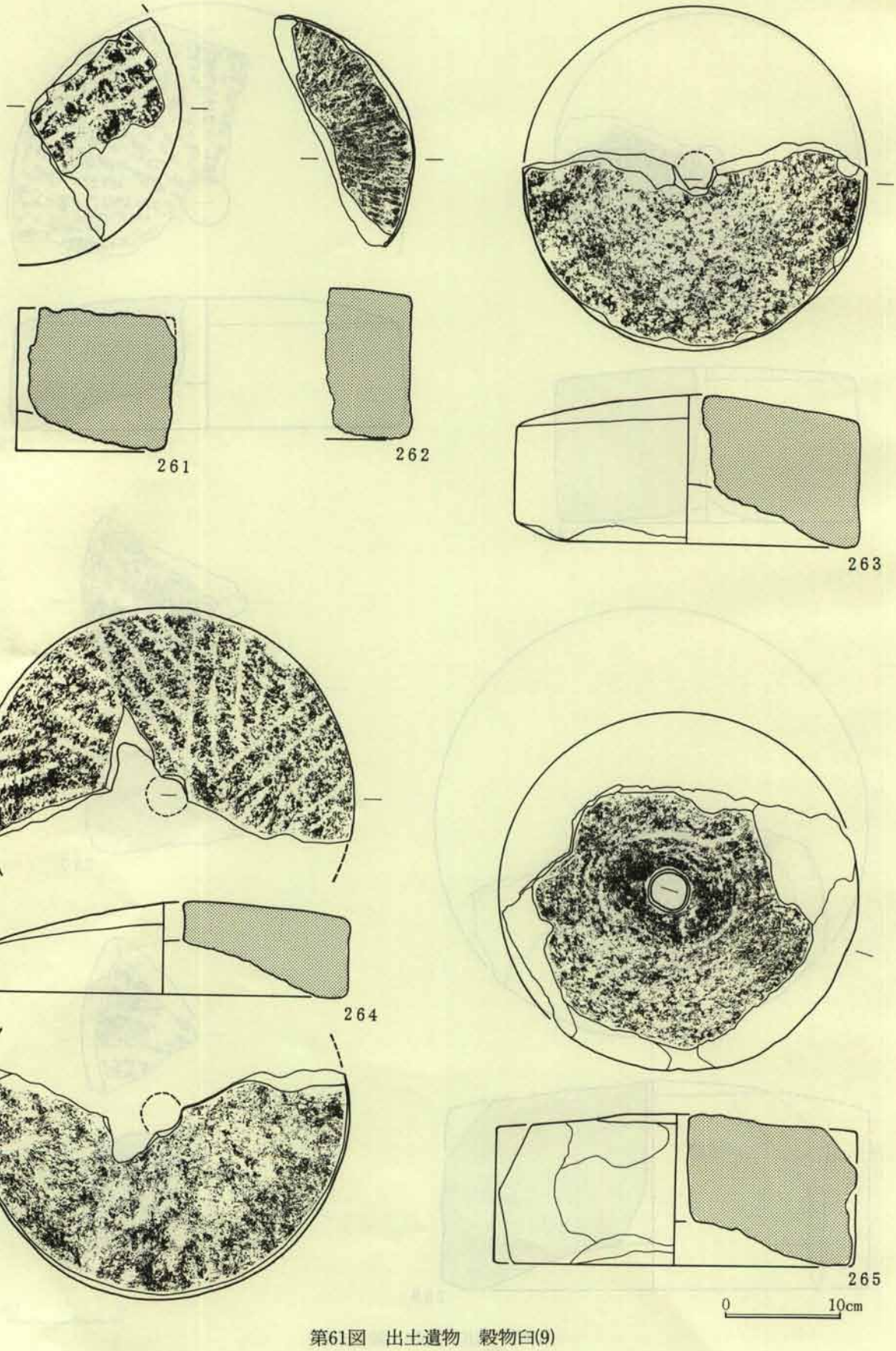
第58図　出土遺物　穀物臼(6)



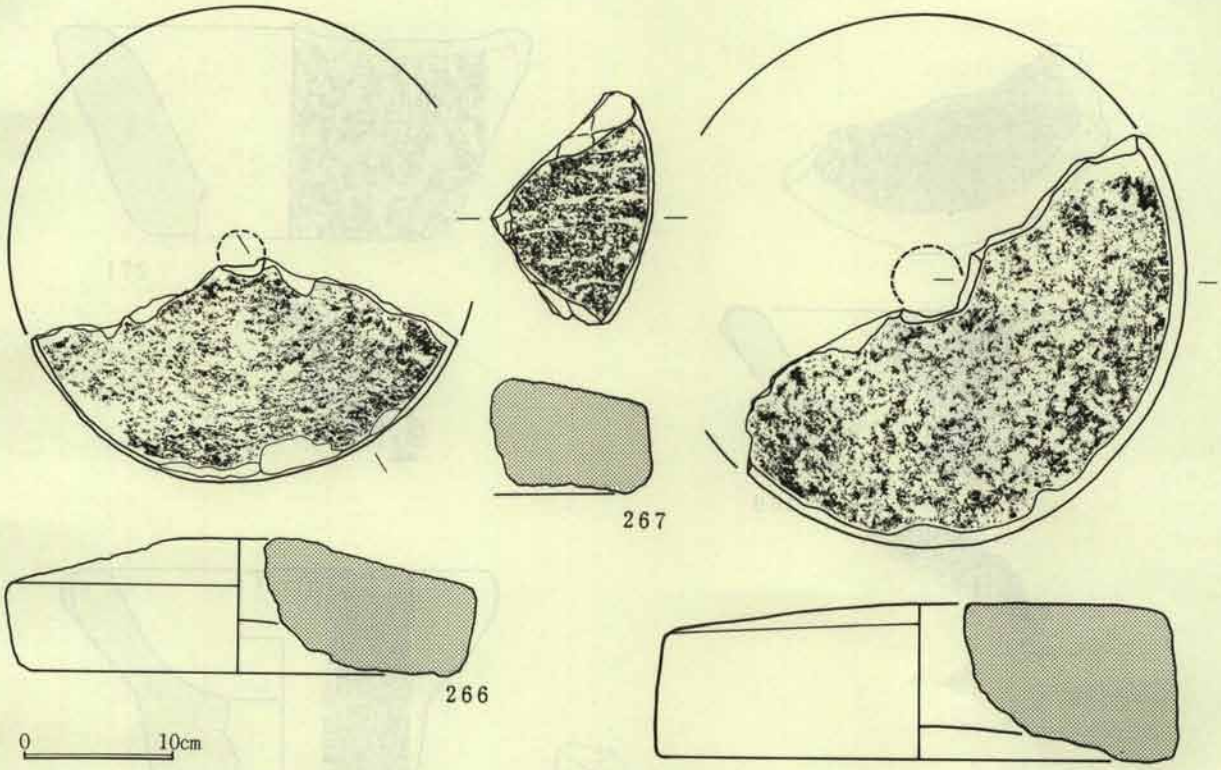
第59図　出土遺物　穀物臼(7)



第60図　出土遺物　穀物臼(8)



第61図　出土遺物　穀物臼(9)



第62図　出土遺物　穀物臼(10)

擦り合わせ面の分画と目は大半が不明であったり不明瞭なものが多い。分画は残存状況から復元可能なものは6分画が3点、8分画が1点、放射状のものが4点、不明瞭なもの5点であり、17点が不明である。目は芯穴から周縁に直線で施されるがやや弧状を呈したり、連続性を欠き途中で食い違うもの、文画内を均一な幅で施されるものも少ない。さらに目立て直しと考えられるものも存在する。

挽き手孔は、側面に孔を穿つ横打込み式が大半である。上臼の張り出しに挽き手孔つくりつけのもの(240)が1点ある。本来この孔は、側面の中央部分に設けられるものであるが、使用による擦り減りが擦り面に達する事例（222、227、232等）がある。これらは機能限界まで使用された状況であり、232では作り替えが行われている。さらに偏平になるまで使用された破片（226、237等）からは、挽き手孔を設ける極限の厚みまで擦り減っている。供給穴は残存するものの大半は、円形か楕円形を呈する。もの配りは、237・245などに残存する。

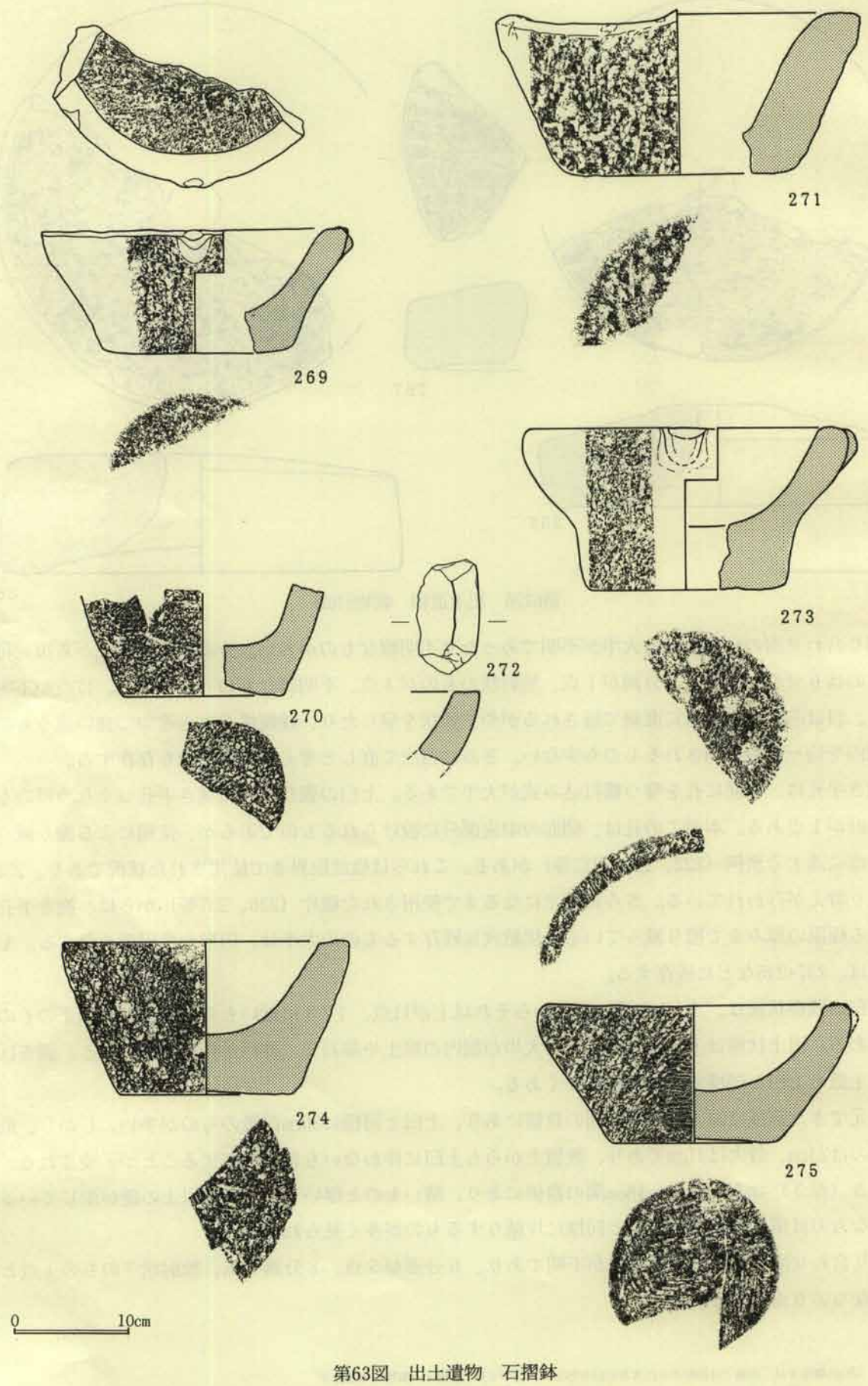
下臼の残存状況は、1/2に近いものからそれ以上が11点、1/3に近いもの3点、それ以下のもの9点である。出土状態は上臼と同様でその大半が堀内の埋土や集石で、井戸からは2点がある。調査区別の出土数も上臼と同様で7・8区に多くある。

復元できた直径は24.2～41.6cm間の数値にあり、上臼と同様に30cm前後のものが多い。しかし、最小のものは24cm、最大は41cmであり、数値上からも上臼に伴わないものが存在することが示唆される。

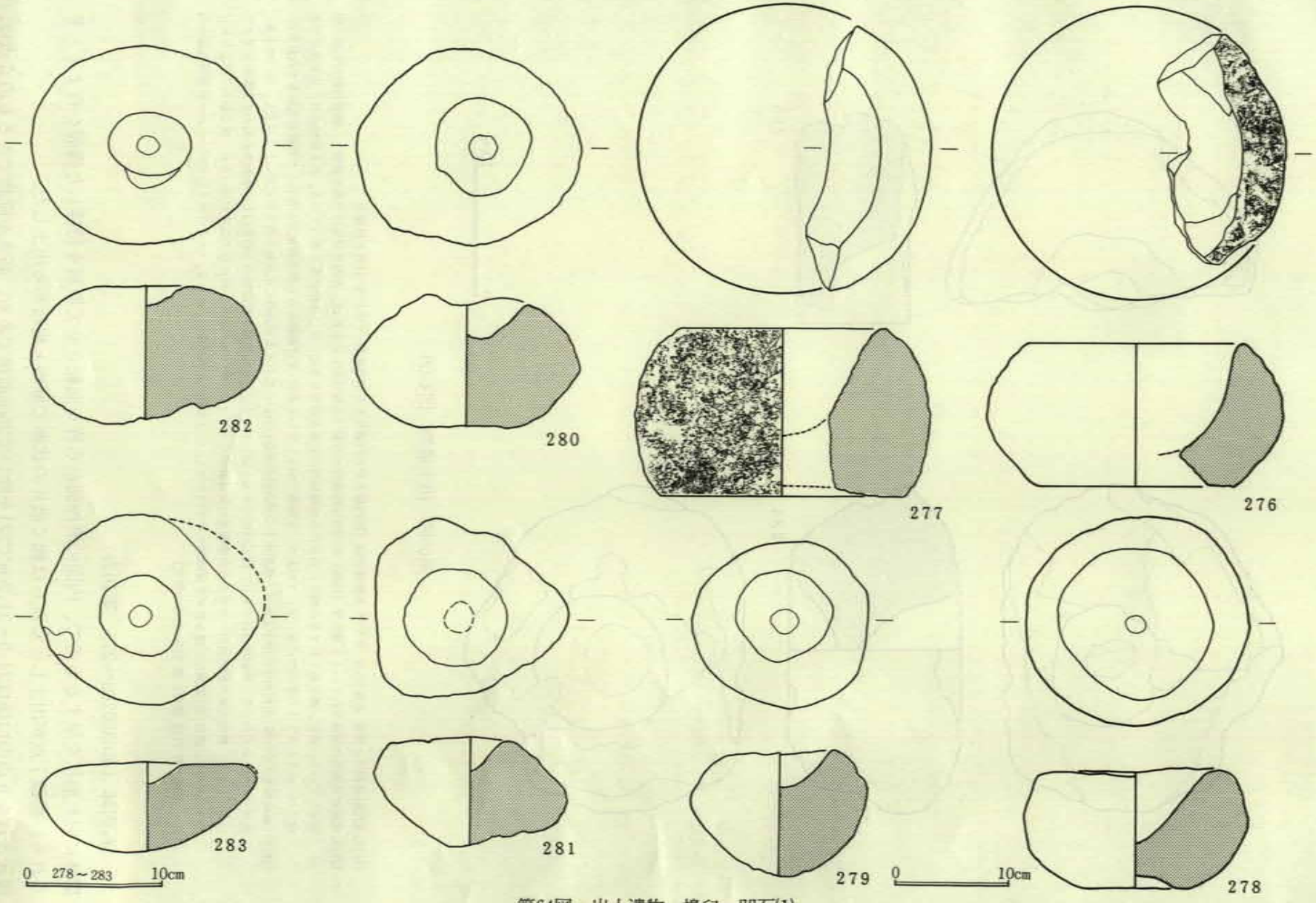
高さ（厚さ）は5cm前後～18cm間の数値にあり、薄いものと厚いものは3倍以上の差が生じている。器薄なものは偏平であり、上臼と同様に片減りするものが多く見られる。

擦り合わせ面の分画と目は半分が不明であり、6分画が5点、8分画1点、放射状？のもの1点と不明瞭なもの6点である。

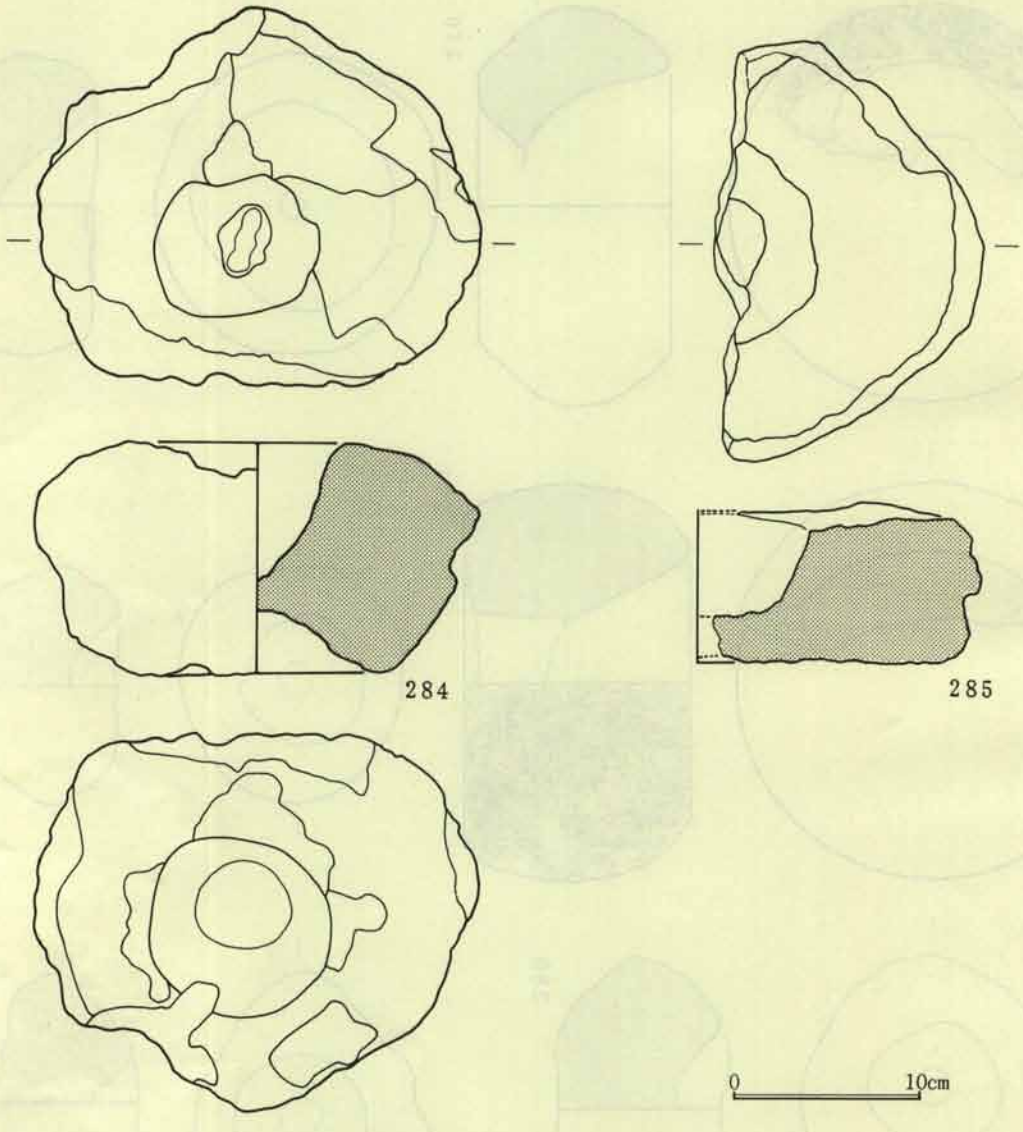
(註13)礪碓とは、狭義では回転式の巨大な石臼を称し、広義では石臼を備えた製粉工場を呼ぶ



第63図　出土遺物　石摺鉢



第64図　出土遺物　搗臼・凹石(1)



第65図　出土遺物　凹石(2)

(註14)文化財発掘出土情報 通巻225号 東大寺 大型建物跡「国内最古の石臼破片も」奈良新聞 平成12年 11月8日報道

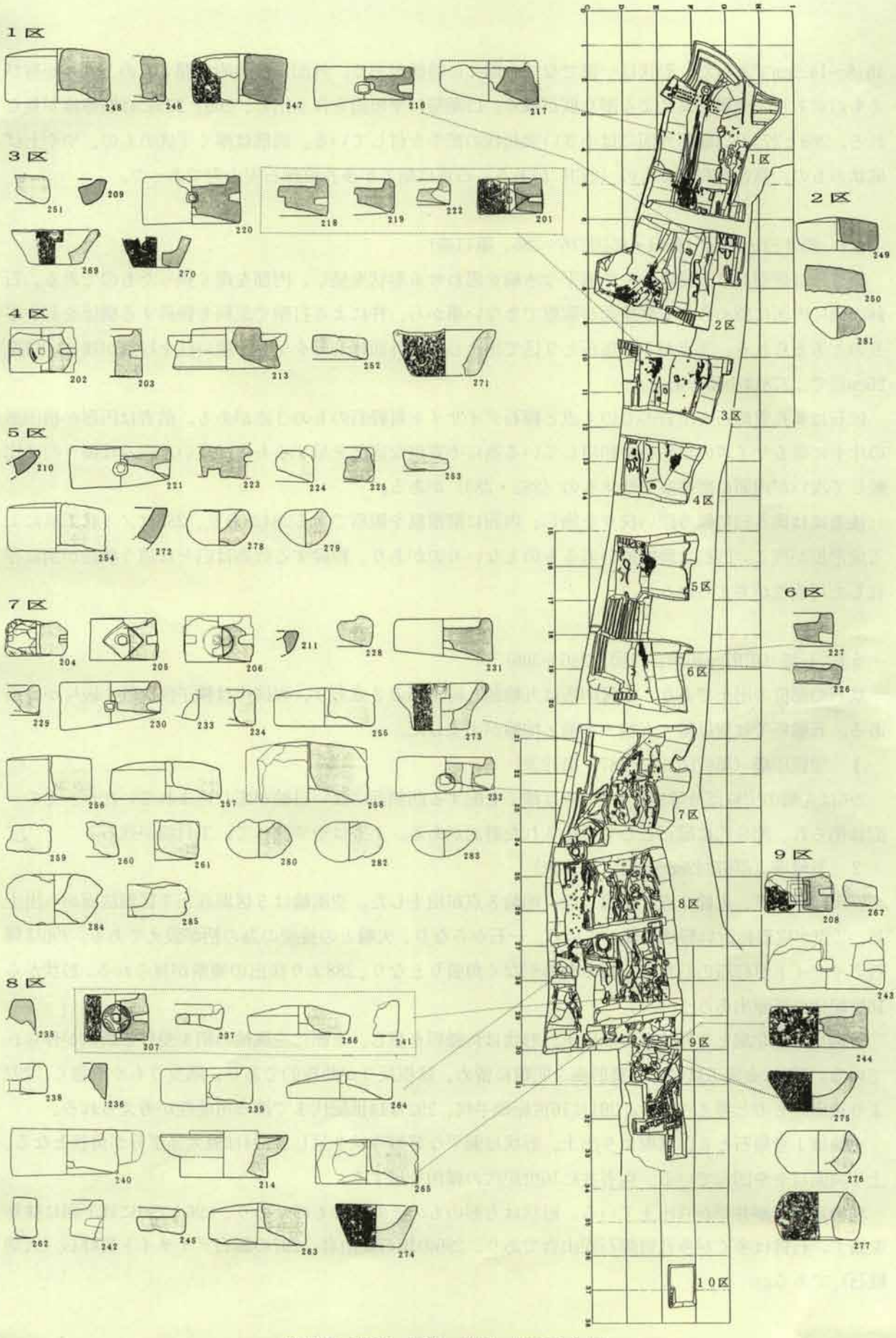
(註15)尾島町長楽寺に所蔵されている永禄八年（1565）の同寺住持義哲の日記「永禄日記」によれば、寺内及び周辺で茶を栽培し、義哲は毎日の様に喫茶をしている。更に、贈答品として金山城主の由良氏や厩橋城代の北条高広や北条助三郎に年始に茶を送っている。当大胡城には、北条高広が永禄五年～没年の天正十六年の間に深い係わりがあり、本調査で出土している茶臼・天目茶碗からも喫茶の風習が存在した可能が充分考えられる。

(註16)「福島県考古学年報」昭和40年に田中正能は、城館出土の刻み目が少ない石臼は黒色火薬製造時に木炭粉を作るのに用いたと発表し、梁川城本丸・庭園での出土の石臼も荒い放射状の目であり、同じ状況であると記している。さらに同県中村館跡出土の茶臼も火薬製造の為の木炭製粉を考えている。しかし、鉄砲火薬の製造法の一つである合薬製法の炭は麻がら・ツツジ・桐・柳がよく、他になすの茎も用いられ、炭を細かくするためにつき臼を用い、硝石・炭・硫黄の三種を混ぜて長時間かけて臼でつく。臼は木製のものが良いとされる。(火薬はどうして作ったか一妙薬擣篩和合の法一 大森　実 月刊 歴史と旅 特集 技術の歴史)

3）　石摺鉢（第63図269～275、第10表）

摺鉢に似た形状を呈するもので、内面の磨擦面から杵を回転させて原料を粉砕した機能を有すると考えられる。総数7点が出土し、これらは総て破片の状態で堀内と集石から出土した。

復元される5点の口径は24.0～31.2cmで271を除いて25cm前後である。高さを確認できるもの5点は、



第66図　石臼・石鉢・搗臼・凹石分布図

10.8～14.3cmであった。形状は一律でなく、個々に特徴がある。外面は直線的に開くものと丸みを帯びるものがあり、金属工具による削り痕が残る。口端部は平坦面を作り出し、269と275には磨擦痕が見られる。269と273の口端部外面には小さい突起状の把手を付している。底部は厚く平底のもの、やや上げ底状のもの、高台を有するもの（273）がある。石質は総てが多孔質輝石安山岩であった。

4） 搗き臼・凹石（第64・65図276～285、第11表）

搗き臼は側面形は五輪塔のやや偏平な水輪を思わせる形状を呈し、内部を深く抉ったものである。石鉢の様に内面に認められる磨擦面が観察できない事から、杵による打撃で原料を粉砕する機能を有するものと考えられる。3点が3号集石と9区で出土した。外面は丸みを呈し、粗い仕上げ痕が残る。口径26cm程で、278は小型である。

凹石は多孔質輝石安山岩のもの4点と輝石デイサイト質軽石のもの3点がある。前者は円形か楕円形の片手に乗るサイズの自然石を利用している為に不安定な底部を呈するものが多い。凹みは搗き臼に比較して浅いが内面に磨擦痕を残すもの（282・283）がある。

後者には搗き臼に似る深い抉りを施し、内面に磨擦痕を観察できる284があり、285はノミ状工具による成形痕が残る。凹石は磨擦痕のあるものとないものがあり、粉砕する行為は臼とは違う機能が別に存在した可能性が考えられる。

5） 石塔（第67～70図、71図、286～306）

墓石の部位の出土であり、宝篋印塔は九輪部と塔身部の2点あり、板碑片は種子部を残す破片が2点ある。五輪塔では空風輪・火輪・水輪・地輪が出土した。

1 宝篋印塔（第67図286・287、第12表）

286は先端の宝珠部分等を欠く。287は種子を配する四側面に浅い日輪が彫り込まれていたが、その一面は削られ、部分的に砥石として使用された磨面がある。上下はやや抉れて、工具痕が残る。

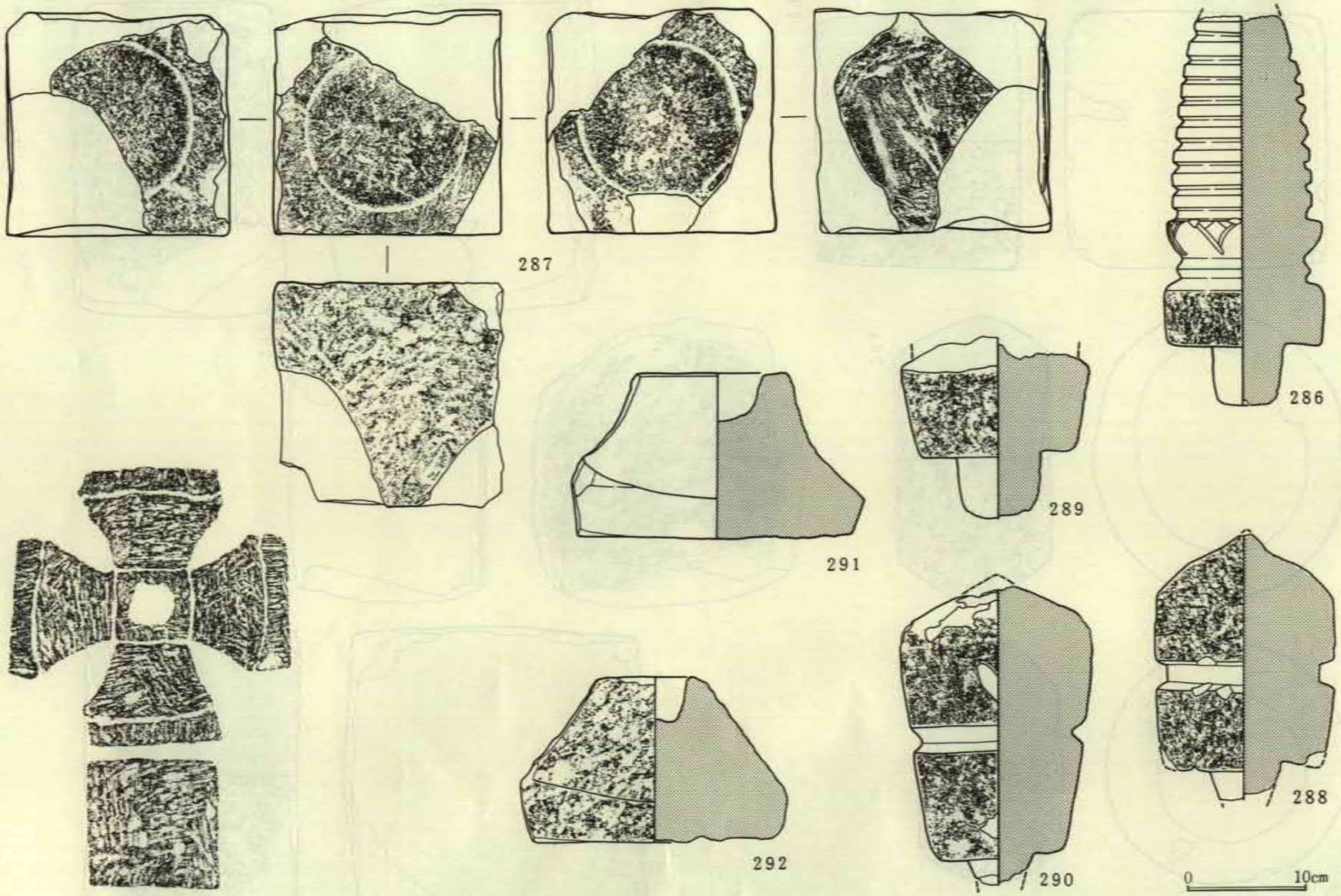
2 五輪塔（第67図288～302、第12表）

空風輪が3点、火輪2点、水輪2点、地輪8点が出土した。空風輪は5区堀底と7区堀法面から出土し、2点が完形に近い形状を保っている。一石からなり、火輪との接続の為の柄が設えてある。290は輝石デイサイト質軽石の石質で空輪の丸みがなく角張りとなり、288より後出の要素が見られる。形状から16世紀代の所産出あろう。

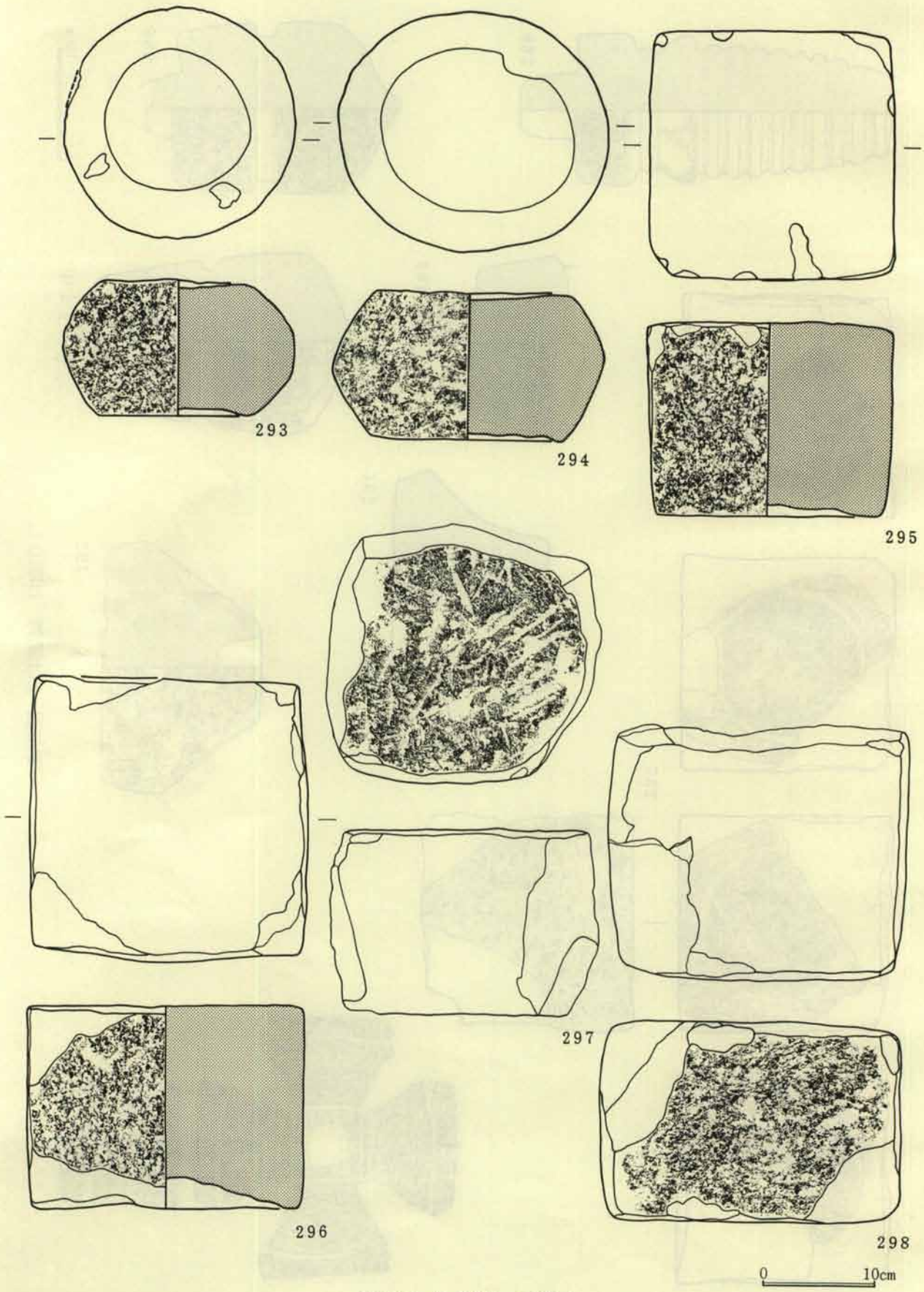
火輪は8区北堀と2号暗渠より出土。形状は角錘形を呈し、上面に空風輪の柄を受ける臍穴が作られている。291は金属工具による整形痕を明瞭に留め、屋根反りが曲線的であり、隅反りもやや強く、292より後出のものと考えられる。291は16世紀後半代、292は14世紀代まで溯る可能性が考えられる。

水輪は1号集石と8区南堀より出土。形状は偏平な算盤珠状を呈し、294は最大径部分が角状となる。上下両面はやや凹んでいる。両者共に16世紀代の様相を呈する。

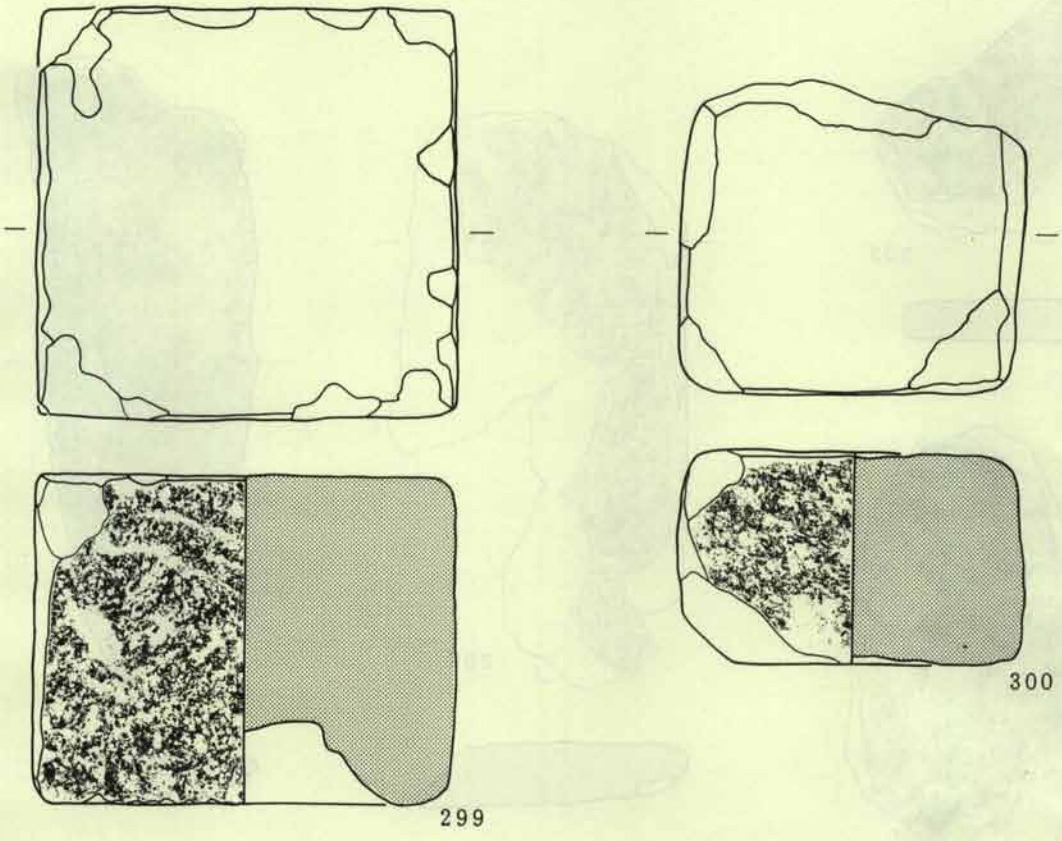
地輪は2点が井戸から出土している。形状は方形のものと偏平なものがあり、296と299には下面に抉りを施す。石質は多くが多孔質輝石安山岩であり、296の輝石安山岩、297の輝石デイサイト質軽石（大胡軽石）である。

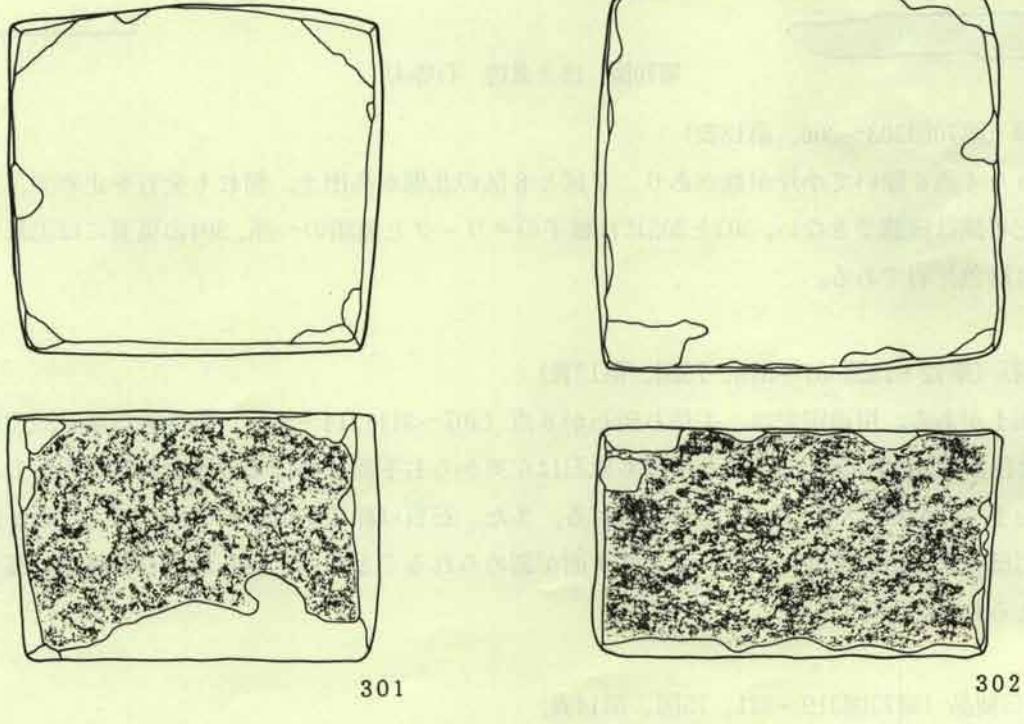


第67図　出土遺物　石塔(1)

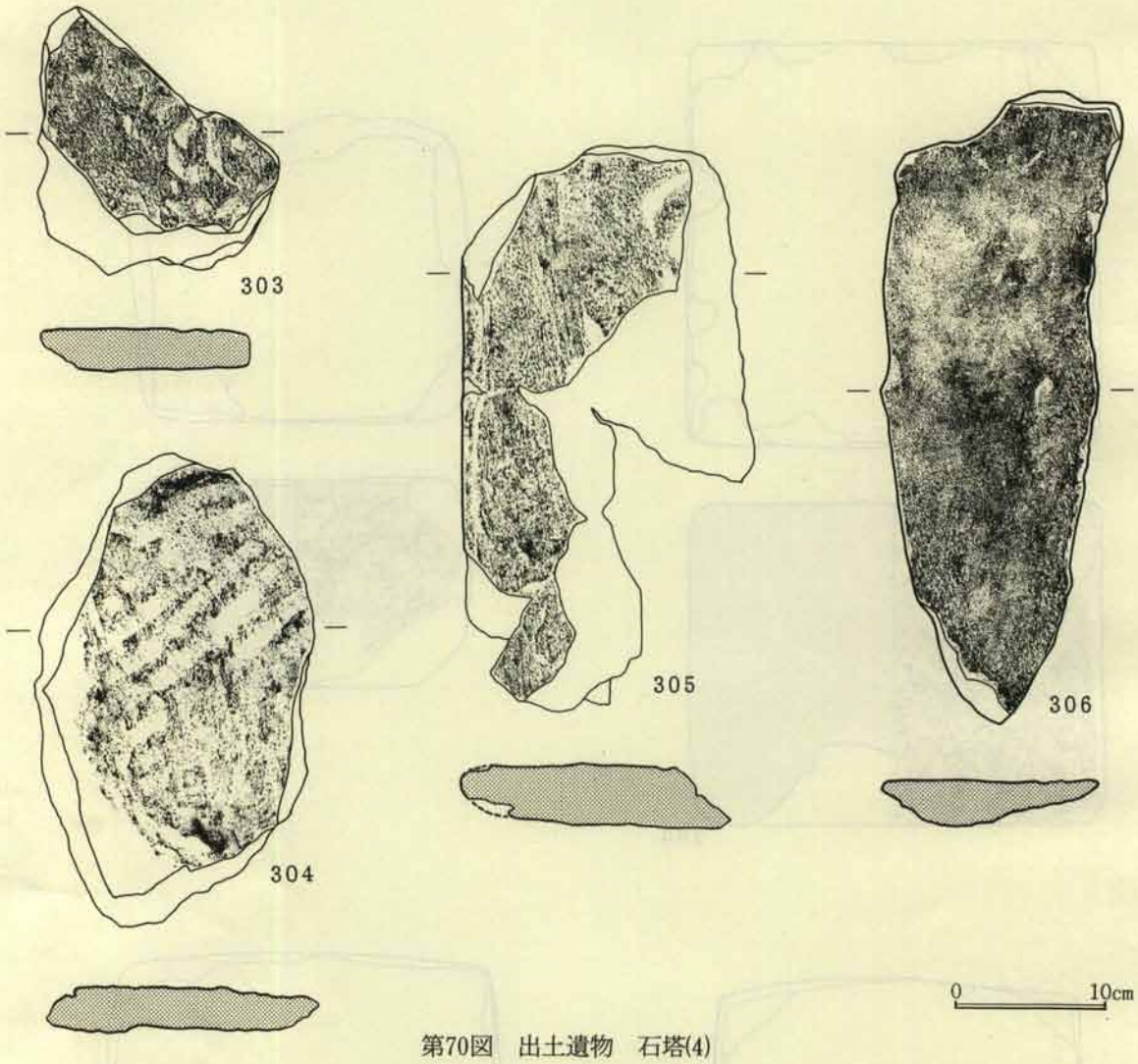


第68図　出土遺物　石塔(2)





第69図　出土遺物　石塔(3)



第70図　出土遺物　石塔(4)

3　板碑（第70図303～306、第12表）

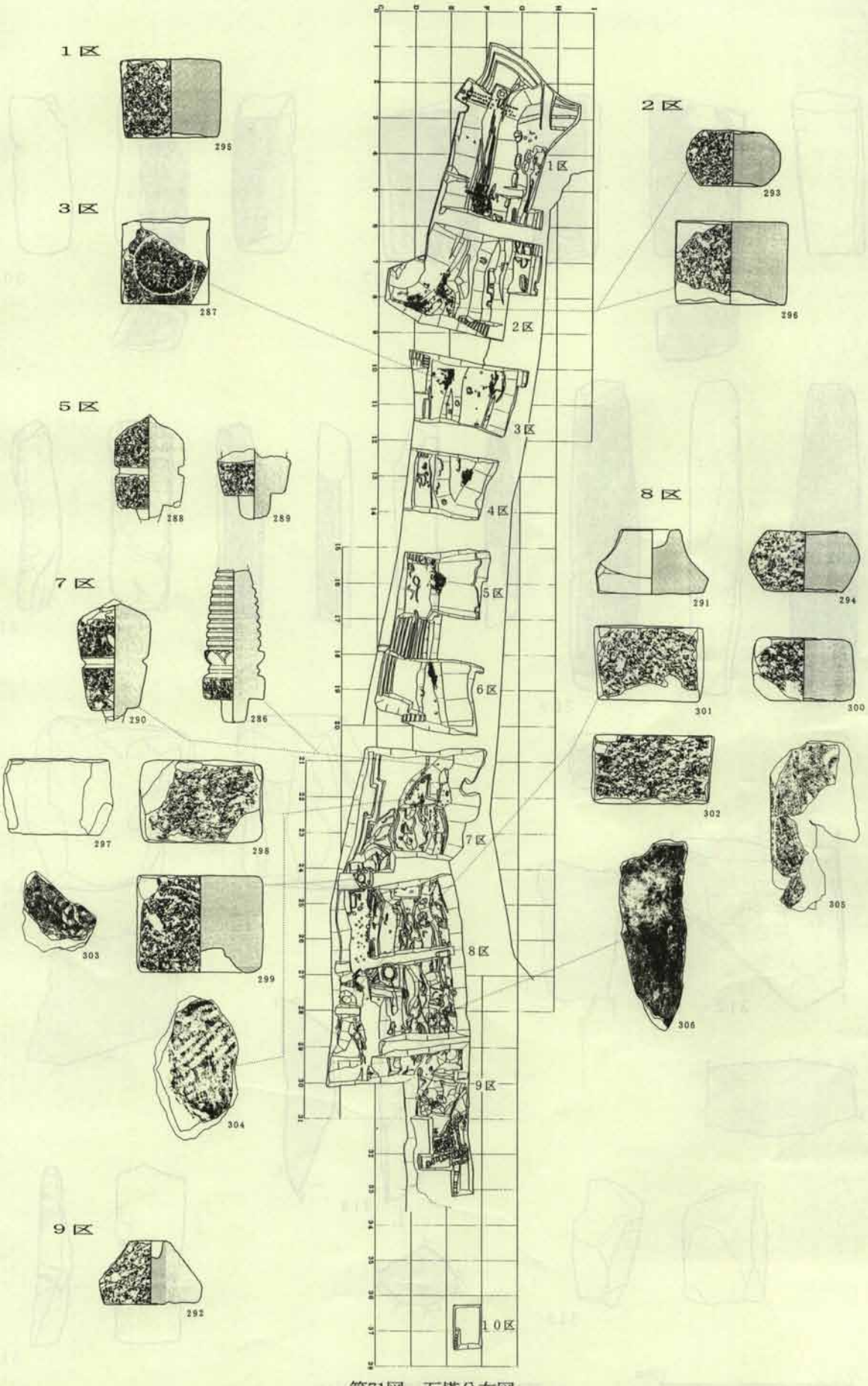
図示できた4点を除いて小片が数点あり、7区と8区の北堀から出土。何れも全容を止めず、造立年代を知る紀年銘は確認できない。303と305には種子のキリークと蓮座の一部、304の裏面には工具痕が残る。石質は緑色片岩である。

6）　砥石（第72・73図307～318、75図、第13表）

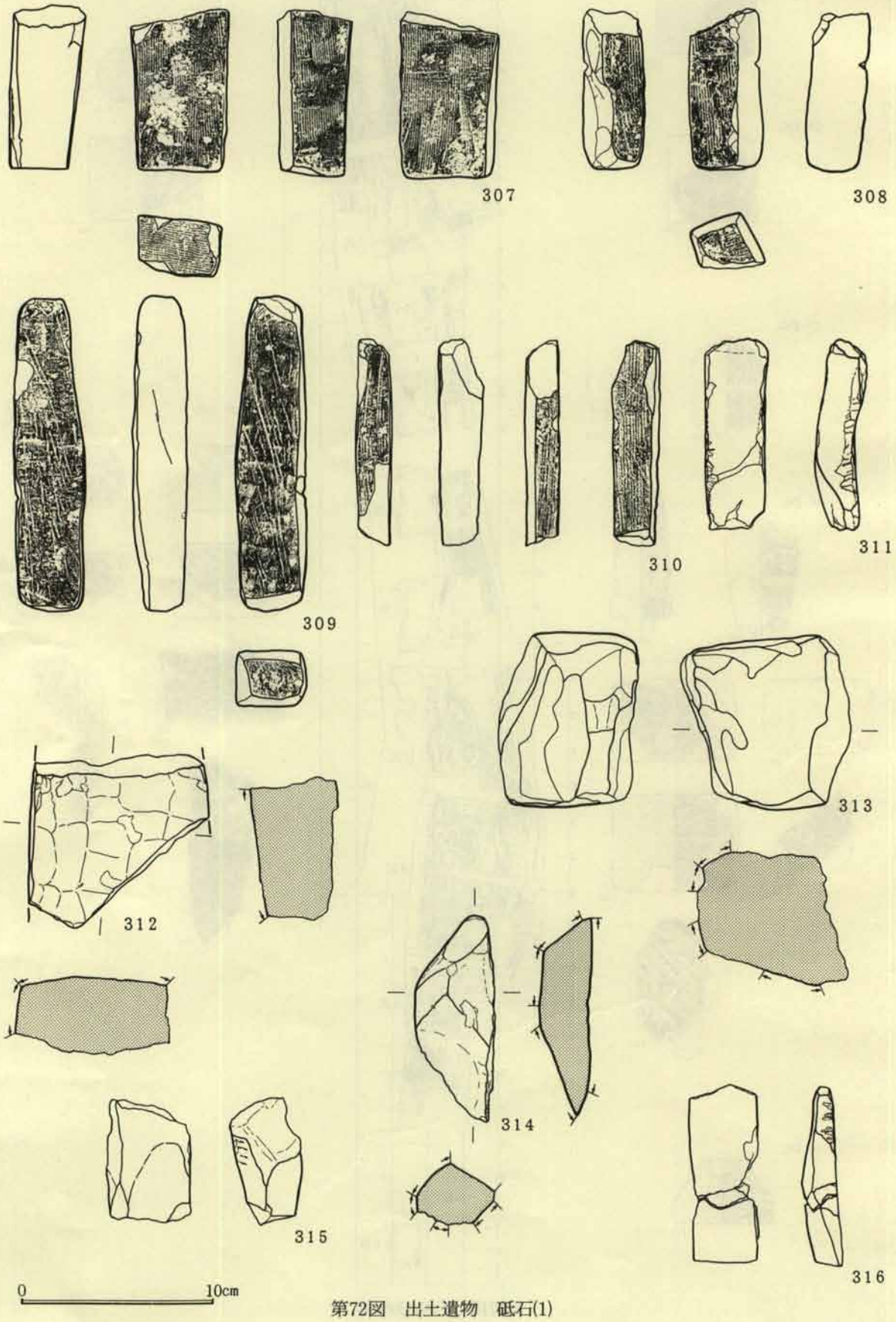
11点の出土がある。用途別では、手持ち砥石が8点（307～311・314～316）、置き砥石は312と317の2点、転用砥石と考えられる313がある。手持ち砥石は左奥から右手前にかけての研磨減りが観察できることから、右手での使用（大江 1981）と考えられる。また、石質は総てが流紋岩であり仕上げ砥と推察される。転用砥石は安山岩で「ハツリ」痕を残す面が認められることから、何らかの石製品の一部を転用したと考えられる。

7）　軽石製品（第73図319～321、75図、第14表）

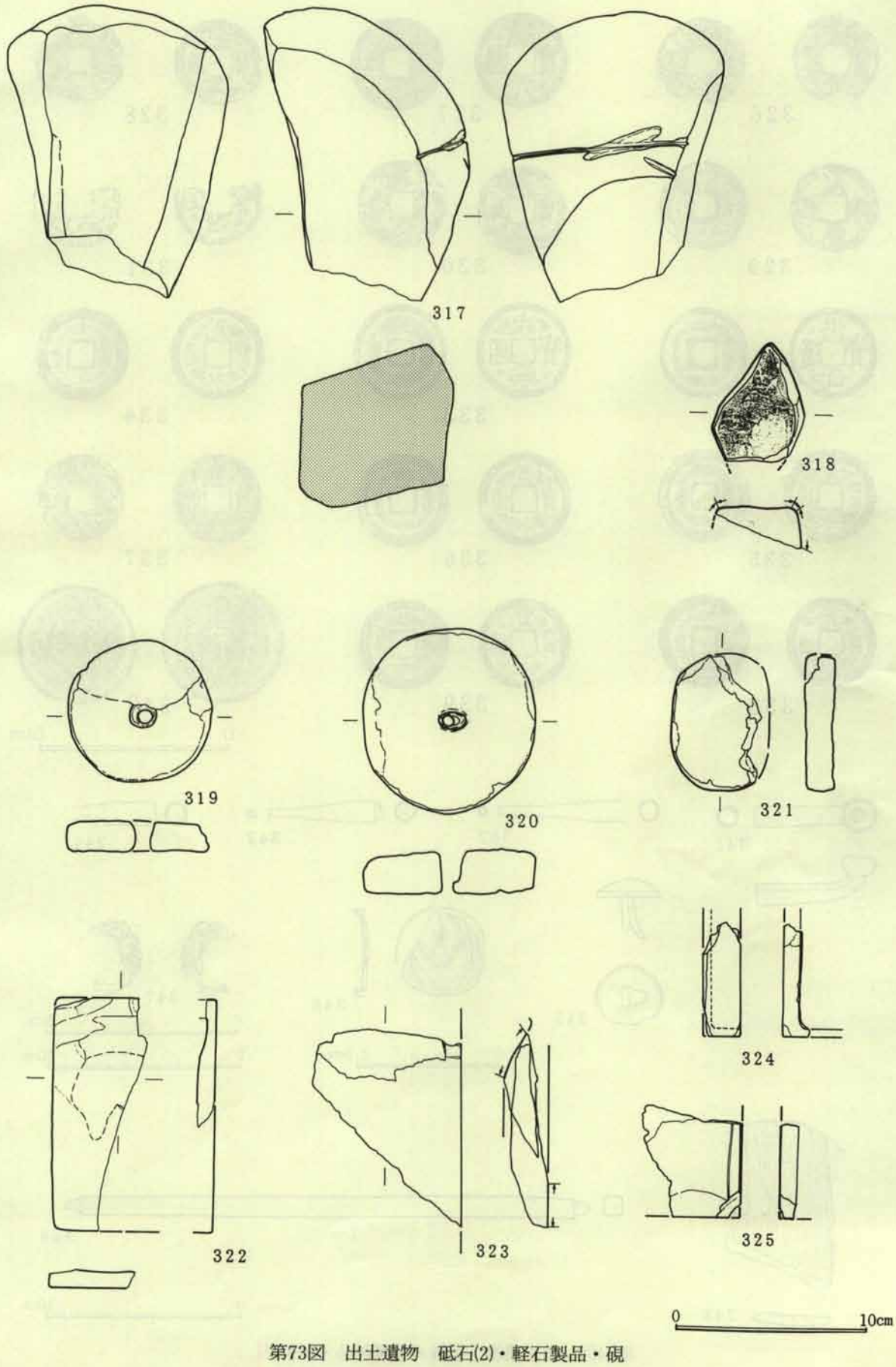
軽石製品としては墓石等に使用されたものを除き、偏平な円盤形の中心部分に孔を穿つもので紡錘車と考えられる2点と偏平な隅丸方形状のものがある。


1区
295
3区
287
5区
288
289
7区
290
286
297
298
303
299
304
9区
292
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区
2区
293
296
8区
291
294
301
300
302
305
306

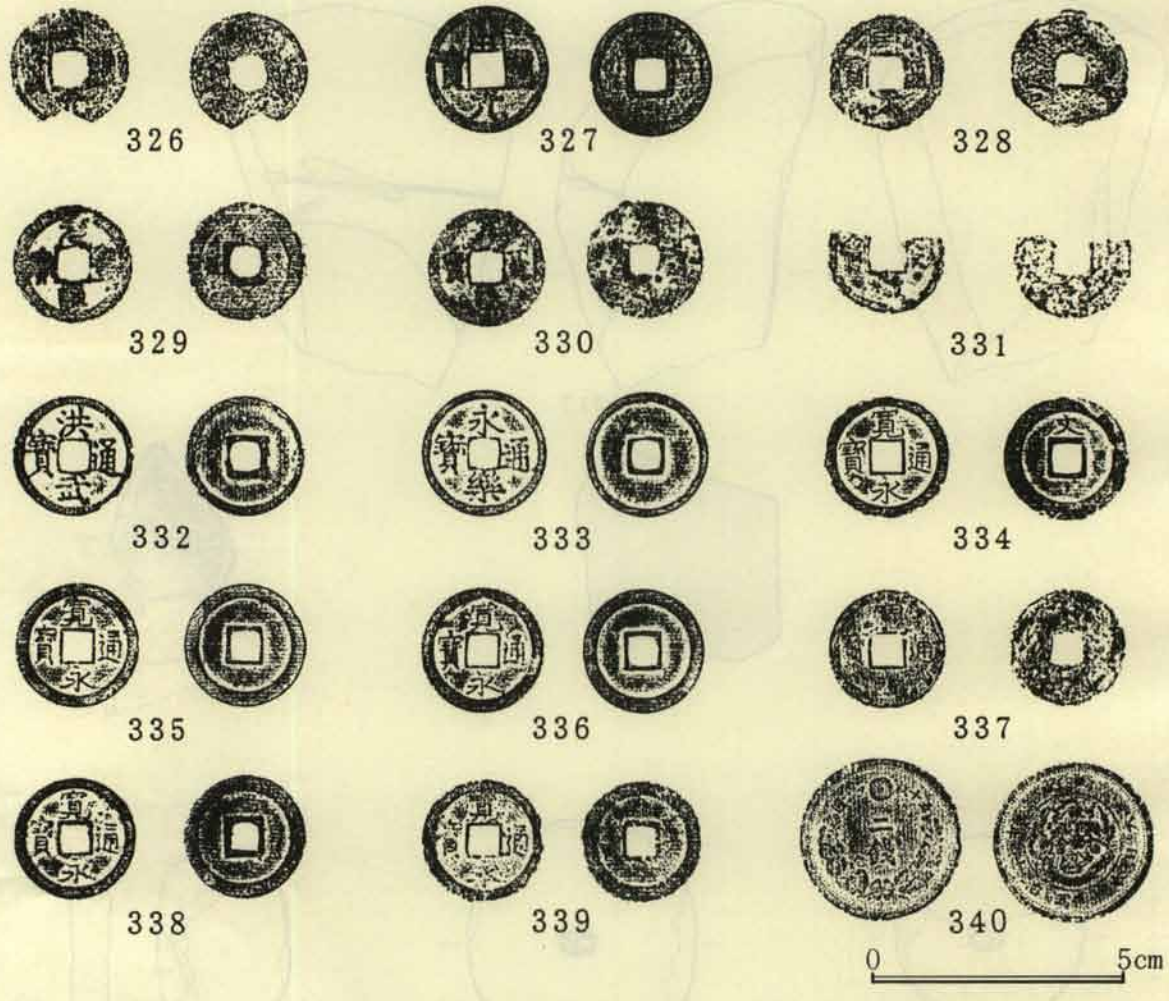
第71図　石塔分布図



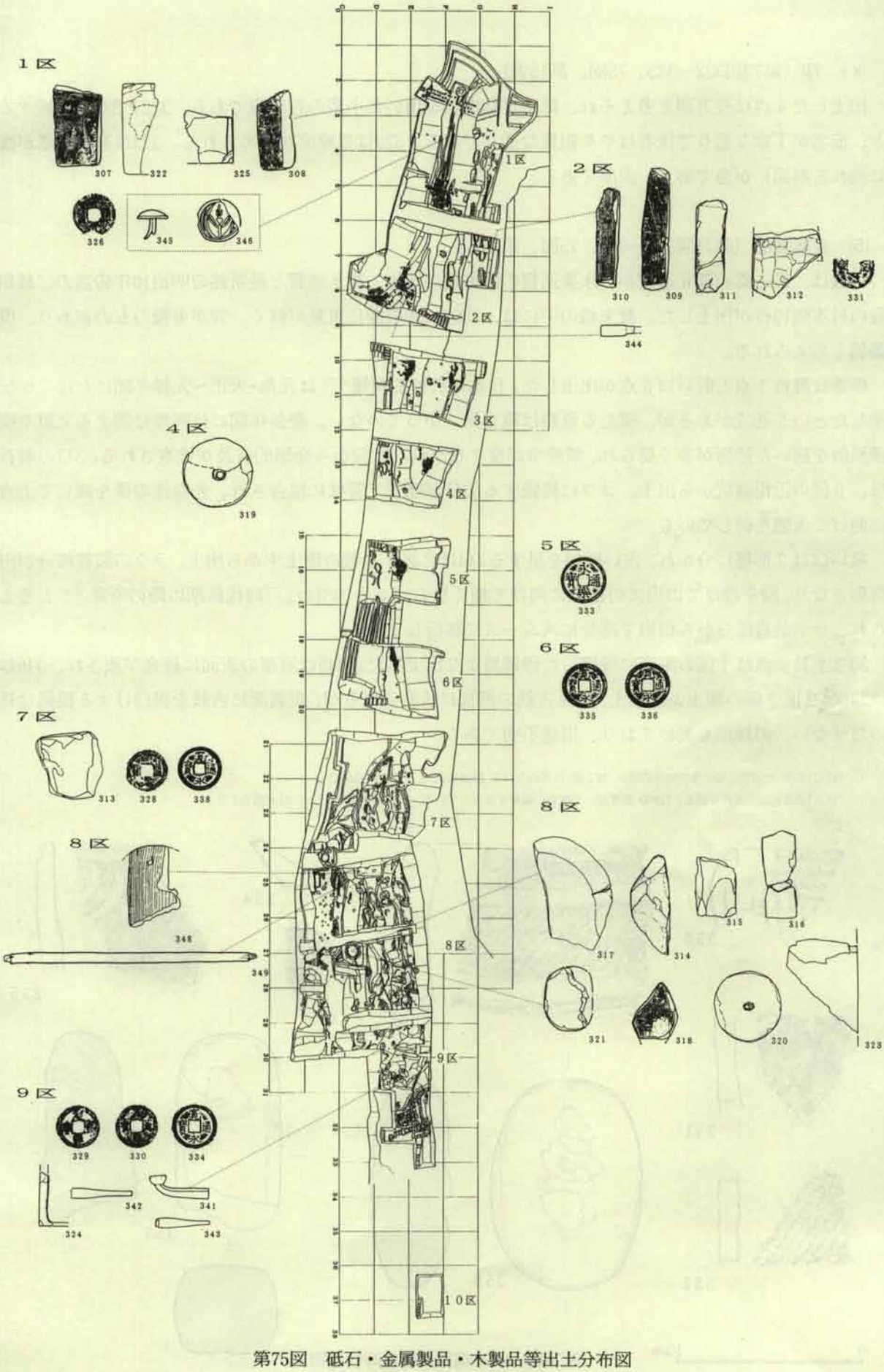
第72図　出土遺物　砥石(1)



第73図　出土遺物　砥石(2)・軽石製品・硯



第74図　出土遺物　古銭・金属製品・木製品



第75図　砥石・金属製品・木製品等出土分布図

8） 硯（第73図322～325、75図、第15表）

出土した4点は長方硯と考えられ、総てが粘板岩を用いた小型の石製硯である。322と325を比較すると、前者が丁寧な造りで後者はやや粗雑な造りである。322は墨擦痕が認められる。323は落潮（墨が海に流れる斜面）が急であり、肉厚である。

(5) 金属製品（第74図326～347、75図、第16表）

古銭は、最古銘の開元通寶から永楽通寶の渡来銭が8枚、寛永通寶と最新銘の明治10年鋳造の二銭銅貨の日本銭15枚が出土した。渡来銭の中には、326や330の様に重量が軽く、背が夷慢のものがあり、摸鋳銭と考えられる。

煙管は雁首1点と吸い口3点が出土した。日本に於ける喫煙[註17]は元亀・天正～元禄年間にたばこが伝来したという通説があるが、確たる資料は現在見つかっていない。慶長年間には喫煙に関する文献や喫煙風俗を描いた絵画が多く見られ、禁煙令が度々布かれた状況から全国的波及が推察される。341の雁首は、9区の近世墓坑から出土。ラウに接続する部分が蠟着で管状に接合され、先端部の径を減じて上方に曲げて火皿を付している。

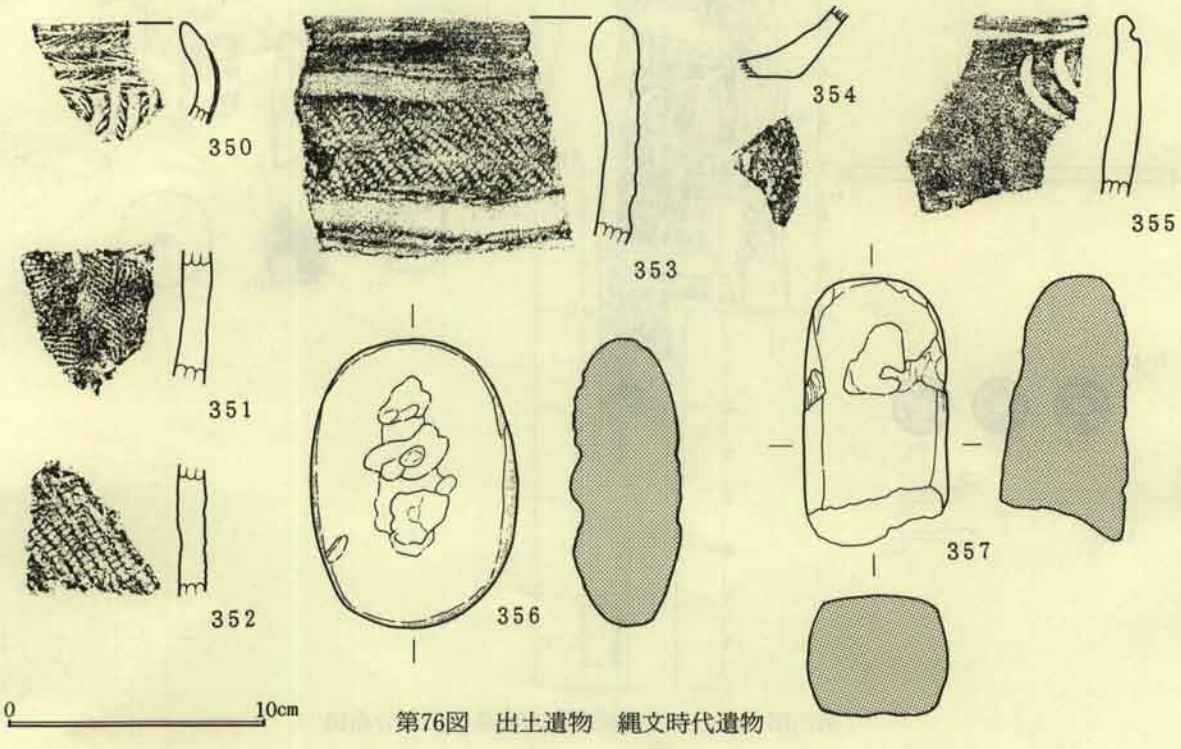
吸い口は2形態に分かれ、古い様相を呈する344は2区1号堀の埋土中から出土。ラウの装着部分が円筒形となり、段を設けて口当ての部分に向けて細くなる。342と343は江戸時代後期以降の所産[註18]と考えられ、ラウ装着部分から口当て部分にスムーズに移行している。

飾り金具2点は1区の堀底に堆積した砂礫層より出土した。345は笠部の表面に鍍金が施され、346は

346は2区2堀の埋土より出土。一見古銭の郭抜け状態に似るが、表裏面に古銭を裏付けする根拠は見いだせない。周縁部も欠けており、用途不明である。

(註17)参照 たばこと塩の博物館常設展示 第2部 日本のたばこ 財団法人 たばこ産業弘済会

(註18)小泉弘は「江戸を掘る」(1990 柏書房) で煙管の編年を提示している。氏の編年の（5）に341が該当する。



第76図 出土遺物 縄文時代遺物

(6) 木製品（第74図348・349、75図、第17表）

8区の方形遺構から出土したもので、348は曲物に係わるものと考えられるが、幅5㎜の銅版が表裏面を貫通して巻き込んである。349は両端に臍が存在することから梯子状？に脇材が装着されるものと考えられるが、用途不明である。

(7) その他（第76図350～357、第18表）

縄文時代前期～後期の土器片と石器が少量出土した。その大半は河川の堆積土に混入して運搬されたものと考えられ、その多くが酸化鉄によるサビが付着したり、摩耗している。

馬骨に係わる頬歯と肢骨等が6区の3号集石下と8・9区に跨がって出土した。3号集石下と9区旧1号堀内からは頬歯、8区では肢骨等が散乱し、9区からは左下顎骨と頬歯・切歯等の頭部が出土した。9区の様子は、頭部を上下に挟み込む様に内耳土器が圧し潰れて出土していた。この内耳土器は、底部を欠くがほぼ全周する個体となり、頭部が内耳土器に入れられていたことが想定される。

出土遺物観察表

第1表　カワラケ

番号	出土区・遺構	残　存	口　径	器　高	底　径	胎　土	焼成	色　調	技法の特徴	その　他
1	1区	1/4	(11.3)	2.6	(7.1)	粗砂粒	良好	明褐色	左回転糸切り	
2	1区　堀底	ほぼ完形	8.3	2.6	4.7	〃	〃	褐色	右　〃	灯明皿
3	1区	口縁部1/3欠	(13.5)	3.2	8.0	微砂粒	〃	〃	左　〃	内底ロクロ目
4	1区	約半分	(8.0)	2.0	(5.0)	〃	〃	淡明褐色	〃	
5	1区			(3.0)	5.9	〃	〃	赤褐色～褐色	右　〃	
6	1区	ほぼ完形	7.3	2.0	5.1	〃	〃	淡褐色	右　〃	底部にスノコ状圧痕
7	1区	約半分	(10.0)	2.4	(5.3)	〃	〃	褐色～黒褐色	左　〃	内底ロクロ目
8	1区　東側堀底集石	1/3	(11.1)	2.4	(7.4)	〃	〃	淡褐色	左　〃	灯明皿　内底渦巻状ロクロ目
9	2区	底部片			5.4	〃	〃	褐色～黒褐色	左　〃	灯明皿　内底渦巻状ロクロ目
10	2区　2堀	約半分	(10.9)	2.0	5.7	〃	〃	赤褐色		
11	2区	約半分	(9.2)	1.9	(6.2)	〃	〃	淡褐色	〃	灯明皿
12	3区	1/4	(10.8)	2.8	6.2	粗砂粒	〃	淡灰褐色	〃	
13	6区　堀底	底部片		(1.4)	6.0	微砂粒	〃	褐色～暗褐色	左　〃	
14	7区	1/2	12.0	2.9	7.4	〃	〃	淡褐色	左　〃	
15	7区　石積列北側	1/3	(11.9)	2.9	(7.0)	粗砂粒	〃	暗褐色	右　〃	
16	7区	1/4	(10.0)	2.0	(4.6)	微砂粒	〃	褐色	左　〃	
17	7区	底部片			6.7	粗砂粒	〃	淡褐色	左　〃	底部にスノコ状圧痕
18	7区	約半分	(8.2)	2.4	5.7	微砂粒	〃	淡赤褐色	左　〃	二度の糸切り
19	7区	底部片			(7.4)	〃	〃	淡褐色	左　〃	胎土内に雲母粒
20	7区	底部片		(2.3)	4.2	〃	〃	〃	左　〃	底部にスノコ状圧痕、内底に指撫。
21	8区	1/4	(11.9)	3.1	(6.5)	粗砂粒	〃	褐色～暗褐色	左　〃	
22	8区　3号井戸南側	2/3	(11.1)	3.4	4.8	〃	〃	橙色	左　〃	底部にスノコ状圧痕
23	8区　旧1号堀	2/3	(7.8)	2.7	4.2	〃	〃	淡明褐色	左　〃	底部にスノコ状圧痕
24	8区　3号井戸	約半分	(9.4)	2.2	(7.1)	粗砂粒	〃	赤褐色	〃	
25	8区　旧1号堀	ほぼ完形	9.0	3.6	5.7	〃	〃	〃	左　〃	灯明皿
26	8区　3号井戸	〃	7.8	2.0	5.8	〃	〃	〃	左　〃	
27	8区　新1号堀	1/3	(7.0)	2.0	4.2	〃	〃	暗褐色	左　〃	灯明皿
28	8区　3号井戸	約半分	(11.8)	4.1	5.0	微砂粒	〃	乳白色	左　〃	内底は指撫
29	8区　新1号堀	口縁部1/5	(8.8)	2.6	5.3	〃	〃	赤褐色～褐色	左　〃	灯明皿
30	8区　3号井戸	約半分	(11.6)	3.2	5.1	〃	〃	〃	左　〃	
31	8区　4号井戸	ほぼ完形	9.3	2.3	6.0	〃	〃	明褐色	左　〃	墨書土器　内面に指撫
32	8区　旧1号堀	約半分	7.1	1.7	3.7	〃	〃	褐色	〃	
33	8区　旧1号堀	1/3	(10.8)	2.5	6.6	粗砂粒	〃	褐色	左　〃	内底渦巻状ロクロ目
34	8区　新1号堀	底部片			5.9	微砂粒	〃	褐色	左　〃	
35	8区　新1号堀	1/3	(10.1)	3.5	5.8	〃	〃	褐色～黒褐色	左　〃	灯明皿　内底渦巻状ロクロ目、タール状付着物有り
36	8区　新1号堀	口縁部2/5	(8.5)	2.2	5.6	〃	〃	褐色	左　〃	内底渦巻状ロクロ目
37	8区　3号井戸	底部片		(2.1)	5.2	〃	〃	乳白色～赤褐色	〃	内底は指撫
38	8区	口縁部2/5	(8.7)	2.2	5.2	粗砂粒	〃	赤褐色	左　〃	
39	8区　旧1号堀	底部片			6.6	微砂粒	〃	褐色	左　〃	
40	8区　旧1号堀	口縁部1/2	(8.7)	2.4	5.9	〃	〃	褐色	左　〃	
41	8区　新1号堀	口縁部大半欠	(10.5)	2.8	5.4	粗砂粒	〃	赤褐色	左　〃	底部周縁を糸切り後に篦削、内底指撫
42	8区　新1号堀	1/3	(8.2)	1.9	5.0	〃	〃	黒褐色	〃	灯明皿
43	8区　旧1号堀	底部片			6.3	微砂粒	〃	暗褐色	左　〃	底部にスノコ状圧痕、内底渦巻状ロクロ目
44	8区　旧1号堀	底部片			6.8	〃	〃	褐色	左　〃	内底渦巻状ロクロ目
45	8区　旧1号堀	口縁部1/6	(11.4)	1.9	7.0	〃	〃	淡褐色	左　〃	
※46	8区　旧1号堀	約半分	(10.7)	4.2	7.4	〃	〃	くすんだ褐色		高台状に削り出し
47	8区　旧1号堀	1/4	(7.3)	1.8	4.8	微砂粒	〃	淡赤褐色	〃	
48	8区　4号井戸	底部片			5.8	粗砂粒	〃	褐色	〃	墨書
49	9区	1/4	(9.0)	2.1	6.2	微砂粒	〃	くすんだ褐色	左　〃	灯明皿？　内底渦巻状ロクロ目
50	9区　石積	1/3	(11.2)	3.7	6.0	〃	〃	淡褐色	左　〃	内底指撫
51	9区　旧1号堀	口縁部大半欠	(15.0)	3.4	8.6	〃	〃	淡赤褐色	〃	内底指撫
52	10区	約半分	(8.2)	2.0	5.2	〃	〃	淡褐色	〃	灯明皿

※カワラケに属さない特殊な器形を呈するが、本類として扱った。

第2表　内耳土器

番号	器　種	出土区・遺構	口　径	器　高	底　径	備　考
53	内耳土鍋(深)	5区　3号集石		〈 9.0〉		
54	〃	7区　堀		〈 7.9〉		
55	〃	7区　旧1号堀	(36.0)	16.8	24.6	外面体部斜位の篦削り
56	〃	7区　旧1号堀		〈10.4〉		補修孔
57	〃	7区　堀	(35.4)	18.0	24.0	
58	〃	7区　旧1号堀	32.8	18.7	24.0	
59	〃	7区　旧1号堀	28.7	15.4	21.6	
60	〃	7区　堀		〈 9.4〉		底部周縁篦削り

番号	器種	出土区・遺構	口径	器高	底径	備考
61	内耳土鍋(深)	7区 堀		〈 7.8〉		底部周縁篦削り
62	〃	8区 旧1号堀下層	(34.6)	16.8	(23.2)	
63	〃	8区 旧1号堀	(33.4)	16.5	(23.8)	
64	〃	8区 4号井戸	(34.4)	17.6	(24.8)	
65	〃	8区 旧1号堀	(28.0)	〈12.8〉		
66	〃	8区 旧1号堀	(32.4)	〈14.8〉		
67	〃	8区 旧1号堀	36.0	18.3	25.5	補修孔
68	〃	8区 旧1号堀		〈12.5〉		
69	〃	8区 旧1号堀		〈11.3〉		
70	〃	8区 旧1号堀		〈14.7〉		
71	〃	8区 旧1号堀	(32.0)	〈 7.4〉		
72	〃	8区 旧1号堀		〈 6.0〉		
73	〃	8区 旧1号堀		〈14.8〉		
74	〃	8区 3号堀		〈14.3〉		
75	〃	8区 旧1号堀		〈 9.3〉		
76	〃	8区 旧1号堀		〈 8.4〉		
77	〃	8区 旧1号堀上層		〈 6.7〉		
78	〃	8区 旧1号堀			(19.6)	
79	〃	9区 虎口	28.0	15.0	18.0	
80	〃	9区 旧1号堀		〈11.0〉		
81	〃	9区	(31.0)	〈16.6〉		
82	〃	9区		〈 1.8〉		
83	焙烙	1区 1号井戸	38.4	5.3	35.5	内耳を3箇所に付し、内底中央付近に印花と小穿孔
84	〃	1区 1号井戸		5.2		
85	〃	2区 2号堀		5.9		補修孔
86	〃	2区 2号堀				内底に印花
87	〃	2区 2号堀		5.4		底部にキャタピラ状の印刻
88	〃	2区 2号堀		5.9		
89	焙烙	7区 旧1号堀	(36.4)	7.0	(27.8)	
90	〃	7区 旧1号堀	(32.8)	7.5	(26.2)	
91	〃	8区 旧1号堀	(36.6)	7.0	(30.0)	内耳欠損部に2カ所の補修孔
92	〃	9区 虎口		5.2		
93	〃	10区		6.4		底部周縁部篦削り
94	〃	10区		5.7		

第3表 瓦器系、その他

番号	器種	出土区・遺構	形状・特徴
95	火鉢	1区	方形を呈するものと考えられ、直線的に体部は開く。高さ9.8cm。口縁部帯を内屈させ、両端部に棒状工具による押圧を連続させ連鎖状の装飾としている。
96	火鉢	1区	円形を呈するものと考えられ、籠に似せた隆帯を巡らせ、上方を無文とし、下方を沈線で格子状の装飾を施す。外面は研磨され光沢がある。
97	高台付皿	2区	須恵質を呈し、底径5.8cm。内底に「宝永四年 為幼心童□ 十月□□」の墨書。
98		2区	瓦器質。上部を平坦に面取りし、円孔を設ける。器面は研磨。
99		2区	瓦器質。98と同一個体と考えられる。
100	不明脚部	2区	火鉢か風炉の脚部片と考えられ、円孔を施している。
101	火鉢	9区	方形を呈するものと考えられ、体部は直立する。高さ8.5cm。口縁部は外削ぎ状とする。
102	壺	10区	肩部片。外面に蛇の目状のスタンプを充填する。
103	壺	10区	玉縁状の口縁を呈する。
104	欠番		

第4表 瀬戸・美濃系陶磁器観察表

番号	出土区・遺構	器種	口径	器高	底径	特徴・時代
105	8区	梅瓶				灰釉を施釉し、淡緑色を発する。胎土は灰白色を呈する。15世紀前後の所産と考えられる。
106	8区	足つき向付	(17.8)	5.2		絵志野
107	2区	鉄絵丸皿			5.7	志野釉 17世紀中～後半
108	5区	鉄絵丸皿	(12.0)	2.0	7.2	志野釉 17世紀中～後半
109	9区 石積	鉄絵丸皿	(12.6)	2.7	(7.2)	外面と見込みは無釉 胎土は軟質の白色 17世紀中
110	7区	丸皿	(11.6)	2.8	7.2	長石釉 見込みにワトチ痕 17世紀代
111	9区 近世墓坑	灰釉小皿	11.6	3.2	5.5	外面回転ヘラ削り整形、見込みにワトチ痕 18世紀後半
112	8区	小皿	(9.4)	2.0	4.5	
113	1区 1号井戸	小坏	(7.6)	(2.9)		天目釉 胎土は淡黄灰色
114	2区 2号堀	碗	(8.7)	6.0	2.9	透明 上絵 18世紀中頃 京焼？
115	2区 2号堀	尾呂碗	(11.8)	7.2	5.4	胎土は硬質で灰色 光沢 17世紀後半～18世紀前半
116	2区 2号堀	尾呂碗	(11.8)	(6.4)		飴釉にうのふ 胎土は黄灰色 17世紀後半～18世紀中
117	2区 2号堀	碗		(2.2)	4.8	肥前系の小鉢 京焼風 内底に山水文 17世紀後半～18世紀
118	7区	小坏	7.6	3.5	2.9	長石釉 17世紀代

番号	出土区・遺構	器種	口径	器高	底径	特徴・時代
119	9区	塗り分け碗		(6.7)	4.2	灰釉と鉄釉の塗り分け　胎土は灰色　18世紀後半～19世紀
120	9区　近世墓坑	腰錆碗	10.4	6.5	5.6	内面から体部上方に灰釉、他は錆釉　体部に凹み　18世紀前半
121	1区　1号井戸	水注	4.2	10.5	6.5	灰釉織部流し　注口と把手部を欠損　18世紀代
122	1区　堀底	折縁鉢	25.2	6.7	13.0	灰釉　17世紀代
123	2区	大皿	(25.0)	4.3	16.2	鉄釉で黍絵？　18世紀中頃
124	9区　近世墓坑	尾呂徳利		(17.5)	8.2	飴釉にうのふ　18世紀代
125	1区	陶製容器				蜜柑を模した蓋付きの容器。
126	5区　堀底	茶壺				
127	2区	茶壺			(13.0)	
128	1区　1号井戸			(6.6)	(19.0)	
129	1区　1号井戸	天目茶碗	(12.0)	(4.5)		
130	3区	天目茶碗	(11.7)	(5.4)		サビ　釉薄い
131	4区	天目茶碗	(11.7)	(5.5)		鉄釉　露胎
132	7区	天目茶碗	(11.8)	(5.8)		露胎
133	7区	天目茶碗	(12.4)	(5.0)		露胎
134	8区　4号井戸	天目茶碗	(11.8)	6.4	4.0	露胎　輪高台　胎土硬質で灰色
135	9区	天目茶碗	(11.6)	6.1	(4.0)	サビ　高台脇狭い

*訂正　117は肥前系陶磁器として扱う

第5表　肥前系陶磁器観察表

番号	出土区・遺構	器種	口径	器高	底径	文様・特徴と時代
136	1区　1号井戸	染付皿	(14.0)	3.8	(8.2)	1740～1780
137	2区	染付皿	(18.0)	4.3	(9.8)	外面唐草文　内面扇草花文？　18世紀中頃
138	2区　2号堀	色絵染付皿	(19.0)	4.7	(11.4)	内面に蝶と菊花など　外面一重圏線と渦福銘　18世紀代
139	2区　2号堀	染付皿		(3.7)	(8.7)	見込五弁花コンニャク判　底部に渦福銘　1740～1780
140	2区　2号堀	染付皿	(19.8)	5.2	(11.1)	外面唐草文　18世紀中頃
141	2区　2号堀	染付皿		(2.6)	(12.0)	18世紀代
142	3区	染付皿			6.2	山水文　蛇目凹形高台　18世紀後半
143	2区	染付皿	(13.9)	3.2	(6.4)	口紅　水蓮　1640～1660
144	2区　2号堀	染付皿	(9.5)	2.1	(4.6)	外面　内面菊花散らし
145	3区	染付蓋物蓋	(13.0)	(3.2)		18世紀中頃～
146	2区　2号堀	染付碗	(10.0)	(6.1)		寿に網目文　17世紀代
147	1区　1号井戸	染付碗	(11.8)	(4.8)		松竹梅文　18世紀中～後半
148		染付碗	(9.8)	(4.7)		コンニャク判　18世紀前後
149	2区　2号堀	染付碗	(9.8)	(4.6)		くらわんか茶碗　雪輪草花文　18世紀中頃
150	2区　2号堀	染付碗	10.0	5.9	4.4	くらわんか茶碗　雪輪草花文　18世紀中頃
151	2区　2号堀	染付碗	10.5	6.5	4.0	草花文
152	8区	染付碗		(2.7)	4.0	「大明年製」の崩れ銘　18世紀代
153	1区　1号井戸	染付猪口	(7.4)	(3.2)		雪持竹文
154	1区　1号井戸	染付蓋物	(13.6)			菊花唐草文　口唇部無釉　18世紀後半
155	1区　1号井戸	染付青磁碗	(9.0)	(3.0)		(1750～1810年代)外面に青磁釉、口縁部内面に染付で四方襷文を巡らす
156	1区　1号井戸	染付青磁碗	(7.6)	(4.7)		(1750～1810年代)外面は青磁釉、口縁部内面に染付で四方襷文を巡らす
157	9区	染付火入		4.8	4.3	瓔珞文　18世紀後半
158	1区　1号井戸	青磁仏花器	13.0	23.6	6.6	把手に人面　19世紀代？
159	2区	鉢		(12.2)	12.6	唐津
160	5区	碗			4.5	唐津　17世紀前半
161	6区	碗		(2.9)	5.8	唐津　17世紀前半
162	7区	向付	(10.8)	7.4	4.3	唐津？　オリーブ灰に鉄絵　17世紀代

第6表　舶来陶磁器

番号	出土区・遺構	器種	備考
163	2区　南斜面	青花磁碗	外面高台に界線、見込みに界線と花を表現したと考えられる満文。底部外面は中央に向けて突出する。
164	2区　堀内	青花磁	外面に唐草文、内面に四方襷文
165	7区　旧1号堀	青花磁皿	端反り皿の器形で、外面高台と見込みに界線、外面は密に唐草文。高台の端部内面は面取り
166	7区　旧1号堀	青花磁皿	外面高台と見込みに界線、見込みに玉取獅子？
167	7区　旧1号堀	青花磁皿	外面高台と見込みに界線、高台端部は内外面の面取りによって尖る。
168	8区	青磁碗	外面口縁部下に浅い沈線、釉調は暗緑色を呈する。
169	8区	白磁耳壺	

第7表　焼締陶器（常滑焼）

番号	出土区・遺構	備考
170	2区　2号堀	褐色を呈する胴部下半片。
171	3区	やや光沢のある暗褐色を呈する胴部片。
172	5区　堀底	紫色を帯びる暗褐色を呈する。
173	8区　旧1号堀	頸部に近い肩部片。

番号	出土区・遺構	備　　考
174	8区　旧1号堀	底部片。内面は剝離。
175	9区　旧1号堀	格子状の押捺印。176と同一個体。褐色を呈し、1㎝～5㎜ほどの礫を含む。
176	9区　旧1号堀	格子状の押捺印。

第8表　擂鉢・捏鉢

番号	出土区・遺構		備　　考
177	1区	瀬戸美濃系	内外面に鉄釉。胎土はモグサ土。底部糸切り。内底同心円状の櫛目、底部から立ち上がり部にトチ痕。
178	1区	瀬戸美濃系	内外面に鉄釉。胎土はモグサ土。直線的に開く体部から口縁部は水平気味に短く折れ、端部は直立とする。口縁部内面に突起を有する。
179	2区	在　地　系	土師質を呈し、底部片で残存する内面に櫛目が見られる。
180	2区　1号堀	瀬戸美濃系	内外面に鉄釉。胎土はモグサ土。口縁端部の内面に庇状の突起を有する。櫛目数は7条？。
181	2区　2号堀	瀬戸美濃系	復元口径30cm、器高13cm、底径13.4cm。内外面に鉄釉。胎土はモグサ土。体部と口縁部の境に指撫でによる凹みが廻り、外面にはこの凹み付近まで回転篦削り。底部は糸切り。櫛目数は11条。
182	2区	瀬戸美濃系	126に似る。櫛目数は6条
183	2区　2号堀	瀬戸美濃系	復元口径33.5cm。光沢のある鉄釉を施す。胎土はモグサ土。口縁部帯と体部に段を有する。
184	2区　2号堀	瀬戸美濃系	光沢のある鉄釉を施す。胎土はモグサ土。体部と口縁部との境に指撫でによる凹みがあり、内面に段を形成する口縁部片。18世紀の第4四半期の所産。
185	2区	瀬戸美濃系	内外面に鉄釉を施す。底部周辺の釉は拭い取られている。胎土はモグサ土。比熱を受けている。底部は糸切りと考えられるが擦が著しい。櫛目数は11条で3.5cm幅。
186	2区　2号堀	明　石　系	体部片で色調は赤褐色。櫛目数は10条で3.3cm幅。
187	3区	泉州堺？	
188	3区	瀬戸美濃系	錆釉を施す。胎土はくすんだ赤褐色。口縁端部が内側に折り返されている特徴から大窯期の擂鉢II類に類似する16世紀中頃の所産。
189	7区	在　地　系	直線的に外傾し、口端部を水平気味に外面に突出させる口縁部片で、僅かに片口部が残存する。土師質の内耳土鍋の胎土。内面に櫛目が施されるが数は不明。
190	8区　3号井戸	在　地　系	全体に器面は荒れている。須恵質を呈し、胎土は微砂粒を含む。櫛目は単沈線で内面の立ち上がり部から上方に粗い間隔で施す。
191	8区　旧1号堀	瀬戸美濃系	体部片で錆釉を施す。胎土は淡い赤褐色。櫛目数は12条で2.6cm幅。
192	8区　新1号堀	瀬戸美濃系	内外面に鉄釉を施す。体部外面下半の釉は拭い取られている。胎土はモグサ土。櫛目数は15条で4㎝幅。
193	8区	瀬戸美濃系	内外面に鉄釉を施す。胎土はモグサ土。口端部内面に陵。体部外面の中位下は回転篦削り。
194	8区　2号井戸	瀬戸美濃系	内外面に鉄釉を施す。底部周辺の釉は拭い取られている。胎土はモグサ土。底部糸切り。櫛目数は15条？。
195	8区　旧1号堀	在　地　系	復元底径10.8cm。土師質で胎土には粗砂粒を多く含む。内底部分は使用による摩面。櫛目数は8条で2.5cm幅。底部は二度の糸切り。
196	9区	明　石　系	復元口径23.8cm、残存器高7.7cm。口縁部内面に突帯状の張り出し。体部外面篦削り調整。色調は暗褐色。櫛目数は8条で1.7cm幅。
197	9区	丹波信楽系	焼締。
198	9区	丹波信楽系	焼締。櫛目数7条で1.8cm幅。
199	10区	明　石　系	復元口径22.7cm、器高8.3cm、底径10.3cm。口縁端部内面に突帯状の張り出し。体部外面篦削り調整、篦削りのロクロの回転は左回転。底部は砂目。色調は赤褐色。櫛目数は10条で2.3cm幅。
200	8区　新1号堀	在地系捏鉢	復元口径16.6　器高7.9　復元底径13.6。内面下半は磨面が著しい。

第9表　石臼観察表　　（　）復元　〈　〉残存

番号	種　別	出土区・遺構	残存	直径(A)	高さ(B)	上縁高(C)	上縁幅(D)	ふくみ(E)	芯穴の径(F)	挽き手の径(G-H)	同深さ(K)	同形状 分画・主溝＋副溝	重量(g)	石　質	台座文様
201	茶臼・上臼	3区 堀底集石	1/4	(20.0)	10.6	1.2	2.4	1.0	3.1	1.7×1.3	4.4	方形　6分割 菱　形	1422	輝石安山岩	
202	〃　〃	2号 集石	1/2	(19.8)	〈12.0〉			0.3	3.0	a1.7×1.7 b2.0×2.0	a4.6 b3.8	方形　8分割・8～12	3292	輝石安山岩	円　形
203	〃　〃	4区	1/3	(20.0)	14.4	1.6	2.2	0.2	2.2	2.6×2.6	(3.8)	方形	2220	多孔質輝石安山岩	
204	〃　〃	1号 石積北	上縁部欠	19.1	〈11.2〉			0.4	2.5	a1.5×1.7 b1.6×1.6	a2.3 b3.1	方形(90°回転)	5249	輝石安山岩	
205	〃　〃	1号 石積北	1/2弱	(21.2)	12.8	2.0	2.9	0.4	(3.0)	3.7×4.6	3.2	隅丸方形	2341	多孔質輝石安山岩	菱　形
206	〃　〃	1号 石積北	1/2	(20.2)	〈13.5〉			1.0	3.1	a3.1×3.1 b2.5×2.4	a4.7 b3.0	隅丸方形	3365	多孔質輝石安山岩	円　形
207	〃　〃	8区 4号井戸	1/2	(19.4)	14.1			0.6	(2.4)	2.7×3.0	4.7	方形　8分割・9～10	2845	多孔質輝石安山岩	七宝文
208	〃　〃	9区	1/2	(21.0)	〈11.3〉			0.8	2.8	2.0×2.1	4.0	方形	2681	多孔質輝石安山岩	二重方形

番号	種　別	出土区・遺構	残存	直径(A)	受皿径(I)	底径(J)	高さ(B)	ふくみ(E)	芯穴の径(F)	分画・主溝＋副溝	重量(g)	石　質	備　　考
209	茶臼・下臼	1号 集石	受け皿縁部								546	輝石安山岩	タール状の付着物
210	〃　〃	5区 堀底	〃								165	多孔質輝石安山岩	被熱を受けている。内外面丁寧な仕上げ。
211	〃　〃	7区 法面	〃								158	輝石安山岩	
212	〃　〃	9区 虎口	〃								84	多孔質輝石安山岩	
213	〃　〃	2号 集石	1/4	(21.4)	(36.0)	(30.3)	12.4	0.3			3583	輝石安山岩	高台状底部を造り出し、底部は抉られている。高台の高さ4.0cm
214	〃　〃	8区	約1/4		(38.4)	(26.3)	〈12.7〉				1704	多孔質輝石安山岩	高台状底部を造り出し、底部は抉られている。高台の高さ6.2cm　被熱
215	〃　〃	不明	約1/2	(19.4)	(36.3)	(28.0)	11.6	0.1	(2.4)	8分割・7～9	2989	多孔質輝石安山岩	高台状底部を造り出し、底部は抉られている。高台の高さ4.5cm

番号	種　別	出土区・遺構	残存	直径(A)	高さ(B)	上縁高(C)	上縁幅(D)	ふくみ(E)	芯穴の径(F)	供給口の径(G)	挽き手の径(H)	同深さ(K)	分画・主溝＋副溝	重量	石　質	備　　考
216	挽き臼・上臼	1区 橋脚跡下	1/2強	(30.5)	11.7（片減り）	2.5	2.7	2.7	(5.0)	(4.3)	4.8×3.0	4.7	不明	5319	多孔質輝石安山岩	擦面はざらつく
217	〃　〃	1区 堀南法面	1/2	(30.0)	〈11.2〉（　〃　）					(4.5)			不明	4064	多孔質輝石安山岩	側面砥石に使用
218	〃　〃	3区 堀底	1/8	(29.0)	11.3	2.6	3.3	2.7	(3.4)		2.1×2.1	4.2	不明瞭	1580	多孔質輝石安山岩	

番号	種別	出土区・遺構	残存	直径(A)	高さ(B)	上縁高(C)	上縁幅(D)	ふくみ(E)	芯穴の径(F)	側面口の径(G)	挽き手の径(H)	同深さ(K)	分画・主溝+副溝	重量	石質	備考
219	挽き臼・上臼	3区 堀底	1/4		10.4（片減り）	2.9	3.1	3.6		(2.4)			不明	2377	輝石安山岩	上縁丸み。被熱
220	〃 〃	3区	1/4	(30.0)	14.4（片減り）	2.8	2.9	2.8	(5.4)		3.0×3.3	3.5	不明	4256	多孔質輝石安山岩	擦面の周縁が磨面
221	〃 〃	5区	1/2	(31.0)	12.9（片減り）	2.5	2.8	6.3	(4.5)	(4.3)	4.1	4.7	不明	3700	多孔質輝石安山岩	芯穴は上部まで貫通
222	〃 〃	3区 堀底	1/4	(29.8)	7.6（片減り）	2.6	3.0	1.3以上					不明	1216	多孔質輝石安山岩	挽き手孔擦面に及ぶ
223	〃 〃	3号 集石	1/4		9.7			4.0	(2.0)				6分割・4～	3274	多孔質輝石安山岩	供給面に擦痕
224	〃 〃	3号 集石	1/5		9.5			3.6以上					不明	1151	輝石安山岩	被熱を受ける
225	〃 〃	3号 集石	1/8		10.5	2.8							不明	1012	多孔質輝石安山岩	被熱を受ける
226	〃 〃	4号 集石	1/4	(30.6)	6.0	1.3	3.5	0.7					不明	1292	多孔質輝石安山岩	偏平。
227	〃 〃	4号 集石	1/6	(33.6)	10.2（片減り）	2.9	3.5	2.0以上					不明瞭	2176	多孔質輝石安山岩	雑な目。もの配り。
228	〃 〃	7区	1/5		9.3（片減り）	1.3	5.7	2.4以上					不明	1324	多孔質輝石安山岩	
229	〃 〃	7区	1/3	(28.2)	9.3（片減り）	1.5	2.9	1.0以上					不明	1598	多孔質輝石安山岩	挽き手孔擦面に及ぶ
230	〃 〃	7区 堀法面	1/2	(31.0)	14.3（片減り）	2.5	3.2	4.0	4.0		3.5×3.0	4.2	8分割・5～	4878	多孔質輝石安山岩	擦面の周縁が磨面
231	〃 〃	7区	1/2弱	(30.1)	12.8（〃）	2.5	2.3	2.4	(3.6)	(4.0)			不明瞭	3551	多孔質輝石安山岩	擦面はやや磨面
232	〃 〃	7区 旧1号堀	完形	30.0	12.2（〃）	2.5	2.3	2.7	4.5	3.5	2カ所	5.7 6.0	放射状	9500	多孔質輝石安山岩	挽き手孔擦面に及ぶ
233	〃 〃	7区 旧1号堀		(39.8)	〈8.0〉			0.7以上					放射状？	825	〃	V字形の目。被熱
234	〃 〃	7区 旧1号堀	1/3	(28.1)	10.8（片減り）	2.3	2.8	1.0以上		(2.8)			不明瞭	2128	〃	間隔のある雑な目
235	〃 〃	8区	上縁片			2.9							不明	209	〃	
236	〃 〃	8区	上縁片			2.2	2.4						不明	390	輝石安山岩	
237	〃 〃	8区 4号井戸	1/4	(29.4)	7.4	2.9	3.1	(1.5)		3.9			不明	1462	多孔質輝石安山岩	肉薄。被熱
238	〃 〃	8区 新1号堀	1/5	(36.0)	9.2（片減り）	4.2	3.4	0.8以上		5.0			不明	2018	〃	肉薄。
239	〃 〃	8区 旧1号堀	1/3	(28.0)	11.5（片減り）	1.8	2.5	1.5	3.8	2.7			8分割・乱れ	3444	輝石安山岩	目はU字形。被熱
240	〃 〃	8区 新1号堀	1/2弱	(32.5)	13.2（片減り）	3.0	4.2	2.0	5.0	3.2	4.8		6分割	7500	多孔質輝石安山岩	挽き手孔つくりつけ
241	〃 〃	8区 4号井戸	1/5		10.8		0.3						不明	1069	〃	被熱、下臼の可能性
242	〃 〃	8区 新1号堀	1/5	(30.2)	〈12.3〉	2.3	3.0	1.4以上			3.3×3.2	5.5	放射状？	1705	輝石安山岩	上縁部磨面・被熱
243	〃 〃	9区	1/4	(36.0)	〈14.9〉			4.0以上			3.2×4.0	6.0	不明瞭	3096	多孔質輝石安山岩	被熱
244	〃 〃	9区上面	1/4	(30.3)	12.2	3.0	3.2	(3.7)	(3.8)	(3.8)			放射状	3313	〃	側面砥石に使用。
245	〃 〃	8区 旧1号堀	1/4	(26.2)	〈7.7〉（片減り）			1.5以上					不明	1546	〃	偏平。もの配り

番号	種別	出土区・遺構	残存	直径(A)	高さ(B)	ふくみ(E)	芯穴の径(F)	分画・主溝+副溝	重量	石質	備考
246	挽き臼・下臼	1区	1/3	(29.9)	13.7	1.1以上		不明瞭	3252	多孔質輝石安山岩	擦面はやや磨面。被熱を受ける。
247	〃 〃	1区	1/2	29.0	14.8	1.8	4.4	6分割？	8000	〃	擦面はやや磨面。側面下部の一部を砥石として使用。
248	〃 〃	1区 東集石	1/2	(32.2)	16.2	2.2	2.5	6分割・5～	10000	〃	擦面は磨面。下面皿状に抉り。
249	〃 〃	2区 集石	1/2	24.9	10.0（片減り）	1.3	(2.5)	不明	4772	輝石安山岩	擦面はやや磨面。被熱を受ける。
250	〃 〃	2区 集石	1/6		(4.9)	1.3		不明	756	〃	被熱を受ける。
251	〃 〃	3区 集石	1/6		8.3	0.3以上		不明	1285	多孔質輝石安山岩	磨面を呈し、目は消滅？ 被熱を受ける。
252	〃 〃	2号 集石	1/4	(41.6)	7.5	1.6		不明	2247	〃	偏平で、擦面はやや磨面。目は不明。
253	〃 〃	3号 集石	1/6	(28.0)	6.0	2.6		放射状？	845	〃	偏平で、擦面はやや磨面。目は間隔が粗く、V字形。
254	〃 〃	5区 堀底	ほぼ完形	30.0	14.5	1.3	3.0	6分割・4～5	12000	〃	擦面はやや磨面。被熱を受ける。
255	〃 〃	7区	1/3	(30.4)	11.5	2.3	(3.5)	不明	3801	〃	擦面はやや磨面。
256	〃 〃	7区	1/2弱	(26.0)	13.1	1.1	(3.0)	不明瞭	6500	輝石安山岩	光沢のある磨面。目は短く途切れ途切れで、細く浅い。
257	〃 〃	1号 石積北	1/3	(29.6)	11.1	2.4	(3.8)	6分割？	3659	多孔質輝石安山岩	蛇行気味の深い目。
258	〃 〃	7区	1/2弱	(37.2)	18.0	2.5	3.2	6分割・5～	10500	〃	擦面は磨面を呈する。
259	〃 〃	7区	1/4	(31.6)	(9.0)			不明	1781	〃	上下の面はアバタ状で天地不明。被熱を受ける。
260	〃 〃	1号 石積北	1/6		15.7	1.1		不明瞭	1167	〃	光沢のある磨面、目は幅広でV字形。被熱を受ける。
261	〃 〃	1号 石積北	1/4	(27.2)	12.2	(3.5)		不明瞭	2682	輝石安山岩	間隔のある蛇行気味の深い目。被熱を受ける。
262	〃 〃	8区 旧1号堀	1/4	(24.2)	12.9	0.8		不明瞭	2949	〃	光沢のある磨面、目は細く浅い。被熱を受ける。
263	〃 〃	8区 新1号堀	1/2	29.5	12.7	2.0	3.3	不明	6500	多孔質輝石安山岩	光沢のある磨面。被熱を受ける。下面は深く抉り。
264	〃 〃	8区 5号井戸	1/2強	32.2	7.7（片減り）	1.7	(3.5)	8分割・4～5	4814	〃	偏平で、擦面はやや磨面。下面は深く抉り。
265	〃 〃	8区 旧1号堀		30.8	13.2	0.8	3.7	不明	8500	輝石安山岩	擦面の芯穴周辺が高まり、磨面を呈する。被熱を受け、側面剝離する。
266	〃 〃	8区 4号井戸	1/2弱	(31.0)	8.7	3.0	3.1	不明	2879	多孔質輝石安山岩	偏平気味。擦面は磨面を呈し、下面は被熱を受ける。
267	〃 〃	9区	1/6		7.6	1.9		不明瞭	1091	多孔質輝石安山岩	偏平気味。被熱を受ける。
268	〃 〃	一括	1/2	(34.7)	10.2（片減り）	1.2	(4.7)	不明	7000	〃	偏平気味。擦面の周縁部分が磨面。

第10表 石摺鉢観察表

番号	出土区・遺構	口径	高さ	底径	重量	石質	備考
269	3区 堀	(26.4)	10.8		1407	多孔質輝石安山岩	外面口端部に片口状の造り出しを設ける。内面は口唇部まで滑らかな光沢のある磨面で、部分的に擦痕が残る。
270	3区 1号集石		〈8.8〉	(13.8)	621	多孔質輝石安山岩	底部は上げ底状を呈し、内面にざらついている。被熱を受けている
271	4区 1号集石	(31.2)	14.3		2045	多孔質輝石安山岩	外面ノミ調整痕、口縁部に歪み。内面は比較的丁寧な仕上げを施し、磨面が認められる。
272	5区 堀				242	多孔質輝石安山岩	口縁部片で内外面丁寧な仕上げ。被熱を受けている
273	7区 旧1号堀	(24.0)	14.0	(17.0)	1922	多孔質輝石安山岩	外面口端部に片口状の造り出しを設ける。内面底部から立ち上がり部分は磨面。
274	8区 旧1号堀	(24.4)	13.1	(14.8)	2146	多孔質輝石安山岩	内面に僅かな磨面。
275	9区 堀	(26.6)	11.9	13.6	3533	多孔質輝石安山岩	内面は口唇部まで滑らかな磨面で、口唇部分に擦痕が残る。被熱を受けている。形状はやや楕円形を呈すると考えられ、片口を付す可能性がある。

第11表　搗き臼・凹石観察表

番号	種別	出土区・遺構	外径	高さ	口径	深さ	底径	重量	石質	備考
276	搗き臼	9区	(26.0)	12.6	(18.0)	(9.7)	(17.2)	2650	多孔質輝石安山岩	やや偏平な水輪を思わせる形状。凹みに磨面は認められない。
277	〃	9区	(26.4)	15.0	(17.4)	(9.5)	(21.5)	2827	多孔質輝石安山岩	凹みに磨面は認められない。被熱を受けている。
278	〃	3号集石	14.8～15.8	8.5	11.0前後	6.3	7.5	1916	多孔質輝石安山岩	逆円錐形の凹みを呈し、磨面は認められない。底部には浅い抉り。被熱を受けている。
279	凹石	3号集石	12.5×11.8	9.2	6.0～7.0	2.7		1184	多孔質輝石安山岩	逆円錐形の凹みを呈する。被熱を受けている。
280	〃	1号石積北	16.0×14.0	9.5	7.0前後の円形	3.0		1870	多孔質輝石安山岩	底面は被熱を受けている。
281	〃	2区	13.7×12.6	7.9	7.0前後の円形	2.3		521	輝石デイサイト質軽石(大胡軽石)	
282	〃	7区堀	17.5～20.7	12.3	7.5×6.5	1.6		4676	輝石安山岩	凹みは滑らか。凹みに僅かな磨痕。
283	〃	7区堀	13.6×15.5	6.3	5.5前後の円形	1.6		1131	多孔質輝石安山岩	平坦面を造り出している。凹みは滑らかで281に似る。
284		1号石積北	23.5×19.8	12.1				2052	輝石デイサイト質軽石	
285	〃	7区旧1号堀		8.5	9.5前後の円形？	(5.5)		1015	輝石デイサイト質軽石	約半分が残存し、隅丸方形と考えられる。ノミ状工具による調整痕。凹部に磨面は認められない。

第12表　石塔観察表

番号	種別	出土区・遺構	高さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
286	宝篋印塔	7区堀矩面	〈33.2〉	13.7		4888	多孔質輝石安山岩	相輪部で九輪・請花・伏鉢・柄が残存。柄の径6.0cm、長さ5.1cm
287	〃	3区堀底集石	19.3	19.5	19.0	9500	輝石安山岩	塔身部　種子を施す部分の4側面に浅いくぼみを施すが、1面は円形文にまで欠損が及び、砥石として使用された磨面を呈する。下面は凹む。
288	五輪塔	5区堀底	〈22.5〉	15.3	13.9	4615	多孔質輝石安山岩	空風輪　柄先端部を欠損。柄の径6.0cm、残存長2.5cm。空風の区画はコの字状に深い彫り込み。
289	〃	5区堀底	〈15.4〉	16.0	16.0	2639	多孔質輝石安山岩	空風輪　空輪部を欠損。柄の径7.2cm、残存長5.2cm。
290	〃	7区堀法面	〈25.5〉	16.3	15.0	2610	輝石デイサイト質軽石	空風輪　空輪先端部と柄部に欠損部分がある。空風の区画はVの字状の彫り込み。柄の径5.5cm。
291	〃	8区北堀	14.5	25.1		8500	輝石安山岩	火輪　屋根の反りが強い。柄穴の径　cm，同深さ4.2cm
292	〃	9区2号暗渠	14.5	22.8		7000	多孔質輝石安山岩	火輪　軒の隅がやや反り、屋根の反りは直線的。柄穴の径　cm，同深さ3.8cm
293	〃	2区1堀集石	12.2	20.8	20.5	5744	多孔質輝石安山岩	水輪　ほぼ円形で、側面中央部分が緩やかな丸みを呈し、上下の面は円形でやや凹む。上下面の径12.5～13.0cm。
294	〃	8区新1号堀	13.2	24.4	21.4	3523	輝石デイサイト質軽石	水輪　楕円形で、側面中央部分が突出して算盤玉状を呈する。上下の面はやや凹む。上面の径17.8×14.5cm
295	〃	1区南斜面	17.2	22.0	22.0	13000	多孔質輝石安山岩	地輪　方形。下面がやや凹む。
296	〃	2号堀	18.2	25.5	25.5	20000	輝石安山岩	地輪　方形。下面に抉り。
297	〃	1号石積北	16.5	25.0	23.5	5344	輝石デイサイト質軽石	地輪　歪な方形。
298	〃	7区堀	18.0	27.0	23.0	17000	多孔質輝石安山岩	地輪　やや偏平。
299	〃	2号井戸	21.5	27.8	27.0	23000	多孔質輝石安山岩	地輪　方形。下面に抉り。
300	〃	8区新1号堀	13.8	23.0	20.5	9500	多孔質輝石安山岩	地輪　偏平気味。
301	〃	8区3号井戸	16.2	24.5	23.0	12500	多孔質輝石安山岩	地輪　偏平気味。
302	〃	8区新1号堀	15.0	26.5	26.0	14500	多孔質輝石安山岩	地輪　偏平。
303	板碑	7区堀	〈17.6〉	〈13.9〉	2.8	1092	緑色片岩	キリークと蓮座の一部
304	〃	7区	〈31.4〉	〈18.7〉	〈3.1〉	2770	〃	裏面にノミ痕を残す
305	〃	8区旧1号堀	〈37.8〉	19.6	4.0	3730	〃	キリークと蓮座の一部
306	〃	8区旧1号堀	〈42.1〉	〈16.1〉	〈3.0〉	2242	〃	

第13表　砥石観察表

番号	出土区・遺構	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
307	1区　堀底	7.6	5.1	3.4	251	流紋岩	長方体を呈し、端部を欠く。主に長軸方向の幅狭い一面を使用。小口と3側面に櫛歯状痕の工具痕が残る。
308	1区1号井戸	8.4	2.8	2.9	120	流紋岩	歪な長方体を呈し、端部を欠く。長軸方向の
309	2号堀	16.5	3.7	2.8	264	流紋岩	細長い長方体を呈する。
310	2区	10.7	2.3	1.7	70	流紋岩	細長い長方体を呈する。
311	2区堀底	10.1	3.3	2.6	91	流紋岩	やや弓なりの長方体を呈する。
312	2区	9.4	9.3	4.7	419	流紋岩	長軸方向の両端部を欠く。整状工具による整形痕を留める。
313	7区	10.2	9.0	7.0	531	多孔質輝石安山岩	
314	8区新1号堀	10.8	4.2	2.8	126	流紋岩	
315	8区	6.5	4.4	3.7	67	流紋岩	
316	8区	9.4	3.5	1.8	67	流紋岩	器薄な長方体を呈し、長軸方向の中央部分が山なりとなり端部を欠く。
317	8区3号井戸	15.0	10.7	11.5	1338	輝石安山岩	端部を扇状気味とし、角柱面に使用研磨面が見られる。扇状の先端部は非研磨面であるが短軸方向に刃研ぎ痕がある。
318	8区堀	6.2	4.8	〈2.1〉	49	流紋岩	歪んだ菱形を呈する。長軸方向の端部を欠き、剥離する。残存面に総てに使用痕が見られる

第14表　軽石製品観察表

番号	種別	出土区・遺構	大きさ	厚さ	孔径	重さ	石質
319	紡錘車	4区	7.5×7.3	1.6	0.8～1.4	44g	輝石デイサイト質軽石
320	〃	8区旧1号堀	8.9×9.6	1.3	0.6 0.9×1.3	126g	輝石デイサイト質軽石
321	不明品	8区3号井戸	7.1×(5.2)	1.6		31g	輝石デイサイト質軽石

第15表　硯観察表

番号	出土区・遺構	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
322	1区	12.2	〈 4.9〉	〈 0.9〉	81	粘板岩	陸と海の一部が残存。
323	8区	〈10.1〉	〈 7.8〉	〈 2.3〉		〃	底部と海の一部が残存。
324	9区　上層	〈 4.7〉	〈 1.4〉	2.0	18	〃	縁部片。
325	1区	〈 4.8〉	〈 4.2〉	〈 0.9〉	39	〃	縁と陸の境を浅い筋条の区画線を施す。

第16表　金属製品観察表

番号	種別	出土区・遺構	銭種名	国名	鋳造年	口径	孔径	厚さ	重量	備考
326	古銭	1区　堀底	開元通寶	唐	621	2.3×2.4	0.7×0.7	1.1	1.9g	
327	〃		開元通寶	〃	621	2.5×2.5	0.7×0.7	1.2	3.1g	
328	〃	7区	周通元寶	後周	955	2.2×2.2	0.6×0.6	1.05	2.0g	
329	〃	9区	元豊通寶	北宋	1078	2.4×2.4	0.6×0.6	1.6	3.2g	
330	〃	9区	元符通寶	〃	1098	2.4×2.4	0.6×0.6	0.9	2.2g	
331	〃	2区	聖宋元寶	〃	1101	2.3×2.3	0.7×0.7	1.2	1.7g	
332	〃	表採	洪武通寶	明	1368	2.4×2.4	0.6×0.6	1.45	2.8g	
333	〃	5区	永楽通寶	〃	1408	2.5×2.5	0.6×0.6	1.2	2.5g	
334	〃	9区	寛永通寶	日本		2.5×2.5	0.6×0.6	1.25	2.9g	
335	〃	6区	寛永通寶	〃		2.4×2.4	0.6×0.6	1.2	3.2g	
336	〃	6区	寛永通寶	〃		2.4×2.4	0.6×0.6	1.1	2.4g	
337	〃		寛永通寶	〃		2.3×2.3	0.6×0.6	1.65	3.3g	
338	〃	9区	寛永通寶	〃		2.4×2.4	0.6×0.6	1.7	4.3g	
339	〃	2区	寛永通寶	〃		2.4×2.4	0.6×0.6	1.45	2.9g	
340	〃	2区	二銭	〃	1877	3.2×3.2		2.45	13.6g	

番号	種別	出土区・遺構						備考
341	煙管	9区　近世墓坑	長さ 6.2	火皿径 1.8	ラウ装着口径 1.0	重さ 16.6		雁首部。蠟着
342	〃	9区	長さ 6.6		ラウ装着口径 1.1	重さ 6.9		吸い口部。
343	〃	9区	長さ 5.6		ラウ装着口径 1.1	重さ 4.9		吸い口部。ラウの一部が残存。
344	〃	2区	長さ〈3.7〉		ラウ装着口径 1.2	重さ 3.8		吸い口部。先端部を欠損。

番号	種別	出土区・遺構	備考
345	鋲	1区　堀底	1.1cm径の半球状を呈し、鍍金を施す。重さは0.8g。
346	飾り金具	1区　堀底	口径1.5cm　重さ0.7g　文様の呼称は不明
347	不明金具	2号堀	

第17表　木製品観察表

番号	出土区・遺構	備考
348	8区　方形遺構	曲げものに係わる一部？
349	8区　方形遺構	全長27.2cmを計り、1cm角の方形、両端部を円形に加工する臍。

第18表　縄文時代遺物観察表

番号	出土区・遺構	備考
350	7区	前期諸磯b式。浮線文系土器。
351	8区　3号井戸	前期の所産。
352	9区	前期諸磯式期の所産
353	8区　旧1号堀	中期加曾利E3式
354	一括	後期の所産。網代痕。
355	8区	後期の所産。
356	3号　集石	磨石。長さ11.3cm 幅 8.1cm 厚 4.4cm 重さ 640g 輝石安山岩
357	8区	磨石。長さ10.6cm 幅 5.6cm 厚 5.0cm 重さ 417g 多孔質輝石安山岩

第5章　成果とまとめ

本調査区は、北側が北城の南縁辺下、南側は玉蔵院曲輪の平坦部の北側、二ノ丸と本丸北縁辺下に該当する大堀切り部分である。調査前の形状は、ほぼ二ノ丸北縁辺下の部分に旧状を留め、西方の玉蔵院曲輪の部分とは段差が設けてあり、本丸北縁辺下の部分（中曲輪）は堀幅が拡大している。

この調査の主体遺構である大堀切り（1号堀）は、玉蔵院曲輪に係わる部分と中曲輪で大きな変革期を呈している。先ず玉蔵院曲輪であるが、曲輪の名称は当地に存在した玉蔵院からの名称であり、その縁起から天正十八年（1590）に入城した牧野氏により、大胡にあった威徳寺と二宮玉蔵院と引き替えで建立された寺である。しかし、元禄・寛政・天保期に火災に会い、その都度再建が計られたが、明治四二年に合併されて金蔵院と称された。

調査区にあった玉蔵院墓地は、昭和22年の水害で荒廃した荒砥川整備に伴い河原浜五反田604番地にあった墓地を当地（根古屋643番地）に移転している。さらに、水害で死亡した水難者が埋葬（発掘時に検出され、大胡警察署鑑識課との立ち会いにより、水害時の水難者と確認）されていた。

当曲輪は、本丸をL字形に囲郭する二ノ丸の北東隅の縁辺下で大堀切りが一段低くなり、その形状を留めて東方に続き、東から南方は二ノ丸との比高差8mを測り、崖を成しているが現在では南方に遊歩道が設置されている。設置前の調査では後述する2号堀が確認されている。西方は風呂川沿いに土塁が遊歩道を下り風呂川に掛かる橋の北から北城の南東縁辺下やや南まで続いている。この土塁が切れる南が搦手と考えられ、北東部分に虎口が想定されていた。曲輪の平坦面は、西方の土塁基部のローム土残存から削り出しによる削平面である。

玉蔵院曲輪に該当する部分の発掘調査では、大きく3時期の変化が判明した。

第1期（2号堀の時期）　調査区部分には大堀切り（1号堀）が存在した。西方は風呂川に開口し、2区東方で二ノ丸西の縁辺下を巡る2号堀と重複する。この新旧関係は1号堀が2号堀より後出の構築であり、2号堀は遊歩道で検出された堀跡と同一と考えられ、玉蔵院曲輪には北～東～南の二ノ丸縁辺下を区画する様に巡っていたのであろう。

第2期(1号堀の時期)　1号堀は北側に巡る2号堀を大規模に拡幅して、北城南縁辺下に大堀切りを構築する。北西部分には虎口に設けられた橋脚跡と風呂川からの流水を止める堰止め施設が作られている。しかし、1号堀と2号堀との新旧関係は明確であるが、大堀切り以前の1号堀は不明な点があり、2号堀の存在した時期に1号堀が無いとすれば、北城と二ノ丸は地続きでいた可能性も考えられる。

第3期（2・1号堀の埋め立て時期）　二ノ丸西の縁辺下の2号堀を埋め、さらに1号堀を埋めて寺域を拡張している。その範囲は堀切りの旧状を止める2区と3区の境までである。1号堀の埋め立ては、出土遺物から17世紀中頃以降と考えられる。さらに玉蔵院で使用したと考えられる1号井戸は1号堀埋め立て後に設けられ、火災後に18世紀代の陶磁器類が多く埋められている。この火災年代は、寛政二年（1790）と考えられる。

次に3区～6区の様相を考察したい。3区では2区のとの境に1m以上の段差があり、玉蔵院の寺域拡張に伴う17世紀中頃以降の1号堀埋め立てにより、生じたと判断される。この段差より東方に6区まで大堀切りの旧状をよく留めて続く。3区に於ける二ノ丸と北城間は24m、二ノ丸からは調査後の堀底まで深さ10.5mを測る。調査区は南側で二ノ丸側の法面に及ばない為に形状と北城の法面に見られた削平地の存在は不明である。北城の法面は5区の土層観察断面では崩落したと考えられる中位を除き、底

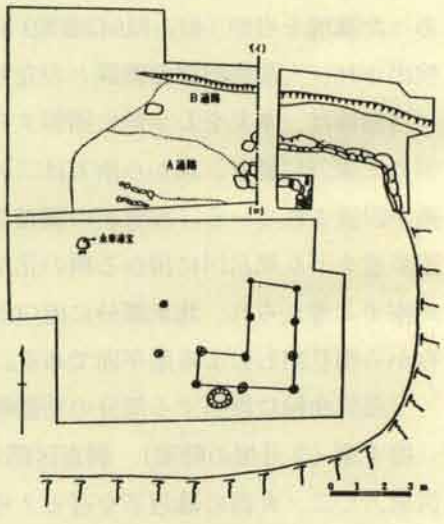
面から北城縁辺の傾斜角は50°に近い急峻な状況であり、現状でも二ノ丸北法面は45°前後の勾配である。

調査により、3・4区には連続する4号削平地に2・3号集石があり、5区と6区にも同様な河原石の集石が見られ、中に石臼等が混入している。これは堀浚いによる所産と考えられ、13m前後の間隔に置かれている。堀底は東傾斜を呈し、箱堀状の底面としている。連続して続く1号堀は7区で新1号堀として、本丸側に走行を変えて続く。

7～8区に於いては、1号堀が北城側から本丸側に走行を変える大きな変革期と考えられる。北城側の旧1号堀は、幾度かの水害を思わせる水成堆積が見られ、16世紀を主体とする遺物が出土している。

この水成堆積と遺物の年代観は、「赤城神社年代記」に記されている「天正十二年、人馬二百余を流失する」水害に関連する可能性が示唆されるが具体的根拠は乏しい。しかし、大胡幼稚園の建設に伴って行われた北城の発掘調査（第77図）で検出された南東隅に設けられた石積虎口に係わる通路と9区土層観察断面の比較により、推察が可能である。

石積虎口にはA・Bの2時期の通路が併走して検出され、古い通路Aは石積以前のものであり、新しい通路Bは石積に伴うと記している。前者は大胡氏、後者は牧野氏の所産と考えられており、9区の階段状通路とB通路、同階段状通路下の灰層を伴う面がA通路と整合すると考えられる。旧1号堀は一時期に水害による埋没があり、時期を隔てずに埋土されて整地面を作っている。この過程で馬による祭祀的な地鎮行為が行われた可能性が考えられる。この水害を上記した天正十二年（1584）とすれば、その前後に時の城主である北条高広か大胡常陸介高繁時代の係わりが推察される。北条高広は永禄五年（1562）に厩橋城の城代となり、厩橋城と大胡城を結ぶ防御ラインとして活躍し、大胡常陸介高繁は大胡城主として活躍した頃である。



第77図　北城南東虎口図

今後の課題としては、水害以前の開削された旧1号堀内からは15世紀代と考えられる内耳土鍋や板碑等のあるが、一体誰の手による構築であろうか。

新旧1号堀の間には、居住空間の存在が確認された。山崎（1976ほか）の云う「中曲輪」に相当する部分である。旧堀が開削された時、本丸よりの空間部分、新堀が開削されて旧堀が埋められた時は北城側に井戸と掘立柱建物が存在し、居住空間を設けている。北城と二ノ丸を結ぶ導線は、北城南東部分の石積虎口から「中曲輪」そして本丸と二ノ丸を分離する空堀道により連絡されると考えられるが、新1号堀の検出部分からは空堀道との連絡施設は不明であった。

これらを総合して判断すると調査区では、3時期の普請が想定される。

第1期は15世紀～16世紀中頃の大胡氏時代である。玉蔵院曲輪を2号堀で三方で囲郭したと考えられるが、この時の1号堀は不明である。

第2期は16世紀後半の北条高広・大胡常陸介高繁～17世紀前半の牧野氏の時代であり、大胡城の骨格が牧野氏以前に造られ、牧野氏によって完成された時期である。1号堀は北城と本城を区画する大堀切りとして完成したが、水害による埋没以後に走行の一部を変更していることからも、同期は細分の可能性が考えられる。

第3期は17世紀中頃以降に玉蔵院が隆盛を誇った時と推察される。

今回の調査では、大胡城の築城時期の問題と水害に係わる時期の推定から第２期とした16世紀後半から17世紀前半の問題提起を提示したが、今後、大胡城の全体像を解明の礎となれば幸いです。また、文献上からは上杉・武田・後北条による三者の覇権争いに巻き込まれた金山城主の由良氏の動向や厩橋城代となった北条高広と大胡高繁の関係を考慮しながら、戦国期～近世初期の様相を留める大胡城についての研究の一歩としたい。今後、皆様の御指導、御教示を頂ければ幸いである。

《主要参考文献》

福島武雄 「大胡城考」 上毛及び上毛人 昭和４年１月号（1929）

山崎 一 「群馬県古城塁址の研究 補遺篇 下巻」

群馬県教育委員会 群馬県歴史の道調査報告書第十四集 日光への脇往還

大和市教育委員会 下鶴間白山 大和市文化財調査報告書 第66集

萩原 進 道しるべ 1965 みやま文庫

勝森すみ 未刊史料「永禄日記」について 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第23巻 第４号 1973

勝森すみ 未刊史料「永禄日記」について（続） 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第24巻 第３号 1974

山崎 一 「大胡城の構造」 大胡町誌 1976

大江正行他 八幡原Ａ・Ｂ 上滝 元島名Ａ 関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第３集 群馬県教育委員会 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981

上田秀夫 14～16世紀の青磁碗の分類について 貿易陶磁研究 №２ 1982 日本貿易陶磁研究会

小野正敏 15～16世紀の染付碗、皿の分類とその年代 貿易陶磁研究 №２ 1982 日本貿易陶磁研究会

群馬県埋蔵文化財調査事業団 浜町屋敷内遺跡Ｃ地点 昭和60年（1985）

梁川町教育委員会 遺跡 梁川城本丸・庭園 発掘調査・復元整備報告書 昭和61年（1986）

新宿区郷土研究会 十周年記念号 「牛込氏と牛込城」 昭和62年（1987）11月12日

山下歳信他 大胡城跡保存管理計画書 1988 大胡町教育委員会

群馬県教育委員会 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団 下佐野遺跡 Ⅰ地区・寺前地区（４） 中世・近世編 1989

小泉 弘 江戸を掘る―近世都市考古学への招待― 1990 柏書房

玉村齊山 「書の基本資料」６ 筆・墨・硯・紙 1990 中教出版

磯部淳一 群馬県における五輪塔の編年 高崎市史研究 ２ 高崎市史編さん専門委員会 平成４年（1992）

海老名尚・福田豊彦 「田中穣氏旧蔵典籍古文書」「六条八幡宮造営注文」について 国立歴史民俗博物館研究報告第45集 田中稔教授追悼号 平成４年（1992）

富岡市教育委員会 宮崎城遺跡調査会 宮崎城 1994

嬬恋村教育委員会 埋没村落 鎌原村発掘調査概報（よみがえる延命寺）平成６年（1994）

都丸十九一 続・地名のはなし―地域の地名を考える― 煥乎堂 平成７年（1995）

服部敬史 内耳土鍋の研究（上） 土曜考古 第21号 土曜考古学研究会 1997

服部敬史 内耳土鍋の研究（下） 土曜考古 第22号 土曜考古学研究会 1998

北条元一 「北条氏史」 平成十年（1998）

群馬県教育委員会 前橋城遺跡Ⅱ 群馬県庁舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1999

稲原昭嘉 明石摺鉢の編年について 近世の実年代資料 第12回 関西近世考古学研究会 2000

群馬県立歴史博物館 第65回企画展 伝統の将軍 藤原日秀郷 武者と物怪の物語り 2000

かみつけの里博物館 第６回 特別展 鍋について考える 土なべの生産・地域性・民俗からさぐる室町・戦国という時代 2000

資料1

〈年　表〉

西暦	年　号	大胡町を中心とした出来事
1159	平治1	12．27　上野国には、大胡・大室・大類太郎～(平治物語)
1180	治承4	8．　源頼朝謀反起こし、～上野国には大胡太郎、～(義経記)
1185	文治1	9．12　参河守範頼、平家追討のために西国発向す。～大胡三郎実秀～(平家物語)
1190	建久元	11．7　源頼朝入洛の行列、後陣随兵十一番　大胡太郎（吾妻鑑）
1195	建久6	3．10　源頼朝の東大寺供養のため供奉人　随兵　大胡太郎（吾妻鑑）
	〃	5．15　大胡佐貫輩足利宿所に集まる（吾妻鑑）
	〃	大胡太郎実秀、父のあとを追い念仏に帰依し、法然に質問し、法然答える。
	正治	3．14　法然が大胡太郎実秀および妻へ返書を送る。
1238	嘉禎4	2．17　将軍頼経上洛の随兵　七番　大胡左衛門次郎　大胡弥次郎（吾妻鑑）
1240	仁治元	8．2　将軍頼経二所参詣行列　先陣随兵　大胡左衛門尉
1246	寛元4	2．29　萩原九郎資盛。同父遠直等。召放所領。被召置其身。是悪党扶持之由。大胡五郎光秀訴申之間。～(吾妻鑑)
	〃	8．15　鶴岡放生会、将軍御出行列先陣随兵　大胡五郎（吾妻鑑）
	〃	大胡実秀、往生する（法然上人行絵図）
1250	建長2	3．1　大胡太郎跡、閑院殿造営雑掌目録　裏築地　用意分　一本　大胡太郎跡（吾妻鑑）
1258	正嘉2	3．1　将軍家二所御御進発　行列　先陣随兵十二騎　大胡太郎跡　大胡掃部太郎（吾妻鑑）
1259	正元元	10．5　大胡小四郎秀村、脚気が再発して往生する（法然上人行絵図）
1275	建治元	京都六条八幡宮造営注文に大胡太郎跡 十二貫（田中穣氏旧蔵典籍古文書）
1333	元弘3	大胡一族、楠正成討伐のため、大番衆として出陣。
1335	建武2	6．19　新田義貞、大胡郷野中村の地頭職を長楽寺に寄進す（長楽寺文書）
1339	暦応2～	2．18　横沢の石塔婆に観音有縁日を刻み始める（群馬県指定重要文化財）
1347	貞和3	3．22　長善寺に所在する伝大胡太郎の墓に記年銘を刻む（大胡町指定文化財）
1351	観応2	笠懸野戦いで大胡氏、山上氏敗れる（曾我物語）
1365	貞治4	9．14　大胡秀能、常陸国岩瀬郷の供米押領について請文を提出（鹿島神宮古文書）
1373	応安6	6．20　大胡秀重、大胡郷内神塚村、堰口村の田畠在家を売却する（長楽寺文書）
1381	康暦3	4．5　藤原政宗、大胡郷三俣神塚村、上泉村の田畠在家を売却する（長楽寺文書）
1383	永徳2	12．26　大胡上総入道跡、闕所地として上野国守護上杉氏に安堵される。
1456	康正2	2．26　深津で赤堀時綱・岩松持国と共に管領上杉方の深津氏、大胡氏等と戦う。
1469	文明1	大胡修茂、太田資清入道道真の主催した河越千句に参加
1492	延徳4	4．3　長善寺墓地入り口に六地蔵石幢を建立
1532～	天文年間	大胡城主大胡重行、北条氏康の招きで牛込に移住す。
1544	天文13	大胡氏、宗参寺を創建する。
1555	天文24	上杉謙信、山上城の番兵を追い払い、大胡民部左衛門を居らしむ。
		1．6　大胡勝行、北条氏康につかえ、大胡を牛込に改める。
	(弘治1)	大胡宮内少輔重行、赤城神社を新宿区(旧牛込区)赤城元町に遷す。
1559	永禄2	「小田原衆所領役帳」に大胡民部の所領、江戸牛込64貫430文～。
1561	〃 4	「関東幕注文」に厩橋衆として大胡が記される。
1566	〃 9	10．12　由良成繁、大胡領三夜沢に狼藉停止の制礼を発す（赤城神社文書）
1567	〃 10	11．8　上杉謙信、金山城攻略のため大胡に着陣する。
1571	元亀2	8　大胡城主大胡常陸介、赤城二宮大明神（前橋市）に米七石を寄付（二宮神宮寺玉蔵院資料）
1572	元亀3	6．28　膳城は由良成繁に落ち、大胡民部左衛門と渋川主膳を入置く。
	〃	10．26　北条高広、応昌寺に柏倉の所領を寄進する（善昌寺文書）
1573	天正1	五乱田の戦いに大胡氏参戦。
1577	〃 5	9．16　北条高広、三夜沢大明神に祈念書を納む（赤城神社文書）
	〃	大胡城主常陸介高繁公ヨリ御供米五石宛御奉納賜～。
1582	〃 10	3．　北条高広、大胡城を大胡常陸介高繁に固めさせる。
	〃	8　沼田城攻めに大胡常陸之介に参戦（加澤平次衛門覚書）
	〃	9　大胡高繁、赤城神社に永楽銭一貫文を寄進す（赤城神社文書）
	〃	10　倉内合戦に大胡常陸介助参戦(加澤平次衛門覚書)
1584	〃 12	7．29　大胡城下、湯沢川の大水で人馬二百余を流失する（赤城神社年代記)。
	〃	8．13　北条氏直、大胡高繁に金山城亀山の番を命じる。
1585	〃 13	7．9　大胡高繁、赤城神社の神領に対して守護不入とする（赤城神社文書）
	〃	8．　大胡高繁、赤城神社の柏倉の地内九貫文を寄進（赤城神社文書）
	〃	9　北条氏直、沼田へ出勢に大胡一族参戦（加澤平次衛門覚書）

西暦	年号	大胡町を中心とした出来事
1586	天正14	4　北条氏直、沼田へ発向に大胡一族参戦（加澤平次衛門覚書）
1587	〃 15	2　由良氏に参戦し、大胡一族赤城山を越えて白井野ノ原に着陣（加澤平次衛門覚書）
1588	〃 16	9　北条高広、大胡に隠居していたが死亡する。
1589	〃 17	11．9　大胡高繁、赤城神社の父子に近戸大明神を祭ってもらいたいとの依頼文を出す。
1590	天正18	11．9　牧野康成、大胡藩２万石の城主となり、菩提寺として養林寺を創建する。
	〃	牧野氏の家臣稲垣長茂、上野国三千石を賜り、長興寺を開山。
1593	文禄２	9．29　稲垣平右衛門源長茂の父重宗没し、長興寺に葬られる。
1595	〃 4	牧野右馬頭並びに奉行、元大胡高繁家臣で、赤城神社屋根葺の完成に寄進（赤城神社年代記）
1598	慶長３	6．23　牧野康成の室、鳳樹院(酒井忠次の女)没す。
1600	〃 5	5　徳川家康会津の上杉氏を攻める。稲垣長茂は大胡城を守る。
		7．　大胡藩士深沢三四郎、諏訪大明神に鰐口を奉納する（大胡町指定重要文化財）
	〃	8．7　牧野康成、秀忠に従い信濃国上田城攻め、軍規違反を犯し、上州吾妻に蟄居を命じられる。
	〃 6	稲垣長茂、佐位郡で１万石を賜り、伊勢崎城主となり、伏見城番となる。
1601	〃 6	長興寺、徳川家康より五十石の朱印状を賜る。
1604	〃 9	牧野康成、蟄居を解かれ領地大胡に戻り、家督を忠成に譲る。
	〃	11．3　養林寺、百石の朱印状を賜る。
1606	〃 11	牧野駿河守忠成、赤城神社西宮檜皮葺に寄進（赤城神社年代記）
1609	〃 14	12．12　牧野康成没す。55歳。養林寺に葬られる。
1610	〃 15	9　牧野駿河守忠政、稲垣太郎左衛門他　赤城神社西宮上葺（赤城神社年代記）
1611	〃 16	3　牧野駿河守康成、赤城神社瓦葺に寄進（赤城神社年代記）
1614	〃 19	7．8　牧野成定の室、普玉院没す
	〃	10．15　大坂冬の陣、豊臣秀頼御征代の軍列に牧野駿河守
1616	元和２	7．　牧野忠成、越後国長嶺に５万石で転封。
	元和２	8　大胡領は酒井忠世の支配下に編入され、高須隼人が大胡屋敷を預かる。
1617	〃 3	7．　酒井忠世は８万５千石の城主となり、大胡領は前橋藩に組み入れられる。
1618	〃 4	牧野忠成、１万石の加増で長岡藩へ転封。
	〃	旧大胡藩士、長嶺より長岡へ引っ越す。
1620	〃 6	3．　牧野忠成、１万石の加増で７万４千石余を領地する。
	〃	大胡衆(大胡組)、大胡城内の御殿を前橋城へ移す。
1630	寛永７	3．3　牧野忠成、入国を布告。
1669	寛文９	大胡領に初めて城代を置く。
1684	貞享元	儒臣古市剛「前橋風土記」を撰進し、大胡宿の様子を記載す。
1688	元禄初年頃	玉蔵院、類焼する。（玉蔵院縁起）
1700	元禄13	大胡領に藩校「求智堂」を設ける。
1705	宝永２	1．24　川越藩士赤羽三蔵、天神風呂にて病死、長興寺に葬られる。
1725	享保10	6．6　湯ノ沢川洪水、丈余ノ水也（赤城神社年代記）
1749	寛延２	酒井氏姫路転封、大胡城は事実上廃城となる。
1768	明和５	代官前沢藤重(十)郎の支配
1790	寛政２	玉蔵院、火災に会い寺宝書類等をすべて焼失。（玉蔵院縁起）
1793	寛政５	7．8　川々大洪水、人馬流失、大胡辺馬通止、～(赤城神社年代記)
1809	文化６	6．　大胡宿「道しるべ」、世話人奥泉文平・江原忠兵衛（大胡町重要文化財）
1812	文化９	6．　小沼ヨリ出水、～中略～大胡町不残水上ル（赤城神社年代記）
1843	天保14	3．3　丸山の大火。堀越村から出火し、玉蔵院等を始めとして大胡宿まで延焼。
1874	明治７	2．26　俠客大前田栄五郎、大胡町で没す。
1885	明治18	大胡宿「汲場設置願」を提出。
1899	〃 32	5．24　町政施行。
1909	明治42	3　玉蔵院、西方寺（前橋市）と共に合併して金蔵院と称する。
1940	昭和15	大胡神社の南側石段を造る。
1947	〃 22	9．15　カスリン台風による水害で町全域が大被害を被る。
1980	〃 55	大胡町役場新庁舎落成。
2000	平成11～12	大胡城本丸北大堀切りの発掘調査。

一、元和二丙辰年（一六一六）駿河守殿越後江御国替玉蔵院十三世圓祐代　此　　兵右ェ門
年ヨリ大胡城之所ニ成同　国前橋御城主酒井雅楽頭様御領城ニ相成申候　玉　　名主　佐右ェ門
蔵院者城跡ニ有乍諸堂御修復被成下候　八十ヶ年程　以前元禄年（一六八八　明和六巳丑年（一七六九）七月　寺社　御役所　以上之写書　大正十五丙寅年
～一七〇三）中又十九ヶ年以前寛延三午年（一七五〇）右両度玉蔵院焼失仕　（一九二六）三月上旬也
候一、寛延二巳年（一七四九）雅楽頭様御国替当松平大和守様御領分ニ而去
亥年迄御供米被下置候
一、玉蔵院檀林之義大胡引寺以後法壇所会下分限等相定被抑付候　由会下ノ寺
院申傳御座候　以上

乍恐以書付奉願上候御事
明和五戊子年（一七六八）三月御上地ニ相成　同六年丑三月又先主大和守殿
御領分ニ被抑付候　供米記定ト右写招召候也
一、西領二宮村去子年三月御上地相成　御代官前沢藤十郎殿御支所ニ御座候
依之同村二宮大明神御供　米之義　殿様依御信心去亥年迄被下置難有頂戴候
尚又以御慈悲□□　先規之通リ被抑付被下置候様ニ　願上奉候　乍恐古例之
通別当神主等ニ於神前天下泰平別而　殿様御武運御長久之御祈願抽丹精奉候
殊旧例相勤来候神事祭礼怠慢無修行仕候　尤去子年ハ従御公儀無相違被下置
難有頂戴奉候
右願之通御慈悲ヲ以去亥年迄被下置候通被抑付被下置候者難有仕合奉存候
已上
河原浜村
二宮大明神　別当玉蔵院
二之宮村　神主　六谷田讃岐
河原浜村　組頭　源兵衛
六弥
名主　善兵衛
二之宮村　源太夫

御吟味被成即御召状四ヶ寺月番真福寺觸頭根生院飛脚到来　同九日ニ出立ニ宮
明神起立玉蔵院檀林会下等之起立相認、同十三日申ノ時土岐美濃守殿御用人江
戸崎又右衛門殿江差出申候　是ヨリ度々之御
尋同廿六日美濃守殿御前ニ召出右　々申上候　又願
書等差出申候同廿八日帰国被抑付晦日帰着致右起立
書之写

赤城二宮大明神起立書

一、上野国勢多郡二宮村正一位二宮大明神者人王十二代景行天皇之御宇日本尊
武東夷征伐之時　二夜御逗留御座候　此處ヲ社奉崇人王二十（十九）代允恭恭
天皇御宇有勅宣大国主命ヲ当社之神体ニ奉祀候
　大国主命多名有第一ニ八千戈ノ命申神代ヨリ今ニ至迄軍陣擁護ノ神ニ奉祀候
第二ニ国造大巳貴尊ト申時醫道耕作守護神祀奉候　此外大国主命等都合七名ト
神道家ニ習来候
一、右之神体ヲ同国同郡赤城山麓三夜沢村江是又日本武尊三夜御逗留之地ニ勘
請奉五穀成就之守護神崇神奉是ヲ赤城大明神ト申　二宮明神一躰分身而江府牛
込赤城明神之根元ニ御座候　尤牛込之赤城明神者牛込忠左衛門御先祖御勧請被
成候由傳承候
一、源頼朝公天下安全依御願地方ニ而百石御寄附社堂御造営被成候
由永禄年中国乱之節焼失仕候
一、大胡城主大胡常陸介殿元亀二午年（一五七一）八月現米七石弐斗弐合御寄
附被下成　是ヨリ御代々之御領主被下置候

七石弐斗弐合

内四石参斗七升五合別当玉蔵院　内弐石八斗二升七合神主六谷田讃岐
一、牧野駿河守殿大胡城主之節慶長十九年（一六一四）御当家様大坂御出陣被
遊候時　御武運長久戦場御勝利之御祈願　駿河守殿ヨリ仰付候　依之於神前別
当神主等奉抽丹精　駿河守殿御帰陣之後　金地繋馬之大絵馬弐枚被遊御神納
今ニ神前ニ懸置候　尚本社御造営被下成候　棟札今以有之候　別当不動五大尊
并并大般若経一部御寄進神主方江ハ唐紗之大紋被下置候　今所持仕候
一、往古従明神宝物五種

第一　稚波羅玉弐顆　時代不明
第二　龍王之面　聖徳太子御自作云傳　昔ヨリ雨請ニハ彼面ヲ灑必奇特有
第三　仏舎利　一粒塔入往古ヨリ禁裏ヨリ納玉フ云傳王代一覧ニ曰ク人王七
　十代後冷泉諸国之大社ニ仏舎利一粒宛納玉フト云
第四　碑碟珠数　壱連　弘法大師奉納
第五　大長刀　一振　由来不相知

此外古来物有之候
　右宝物御代々之御領主御社来之節入御覧来候　依之当秋者御代官前沢藤十郎
殿御検見之節開帳仕入御覧候　御領主之外一向開帳不仕候玉宝有之候故　別当
寺号玉蔵院ト申候由云傳
一、神主弐人　六谷田讃岐　田所石見
一、社家四人　吉沢加賀　浦野左近　長井嘉傳治　田所源太郎
一、神事之義毎年三月十一日末ノ午之日萱矢千ヲ以悪気邪神退治之秘伝又毎年
四月十二日初辰之日御旅　申可御幣御鉾三夜沢之社上ニ差出天下安全五穀成
就奉祈候　是則神主讃岐勤申候
一、祭礼年々両度二月十二日　八月十五日　別当玉蔵院起立書
一、上州勢多郡大胡河原浜村二宮山神宮寺玉蔵院者真言宗常法壇所ニ御座候
根本二宮村ニ有之古ヨリ　二宮明神別当職相勤本尊千手観世音者本地仏ニ御
座候　開基年代不分明　中興法流開祖圓喜上人弘安　二年（一二七九）七月
入寂　是ヨリ世代二十六世凡四百三十四年也
一、往古従明神別当本尊観世音者本地仏ニ御座候故依旧例長日之本地供月置之
護摩供修行之仕国家安隠　別而御当家様御武運御長久之祈願奉抽試請候　并
社職祭礼如古例相勤申候
一、天正丁午年牧野駿河守殿御祈願寺ニ被抑付則玉蔵院第十世宥源代大胡城内
江引寺ニ相　成申候　二宮村ニ古寺跡参反歩余御余地今玉蔵院所持ニ御座候

為天下泰平地方百石御寄附有之社頭御造営被下　成候所永禄年（一五五八～一五六九）中国乱之節焼失仕候　尤二宮村古水帳ニ会田斎田等之字名有之　候田畑ニ今唱申候会田ト申者新嘗会之神事斎田ト申者御供膳料ニ御座候由申傳ニ御座候　当時御年貢　地ニ相成申候

御斎田上畑　壱反廿五歩
同中田　壱反八畝十六歩
会田下下田　弐反廿歩
同下畑　弐反十三歩
御釜免下畑　壱反九畝廿六歩
鈴振免下下田　七畝廿歩
下通免下田　壱反壱畝十二歩
　切免中田　壱反歩

右者古之神領ニ而御供料神事祭礼ノ料ニ御座候處何時頃ヨリカ御年貢地ニ相成申候当時只唱而已御座候

一、大胡常陸介殿大胡城主之節此神社御信仰被成且旧記之営元亀年（一五七〇～一五七二）中より七石余宛毎年御寄附被下成候　尤二宮村者大胡領二万石之内ニ御座候　其後常陸介別而御城内之鎮守ニ被成赤城二宮大明神御勧請被成神号ヲ近戸大明神ト申　今大胡城跡之北ニ鎮座有之則御供米拾弐俵余御寄附被成当御領主松平大和守殿ヨリ茂先規之通リ被下置神主奈良原左京頂戴仕被在候

又其後常陸介殿御末葉江戸牛込ニ牛込忠左衛門ト申御旗本又々牛込江右之鎮守赤城大明神御勧請被成候由諸人申傳ニ御座候御事

牧野駿河守殿大胡御城江御移ニ被成候後慶長十九年（一六一四）御当家様大坂御出陣被遊候節御武運長久戦場御勝利之御祈願駿河守殿より茂仰付依之恭敷於神前別当神主等奉抽試請候　駿河守殿御帰陣被成ト已後、金地繋馬之絵馬弐枚御神納遊被今以神前ニ奉懸置候　猶以御供米御修復等迄被下成候

又別当玉蔵院方ニ者不動五大尊并ニ大般若経壱部御寄進且又神主先祖六谷田左右衛門方江者唐紗之大紋被下置当時迄家之致重宝所持仕候　其後駿河守殿元和二辰年（一六一六）明和五年（一七六八）迄百五十三年程越後長岡之御城江御国替被成翌元和三年（一七六九）ヨリ前橋御城主酒井雅楽頭殿御領地ニ相成候得共如古例御供米御修復迄被下成候　又寛延二年（一七四九）ヨリ今年春迄松平大和守殿御領分ニ茂如先例去亥年迄御供米等年々被下置候事ニ御座候

乍恐往古ヨリ之伝記奉申上候　尤古書由来等之書者別当玉蔵院両度之焼失故委細ニ者相知兼申候　右申上通リ此神社者上野十二社之随一ニ御座候殊更古ヨリ供米奉頂戴候間往古法乍恐御当家様御武運長久国家安全五穀成就之御祈願無怠慢相勤申候何卒只今迄勤来候　社職先達而願書申上候通永代執行仕度奉存候別而玉蔵院者勢多郡真言檀林会下百余ヶ寺御座候　尤檀林處并会下等之分限相定茂御当家様可成御定被遊候　今ニ七年諸檀林御書改申上候　右躰之義故所以学業茂第一者為奉報御厚恩御当家御武運長久ト御祈願専要ニ御座候　依之諸国諸檀林所ニ毎月十七日ニ論議法楽仕候玉蔵院茂只今迄者明神別当之故茂以談林相続仕来リ候　若今般御供米御被為召揚候茂相成候得者往古ヨリ之御祈願并神事祭礼自及怠慢候義又玉蔵院檀林役茂終ニ相勤兼候様ニ相成候得者百余ヶ寺出家共学業相止申候事乍恐実ニ　ヶ敷奉仰候偏ニ御慈悲ヲ以先規之通リ御供米頂戴仕明神并本地仏江備江御供膳天下泰平之御祈願無怠懈執行仕度奉存且出家学業茂相続致度候　右両端共ニ願之通り仰付被下置候得者難有仕合ニ奉存候以上已上

上野勢多郡二宮村神主六谷田讃岐赤城二宮大明神別当玉蔵院
明和五戊子季（一七六八）十月　前沢藤十郎殿
　御役所

此外藤十郎殿江差上候願等且寺社奉行所并美濃守殿江差上候願書数多有之敷略之唯以肝要一二通書写之尤神主六谷田方ニ自餘書付預置候向来右御供米ニ付預書相認候節ハ神主立合双方之書付等見合案　可認候也必　紛失無之様可被成候　以上

明和戊子五年（一七六八）十二月六日寺社奉行所上州沼田城主土岐美濃守様

水上之泡願成就優曇花可成ヨリ心身煩苦被在候處ニ　同六月十七日前沢殿御手代小林伴左衛門、益田勇助御林見分ニ被来序ニ子年分御供米可下置書付到来難有拝見仕　同廿六日出府仕リ御代官役所請印差上月番御老中、寺社奉行、勘定奉行等相談届順達致御書付御判奉頂戴其之上毎年正月御祈禱之御札御祓差上申候　願書差出諸願成就ニ而同七月五日ニ帰国仕候　首尾壱ヶ年半江府往来五回当寺希代之難渋ニ御座候　若向後ニ茂如斯凶事出来之節者役人比書付等心ヲ以テ寄附米永ク無相違様当院之繁栄也以上

此書付明和五戊子季（一七六八）三月廿四日前橋役所召出則三原忠太殿受取申候為後代写候也

乍恐辨書

一、二宮山神宮寺玉蔵院ハ二宮大明神別当則本尊千手観世音ハ明神本地仏ニ御座候ニ付従御領主様為御　供米河原浜村御蔵米拾弐俵壱斗九桝五合毎年御寄附被成難有頂戴仕天下泰平則殿様御武運長久之御祈　願奉忠誠精寺住職仕来候事

一、大胡並二宮村申傳之義者根本玉蔵院ハ二宮村有之又二宮村威徳寺者大胡ニ有之候所天正元年（一五七三）頃牧野駿河守殿大胡城江御移被成候節御領内二宮大明神並本地仏依御信仰ニ天正五丑年（一五七七）大胡威徳寺ヨリ別当玉蔵院引替被仰付則玉蔵院者諸檀家並田畑等捨置大胡御領内江引越御祈願相勤申候　又威徳寺者大胡ヨリ二宮村江引渡寺右玉蔵院且檀家貰受今ニ二宮ニ有之候　依而山号大胡山威徳寺ト申本山修験之一寺ニ御座候　又玉蔵院ノ山号ヲ二宮山ト申候　尚今二宮村ニ玉蔵院古寺ノ跡三反歩余御除地拙寺所持ニ御座候同引寺之義必定ニ候　先年駿河殿越後江御国替之砌又々引寺ニ被成度所玉蔵院者勢多郡真言檀林ニ御座候　故余義無残置然玉蔵院之写越後長岡之城内ニ御建立有之　則寺号玉蔵院ト申御祈願相勤今ニ有之候　依之両所ニ玉蔵院同本寺野州小俣鶏足寺ニ御座候

一、右申上候通貧寺ニ御座候得共真言一派之檀林ニ御座候　玉蔵院會下ハ東ハ大間々桐生辺渡良瀬川限　西ハ利根川境　南ハ広瀬川通伊勢崎辺　北ハ赤城山之麓東筋東西七里余南北五里程寺院之数大寺小寺　庵室房跡都合八十ヶ寺余有之候　是又真言一派之所以学業之義ハ夏四月朔日ヨリ五十ヶ日冬ハ十月朔　日ヨリ五十ヶ日ノ間談所江会合仕論議修行仕候事一派之掟ニ御座候　因茲何方ニ於茂壇林處茂所以化　飯料等有之義御座候　玉蔵院茂先年者所以寮飯料等有之大体成法談處ニ御座候　由申傳候駿河守殿御　国替遊被其年ニ哀微仕則八十ヶ年程以前致類焼又其後十九ヶ年以前焼失仕当時漸本堂造営有之候得共　造作等一向出来不申荒寺ニ而甚難渋仕候　右引寺故田畑之助成茂無之尚又檀家曽而無之候故極貧寺ニ　而檀林役茂相続成兼候併而只今迄者殿様御信心ニ依リ御寄附米頂戴仕リ其余分ヲ以所以飯料ニ仕夏冬　両所学業相勤寺相続仕申候　是偏ニ殿様家御威光一會下之出家共学業仕候御事ニ御座候

右之通申傳ニ御座候玉蔵院両度之焼失故秘蔵書付等因縁記録之書紛失致唯之傳義乍恐辨書ニ相記差上候以上

二宮明神別当河原浜村　真言檀林　玉蔵院

明和五戊子三月廿四日　寺社御役所

此書付明和五戊子季（一七六八）十月御代官前沢藤十郎殿御役所江差出候御吟味之上書付等此外差出候

乍恐以書付奉申上候御事

一、上野国勢多郡二宮村赤城二宮大明神御供米之義ニ付古ヨリ之通被下置候様先達而奉願上候處御当家様御由緒等無之義容易ニハ難相済候被仰聞尤前々之御料處之節御供米被下置候義茂有之候　委細書　上可申上旨御尋ニ御座候依而従往古之由来乍恐右ニ奉申上候

抑正一位赤城二宮大明神ハ大国主命　奉紀候社ニ而上野十二社之根元ニ御座候　此尊ハ八千戈之神　々ニ申日本第一軍陣擁護之神社ニ御座候　故源頼朝公

（資料一）　玉蔵院縁起（大胡町誌参照）

二宮山神宮寺玉蔵院と称し、開山は円喜上人（文明六年遷化）と伝えられ、二之宮村にある二宮大明神別当であった。本尊千手観世音は明神本地仏であった。

天正十八年頃牧野駿河守当地へ入廓の際、領地内二宮大明神並びに本地仏の御信仰により天正五年大胡城威徳寺と別当玉蔵院を引替え度いとの仰付にあり玉蔵院は諸檀家並び田畑等を捨て置いて大胡城へ引越して祈願寺となった、そのため山号を二宮山と云う。

当寺は真言一派の檀林にして東は大間々桐生辺の渡良瀬川、西は利根川境、南は広瀬川の通り伊勢崎の辺り、北は赤城山麓に到る東西七里余、南北五里程の大寺小寺庵室房室など八十ヶ寺余の中心であり真言一派の学業の道場であった。

元和二年駿河守越後国長岡城に御国替の時住職頼祐上人領主に倍従して長岡に移住したので、当寺は年々衰微して来た処、元禄初年頃類焼し、再建後も寛政二年に再度火災に会い寺宝書類等すべて焼失した。明和年代に漸く本堂造営したが檀家田畑等なく極貧寺となった。

その後天保十四年三月三日の当地丸山の大火によりすべてを焼失しその後間口五間奥行四間の仮本堂を建立したがその維持も困難となった。その為明治四十二年三月住職宥意大僧都の時に末寺金胎寺に桂萱村（前橋市桂萱町）西方寺と共に玉蔵院を合併した。そして寺号を金蔵院と称するようになった。

（資料二）　無縁塔

碑　文

昭和二十二年「一九四七」九月十五日午後四時三十分連日ノ豪雨ノタメ赤城山津波突如トシテ襲来シ不慮ノ大水害ニ遭ヒ大胡町ハ甚大ナル被害ヲ蒙ムレリ特ニ荒砥川岸ノ根古屋地区ニ於テハ家屋流失四七戸水難者廿九名ノ多数ニ達シ尚ホ祖先ノ霊域根古屋墓地ノ大半ヲ流壊スルノ大災難ニ遭遇セリ此ノタメ河川改修ニ当リ同墓地ハ河床ト指定設計セラレ万已ナク新墓地ヲ設クル事ニ関係者一同ノ協議ヲ纏メ旧墓地河原浜五反田六〇四番地一反一畝二十九歩ヲ廃シ根古屋六四三番地ニ新墓地ヲ設ケ各関係者ノ流失ヲ免レシ先祖ノ石碑ヲ移転シ開眼供養ヲ厳修シ併セテ無縁塔ヲ立テ以テ祖先ノ霊ヲ吊慰スル者ナリ

金蔵院住職少僧正　遠藤恵龍撰書

（資料三）　二宮神宮寺玉蔵院資料

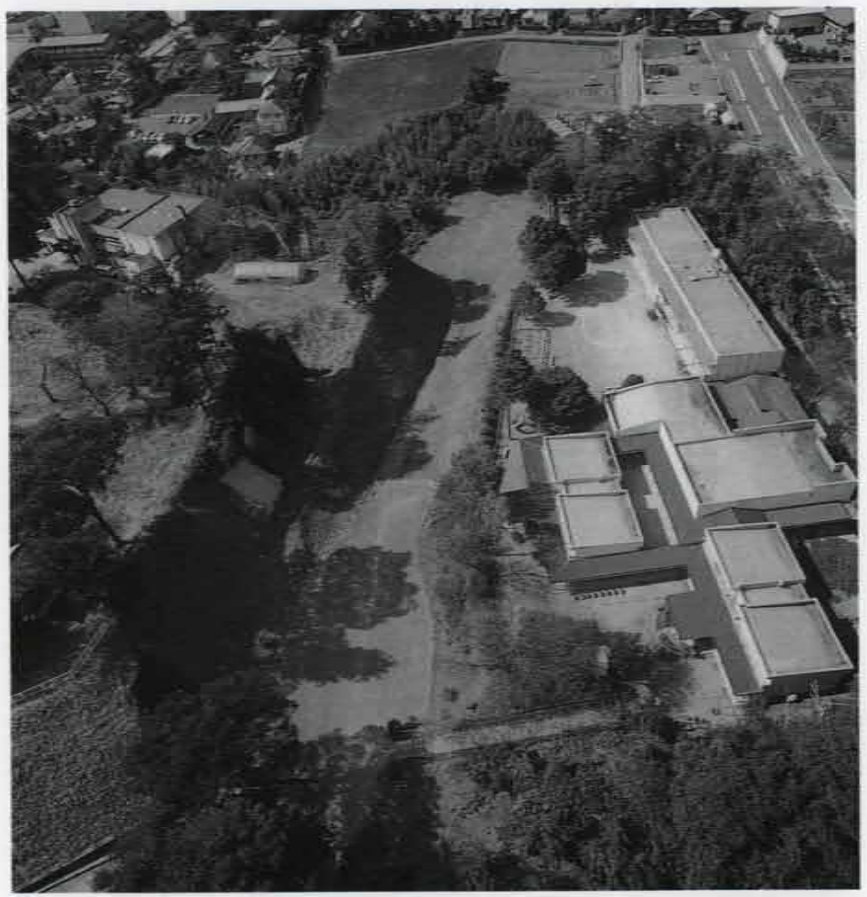
御供米願書写並起因

抑当院者御寄附米之事弐百有余年無違変被下置候　明和五戊子季（一七六八）春三月領主松平大和守殿武州川越江国替有之前橋領内堀越、江木、増田、二宮郷等都合六十余ヶ村御上地ニ成　同三月廿五日御代官前沢藤十郎殿ニ於御役所ニ引渡有之所領中宮関、河原浜二ヶ村ハ前橋領地也　然ル時二宮大明神御領地ニ相成上ハ右御供米従公儀可被下置筋ニ而子年分ハ可被召揚義於前橋役所ニ神主六谷田讃岐へ被仰渡候　併当寺ハ領内ニ羅在殊ニ年々御祈禱御札上来御祈願寺ニ有之候間可召上義否難相分依之辨書等差上既ニ五月半上延引ニ成候

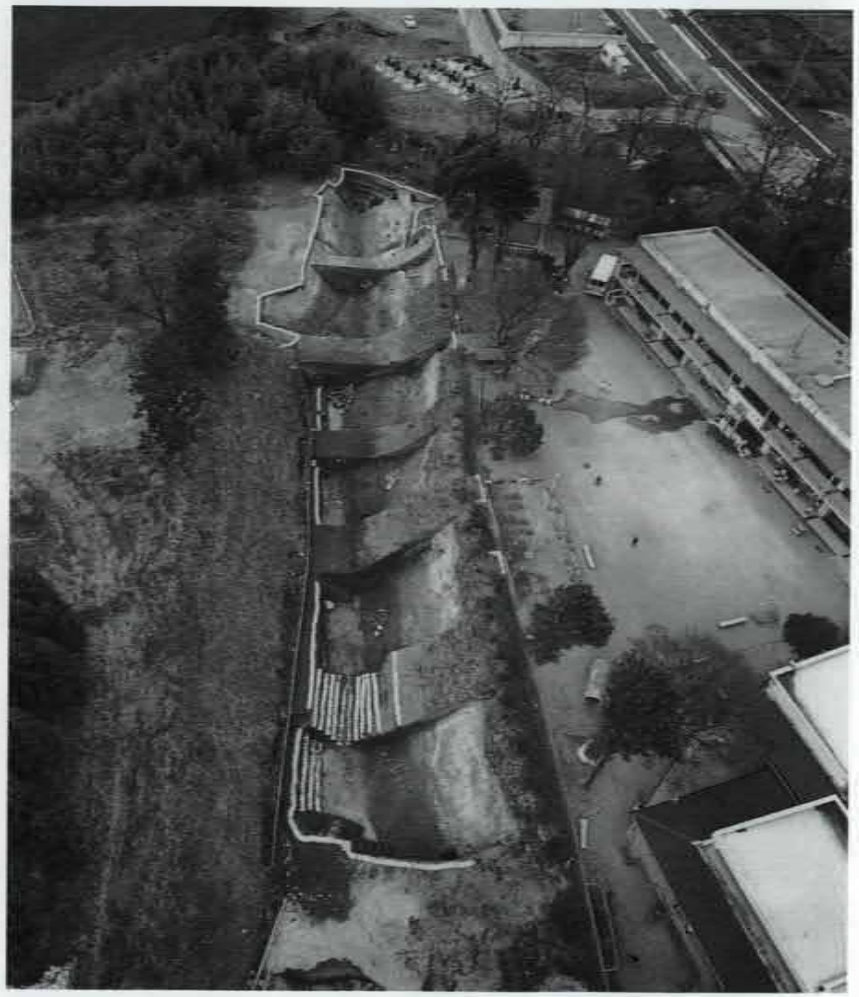
然ル時御代官役所ヨリ別当供米願前橋役所迄御尋有之則五月廿一日出立　同廿七日ニ前沢殿役所別当神主書付二通差出　同六月上旬ニ帰国仕候然而　同十月七日御代官ヨリ召状到来　同十日出府仕御尋之上御由緒差上同廿五日帰村仕候　其後同十二月六日寺社奉行所土岐美濃守殿ヨリ二宮明神並別当玉蔵院檀林会下等之起立書相認可罷り出之所召状故役寺ヨリ飛脚到来　同八日ニ罷立右起立書　同十三日美濃守殿御役所江差出細々御尋有之書付数通差上　同廿八日ニ帰国仰付大晦日ニ帰着仕候　然ル後明和六己丑季（一七六九）右上村之内二宮一ヶ村又々前橋帰領相成則旧主大和守殿領分ト相成候　因茲同四月九日ニ出府仕子年分之御供米頂戴仕度願書又々差出　同廿九日帰国仕候　誠ニ風前之灯火

写真図版

1　発掘調査前(真上から)



2　同(東から)



2　同(東から)

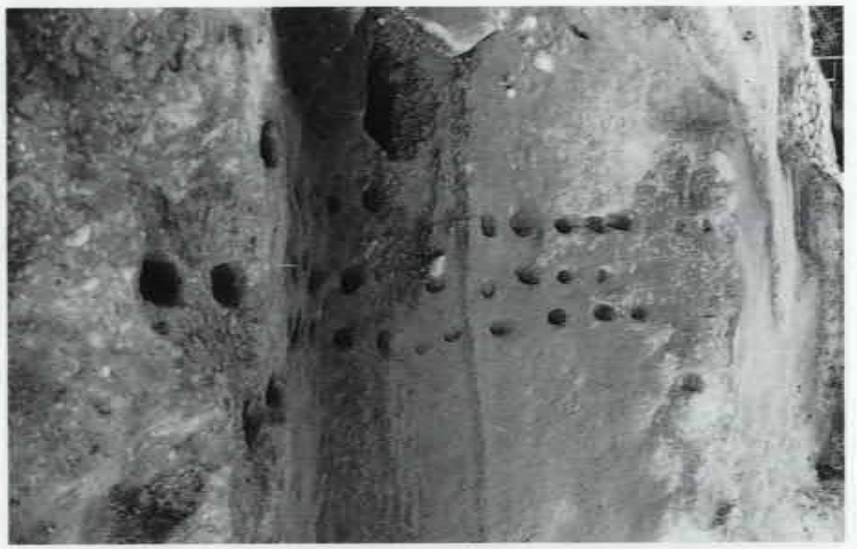
1　発掘調査　1～6区(真上から)

1　1～3区全景(真上から)

2　1区作業風景

3　橋脚柱穴(東から)

3　仕切り堀(北側部分)



1　橋脚柱穴跡(南から)

4　同(北側部分)

2　1区1号堀(東から)

3　同(近撮)

1　仕切り堀(南側)

4　2区西側セクション

2　1区堀内集石

3　石臼(216)出土状況

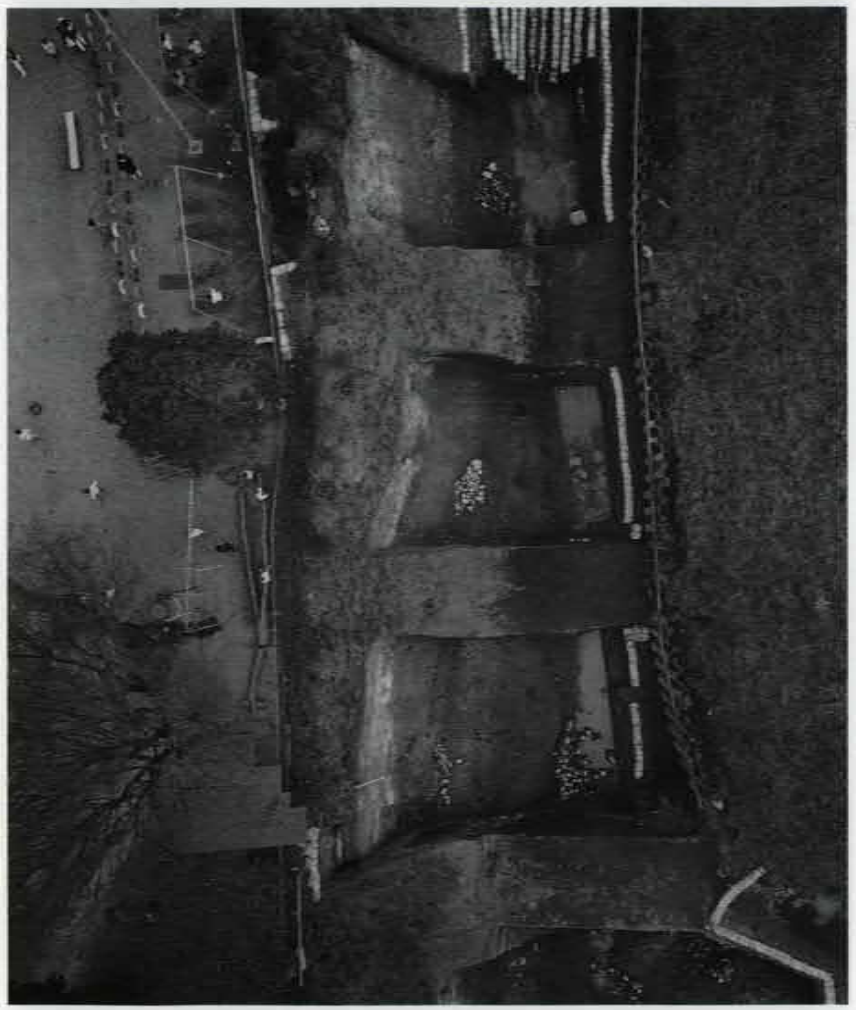
1　2区全景

4　2区東側セクション

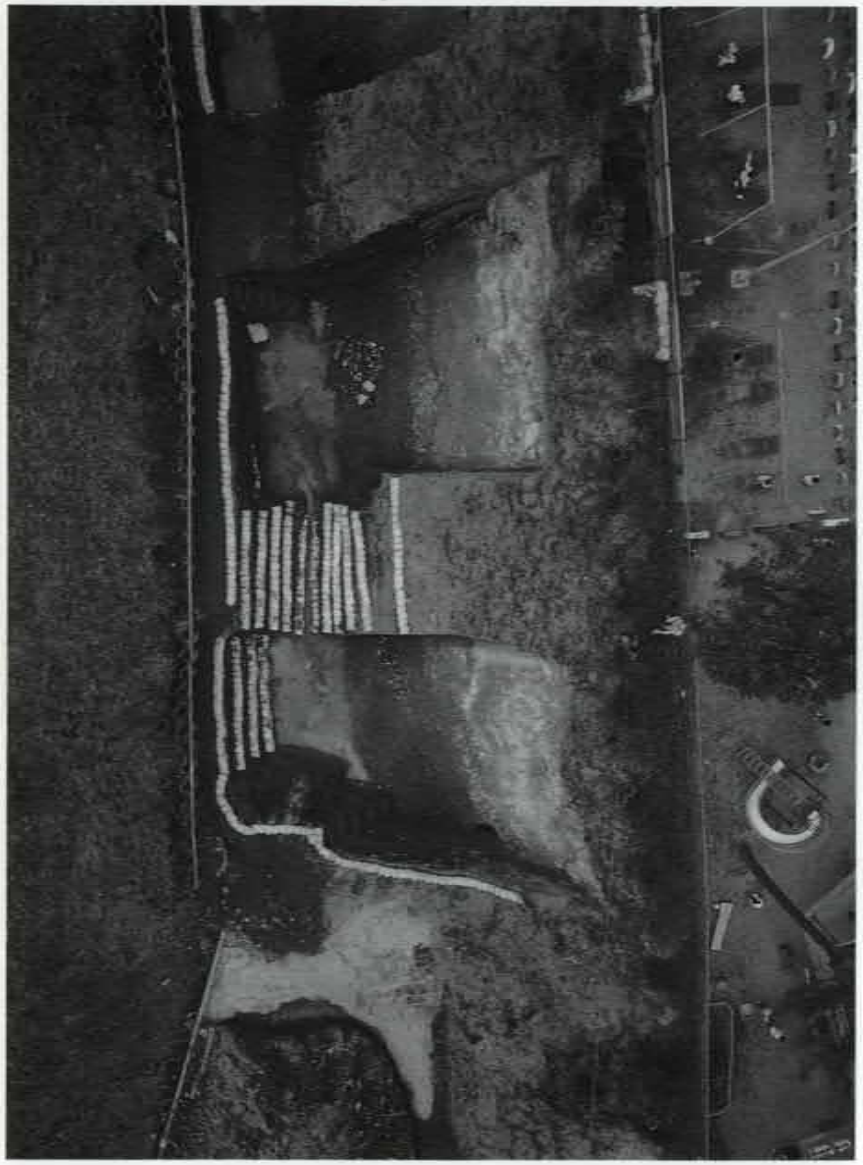
2　2区(東側から)

1　2区2号堀

2　3区集石状況



3　3～5区全景(真上から)



3　5・6区全景(真上から)

1　1号集石

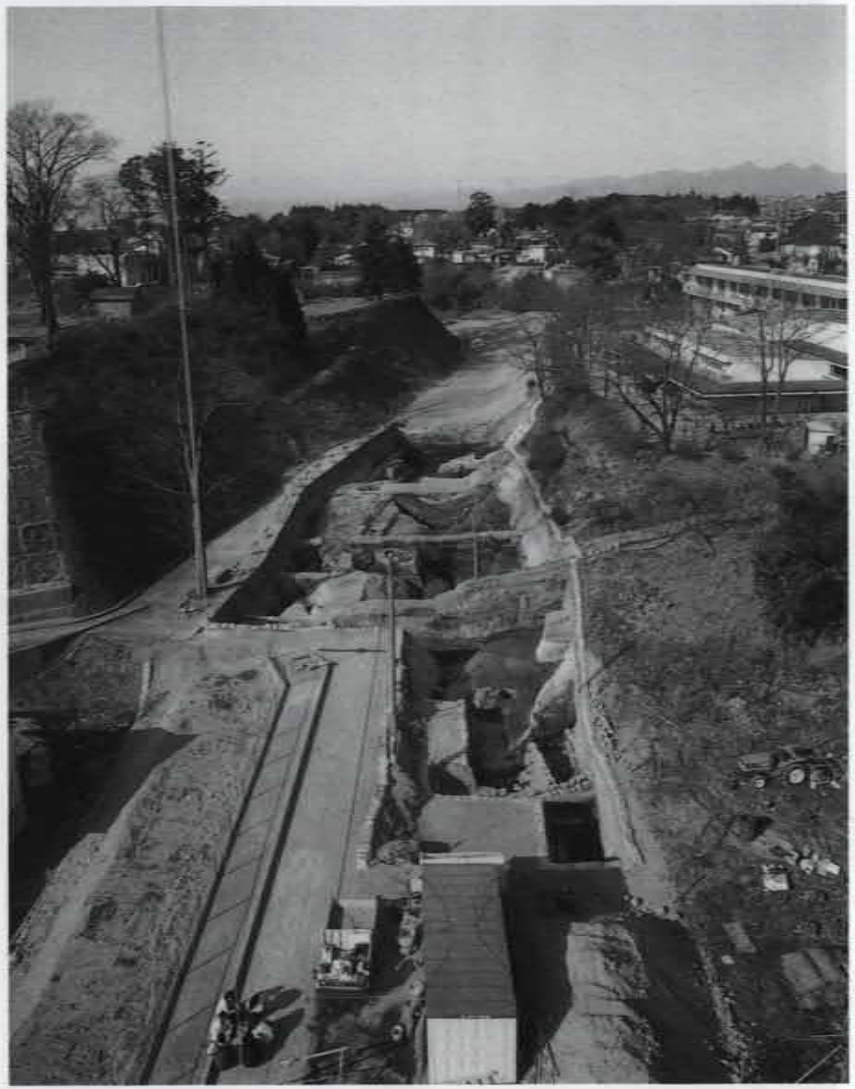
2　3区堀内集石

3　3号集石

1　2号集石

4　同作業風景

2　6区から西側を望む



3　7～9区(東側から)

1　3号集石除去後

2　4号集石

1　7～9区全景(真上から)

2　7区全景(真上から)

3　1号石積

1　7区(南から北を望む)

2　7区作業道？

3　8区全景(真上から)

3　3号堀封石と3号井戸

1　8区旧1号堀

4　3号堀セクション

2　8区柱穴群等

3　3号井戸半截

1　3号堀と5号井戸

4　3号井戸周辺(真上から)

2　3号井戸

3　9区馬歯出土状況

1　新1号堀

4　墓坑副葬品

2　6号井戸

3　石積と暗渠(真上から)

1　9区(西側から)

4　石積と暗渠(真上から)

2　石積と暗渠(西側から)

3　2・3号石積(真上から)

1　1号暗渠(真上から)

4　3号石積

2　1号暗渠(北側から)

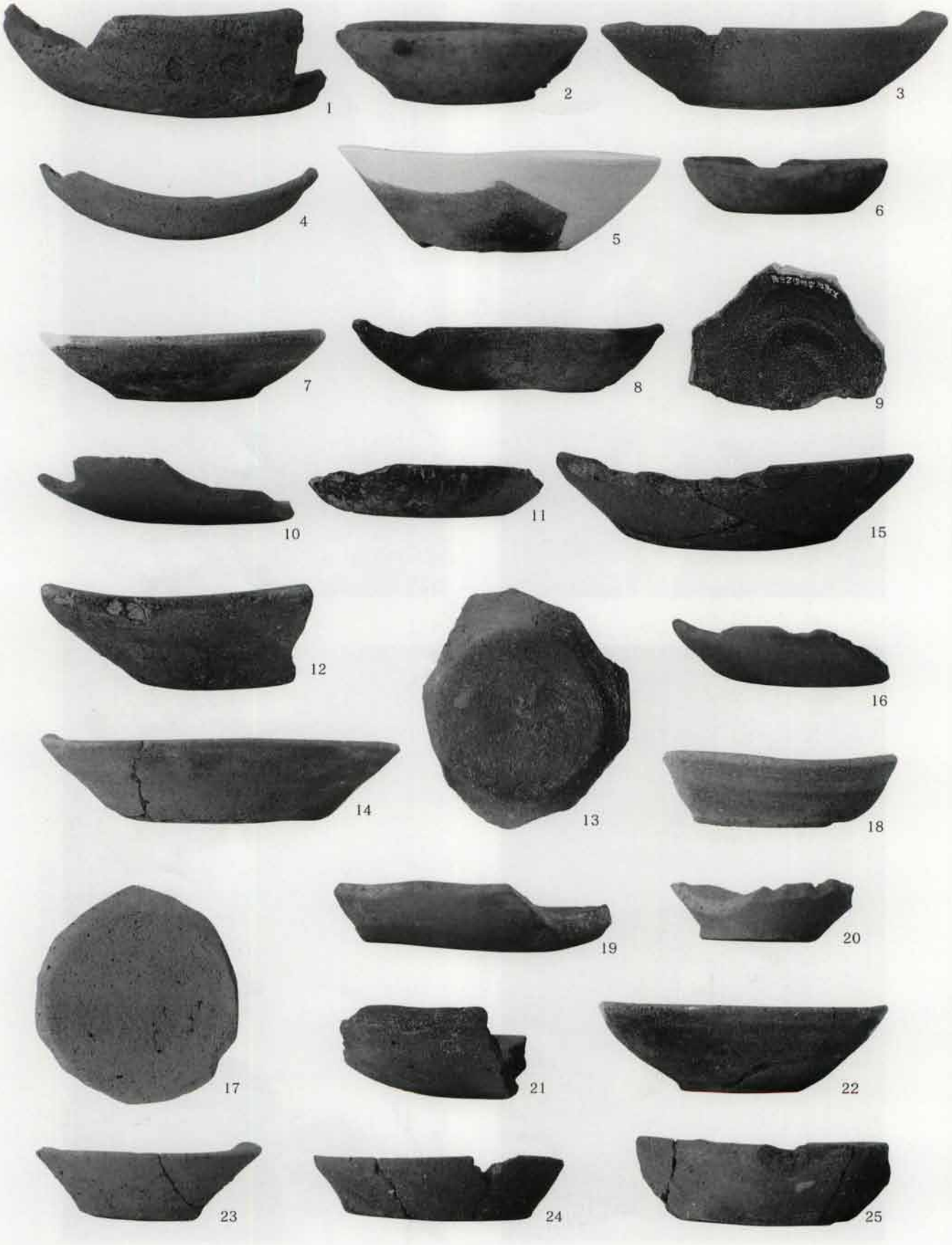
3　10区北側セクション

1　石積と暗渠(東から)

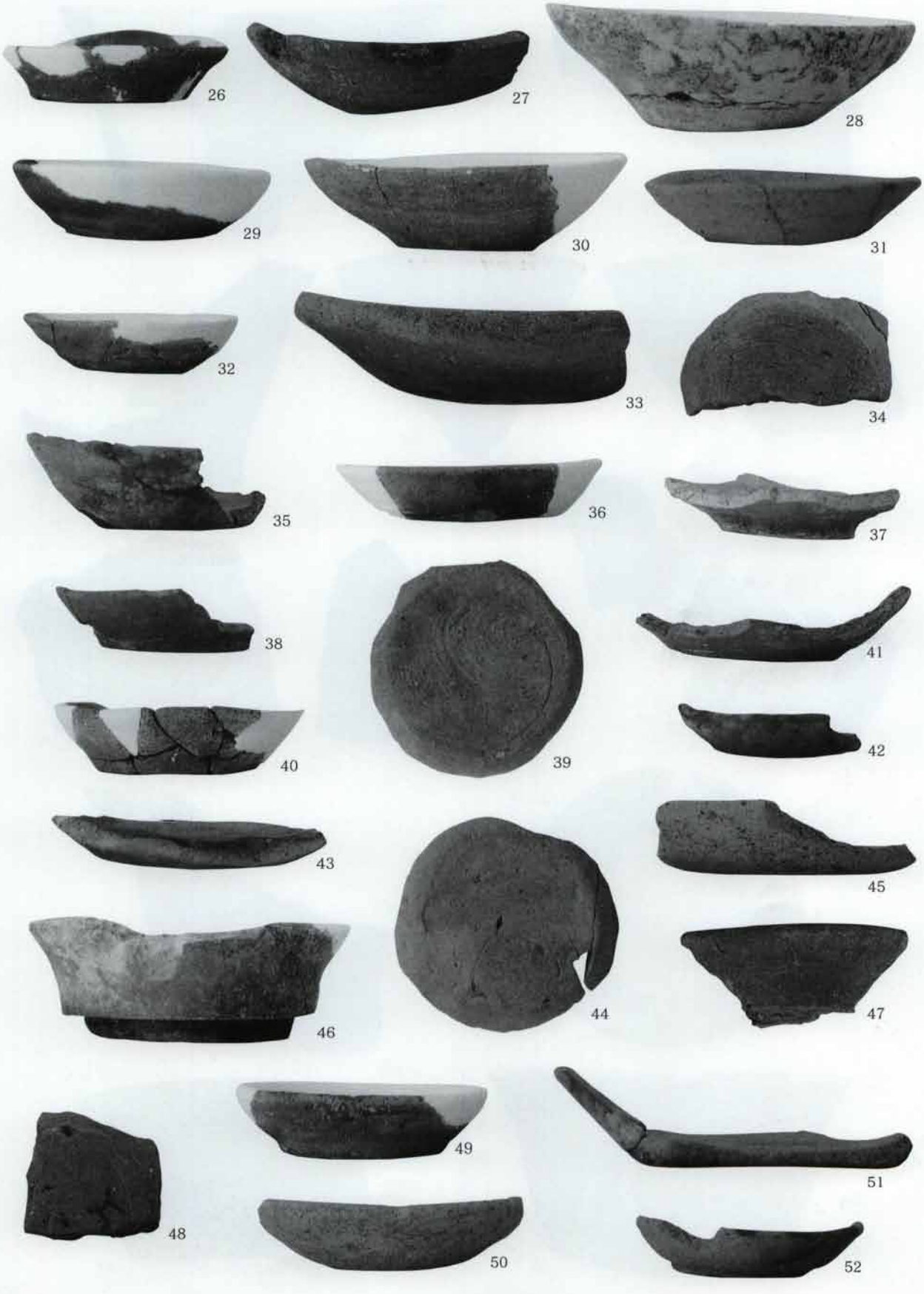
4　気球による写真撮影

2　9区北側セクションと4号石積

PL19



出土遺物(カワラケ)No 1 ～No25



出土遺物(カワラケ)No26～No52

PL21

53

55

54

56

57

58

60

61

59-真上

62

59

63

出土遺物(土鍋)No53～No63

64

67

65-外面

66-外面

69-外面

65-内面

65-内面

69-内面

68

70

72

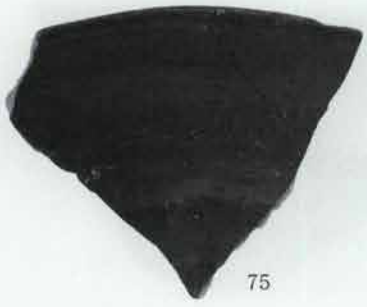
73

71-外面

71-内面

出土遺物(土鍋)No64～No71

PL23


75

76

77

78-内面

79

80

78-外面

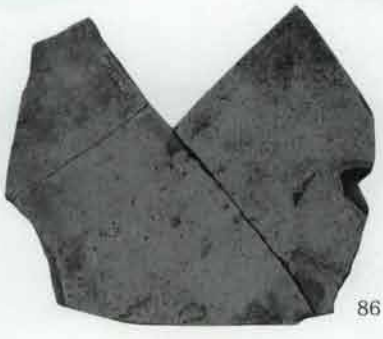
81

82

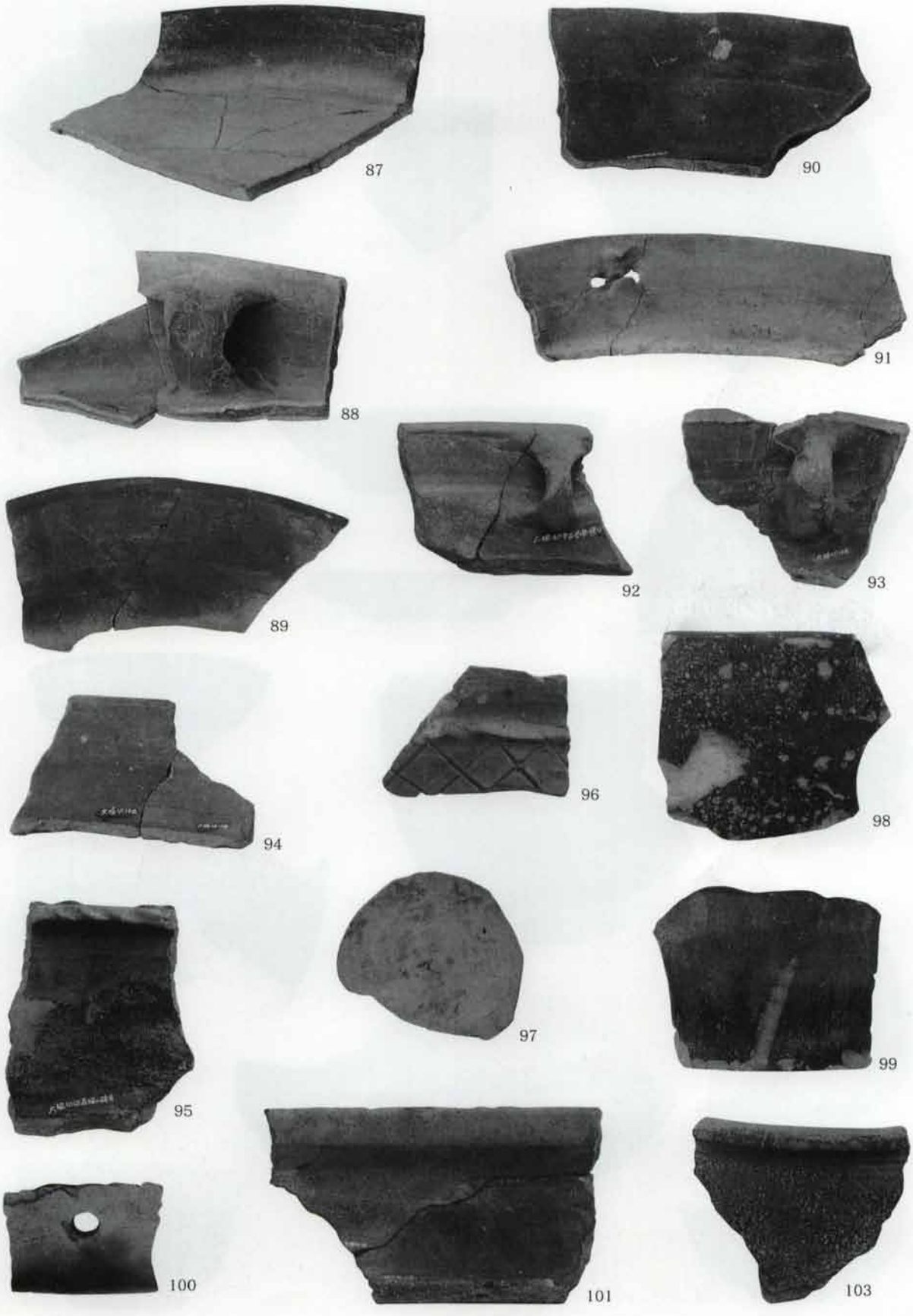
83-真上

83

84

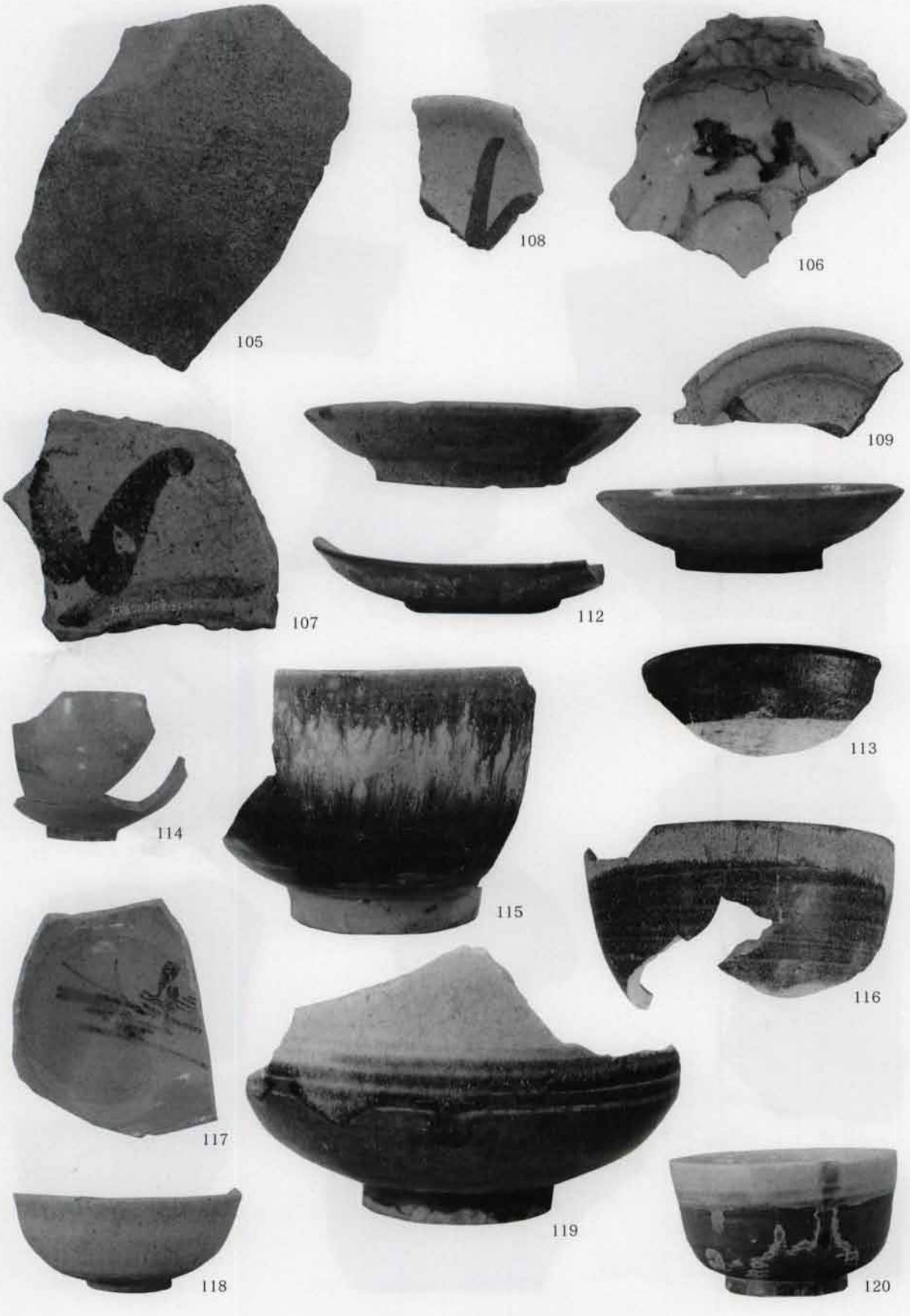

86

出土遺物(土鍋)No75～No86



出土遺物(土鍋瓦器等)No87～No103

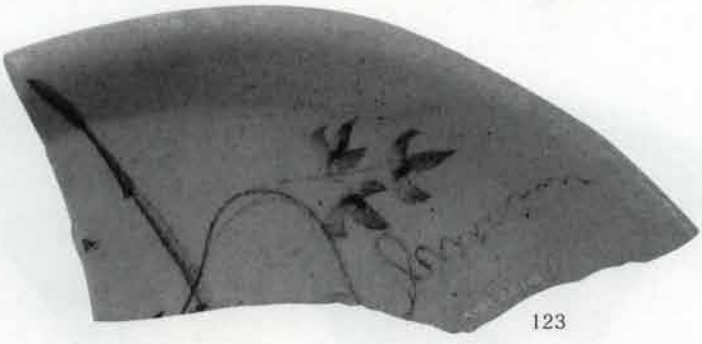
PL25



出土遺物(陶磁器)No105～No120

121

122


123

124

125

126

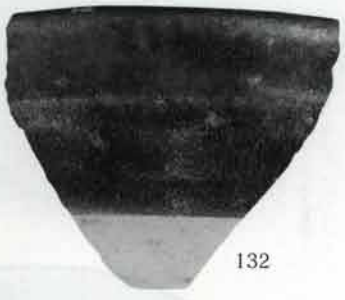
127

128

129

130

131

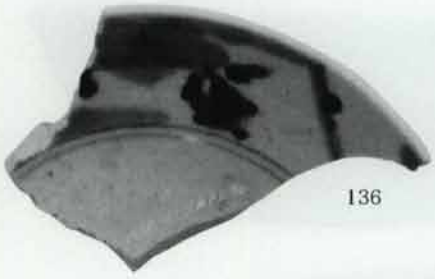

132

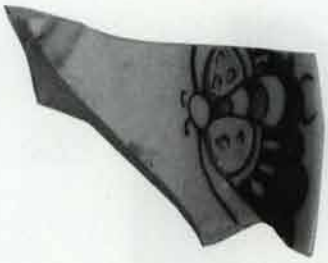
133

134

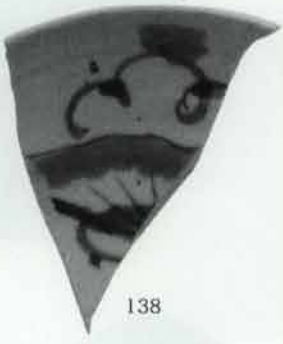
135

出土遺物(陶磁器)No121～No135


136

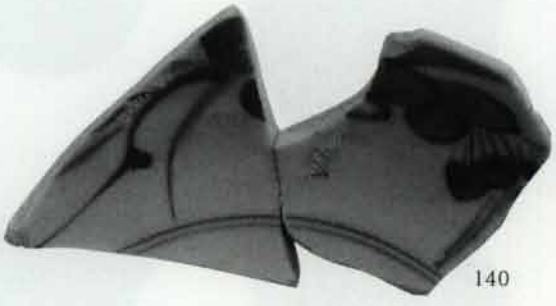

137

138


138

138

139


140

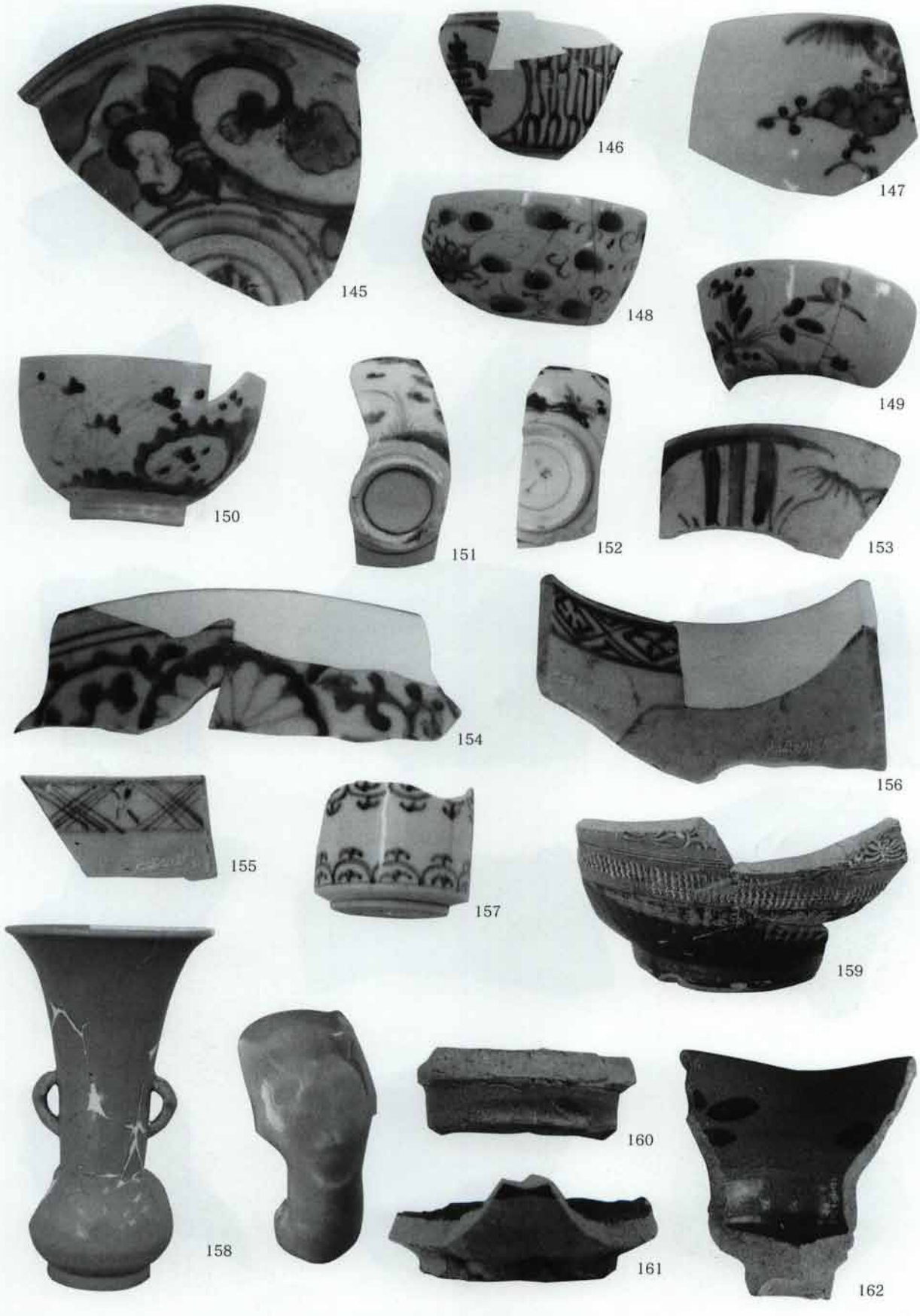
141

142

143

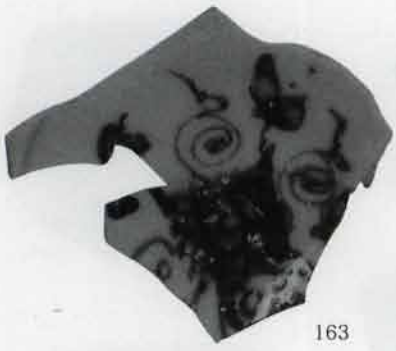
144

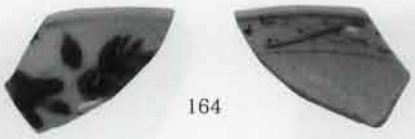
出土遺物(陶磁器)No136～No144



出土遺物(陶磁器)No145～No162

PL29


163


164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

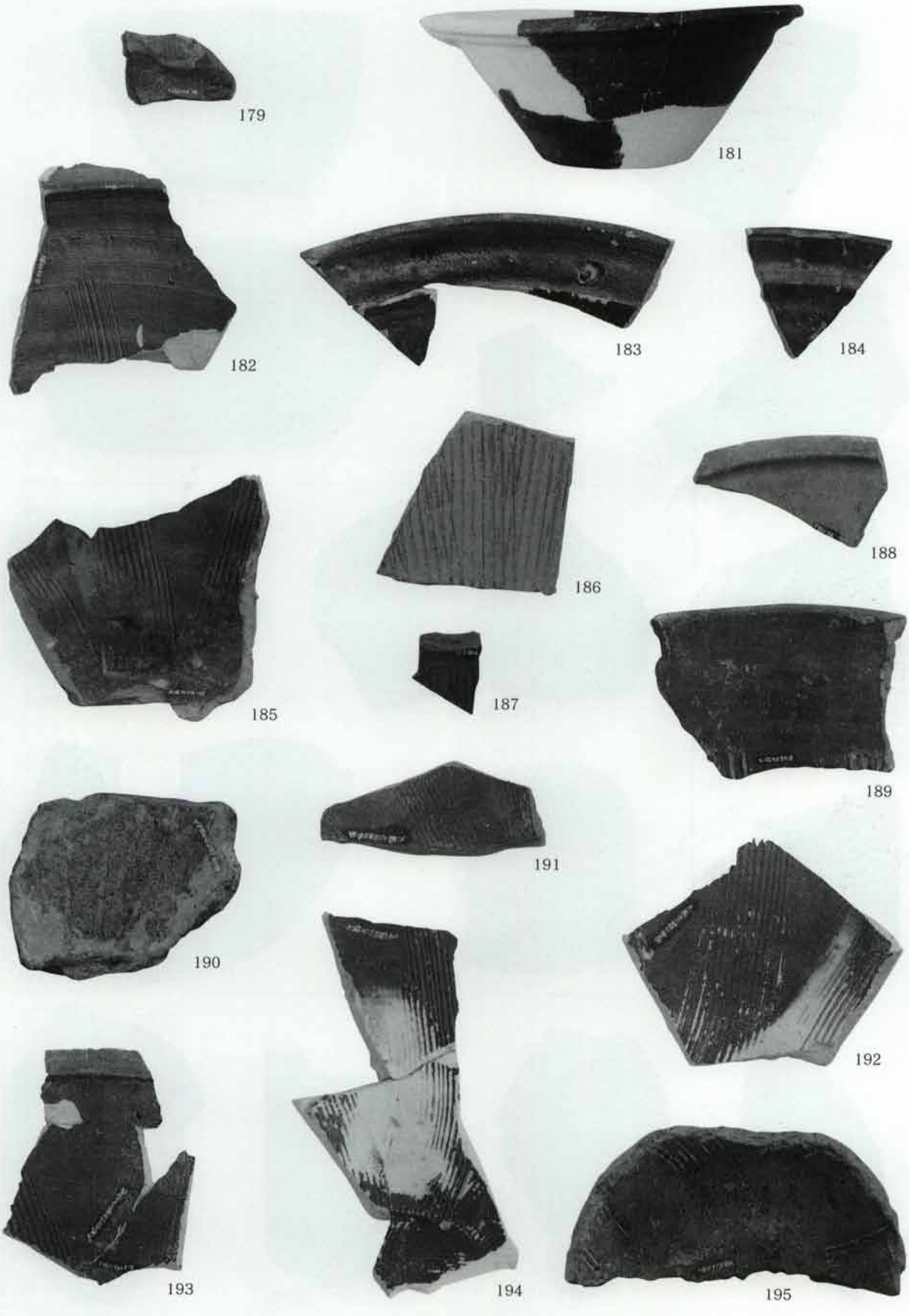
176

177

178

180

出土遺物(陶磁器)No163～No180



出土遺物(陶磁器)No179・181～No195

PL31

196

199

197

198

200

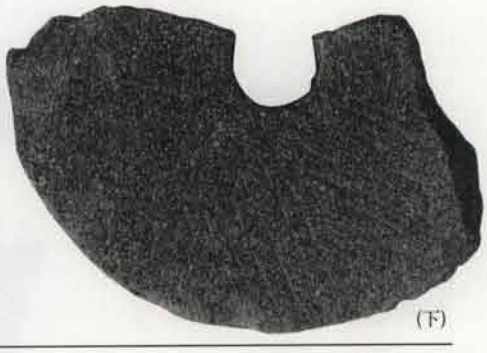
(上)

(側面)

202-(上)

(断面)

(側面)



(下)

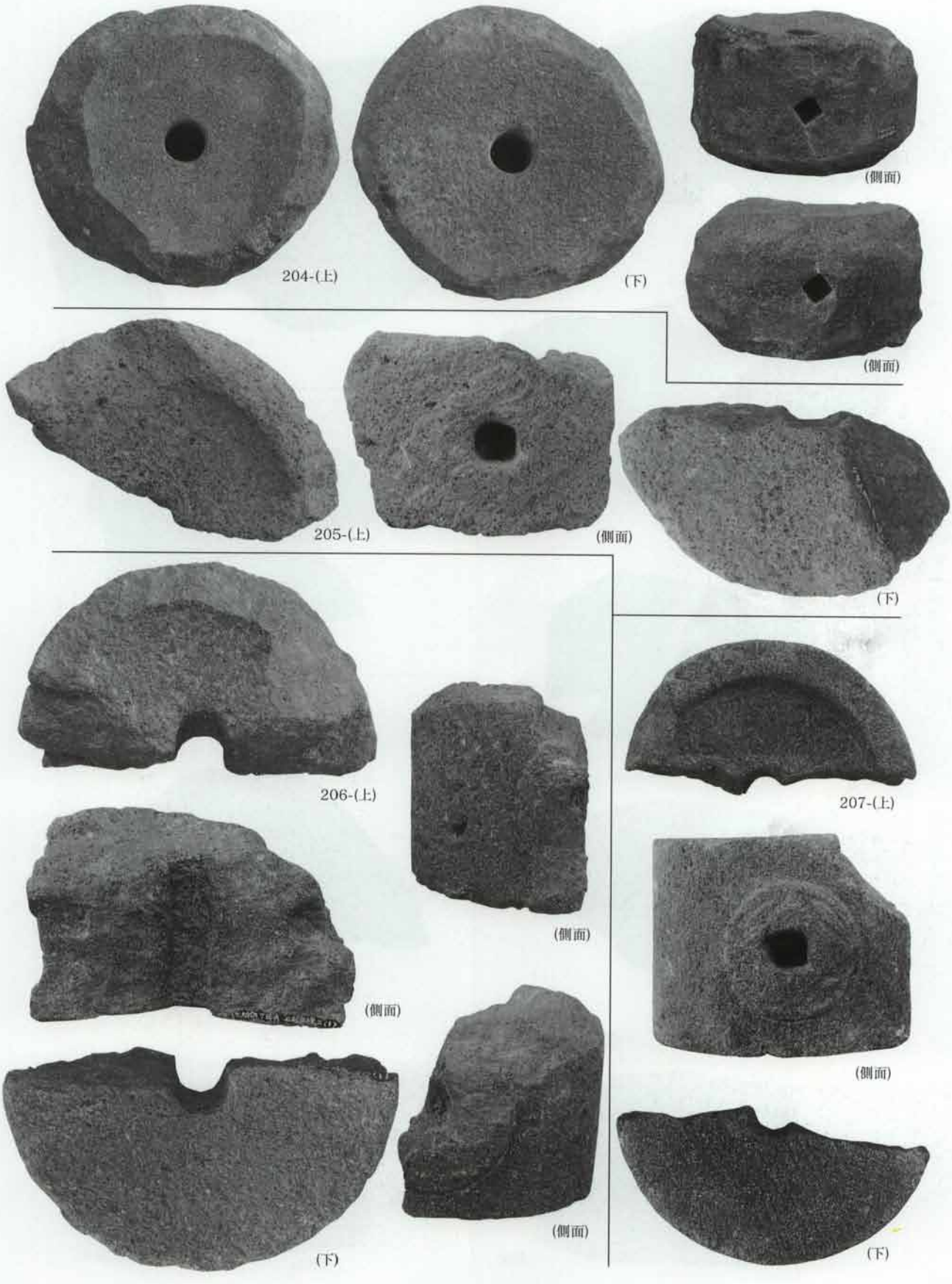
201-(下)

(上)

(側面)

203-(下)

出土遺物(陶磁器・白)No196～No203



出土遺物(白)No204～No207

PL33

208-(上)

(下)

(側面)

209-(上)

(側面)

214-(上)

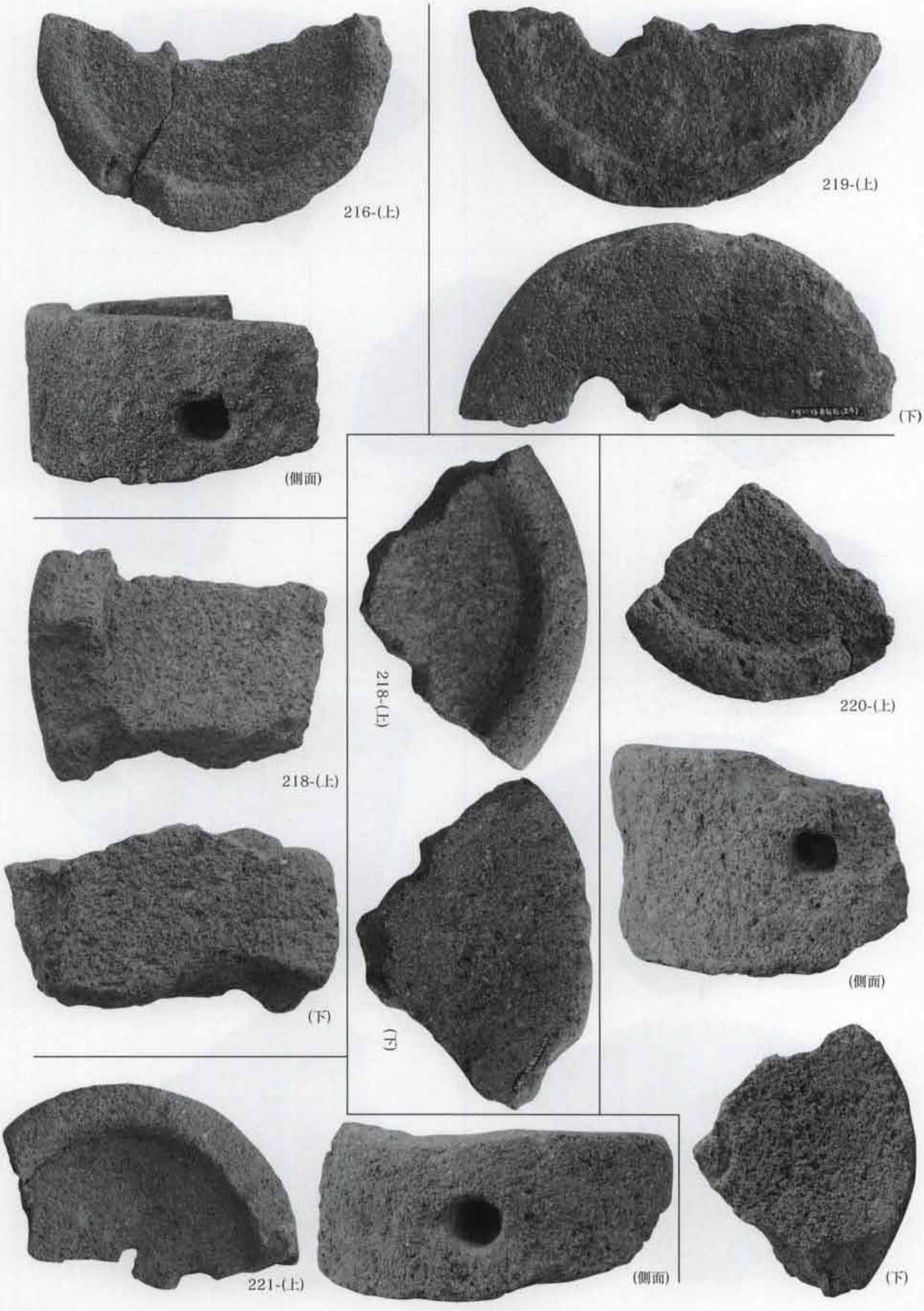
213-(上)

(側面)

215-(上)

(側面)

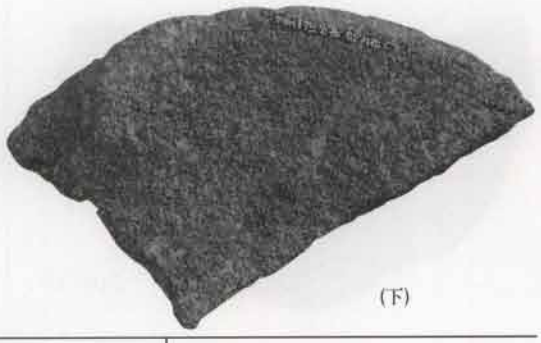
出土遺物(白)No208～No215



出土遺物(白)No216～No221

PL35

222-(上)



(下)

223-(上)

(下)

224-(上)

(下)

225-(上)

226-(上)

(下)

227-(上)

(下)

出土遺物(白)No222～No227

228-(上)

(下)

230-(上)

(側面)

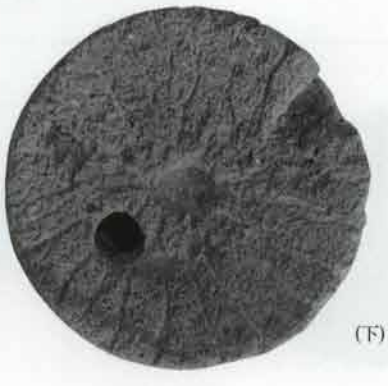
(下)

229-(上)

231-(上)

(下)

232-(上)



(下)

233-(下)

出土遺物(白)No228～No233

PL37

234-(上)

(下)

237-(上)

(下)

238-(上)

(下)

239-(上)

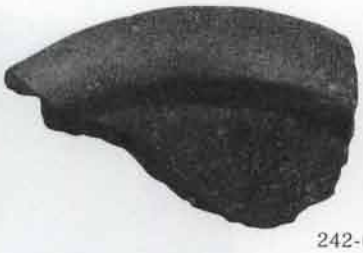
(下)

240-(上)

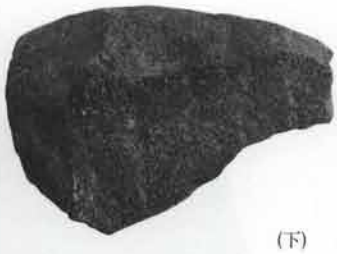
(下)

出土遺物(白)No234～No240

241-(上)



242-(上)

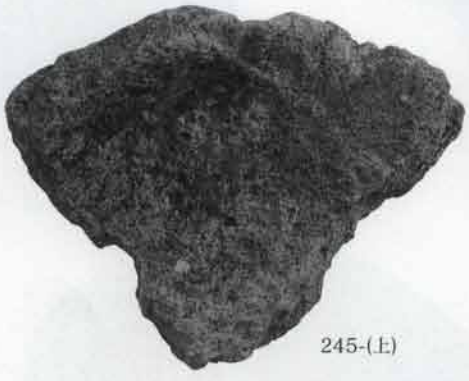


(下)

243-(下)

244-(上)

(下)



245-(上)

246-(上)

248-(上)

247-(上)

(断面)

249-(上)

250-(上)

出土遺物(白)No241～No250

PL39

251-(上)

254-(上)

252-(上)

253-(上)

255-(上)

258-(上)

256-(上)

257-(上)

259-(上)

出土遺物(白)No251～No259

260-(上)

261-(上)

262-(上)

263-(上)

(側面)

264-(上)

(側面)

265-(上)

266-(上)

267-(上)

268-(上)

出土遺物(白)No260～No268

PL41

269-(上)

(下)

270-(側面)

271-(側面)

273-(上)

274-(側面)

275-(上)

(側面)

276-(上)

(側面)

出土遺物(白)No269～No276

277-(上)

(側面)

278-(上)

(下)

279-(上)

280-(上)

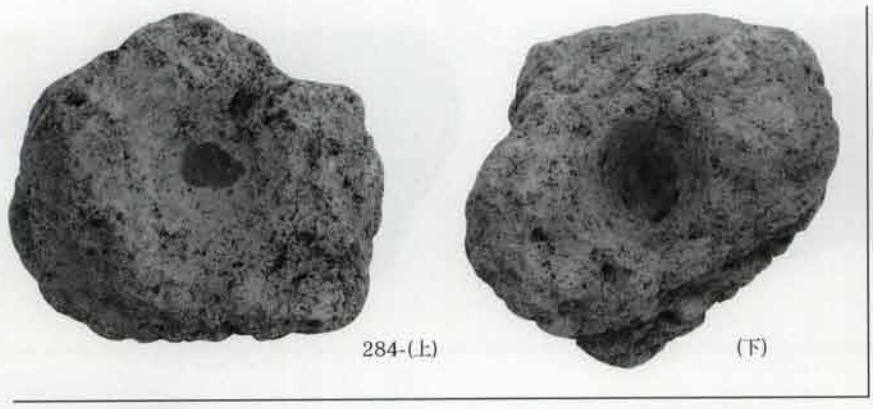
281-(上)

282-(上)

283-(上)

出土遺物(石鉢・擂臼)No277～No283

PL43



284-(上)　(下)

288

285-(上)

286

289

287

(下)

290

291-(側面)

292-(側面)

出土遺物(搗臼・凹石)No284～No292

293-(側面)

295-(側面)

294-(側面)

296-(側面)

297-(側面)

298-(側面)

(下)

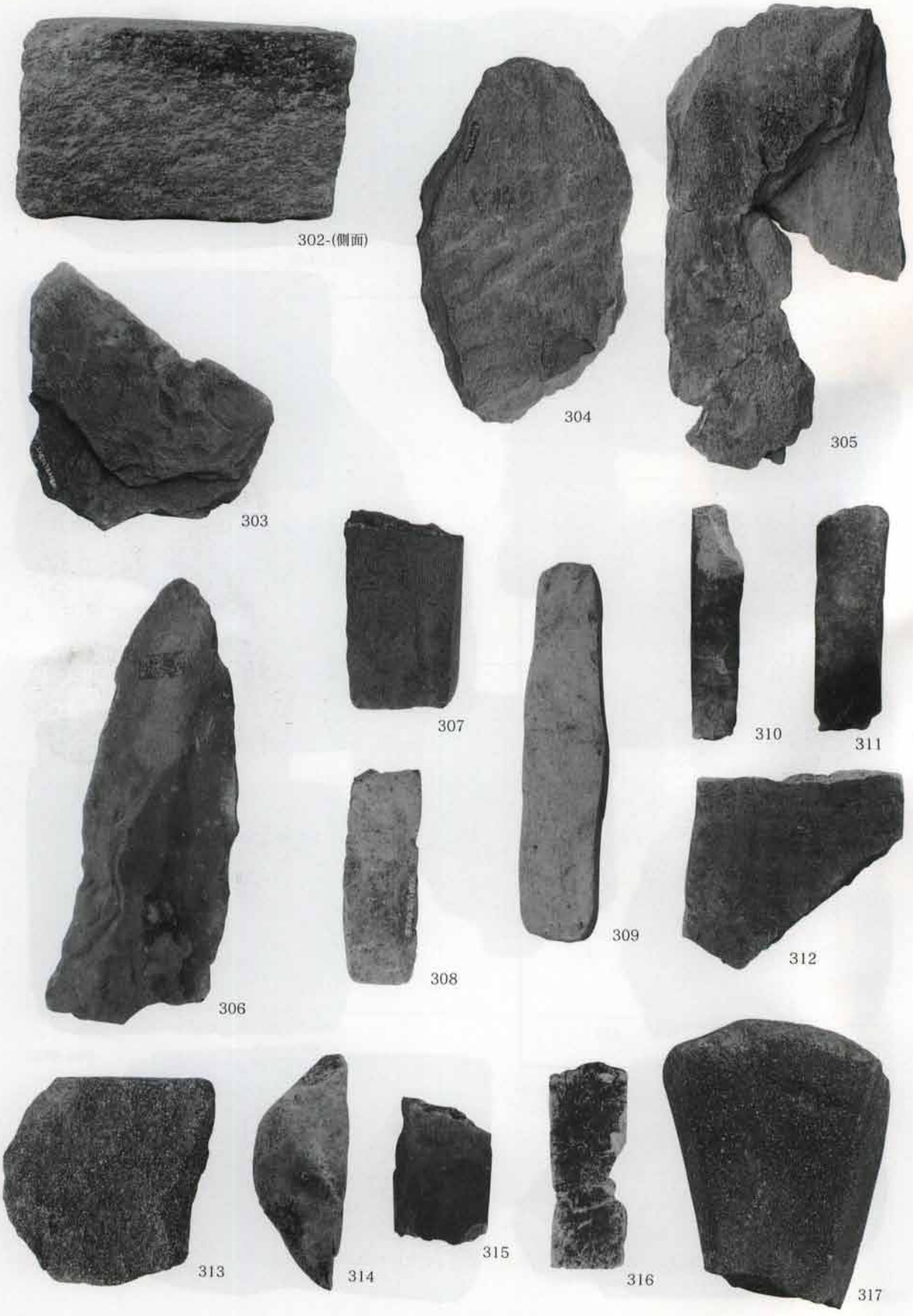
299-(側面)

300

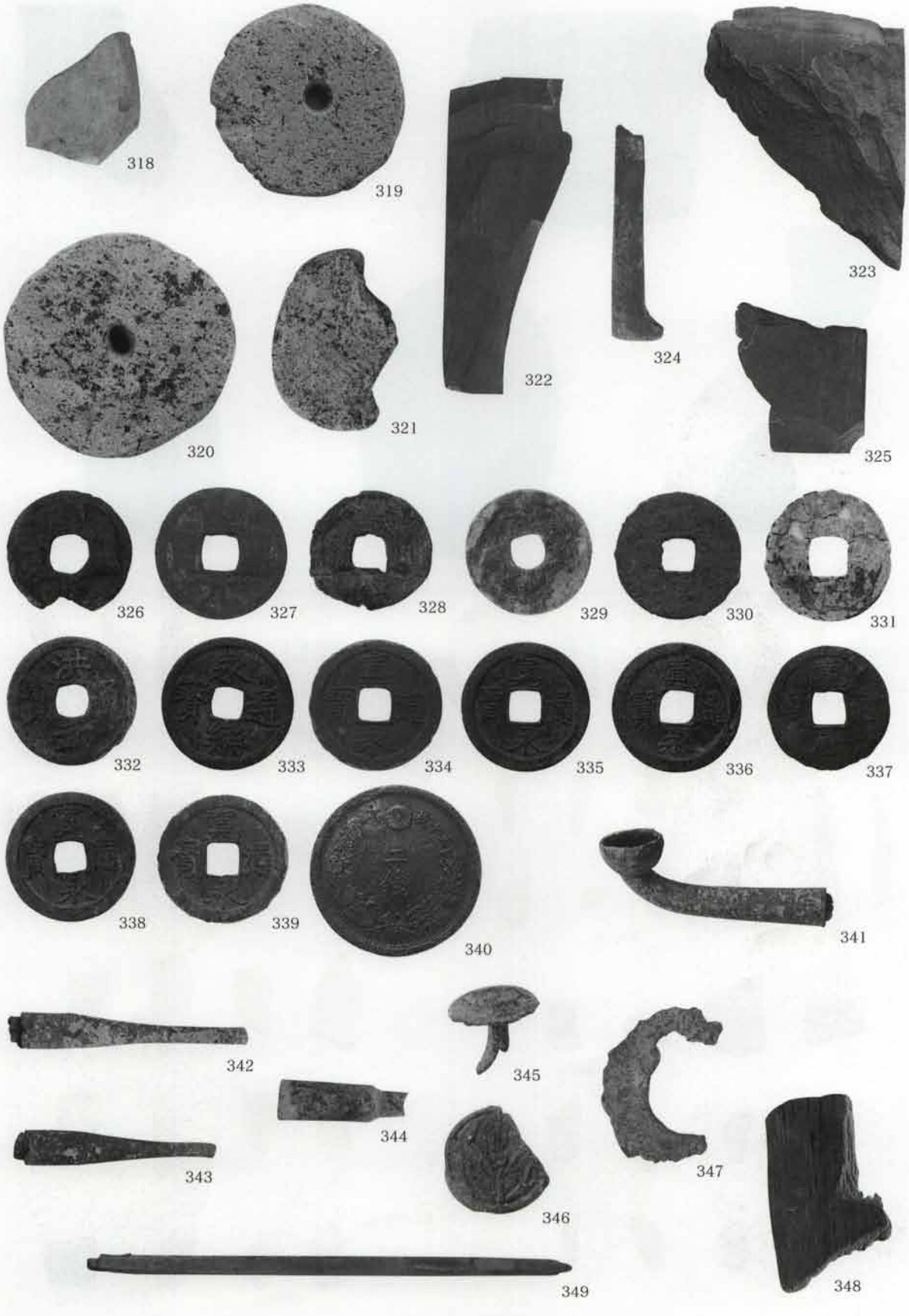
301-(側面)

出土遺物(墓石)No293～No301

PL45

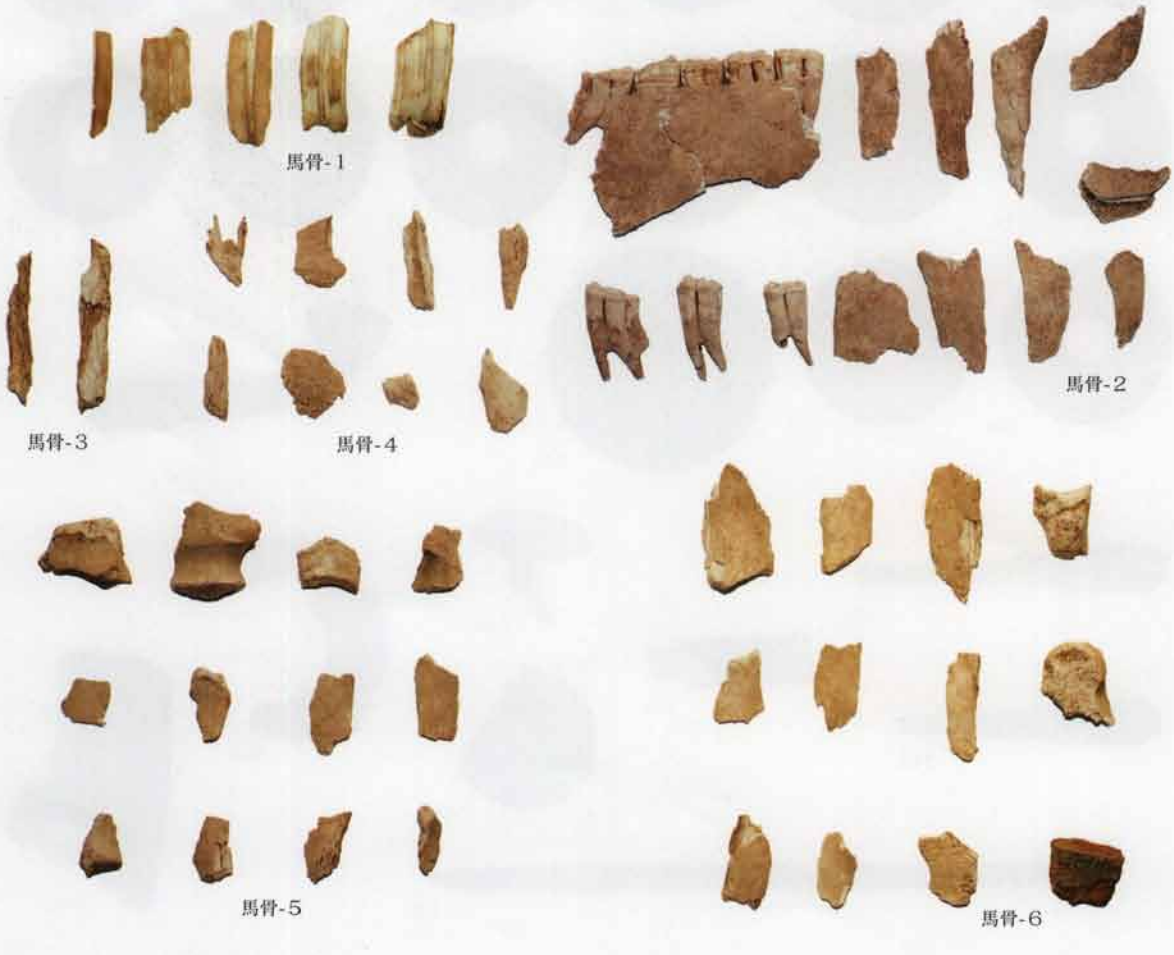


出土遺物(墓石・砥石)No302～No317



出土遺物(砥石・軽石製品・硯・古銭煙管等金属製品・木製品)No318～No348

PL47



馬骨-7

馬骨-8

馬骨-9

馬骨-10

馬骨-11

馬骨-12

抄　　録

フリガナ	グンマケン シテイ シセキ オオゴジョウアト　ホンマルキタオオホリキリ　イセキ
書名	群馬県指定史跡大胡城跡　本丸北大堀切り遺跡
副書名	横町川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	山下歳信
編集機関	大胡町教育委員会　〒371—0292　群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行機関	大胡町教育委員会　〒371—0292　群馬県勢多郡大胡町大字堀越1115番地
発行年月日	西暦2001年3月23日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本丸北 大堀切り遺跡	大胡町大字河原 浜字根古屋641- 7・8番地外	10304		36°25′1″	139°9′43″	平成11年9月30日 〜 平成12年3月25日	4000㎡	横町川砂防事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
本丸北 大堀切り遺跡	城館跡	戦国時代 〜 江戸時代	大堀切り 堀跡 橋脚跡　1カ所 井戸跡　6本 削平地 柱穴群 土坑 石積　4カ所 暗渠　2カ所 近世土坑墓　1基	カワラケ 内耳土器 （陶磁器） 瀬戸・美濃、肥前、常滑等 （舶来品） 青磁・明青花磁・青白磁 （石製品） 石臼・石鉢・凹石・石塔・砥石・硯 （金属製品） 古銭・煙管・飾り金具 木製品 馬骨 縄文時代土器片・石製品

《特記事項》

本丸と二ノ丸の本城と北城を区画する大堀切りを主体とし、玉蔵院曲輪に係わる虎口（橋脚跡）、2号堀、北城と二ノ丸を繋ぐ「中曲輪」の存在等が確認された。大堀切りの玉蔵院曲輪部分は、17世紀中頃以降に人為的に埋土されている。また、旧1号堀は天正年間の水害による埋没が考えられ、埋土から出土した馬骨の出土状況は地鎮に係わる行為と推察される。出土遺物では、志野焼の向付、多数の石臼類が注目される。

《追補》

脱稿後に、馬と厄災送りの民俗（2000 櫻井）を知った。

『続日本書紀』に書かれている「異常な暴風雨がおこったため、この荒神に馬を献じて鎮撫した」とされ、天地異変の厄災の原因が神の祟りであることを畏れ。生馬を供養として奉じ荒神を和める呪術があり、無病息災、無事平安を願う儀礼が行われていた。この事例が戦国時代まで継続していたかは定かではないが、本遺跡の出土の馬骨は、上記儀礼に類似する行為と考えられる。その背景には、下記の要因が考えられる。

1．天正十二年(1584)「城下人馬二百余を流失」の水害で旧１号堀が埋没し、根古屋地域一帯が大災害を被ったと考えられる。

2．時の城主であった大胡高繁は、その帰属を上杉謙信・北条氏直・由良成繁と日々変化する情勢下に強いられていた。

3．水害の翌年には、大胡高繁は、赤城神社に武運長久と子孫繁栄を祈願している。

これらの時代を総合して推察すれば、天変地異による水害で大きな打撃を受けた大胡城下を復興させ、武運長久・子孫繁栄を願い、正常な秩序回復を祈る儀礼として神に馬を捧げたのであろう。

しかし、内耳土器に頭部を入れた（鍋被りに似る）状態は、この儀礼とどの様な結び付きがあるのかは定かではない。恐らく、生前に大切に扱われていた馬の霊の再生を防ぐ行為と考えられる。

《参考文献》

櫻井龍彦 『馬と厄災送りの民俗』 日本民俗学 223 日本民俗学会 平成12年８月

群馬県指定史跡大胡城

本丸北大堀切り遺跡

横町川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年３月23日発行

編　集　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

発　行　群馬県勢多郡大胡町教育委員会

〒371-0292　群馬県勢多郡大胡町堀越1115番地

電話　027(283)1111

大胡町文化財事務所　電話 027(283)6055

印刷製本　朝日印刷工業株式会社